

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第126集

は せ ぐち
長 谷 口 遺 跡

2004

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

長谷口遺跡の所在する瀬戸市は、「せともの」と呼び親しまれているように全国屈指の窯業生産地であります。瀬戸地域の窯業生産は栄枯盛衰を繰り返し 1,300 年余り続いています。織豊期の「瀬戸山離散」から尾張藩の働きかけにより江戸時代に再興した「赤津焼」の窯元が建ち並ぶ一角に長谷口遺跡はあります。

愛知県埋蔵文化財センターでは、東海環状自動車道建設に先立ち、埋蔵文化財調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代から江戸時代にいたる多大な成果をあげることができました。なかでも、縄文時代早期末葉は、隣接する八王子遺跡から続く集落遺跡として貴重な資料を得ることができました。県内の内陸部では調査例が少なく、今後海岸部との比較検討が可能になりました。江戸時代末の隣接する長谷口 B 窯跡に関連する屋敷地と煎茶に関連する資料群は、窯業生産地の生活誌を垣間見る貴重な発見といえます。これら多岐にわたる調査成果を本書に掲載することが、地域誌研究の一翼を担い、多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、長谷口遺跡の発掘調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮賜り、関係者および関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 16 年 8 月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 古池 庸男

例 言

1. 本書は愛知県瀬戸市長谷口町地内に所在する長谷口遺跡(県遺跡番号3779)の調査報告書である。
2. 発掘調査は国土交通省愛知県国道事務所の東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、国土交通省愛知県国道事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成12年8月18日～11月8日(1,200m²)と平成14年7月1日～9月9日(1,325m²)、調査面積は計2,525m²である。
4. 調査にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター運営協議会委員、同専門委員ならびに次の各関係機関のご指導とご協力を得た。(順不同)
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター、
国土交通省愛知県国道事務所、
瀬戸市教育委員会
5. 調査および本書作成において、次の方々、関係機関のご教示、ご協力賜った。
(敬称略・順不同)
青木 修 天野賢一 伊藤正人 井澤 純 伊丹 徹 岩瀬彰利 岩野見司
岡本直久 長田友也 恩田 勇 春日井 恒 金子健一 河合君近 黒尾和久
瀨瀬 茂 佐野 元 田村陽一 仲野泰裕 野口哲也 林 芳樹 藤澤良祐
増子康真 松井直樹 松田光太郎 山下勝年 山下峰司
関西縄文文化研究会 助瀬戸市埋蔵文化財センター 助かながわ考古学財団
知多市歴史民俗博物館
6. 調査と遺物整理および本書の作成に関わる作業において、次の方々、関係機関の助力を得た。
中村たかみ 三浦里美 山口きみ代 山口典子 (株)中部日本鋳業研究所 (株)シン技術コンサル
(株)アイシン精機 (株)クイックス
なお、出土遺物の写真撮影は金子知久氏(写真工房 遊)の手を煩わせた。
7. 本書の執筆は、目次に示した。とくに明記していない場合は、永井宏幸が執筆した。本書の編集は永井宏幸が担当した。
8. 発掘調査および本書で使用した方位は、国土座標第Ⅶ系、基準高は東京湾平均海面(T.P.)に基づく。ただし、表記は「日本測地系」とした。
9. 図版に掲載した遺物実測図および拓本の縮率は、原則として1/3を基本に、それ以外のものはその都度明記した。
10. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いた番号を使用した。
11. 発掘調査の記録(実測図・写真など)は愛知県埋蔵文化財センターで保管、出土遺物(本書付属CD-ROMに保管箱番号・登録番号対照表を集録)は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。



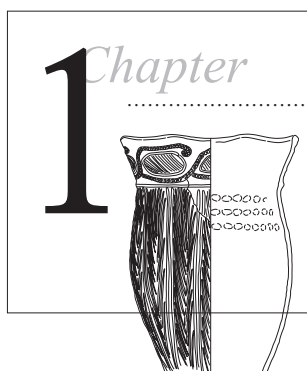
1	調査の概要	1
1	調査の概要.....	1
2	調査の成果	9
1	遺構の概要.....	9
2	縄文時代早期の遺構.....	10
3	縄文時代中期の遺構.....	13
4	弥生時代の遺構.....	17
5	古代の遺構.....	20
6	中世の遺構.....	27
7	近世の遺構.....	27
8	縄文土器・早期.....	35
9	縄文土器・前期から後期.....	38
10	弥生土器.....	39
11	古代の土器.....	39
12	中世の土器.....	40
13	近世の土器.....	41
14	土製品.....	42
15	その他の遺物.....	42
16	石器.....	45
3	まとめ	55
	図 版	61
	報告書抄録	122
	写真図版	123

図版目次

図版 1	(遺構) 基本遺構図割付	61	図版 32	(遺物) 縄文土器 9	92
図版 2	(遺構) 00 遺構全体図 1 / 4	62	図版 33	(遺物) 縄文土器 10	93
図版 3	(遺構) 00 遺構全体図 2 / 4	63	図版 34	(遺物) 縄文土器 11	94
図版 4	(遺構) 00 遺構全体図 3 / 4	64	図版 35	(遺物) 縄文土器 12	95
図版 5	(遺構) 00 遺構全体図 4 / 4	65	図版 36	(遺物) 縄文土器 13	96
図版 6	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 1 / 6	66	図版 37	(遺物) 弥生土器	97
図版 7	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 2 / 6	67	図版 38	(遺物) 古代の土器 1	98
図版 8	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 3 / 6	68	図版 39	(遺物) 古代の土器 2	99
図版 9	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 4 / 6	69	図版 40	(遺物) 中世の土器 1	100
図版 10	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 5 / 6	70	図版 41	(遺物) 中世の土器 2	101
図版 11	(遺構) 02 遺構全体図第 1 面 6 / 6	71	図版 42	(遺物) 近世の土器 1	102
図版 12	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 1 / 6	72	図版 43	(遺物) 近世の土器 2	103
図版 13	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 2 / 6	73	図版 44	(遺物) 近世の土器 3	104
図版 14	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 3 / 6	74	図版 45	(遺物) 土製品	105
図版 15	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 4 / 6	75	図版 46	(遺物) 石製品	106
図版 16	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 5 / 6	76	図版 47	(遺物) 石器 1	107
図版 17	(遺構) 02 遺構全体図第 2 面 6 / 6	77	図版 48	(遺物) 石器 2	108
図版 18	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 1 / 6	78	図版 49	(遺物) 石器 3	109
図版 19	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 2 / 6	79	図版 50	(遺物) 石器 4	110
図版 20	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 3 / 6	80	図版 51	(遺物) 石器 5	111
図版 21	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 4 / 6	81	図版 52	(遺物) 石器 6	112
図版 22	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 5 / 6	82	図版 53	(遺物) 石器 7	113
図版 23	(遺構) 02 遺構全体図第 3 面 5 / 6	83	図版 54	(遺物) 石器 8	114
図版 24	(遺物) 縄文土器 1	84	図版 55	(遺物) 石器 9	115
図版 25	(遺物) 縄文土器 2	85	図版 56	(遺物) 石器 10	116
図版 26	(遺物) 縄文土器 3	86	図版 57	(遺物) 石器 11	117
図版 27	(遺物) 縄文土器 4	87	図版 58	(遺物) 石器 12	118
図版 28	(遺物) 縄文土器 5	88	図版 59	(遺物) 石器 13	119
図版 29	(遺物) 縄文土器 6	89	図版 60	(遺物) 石器 14	120
図版 30	(遺物) 縄文土器 7	90	図版 61	(遺物) 石器 15	121
図版 31	(遺物) 縄文土器 8	91			

写真図版目次

写真図版 1	(遺構) 1 00A 区	123	写真図版 9	(遺物) 4 縄文時代早期末葉	131
写真図版 2	(遺構) 2 00B 区	124	写真図版 10	(遺物) 5 縄文時代早期末葉	132
写真図版 3	(遺構) 3 02 区	125	写真図版 11	(遺物) 6 縄文時代早期末葉	133
写真図版 4	(遺構) 4 02 区	126	写真図版 12	(遺物) 7 縄文時代早期末葉	134
写真図版 5	(遺構) 5 02 区	127	写真図版 13	(遺物) 8 縄文時代	135
写真図版 6	(遺物) 1 縄文時代早期末葉	128	写真図版 14	(遺物) 9 縄文時代中期後葉	136
写真図版 7	(遺物) 2 縄文時代早期末葉	129	写真図版 15	(遺物) 10 近世の土器	137
写真図版 8	(遺物) 3 縄文時代早期末葉	130	写真図版 16	(遺物) 11 縄文時代・弥生時代石器	138



調査の概要

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と概要

長谷口遺跡は、北緯 35 度 13 分 28 秒（世界測地系：35 度 13 分 40 秒）、東経 137 度 08 分 23 秒（世界測地系：137 度 08 分 13 秒）標高 200m 前後（現況）、愛知県瀬戸市長谷口町に所在する。近年の分布調査により確認された遺跡で、長谷口 B 窯跡が北東に隣接する。

遺跡の位置

遺跡周辺の現状は、赤津焼の窯元が点在する赤津町から藤岡町へ抜ける県道 33 号瀬戸設楽線沿いに立ち並ぶ住宅地である。

今回の調査は、東海環状自動車道建設に先立つ事前調査である。本調査に先立ち 1997（平成 9）年度に、木下川を挟んで隣接する八王子遺跡と合わせて予定地内の範囲確認調査を実施した。その結果、縄文時代早期の遺構と遺物、中世から近世の遺物包含層、隣接する長谷口 B 窯跡に関連する窯道具などを確認した。範囲確認調査の結果、調査対象範囲が決定し、国土交通省愛知国道事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は、2000（平成 12）年度に 1,200m² と 2002（平成 14）年度に 1,325m² の 2 次にわたり、合計 2,525m² 行った。

範囲確認調査

調査区の現況は、西側に隣接する長谷山観音堂から続く雑木林と竹林に囲まれた畑地であった。調査は、00A・B 区と 02 区を設定し実施した。（図 1）

調査終了後、遺物の洗浄・注記（1 次整理）をそれぞれの年度内に完了。その後、分類・接合・実測など（2 次整理）を 2003（平成 15）年度に実施した。

発掘調査関連日誌抄

000807 地形測量	001107～1108 埋め戻し
00A 区	遺跡視察（瀬戸市教委服部 郁、瀬戸市埋文セ藤澤良祐・岡本直久、名古屋大学山本直人・伊藤伸幸）
表土剥ぎ 000808～0817	02 区
000809 木下川沿いに水車小屋跡（SX02）確認	020708 作業開始
020818～0901 遺構検出	020709～0718 表土剥ぎ
000831 SX02 検出	020711～0722 遺構検出（第1面）
000904～0905 遺構掘削	020711 調査区北西側（最上段）に屋敷地を確認。
000905 空測	020718 縄文時代中期の遺構確認。
000906～0914 補足調査	020722～0725 遺構掘削（第1面）
000914～0928 埋め戻し	020722～0806 遺構測量（第1面）
00B 区	020731 最上段のトレンチ掘削、下位に縄文早期末の包含層確認。
000914～0928 表土剥ぎ	020801～0808 包含層掘削（第2面）
000919～0928 遺構検出	020805～0823 遺構検出（第2面）
000928 縄文早期の集石（SX01）検出	020808～0827 遺構掘削（第2面）
000929～1012 遺構掘削	020808 見学（愛知県立大学学生3名、県立惟信
001013 空測	
001016～1106 補足調査	

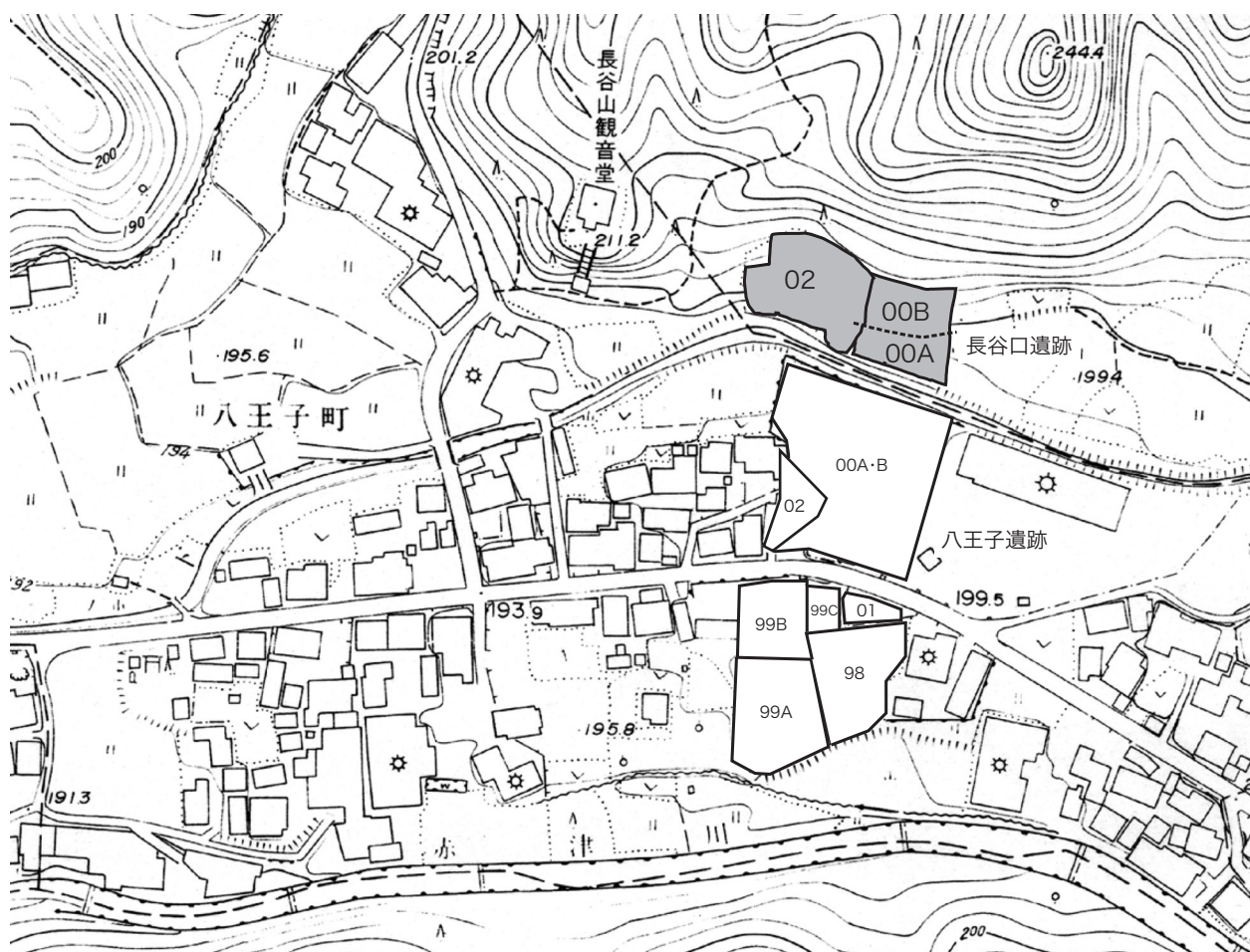


図1 調査区位置図 (S=1:25,000)

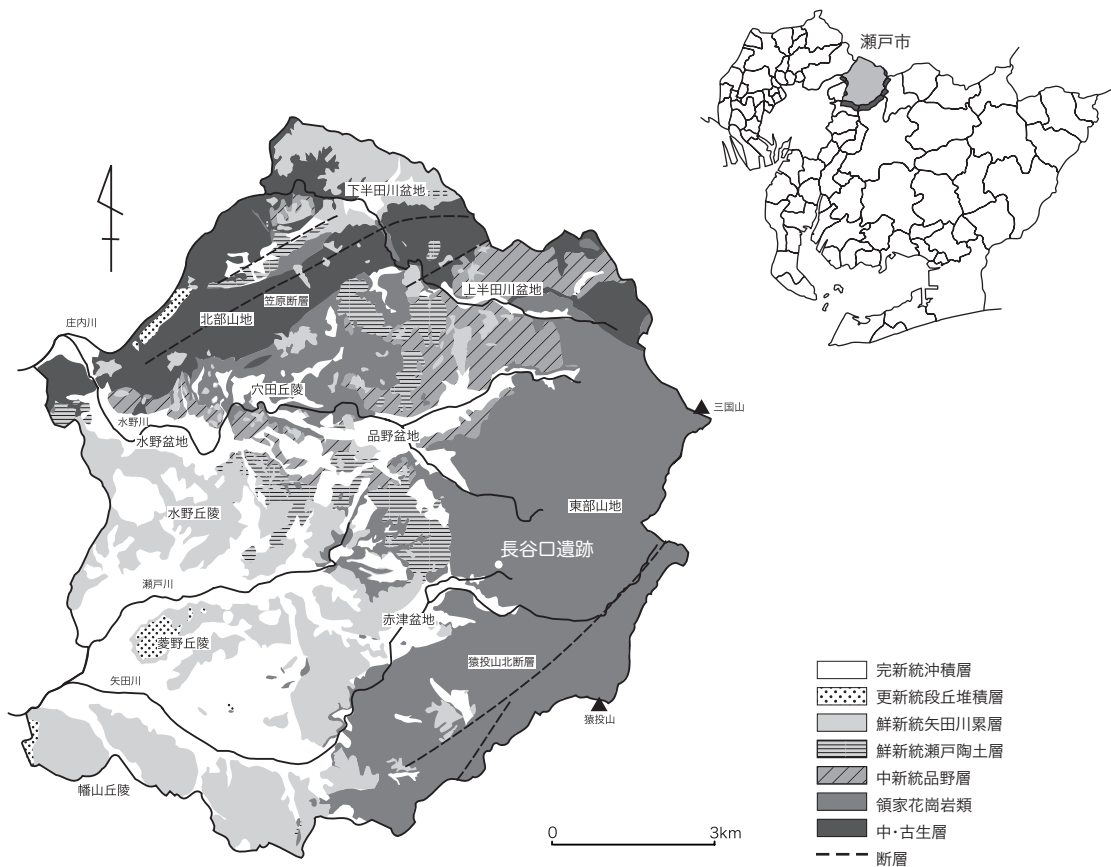
高校生徒・教諭 3 名)	020904～0909 遺構掘削 (第 3 面)
020822～23 地元説明会 (参加者 22 日 30 名・ 23 日 70 名)	020907～0909 遺構測量 (第 3 面)
020828 空測 (第 2 面)	020909 作業終了
020829～0902 縄文早期末包含層掘削 (第 3 面)	遺跡視察 (瀬戸市教委服部郁、瀬戸市埋文セ藤澤 良祐・岡本直久、名古屋外国語大学斎藤基生、名 古屋市博物館河合剛、名古屋市見晴台考古資料館 伊藤正人・瀬藤茂、東海学園大学岩野見司)
020902 SK120 から板状鉄斧出土	
020903～0906 遺構検出 (第 3 面)	

(2) 遺跡の周辺

長谷口遺跡は愛知県の北部、瀬戸市長谷口町に位置する。市域は東西 12.8km、南北 13.6km、総面積は 111.63km² である。

瀬戸市域は濃尾平野を取り囲む丘陵地と山地の東北端に位置する。長谷口遺跡の位置する地形は、東部山地と呼ばれる山地である。 地形

調査地の南約 100m には矢田川の最上流部である赤津川が流れる。赤津川の北側には八王子町と長谷口町境を通る小河川 (木下川) が東から西へ流下する。調査地点は木下川の右岸、標高 200m 前後に位置する。木下川は西側約 800m で赤津川と合流する。赤津川ではマサ化した花崗岩類を侵食し、谷頭に近い谷底が堆積範囲の狭長な谷底平野となつ



瀬戸市史編纂委員会 1986『瀬戸市史』資料編二自然および愛知県 1997『愛知県活断層アトラス』を引用一部改編

図 2 遺跡の位置図と地形・地質図

ている場合が多い。赤津川は約 3.8km 西方で矢田川に合流する。合流地点の約 5.0km 西方では瀬戸川と、さらに約 16km 西方では庄内川と取束し、約 11km 南方で伊勢湾へと注ぐ。

地質 調査地周辺の地質を概観すると、東側の広範囲を中生代白亜紀～新生代古第三紀花崗岩類が占める。調査区の西側の広い範囲で、新生代第三紀中新世後期から第四紀更新世前期にかけて陸水域に堆積した未固結の礫・砂・シルトなどからなる地層群が広く分布している。これらは東海湖とよばれる堆積盆地に堆積した一連の地層と考えられ、まとめて東海層群とよばれている。このうち、名古屋市東部から瀬戸市、岐阜県の東濃地方にかけて分布しているものは瀬戸層群とよばれている。第四系更新統は丘陵地の端部などにわずかにみられる。第四系更新統はおもに矢田川および瀬戸川の河川沿いに分布し、赤津川にもわずかな分布がみられる。

調査地点を微細にみると、矢田川の支流赤津川に流れ込む木下川右岸に形成された河岸段丘と東部山地の境目に長谷口遺跡は位置する。遺跡から少し山側に登ると花崗岩の露呈する地点が所々確認できる。一方、調査地内には 2m を越える花崗岩が数ヶ所あり、遺跡の立地が領家花崗岩類に隣接していることが見て取れる。

周辺の遺跡 瀬戸市内の遺跡は 1995（平成 7）年度までの分布調査によると、836 ケ所を数える（瀬戸市教委 1997）。市域は窯業生産地であるから、全体の約 7 割強が窯跡となる。長谷口遺跡に関連する縄文遺跡は、約 30 ケ所を数える（青木 1998）。

縄文遺跡は東部山地に近い水野川と矢田川の上流域に多く確認されている。長谷口遺跡の立地する矢田川の支流、赤津川流域は下流から太子遺跡、太子縄文遺跡、惣作・鐘場遺跡、八王子遺跡、長谷口遺跡、白坂雲興寺遺跡がある。

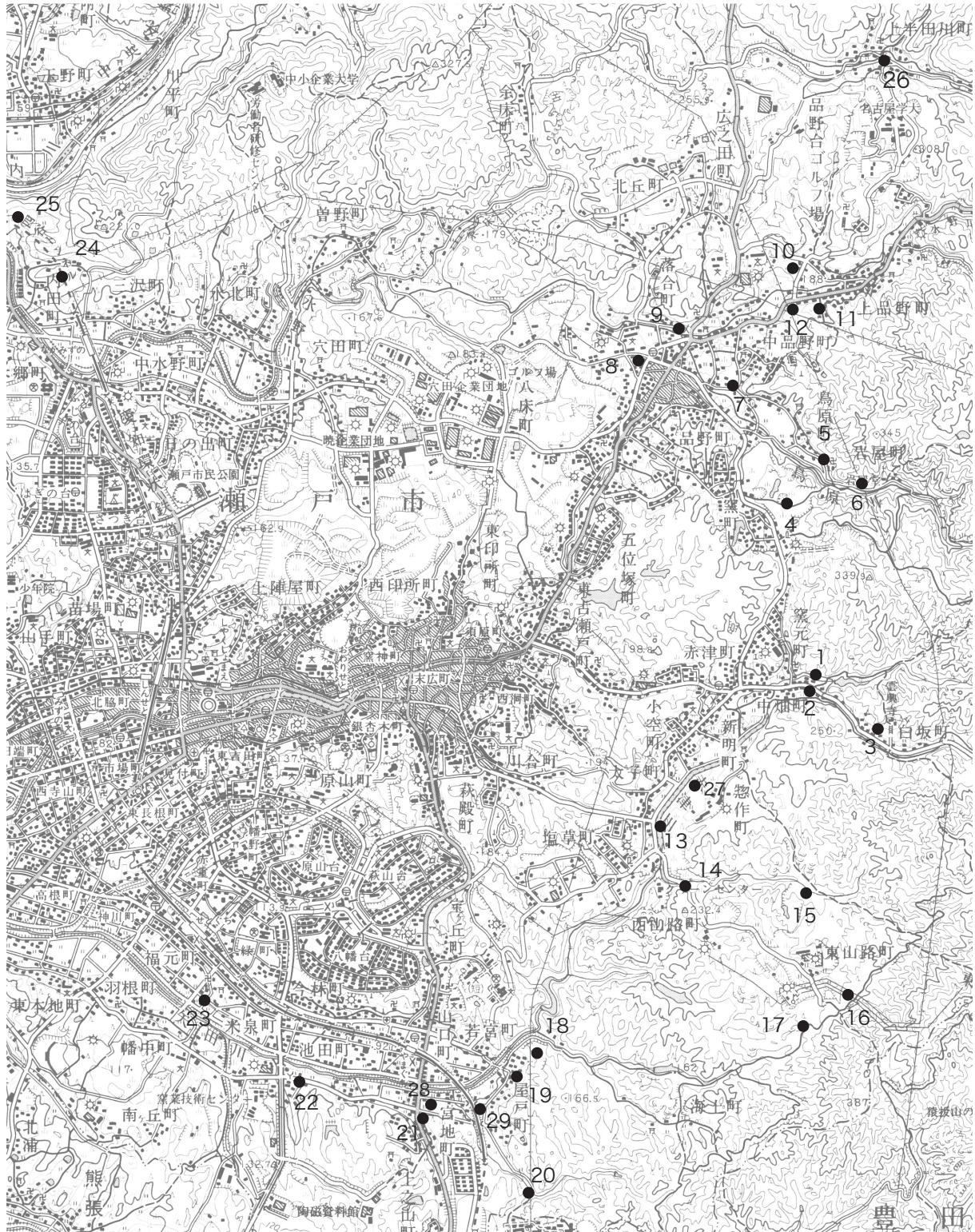
八王子遺跡は、木下川を挟んで長谷口遺跡の対岸に位置し、遺跡の消長から密接な関係が指摘できる。八王子遺跡は、早期後葉である粕畑式から上ノ山式に比定できる土器群が最も多く出土している。入海Ⅰ式以降、徐々に出土量が少なくなる。一方、長谷口遺跡は粕畑式に比定できる資料も数点確認できるものの、大多数は早期末葉の入海Ⅱ式から天神山式である。つまり、八王子遺跡から長谷口遺跡への移動が想定できる。ただし、八王子遺跡では竪穴住居が 1 棟検出されているものの、長谷口遺跡では明確な住居がない。

前期から中期前半に関しては両遺跡ともに希少、中期後葉になると長谷口遺跡では竪穴住居が検出されている。

少し下流に目を向けると、赤津盆地が大きく広がる赤津川に形成された河岸段丘が展開する。この赤津川左岸段丘上に惣作・鐘場遺跡が位置する。惣作・鐘場遺跡は縄文時代草創期に遡る遺物が確認されている。中心となる時期は、中期後半から後期にかけてである。2004 年度まで調査は継続しており、詳細は不明ではあるが、縄文時代中期後半から後期を中心とした集落遺跡として注目できる。

弥生時代については、瀬戸市域の調査例が少ない。そのなかで、長谷口遺跡は中期末から後期初頭の竪穴住居を検出、先に示した惣作・鐘場遺跡では、弥生後期から古墳時代前期の住居や溝などが確認されている。赤津川流域に弥生時代後半の核となる遺跡群が想定できる。

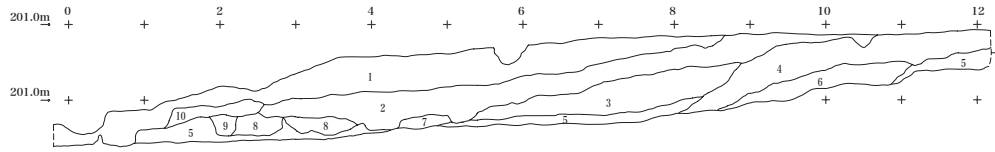
古代については、長谷口遺跡に先行する遺跡が木下川および赤津川を挟んで対岸約



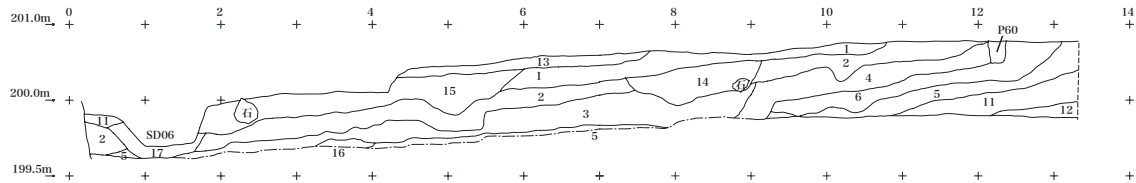
- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-----------|-------------|
| 1. 長谷口遺跡 | 6. 岩屋堂遺跡 | 11. 中洞遺跡 | 16. 山路縄文遺跡 | 21. 大坪遺跡 | 26. 上半田川遺跡 |
| 2. 八王子遺跡 | 7. 境井遺跡 | 12. 上品野遺跡 | 17. 大平縄文遺跡 | 22. 大六遺跡 | 27. 惣作・鐘場遺跡 |
| 3. 白坂雲興寺遺跡 | 8. 品野西遺跡 | 13. 太子縄文遺跡 | 18. 屋戸遺跡 | 23. 西米泉遺跡 | 28. 大坪西遺跡 |
| 4. 針原遺跡 | 9. 落合橋南遺跡 | 14. 太子遺跡 | 19. 屋戸遺跡 2 | 24. 四ッ谷遺跡 | 29. 吉野遺跡 |
| 5. 鳥原遺跡 | 10. 上品野蟹川遺跡 | 15. 山路遺跡 | 20. 吉田奥遺跡 | 25. 岩割瀬遺跡 | |

図3 周辺遺跡の分布図

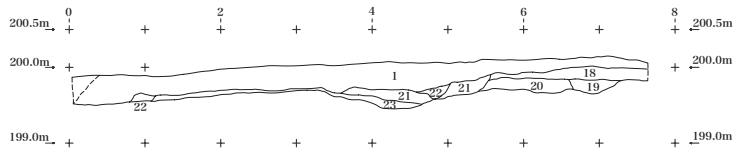
トレンチ I



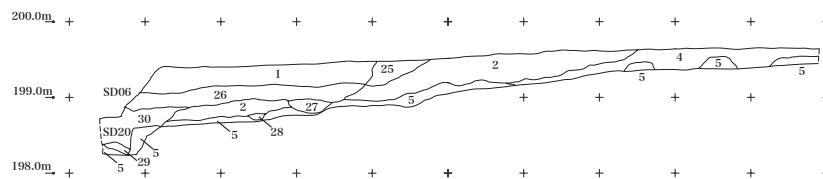
トレンチII



トレンチIII



トレンチIV



層位番号	土色記号	土色・土質	層位番号	土色記号	土色・土質
1	10YR2/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混	11	5YR3/2	暗赤褐色土2~4mmの砂礫混
2	10YR1.7/1	黒色土2~4mmの砂礫混	12	5YR3/4	暗赤褐色土2~4mmの砂礫混
3	10YR2/1	黒色土2~4mmの砂礫混	13	2.5YR3/3	暗オリーブ褐色土2~4mmの砂礫混
4	2.5YR3/1~5YR3/1	暗赤灰~黒褐色土2~4mmの砂礫混	14	2.5YR2/1	黒色土2~4mmの砂礫混、7.5YR3/2黒褐色土混
5	7.5YR3/3	暗褐色土2~4mmの砂礫混	15	10YR2/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混、10YR3/2黒褐色土混
6	5YR3/2	暗赤褐色土2~4mmの砂礫混	16	7.5YR2/3	極暗褐色土2~4mmの砂礫混
7	7.5YR2/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混	17	10YR3/1	黒褐色土2~4mmの砂礫混、10YR1.7/1黒色土混
8	5YR3/1	黒褐色土2~4mmの砂礫混	18	10YR3/4	暗褐色土2~4mmの砂礫混
9	7.5YR3/1	黒褐色土2~4mmの砂礫混	19	10YR3/3	暗褐色土地山、10YR5/8黄褐色土混
10	7.5YR2/2	極暗褐色土2~4mmの砂礫混	20	10YR3/2	黒褐色地山、10YR5/8黄褐色土混
21	10YR2/3	黒褐色土2~4mmの砂礫混			
22	7.5YR3/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混			
23	5YR4/2	灰褐色土山混			
24	7.5YR4/2	灰褐色土山混			
25	2.5YR3/3	暗オリーブ褐色土2~4mmの砂礫混、10YR2/2黒褐色土混			
26	2.5Y3/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混			
27	10YR1.7/1	黒色土2~4mmの砂礫混			
28	7.5YR4/2	灰褐色土2~4mmの砂礫混			
29	10YR2/2	黒褐色土2~4mmの砂礫混、7.5YR3/3暗褐色土混			
30	7.5YR1.7/1	黒色土			

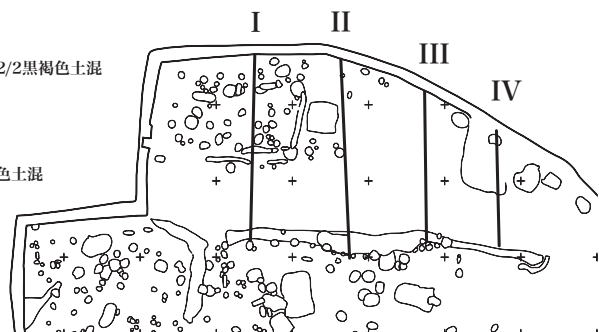


図4 トレンチI~IV断面図 (S=1:100)

350m 離れた山地縁辺部に位置する 凧山屋敷遺跡がある。折戸 10 号窯式前半に比定できる 竪穴住居が 2 棟検出されている。一方、長谷口遺跡では黒笹 14 号窯式に比定できる 竪穴住居が 3 棟検出されている。赤津盆地の北東部において、このような数棟単位のまとまりが短期間に移動していたと想定できる。

中世については、赤津地区に 100 基を越える窯跡が確認されている。その一方で集落遺跡は不明である。窯業生産に関わった人々の居住地が恐らく赤津盆地に点在していたと考えられる。惣作・鐘場遺跡はその候補遺跡であるが今後の調査成果を待ちたい。隣接する八王子遺跡からは、14 世紀中頃の墓地と 15 世紀後半の街道沿いに想定される製品選別に関わる施設がある。長谷口遺跡は 15 世紀前半の遺構・遺物が多く、ちょうど八王子遺跡の希薄となる時期を埋める。

近世については、赤津地区の窯業生産地の東端に位置し、近世末から近代とされる長谷口 B 窯が遺跡に隣接する。この時期前後の窯跡としては長谷口 C 窯、窯元 B 窯などがある。長谷口遺跡では、同時期に比定できる居住地を検出した。窯道具のほか、陶磁器類も多数出土している。そのなかでも茶道具に関連する一括廃棄が認められ、居住者像を知る手がかりになる。長谷口 B 窯は長谷口観音堂が 17 世紀後半頃に創建された後の操業と考えられるため、観音堂と窯さらに居住地の関連性が問題となる。

(3) 基本層序

調査前の現況は、畑地であった。山側から木下川に向かって緩斜面であるべきところ、等高線にほぼ沿いながら細長い平坦面を 4 段作り出し畑地として利用されていた。調査の結果、最上段 (02 区) は近世末 (19 世紀第 3 四半世紀) の居住地の平坦面、上段は中世後期 (15 世紀前後) の遺構が展開する平坦面、中段は 00 区の東寄りに平坦面が広がり、下段は木下川河川敷に相当し、水車小屋跡 (00A 区 SX02) が位置するとわかった。つまり、近世末までには現況に近い棚田状の平坦面が整備されていたと考えられる。平坦面の作り出しは、各々段を作り出す部分を帯状に削り、その土を上位の斜面に盛り平坦面を形成していたと考えられる。したがって、現況は 4 段のテラスが認められるが、むしろ旧地形を生かしながら造成したと考えられる。

基本層序を 02 区から示せば、次のようになる。(図 4 参照)

20 ~ 30cm の表土 (10YR5/4 にぶい黄褐色土) の下位に、概ね古代から近世の包含層 (2.5YR3/5 ~ 5YR3/1 暗赤灰~黒褐色砂質土が 30cm 前後覆う (検 I)。この古代から近世の包含層も場所によって厚く堆積する一方で、まったく包含層がない場合もある。この場合、先に触れた棚田状の整地が要因と考えられる。包含層の有無に関して、以下に示す縄文時代早期後葉を中心とする遺物包含層についても指摘できる。棚田状の整地が時期的に新しい地形の改変ではあるが、遺跡の立地する地形をみればごく当たり前の状況である。つまり、山地の裾に位置し、緩斜面であること。要するに大なり小なり自然地形が変化する場所であることは、堆積層の形成をより複雑に示す要因になっている。

図 4 に示したトレンチは中世から近世を中心とする遺構群、つまり第 1 面の掘削終了時点の段階で、最上段に南北方向に 4 本設定した。最上段を選定した理由は、最も山側に位置し、堆積状況が良好であると判断したからである。

4 段の平坦面
最上段・上段
中段
下段

トレンチ掘削の結果、いわゆる地山とした無遺物層（10YR5/8 黄褐色土）より上位に、都合 30 層序確認した。おおまかにみると、1 層（10YR2/2 黒褐色土）は弥生時代中期から後期の遺物包含層（検 II）、2 層（10YR1.7/1 黒色土）～3 層（10YR2/1 黒色土）は
検 II 縄文時代早期末葉と前期を含む中期を中心とした遺物包含層（検 III）、4 層から 6 層は縄
検 III 文時代早期末葉を中心とした遺物包含層（検 IV）が見て取れる。東寄りのトレンチほど、
検 IV 地山までの堆積が薄く、検 IV 層が見当たらない。00 区にいたっては、表土層および古代から近世の包含層を除去後ただちに地山面に到達する。そして、調査区北西側は、縄文早期末葉を中心とした遺物包含層が良好に包蔵されていた。したがって調査区全体の堆積傾向は、地山面を基層とするならば、南東に向かい徐々に堆積層が薄くなる。



調査の成果

1 遺構の概要

長谷口遺跡では、縄文時代早期から近世末にいたる遺構群を確認した。遺構群は02調査区の様相から、大きく6つの時期に分けることができる。すなわち、第1面を中心に展開する中世後期～戦国・近世末、第2面を中心に展開する縄文時代中期末葉・弥生時代中期末葉から後期初頭と古代、第3面を中心に展開する縄文時代早期末葉、都合3面にわたり遺構を確認した。基本層序の項に示したとおり、斜面堆積であることも相俟って、時代あるいは時期ごとの層位検出は困難であった。以下、6つの時期ごとに概観する。

縄文時代早期末葉の遺構は、00BSX01と02SK156の集石遺構が2ヶ所、最大長1m以下の土坑15ヶ所、20cm前後のピット24ヶ所がある。このうち、土坑とピットは可能性のあるものを含めると、それぞれ土坑が45ヶ所、ピットが137ヶ所ある。集石遺構は土器など遺物を伴わないが、他時期の遺構と比較して早期とした。しかしながら、その他の土坑・ピットに関しても、遺構の性格を確定しえる要素がない。したがって、早期の遺物を多く含みかつ他時期の遺物を含まない遺構をとりあげた。対岸に位置する八王子遺跡では、竪穴住居が1棟確認されている。しかし、大多数のピット・土坑は性格不明である。

縄文時代中期後葉の遺構は、02SB04・02SB06の竪穴住居、02SK146の埋甕がある。その他SK155のように土坑内にほぼ完形品が埋まる例がある。遺構数は早期末葉にくらべ格段に少ないが、住居など時期比定が可能でかつ遺構の性格を推定できる遺構が目立つ。現在調査中の惣作・鐘場遺跡からは、同時期に比定できる竪穴住居などが確認されている。

弥生時代中期後葉から後期初頭の遺構は、02SB03・02SB07と00BSB01に代表される竪穴住居がある。前者2棟の住居は軸線をややずらして重複関係にある。いずれの住居も、惣作・鐘場遺跡の弥生時代集落より一時期古く、瀬戸市内では他に例がない。

古代の遺構は、竪穴住居が3棟ある。いずれも黒笹14号窯式に比定できる。木下川を少し下り対岸に位置する鳳山屋敷遺跡では折戸10号窯式の竪穴住居が3棟確認されている。3棟単位の住構成が追認できた。

中世の遺構は、廃棄土坑(02SK28・02SK143)や馬骨埋葬土坑(02SK71)など、土坑・ピットがある。不明な点が多いものの、上段におそらく屋敷地があったと思われる。

遺構検出面と時期

縄文早期末葉

縄文中期後葉

弥生中～後期

古代

中世

近世末 近世末の遺構は、最上段を中心に展開する屋敷地がある。区画溝とその内部に柱穴が配置される。最上段と上段の境目に掘り込まれたSD06、さらに溝内に一括投棄されたSU01がある。00A区では、木下川河川敷に接する水車小屋跡(SX02)が検出された。このSX02は、珪砂(石英の小粒砂)を産出するための施設と考えられる。これらの遺構はおそらく長谷口B窯跡と深い関わりをもった遺構群である。そして、SU01から出土した煎茶に関わる茶道具類のセットは居住者像を知る手がかりとなろう。

2……………縄文時代早期の遺構

不明確な遺構群

縄文時代早期の遺構は、出土遺物からほぼ早期末葉、土器型式で示せば入海Ⅱ式から天神山式に相当する。ただし、遺構の性格を特徴づける傍証は皆無に等しい。本書では集石遺構の2ヶ所を除く遺構(SKやP)について、縄文時代早期末葉の土器のみ出土する遺構を取り上げる。そこで、SKやPの番号を付した遺構のうち、早期末葉の土器のみ出土する遺構を拾い上げると、約180ある。この内、時期比定可能な土器を含む遺構は約30ある。傾向として一型式のみが出土する遺構は少なく、大多数が前後する二型式以上またがっている。第2面の調査によって確認した遺構群のうち、19m・19mグリッド周辺は時期比定可能な遺構が集中する。包含層遺物もこの周辺に集中する。遺構としては明確ではないが、ピット群が集中する箇所でもあるから、住居跡の可能性もある。

00BSX01 (図5)

集石炉

00BSX01は径1.25m、深さ25～30cm、ほぼ円形となる掘り込みを持つ集石炉である。集石は底面に20cm前後の礫を敷き、少し間隔を置いて20cm以下の礫が広がっていた。つまり、円形土坑の底面に礫を敷きそこにやや小さい礫を投棄した様子が見て取れる。礫はいずれも被熱痕が認められた。土坑内から、礫以外に炭化物とともに、数片の土器を確認した。いずれも凶化できるものはなかったが、おそらく縄文時代早期後葉の土器片と考えられ、遺構の所属時期を決めた。

02SK169 (図6)

02SK169は1.6×0.85m、深さ25cm、長楕円形の掘り込みを持つ集石炉である。調査途中までSK71の掘り込みに伴う礫群と想定し進めた。ところが、SK71が馬骨を埋葬した土坑であることが判明すると、SK71の掘り込みにくい込む礫群が一部確認できた。したがって、SK71とは別の遺構に伴う礫群として扱うことにした。SK71完掘後、精査したところSK169の掘り込みを確認した。掘り込みに対して礫群が西側に寄る。これはSK71を掘削した時点で礫を寄せた可能性が高い。つまり、SK71によってSK169は破壊されていたことがわかる。礫はいずれも被熱痕が認められ、00BSX01と同様に集石炉とした。ただし、遺物が他にないこと、中世の馬骨埋葬土坑と切り合い関係があることから、縄文時代早期後葉の集石炉と断言することはできない。

いずれの集石炉も、縄文時代早期後葉の遺物を多く確認した箇所から少し離れた上段の端、つまり木下川により近いところに位置する。仮に居住地が山側に近い最上段に位置すると想定すれば、少し離れた場所に集石炉が位置することも納得できよう。

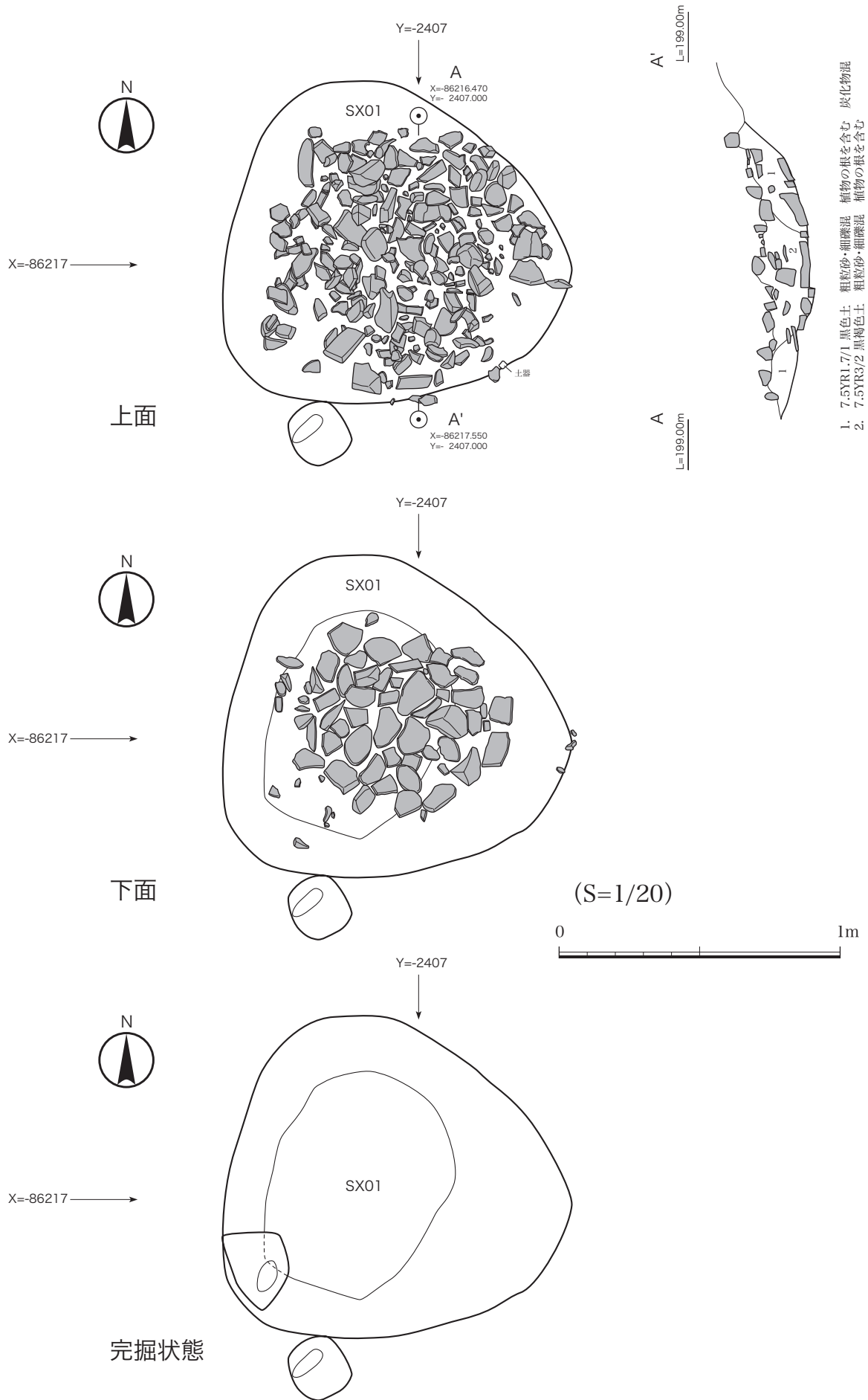


図5 00B区 SX01 平面図および断面図

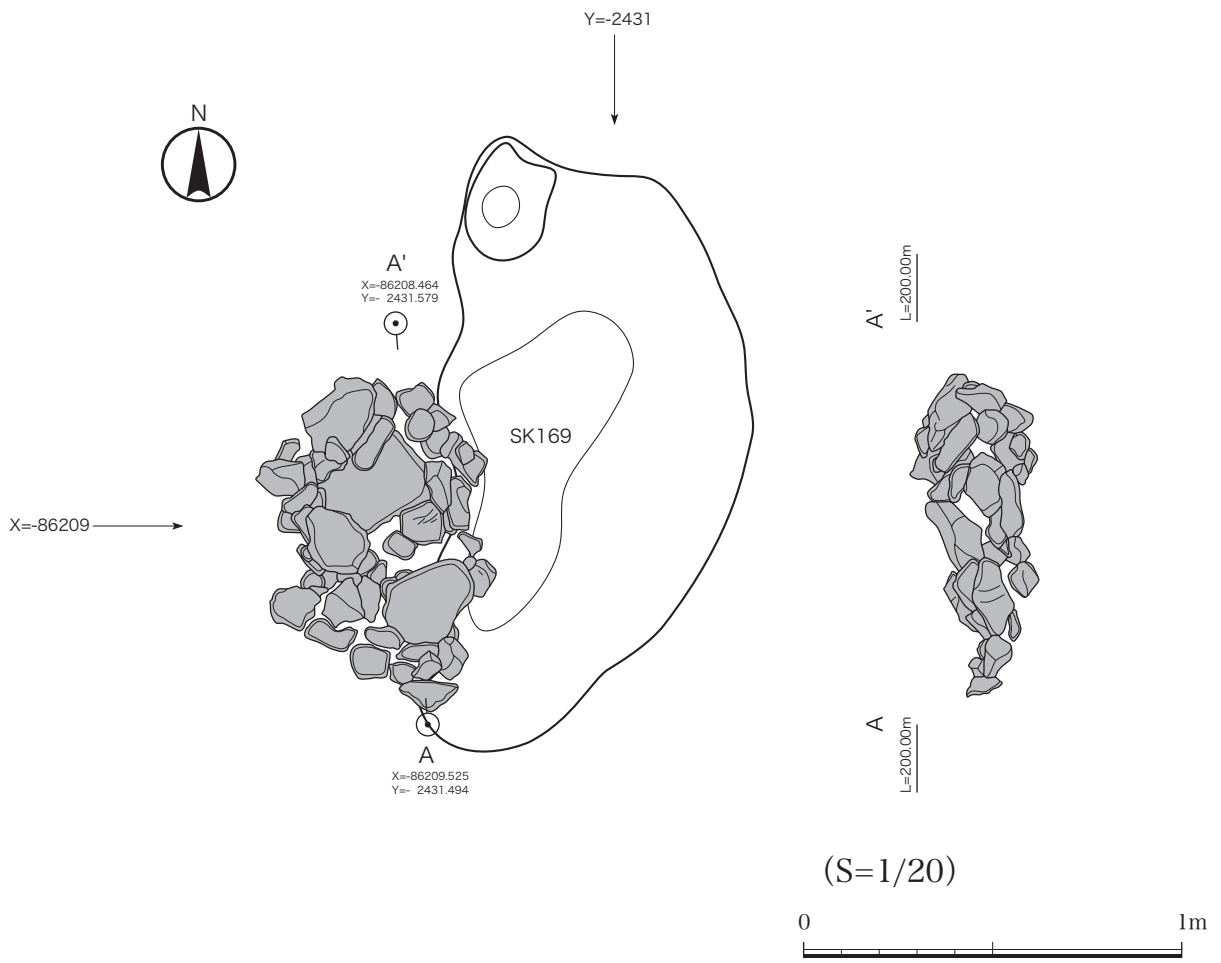


図6 02区 SK169 平面図および断面図

3……………縄文時代中期の遺構

縄文時代中期の遺構群は、調査段階の第2面および第3面を中心に確認した。縄文中期までの遺物を含む遺構としては、16ヶ所のみである。遺構の時期は、中期末葉を中心に認められる。主要な遺構としては、竪穴住居が2棟、埋甕が1基ある。以下、これらの遺構を中心に記載する。

02区 SB04 (図7)

3.8×3.5mを測るほぼ円形の竪穴住居。中世以降の削平を受け、検出面がほぼ床面であった。円形プラン内には、ピットなどを確認したが、柱穴と確認できるものはなかった。また、円形プラン中央付近に被熱した集石があった。ここから島崎III式に比定できる土器片が出土した。炉石として組まれた形跡は認められない。遺物はこの1点のみであったが、隣接する遺構は中世後期が中心となり、状況証拠ではあるが縄文中期後半に比定した。

02区 SB06 (図8)

(4.0)×3.8mを測る壁溝がめぐる五角形の竪穴住居。住居の西側、SK161と中世以降の削平によりプランが確定できない。SK161は風倒木痕で、切り合い関係からSB06以前とした。

五角形プラン

五角形のプランとした理由は、壁溝と柱穴の配置にある。まず、壁溝について、全周はしないが、住居の北側と東側に2重の溝がめぐる。SD27とした北側の外周はやや曲線を描くがほぼ東西方向に延びる。延長上にある東側の外周(SD)はほぼ南北方向、さらにSD24は南西方向に直線に延びる。住居のプランもこれに沿うように折れ曲がる。次に柱穴の配置について、支柱穴としたP571・P572・P582・P580・P577は五角形に配置されている。以上の2点から、五角形の竪穴住居と考えた。

住居のほぼ中央に花崗岩を4点配置した炉がある。中心部分がほぼ円形になり、焼土が見られた。正円に近いプランから恐らく炉帯土器を抜き取った可能性も指摘できる。

山の神I式を中心に比較的多くの遺物が出土した。中期後葉に比定する。

02区 SK146 (図9)

深鉢(286)が単体で出土した。土坑の掘り込みは確認できなかった。検出当初は口縁部が欠損していた。土器内部の埋土を取り除く段階で、比較的上位に口縁部片を確認した。底部は全て打ち欠いていた。したがって、埋設当初は底部を打ち欠いた状態、つまり円筒状の土器を埋めていたと想定できる。なお、土器内の埋土から若干の炭化物と小礫およびスクレイパー(147)と剥片を確認した。石器は埋土低位ではないので埋甕に伴うものではない。

埋甕

02区 SK155 (図10)

1.6×0.7m、深さ0.25mを測る長楕円形で比較的浅い土坑。3・4層が埋まった段階に深鉢(287)が一個体出土した。底部付近はなく、口縁部から胴部も約1/2のみであった。土坑の形状から風倒木痕の可能性も否定できない。

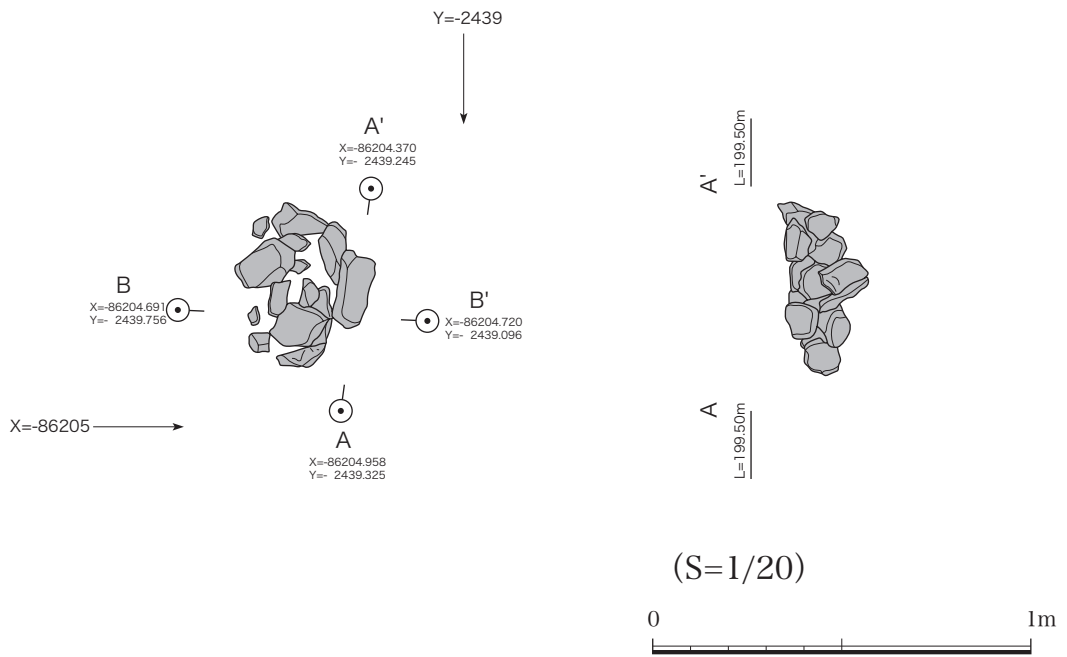
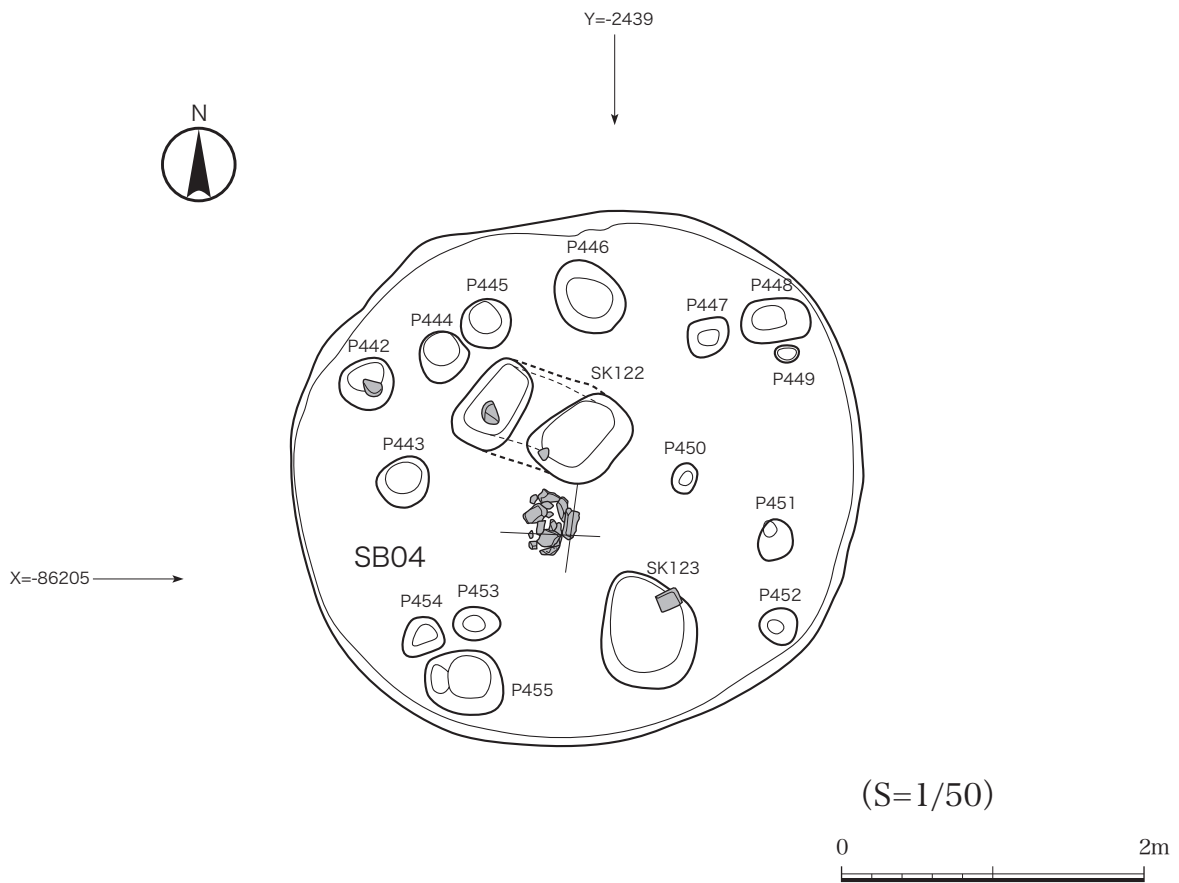
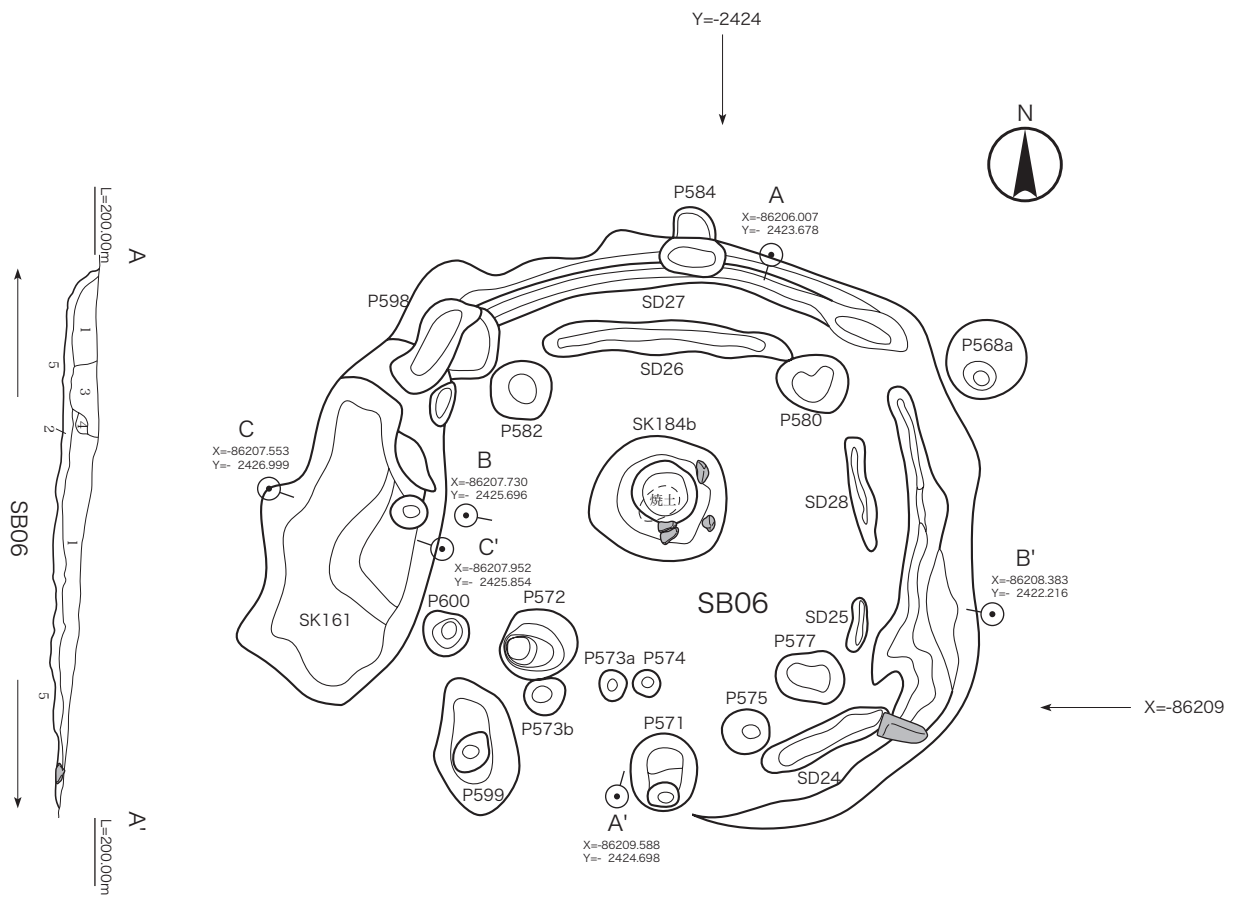
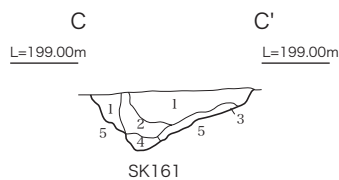
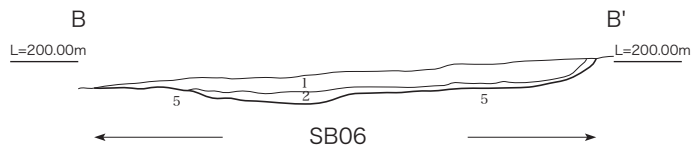


図7 02区SB04平面図



1. 2.5YR2/2 極暗赤褐色土 砂礫土かなり混
2. 2.5YR3/2 暗赤褐色土 砂礫土かなり混
3. 5YR4/1 褐灰色土 砂礫土かなり混
4. 5YR4/2 灰褐色土 砂礫土かなり混
5. 10YR7/6 明黄褐色砂質土 砂礫土かなり混



1. 5YR3/2 暗赤褐色土 砂礫かなり含む
2. 5YR2/1 暗赤褐色土 砂礫かなり含む
3. 5YR4/2 灰褐色土 砂礫かなり含む
4. 5YR3/1 黒褐色土 砂礫・地山土含む
5. 10YR7/6 明黄褐色砂質土 砂礫含む

(S=1/50)



図8 02区 SB06 平面図および断面図

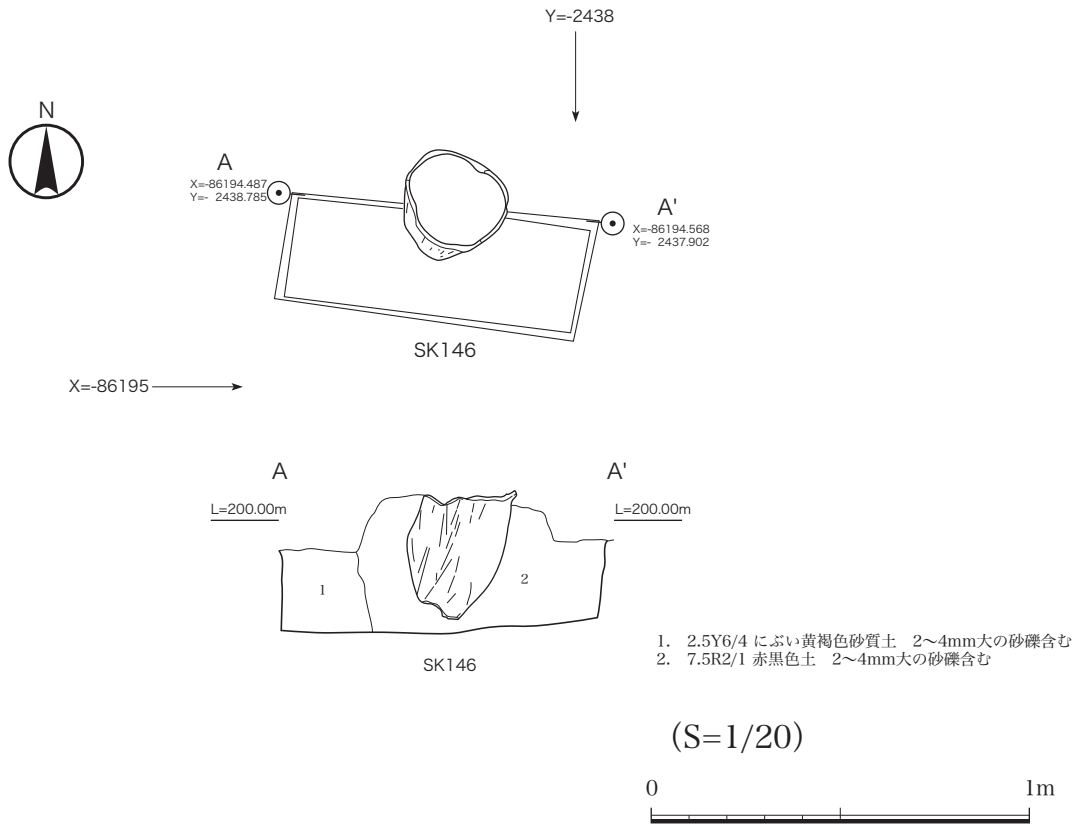


図9 02区 SK146 平面図および断面図

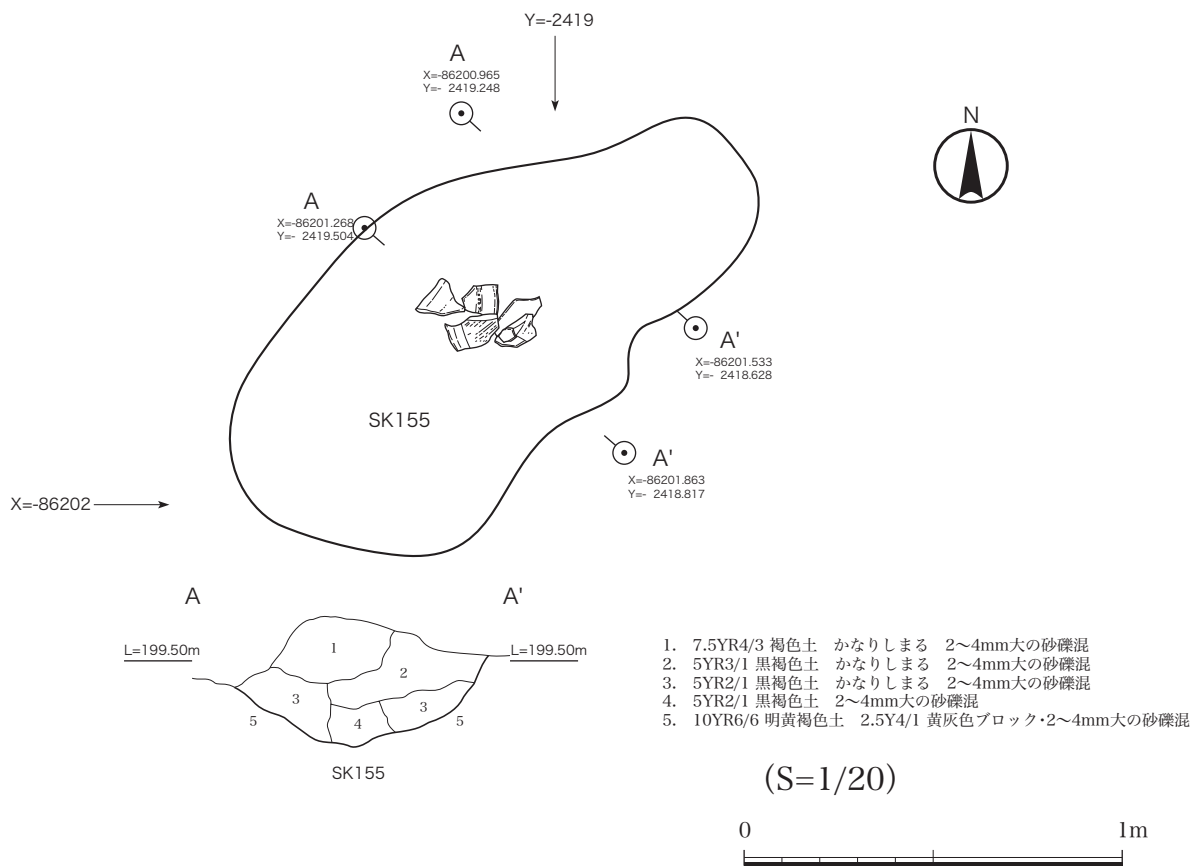


図10 02区 SK155 平面図および断面図

4 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、主に第2面から第3面にかけて確認した。このうち、竪穴住居が2棟切り合った02区SB03・07と00B区SB01、さらに板状鉄斧が出土したSK120について説明を加える。

02区SB03 (図11)

4.6×3.7m、深さ0.4mを測る隅丸方形プランの竪穴住居。長軸をほぼ北にとり、南壁にSK120と切り合い関係をもち、北側半分では長軸を東西にとるSB07と切り合い関係をもつ。SB03はSK120およびSB07を切り込むように構築しており、最も新しい遺構として捉えた。支柱穴は、下位のSB07と混在し判然としない。SB03の壁際にあるピットのうちいずれかが支柱穴になろう。プランのほぼ中央部に浅い窪みを確認した。被熱痕や炉石など付属施設や痕跡がないものの、炉の可能性はある。出土遺物は、中期後葉(尾張Ⅳ様式後半)から後期初頭(尾張Ⅴ様式前半)の土器が混在していた。SB07との切り合い関係を勘案すれば後期初頭に位置づけられよう。

02区SB07 (図11)

5.9×3.8m、深さ0.2mを測るほぼ長方形プランの竪穴住居。ほぼ全面にわたりSB03構築時に削平されており、プランも不安定となる。南西にあるSK168は縄文時代の風倒木痕であり、SB07に切り込まれている。付属施設は確認できない。出土遺物は、中期後葉の土器が少量あり、SB07から出土した土器のうち中期後葉のものがSB07と想定した。

02区SK120 (図11)

2.4×1.1m、深さ0.8mを測る長楕円形の土坑。鉄斧は1層から出土している。つまり、埋土の上位に位置する。SK120は板状鉄斧が出土した希少な遺構にもかかわらず、鉄斧以外に出土遺物がない。若干の縄文土器片の出土があったが、紛れ込みと判断した。SK120の時期比定はSB03とSB07から出土した遺物により判断するしかない。したがって、中期後葉から後期初頭の範疇で捉えたい。

鉄斧

00B区SB01 (図12)

4.2×2.0m以上、深さ0.3mを測る方形プランの竪穴住居。ちょうど上段から中段への段差にかかる場所に位置したため、後世の削平が著しい。プランは北側にかろうじて残る程度で、一部0.3mの深度が残存する程度である。出土遺物は、02区SB03とほぼ同時期の後期初頭に比定できる。

その他の遺構

02区SB03・07の北東に隣接してピット群(P553～P567a)がある。出土遺物がないものの、SB03・07と土色が類似する点、包含層遺物に弥生土器が比較的多く認められた点を勘案し、掘立柱建物あるいは竪穴住居を想定したい。さらに、02ⅢF1n周辺のピット群(P516～P528)も同様の見解から掘立柱建物あるいは竪穴住居を想定したい。

02区SK15は弥生時代前期(檜王式)の深鉢片(337)が出土している。また、この周辺からも同時期に比定できる土器(335～339)が見られる。SK15は中世土器を若干含むが付近の土坑群(SK13～17)を含めて弥生時代前期の可能性を指摘しておく。

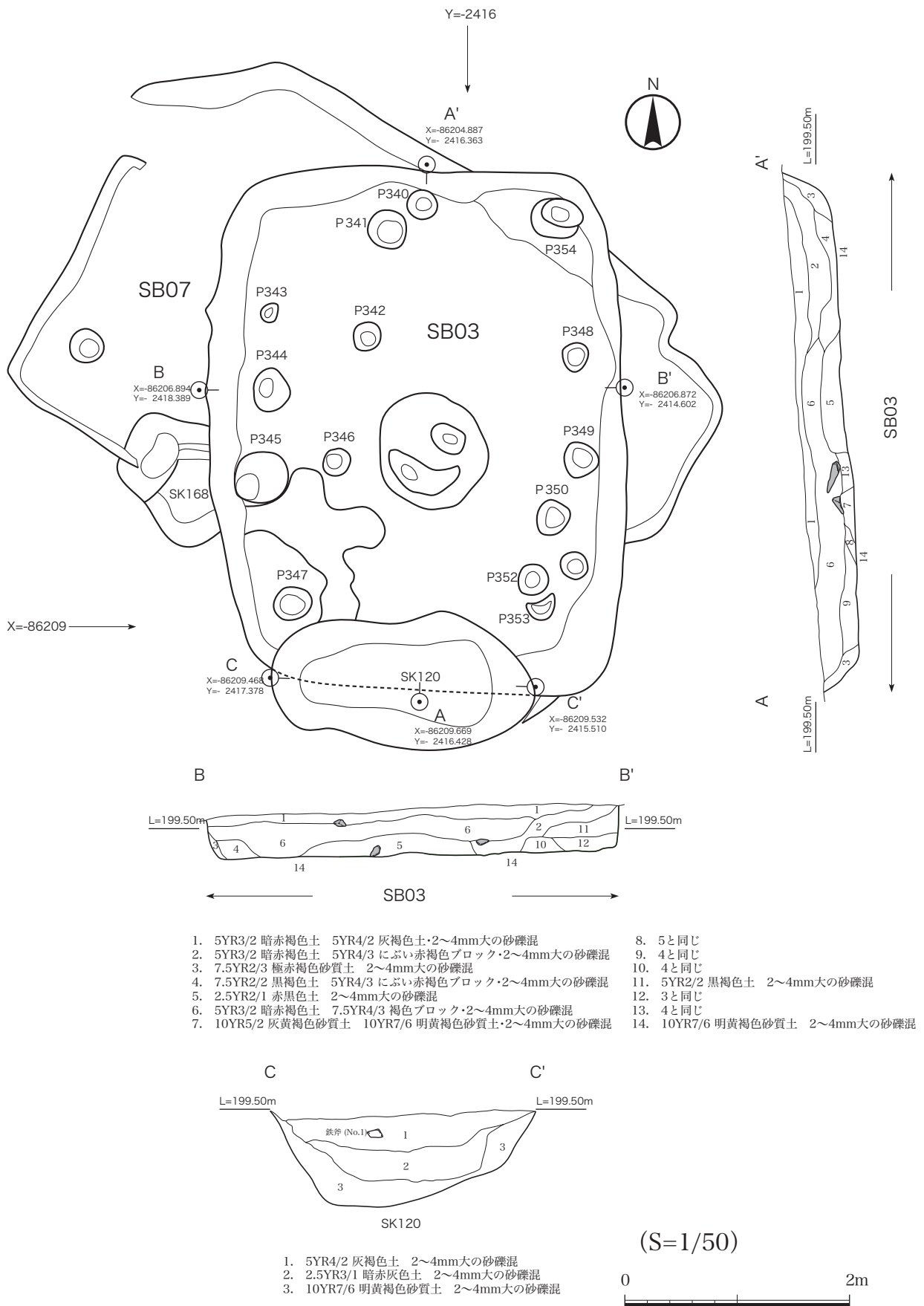


図 11 02 区 SB03・SB07・SK120 平面図および断面図

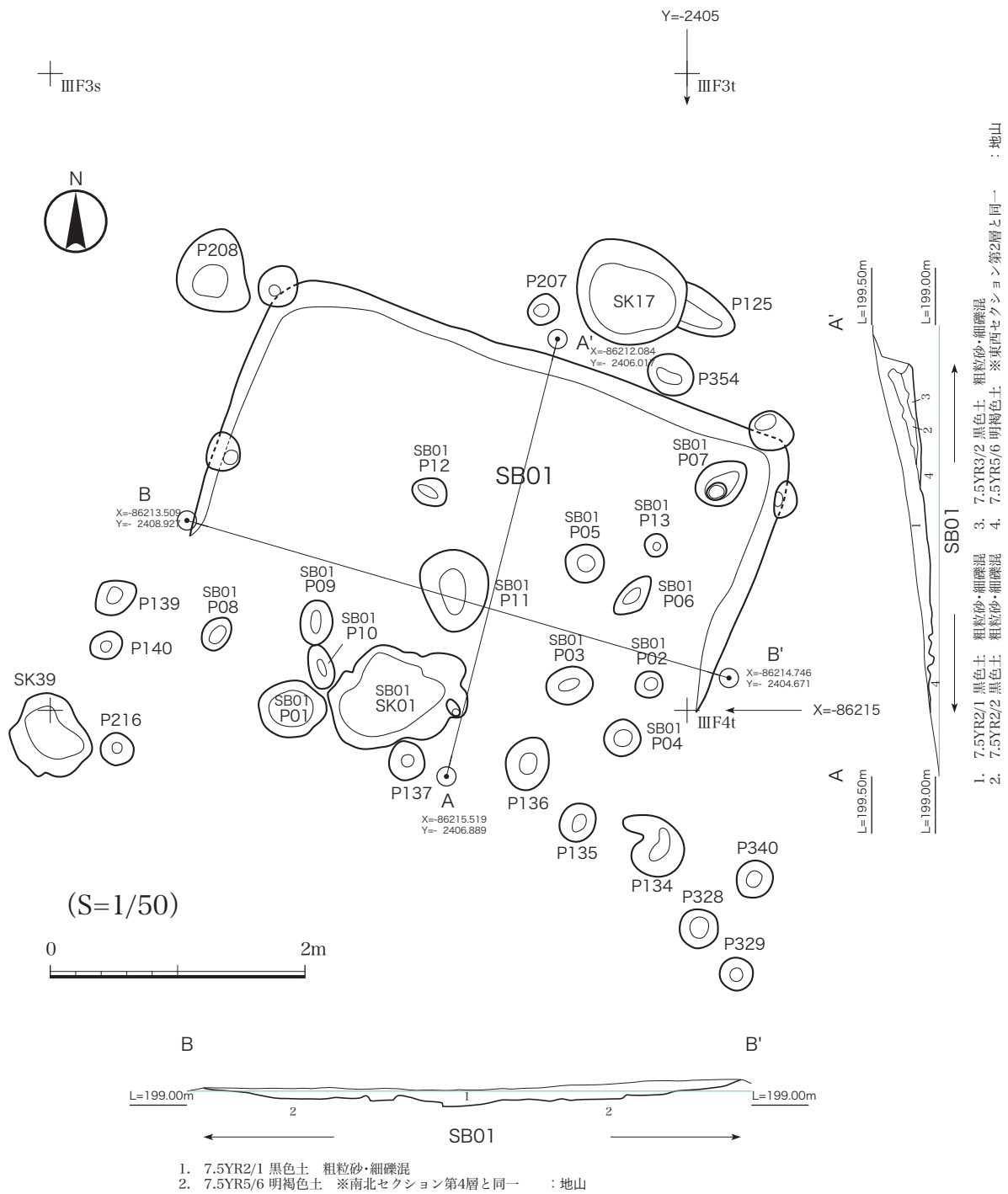


図 12 00B 区 SB01 平面図および断面図

5……………古代の遺構

古代の遺構は、竪穴住居3棟と土壇墓?1基がある。竪穴住居3棟はいずれも調査区上段から中段の縁際に位置する。等間隔ではないが、10m以上の間隔を持ち、等高線に沿って並ぶ。

00B区 SB02 (図13・14・15)

南側が後世の削平によりプランは明確ではない。ピットの位置関係から推定すると、5×(4)mの長方形のプラン、深さ30cmを測る。北側に造り付けカマドをもつ。プランに沿って壁溝がめぐり、その中に小ピットが並ぶ。プラン内に多数のピットと土坑を確認した。これらのうち、ピットの配置を考慮し、SB02 - P02・同P06・P351・P286を支柱穴と推定した。カマドは煙道部の痕跡もみられる。上部構造は遺存していないものの、カマドの本体部分から煙道部への接点辺りは被熱痕が明確に残っていた。カマドのほぼ中央にピット状の落ち込みがあり、支柱石の抜き取り痕の可能性がある。出土遺物から黒笹14号窯式新相に比定できる。

02区 SB01 (図16・17)

南側が後世の削平によりプランは明確ではない。ピットの位置関係から推定すると、5×(4)mの長方形のプラン、深さ30cmを測る。ほぼ00B区SB02と同じ規模の竪穴住居。プラン北西壁に一部壁溝を確認した。全周するかは不明。支柱穴はプランの位置関係から、P364・P366・P372と考えられる。北西側は確認できなかった。北壁中央には造り付けカマドがある。カマド本体は袖部の痕跡がなく、比較的細長い小規模なプラン。上位層から礫を1点確認した。被熱痕がないため、支柱石の可能性は低い。出土遺物から黒笹14号窯式新相に比定できる。

02区 SB08 (図版23・2)

00B区と02区の調査区境に位置する。削平が著しく、痕跡程度にプランを確認した。02区寄りから造り付けカマドと竪穴プランの一部をかりうじて検出した。00区側は調査区壁際のSK45とSK25がおそらく東側のプランと判断した。そうすると、4×4mの方形プランが推定できる。造り付けカマドは北側壁の少し東よりに位置する。出土遺物がなく、確定はできないが、遺構の形状から竪穴住居と考え、上記2例と同様に、古代の住居とした。

02区 SK12 (図18)

土壇墓 長軸2.2m×短軸1.2m、深さ0.25mを測る隅丸長方形の土壇。東壁中央に接して0.95m×0.5mの小土坑がさらに掘り込まれている。この小土坑5層から炭化物が確認された。出土遺物は灰釉陶器碗が1点出土した。時期は折戸53号窯式。土壇墓の可能性もある。

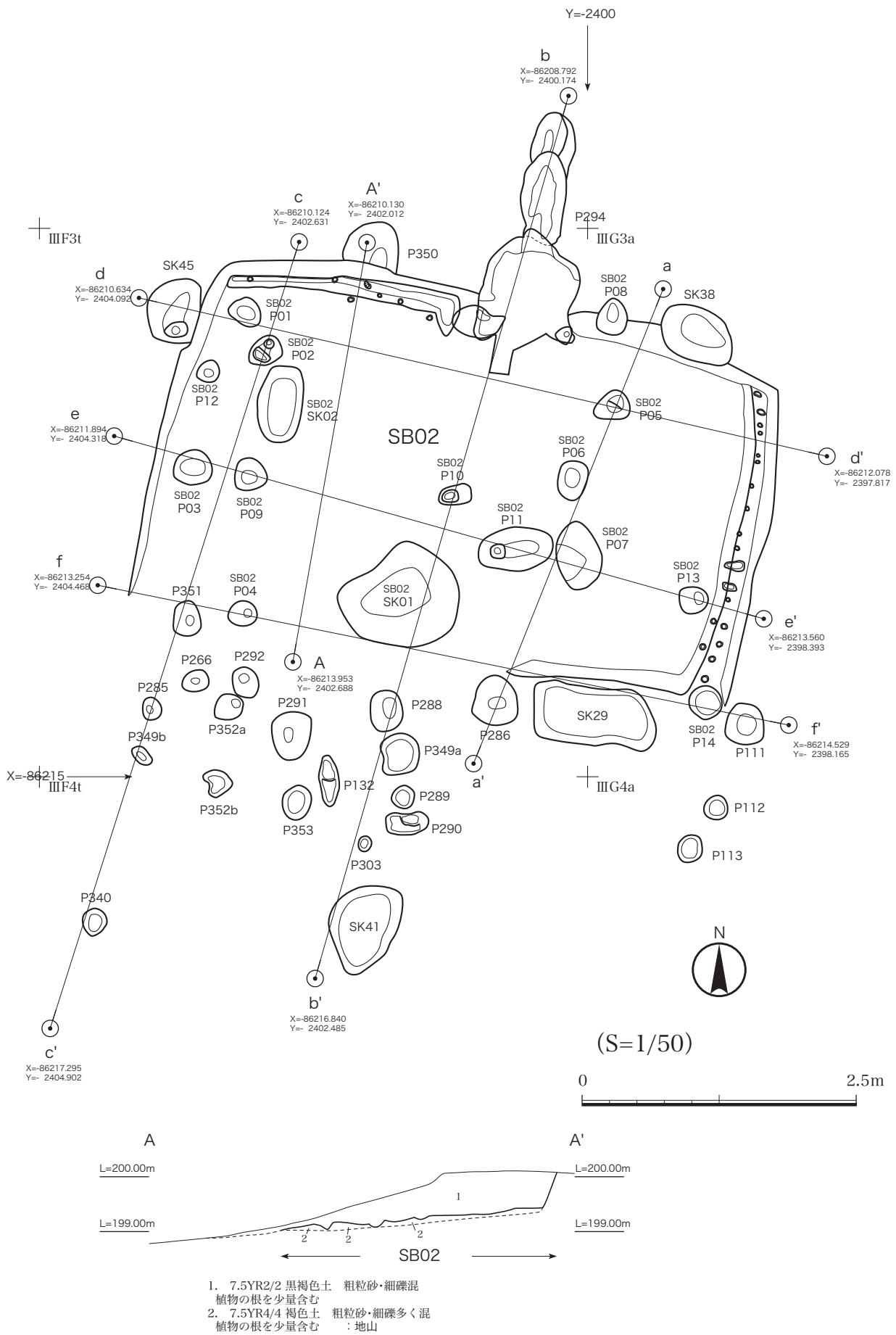


図 13 00B 区 SB02 平面図および断面図

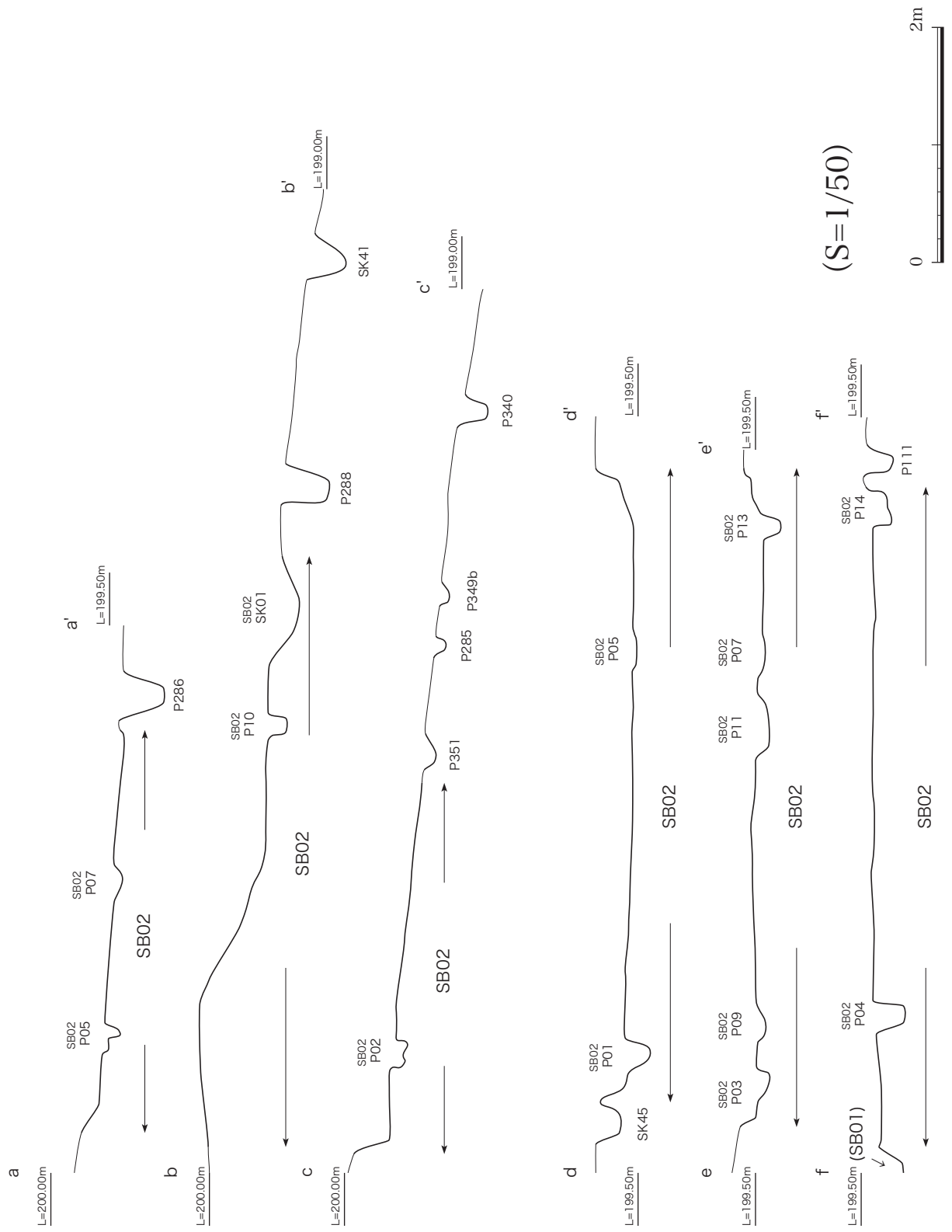
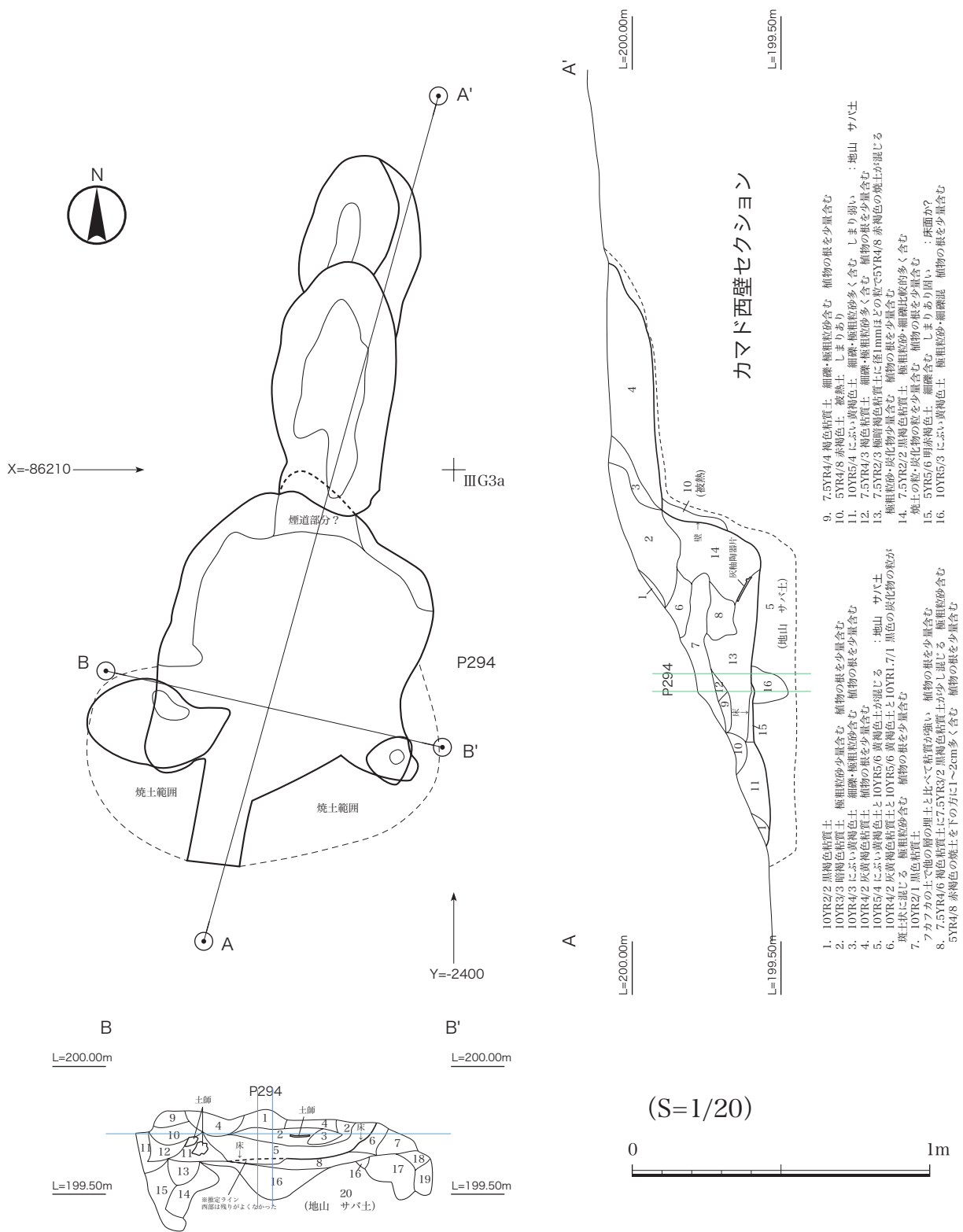


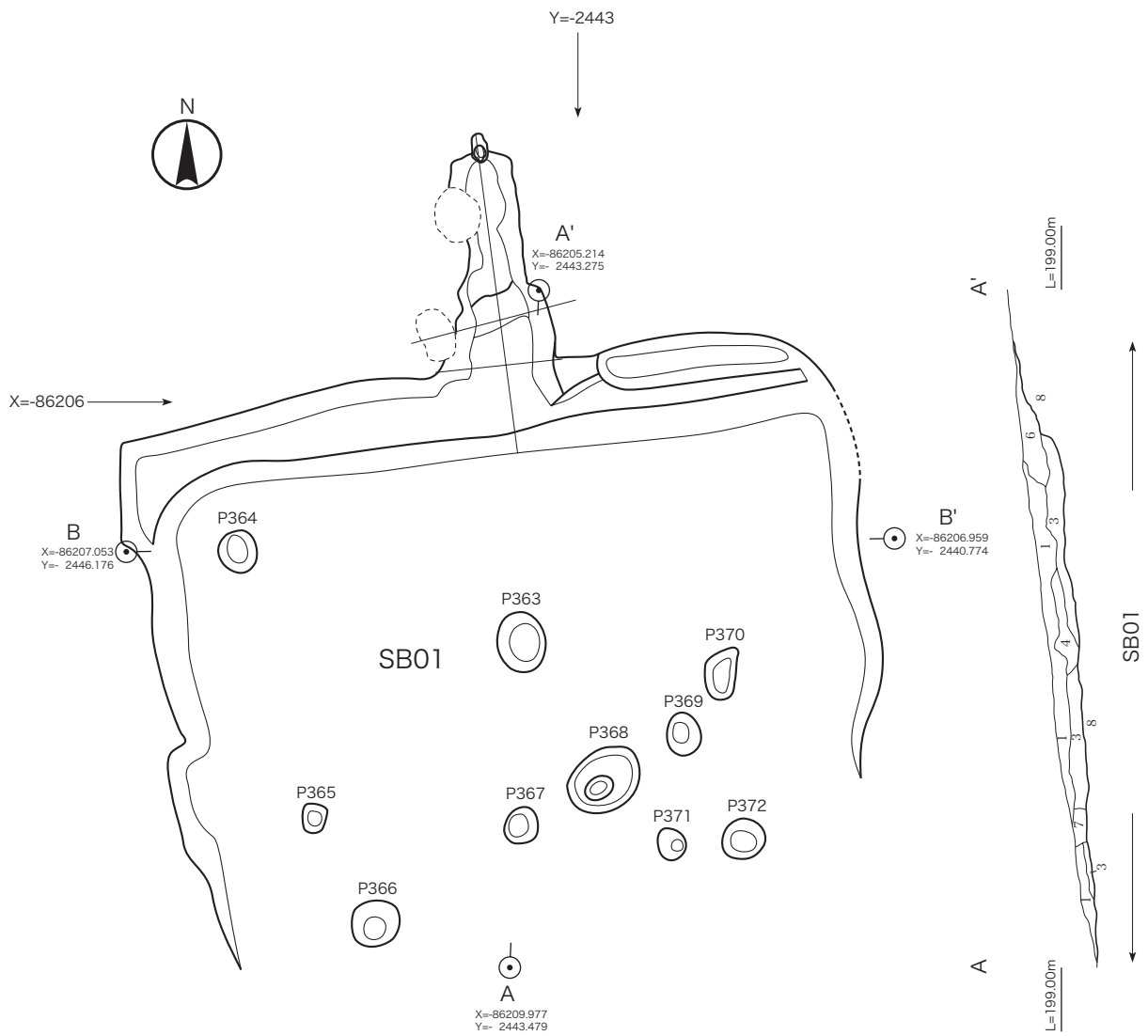
図 14 00B 区 SB02 エレベーション図



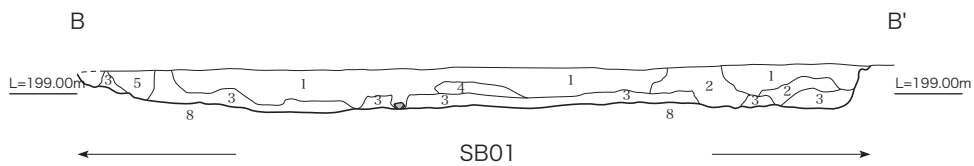
カマド北壁セクション

1. 10YR2/1 黒色粘質土
フカフカの上で、他の層と比べて粘質が強い。植物の根を少量含む
2. 7.5YR4/4 褐色粘質土 細礫・極粗粒砂含む 植物の根を少量含む
3. 2.5Y2/1 黒色粘質土 極粗粒砂含む 植物の根を少量含む
4. 7.5YR5/6 明褐色粘質土にほんの少し5YR5/8 明赤褐色の焼土が混じる
5. 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土に径1cmほどの粒で5YR4/8 赤褐色の焼土が混じる
極粗粒砂・炭化物少量含む 植物の根を少量含む
6. 5YR3/4 暗赤褐色粘質土に5YR4/8 赤褐色の焼土ブロック (1cm程)が所々混じる
極粗粒砂含む 植物の根を少量含む
7. 5YR3/4 暗赤褐色粘質土 極粗粒砂含む 植物の根を少量含む
8. 5YR5/6 明赤褐色土 細礫含む しまりあり固い。：床面か?
9. 10YR5/4 黄褐色土 細礫・極粗粒砂含む 植物の根を少量含む
10. 10YR3/2 黒褐色粘質土に5YR5/8 明赤褐色の焼土の粒がほんの少量混じる
極粗粒砂混 植物の根を少量含む
11. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に5YR5/8 明赤褐色の焼土の粒がほんの少量混じる
極粗粒砂混 植物の根を少量含む
12. 7.5YR5/6 明褐色土 極粗粒砂・細礫混 植物の根をほんの少量含む
13. 10YR3/4 暗褐色土 極粗粒砂少量含む 植物の根を少量含む
14. 7.5YR4/4 暗褐色土に5Y5/8の焼土塊(2cm大)を3つほど含む
極粗粒砂少量含む しまりあり 植物の根を少量含む
15. 10YR4/3 黄褐色土 極粗粒砂少量含む 植物の根を少量含む
16. 10YR5/3 黄褐色土 極粗粒砂・細礫混 植物の根を少量含む
17. 10YR4/4 灰黄褐色土 極粗粒砂・細礫混 植物の根を少量含む
18. 10YR6/3 黄褐色土 極粗粒砂・細礫混 植物の根を少量含む
19. 2.5Y3/2 黒褐色土 極粗粒砂・細礫混 植物の根を少量含む
20. 10YR6/4 黄褐色土 細礫・極粗粒砂混 風化花崗岩混。：地山 サハ土

図 15 00B区 SB02 カマド部分平面図および断面図



1. 7.5YR1.7/1 黒色土 7.5YR4/1 褐灰色ブロック・2~4mm大の砂礫混
2. 2.5Y2/1 黒色土 10YR3/3 暗褐色ブロック・2~4mm大の砂礫混
3. 10YR3/2 黒褐色砂質土 10YR7/6 暗黄褐色砂質土・2~4mm大の砂礫混
4. 7.5R3/2 暗赤褐色土 2~4mm大の砂礫混
5. 7.5R3/2 暗赤褐色土 10YR7/6 暗黄褐色ブロック・2~4mm大の砂礫混
6. 10YR2/3 黒褐色砂質土 焼土(2.5YR5/4)・2~4mm大の砂礫混
7. 10YR2/1 黒色土 2~4mm大の砂礫混
8. 10Y7/6 暗黄褐色砂質土 2~4mm大の砂礫混



(S=1/50)



図 16 02 区 SB01 平面図および断面図

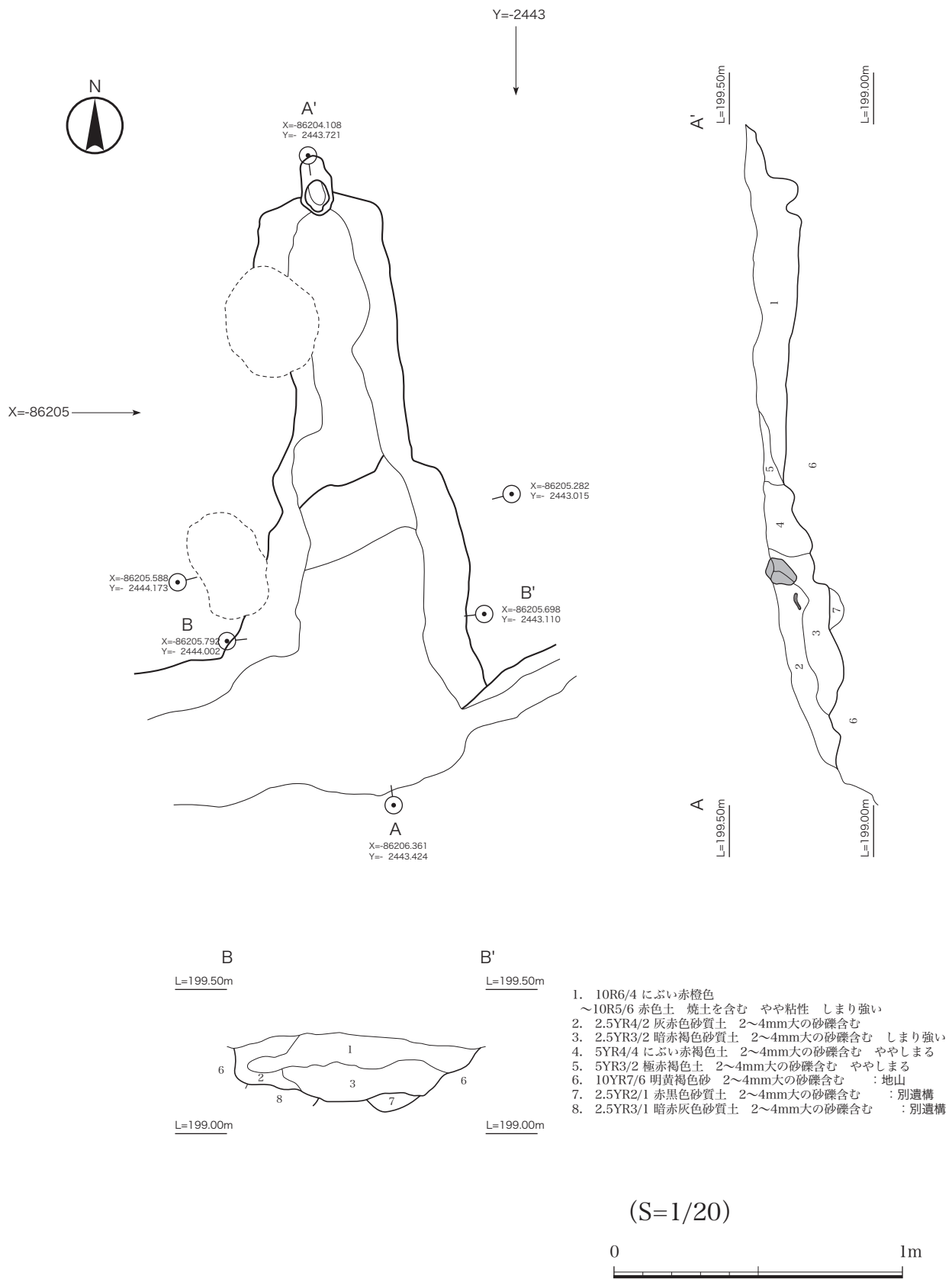


図 17 02 区 SB01 カマド部分平面図および断面図

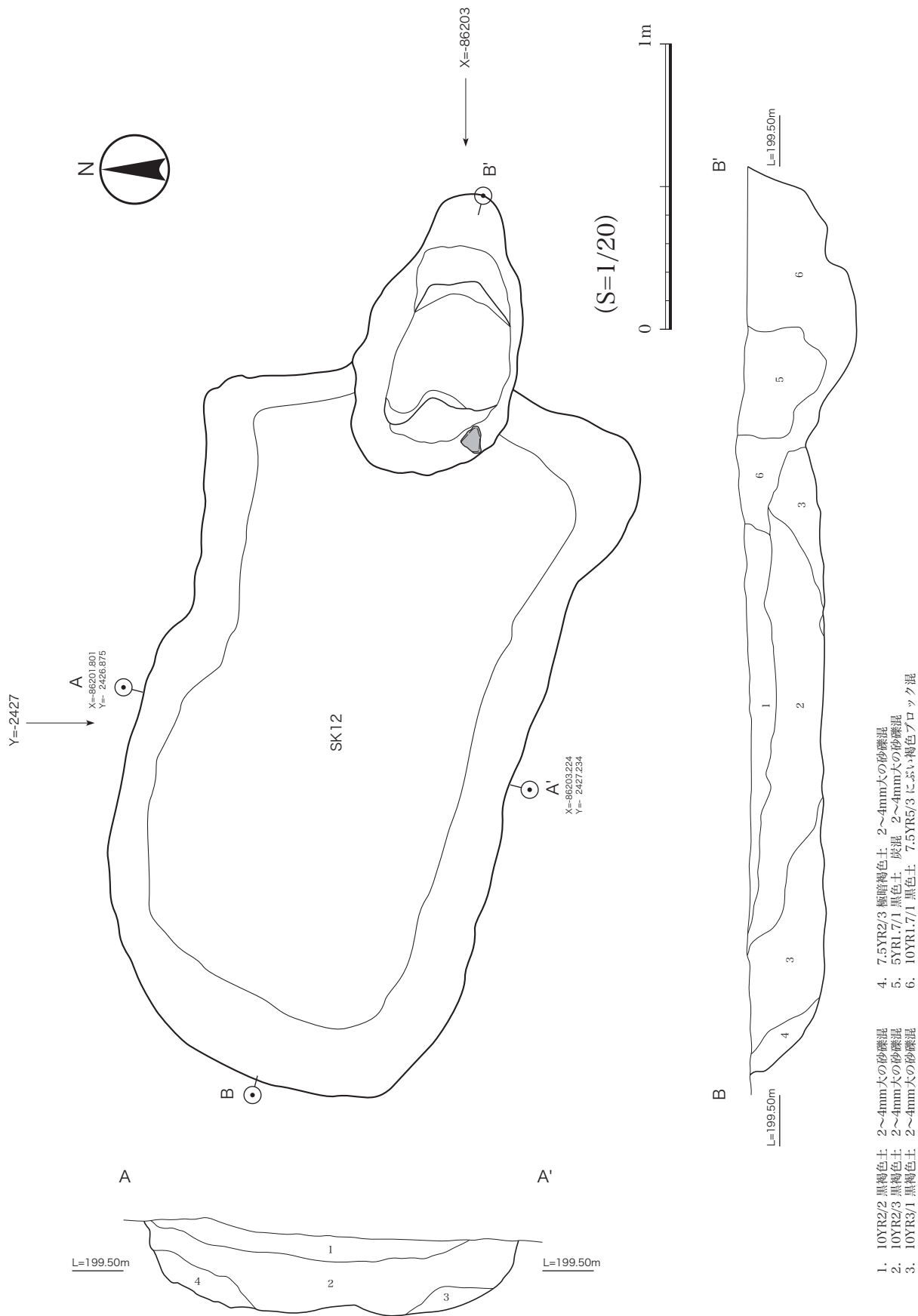


図 18 02 区 SK12 平面図および断面図

6……………中世の遺構

中世の遺構は、02 調査区上段を中心に確認した。

02 区 SK28 (図 19)

SK28 は調査区上段のほぼ中央に位置する。長軸をほぼ南北方向にとり、1.6 × 2.6m、深さ 15 ~ 35cm を測る。南側の一段深くなる所に、40cm 前後の礫が 5 点ほどある。礫は底面から少し浮いた状態で出土している。出土遺物は銭貨が 4 点（永楽通寶ほか）と古瀬戸後 I・II 期を中心に、後 IV 期も見られる。

02 区 SK71 (図 20)

SK71 は調査区上段の南端に位置する。長軸をほぼ南北方向にとり、1.6 × 0.75m、深さ 35cm を測る。概ね 2 層上位の高さに獣骨が見られた。北側に下顎骨、西側に大腿骨が確認されたことから、頭位を北に、脚部を東寄りに埋葬された墓壇と判断した。獣骨は下顎骨および歯の特徴から馬骨と同定した。遺物は北側に銭貨（「開元通宝」）が 1 点出土した。

馬埋葬土壌

上記以外の遺構も多数確認した。土器資料を中心に提示した SK97 や SK143 などは廃棄土坑と考えられる。また、建物も数棟確認できるはずであるが、明確な配置を見いだせなかった。

7……………近世の遺構

近世の遺構は、02 調査区最上段および下段に確認した。

02 調査区最上段は区画溝を伴う居住地が想定できる。南側および東側にある SD01 が断続的に巡る。この SD01 に囲まれた内側に多数の土坑とピットを確認した。

最上段から上段の縁際に SD06 がある。この溝は最上段の居住地を一段下がった面で区画する溝に相当する。この溝の南側にピット列があり、柵列の存在を想起させる。

00A 区の下段に位置する SX02 は木下川の河川敷に位置する。水車小屋と想定するこの遺構は、陶石を砕く施設として利用されたと考えられ、長谷口 B 窯との関連性が指摘できる。

02 区 SU01 (図 21)

SU01 は、SD06 に廃棄された遺物集積である。遺物集積の両側、つまり SD06 の両肩を沿うように礫が配置されていた。この配石は断続的ではあるが、SD06 の両肩に沿うように配置されているが、SU01 の付近は残りがよい。この配石は 1 段の列で確認できたが、50cm 前後の礫の間を埋める小礫の存在や、高さが一定していないことから、本来は 2 段以上の礫が積まれていたと考えられる。SU01 は南側の配石が崩れた下位に位置する。幕末期に相当する遺物群が認められ、「茶器」に関連する陶器類が目立った。

茶器関連遺物

02 区 SK08 (図 22)

1.9 × 1.6m、深さ 10cm 前後を測る土坑。土坑の壁際は一段高く、テラス状となる。北東隅に焼土が集中する。内部にピットはなく、若干貼床状に硬く締まった箇所もみられた。

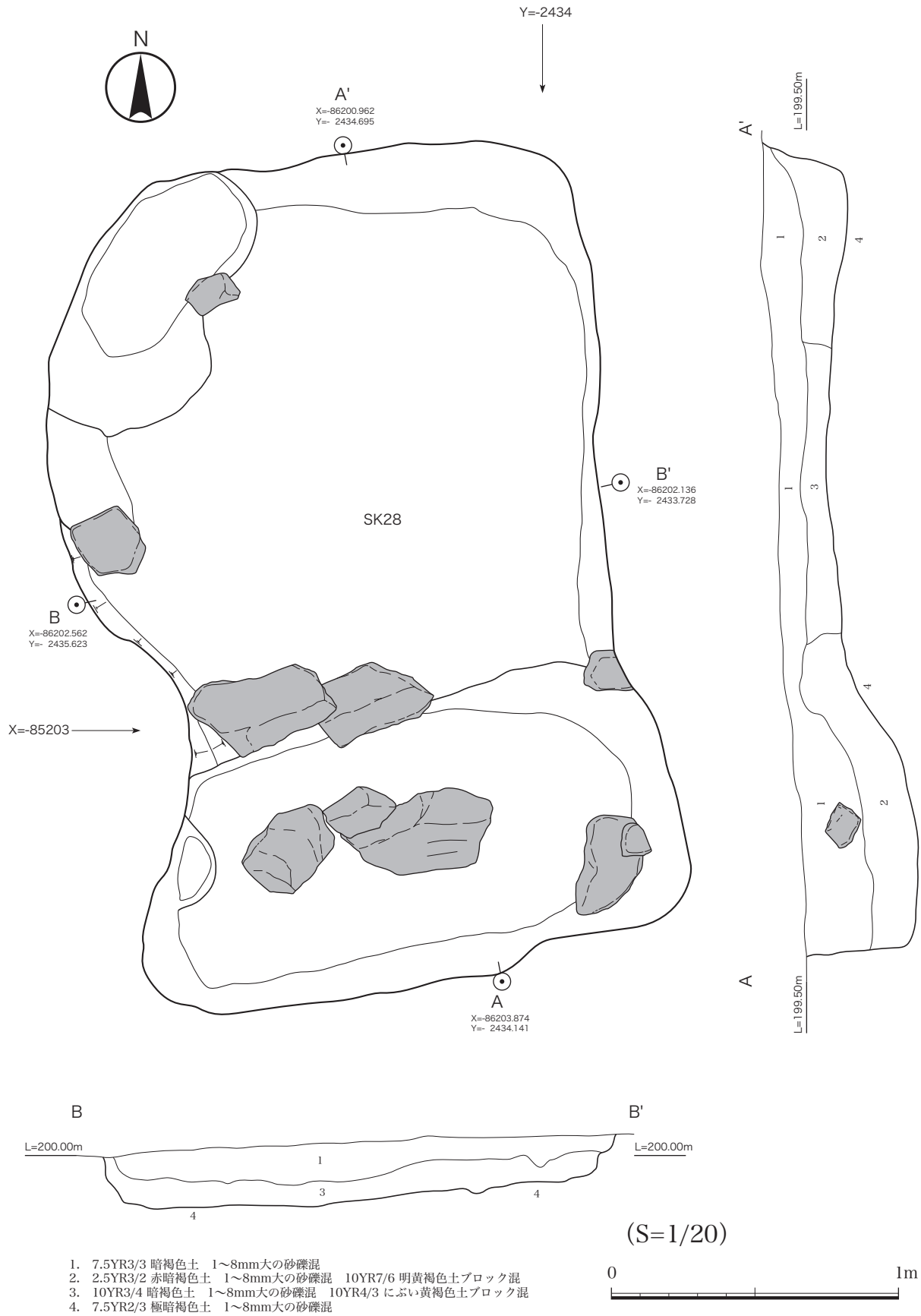
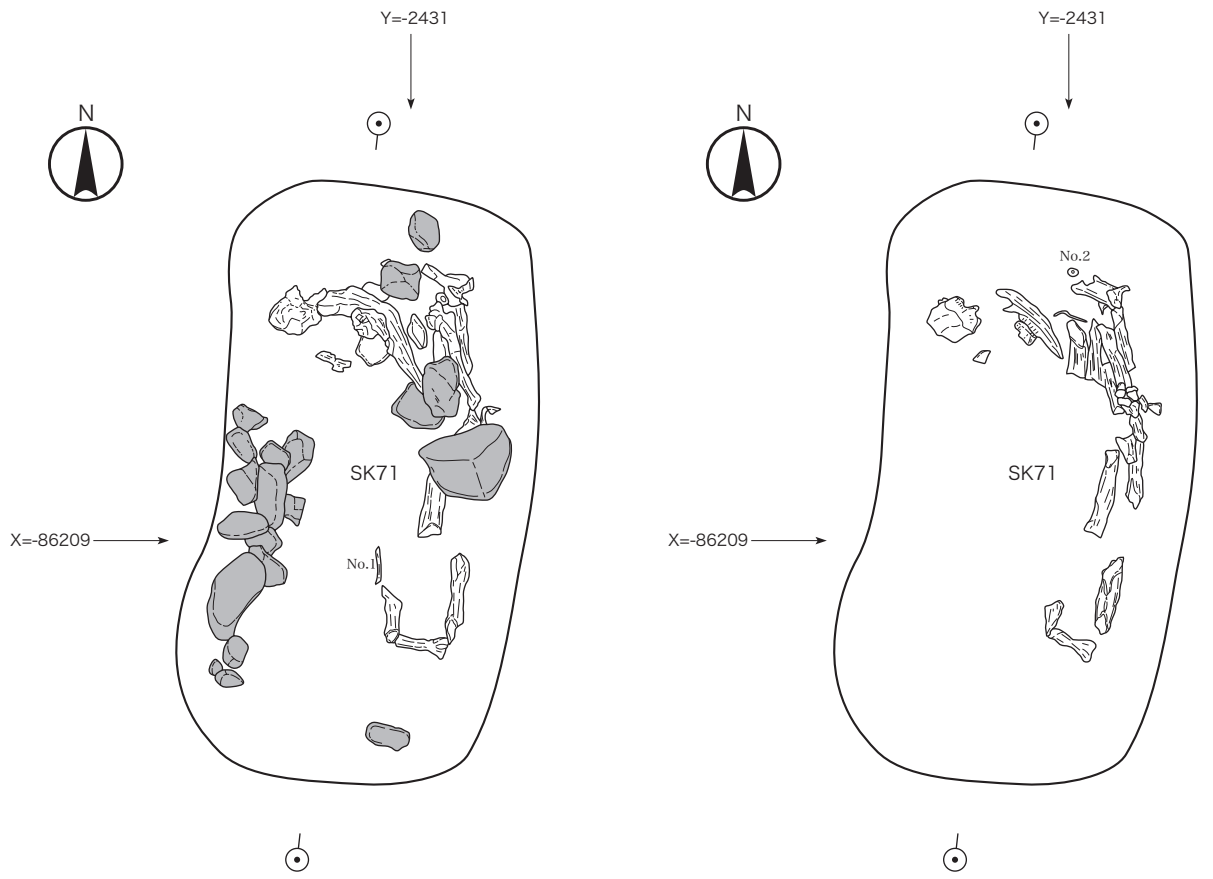
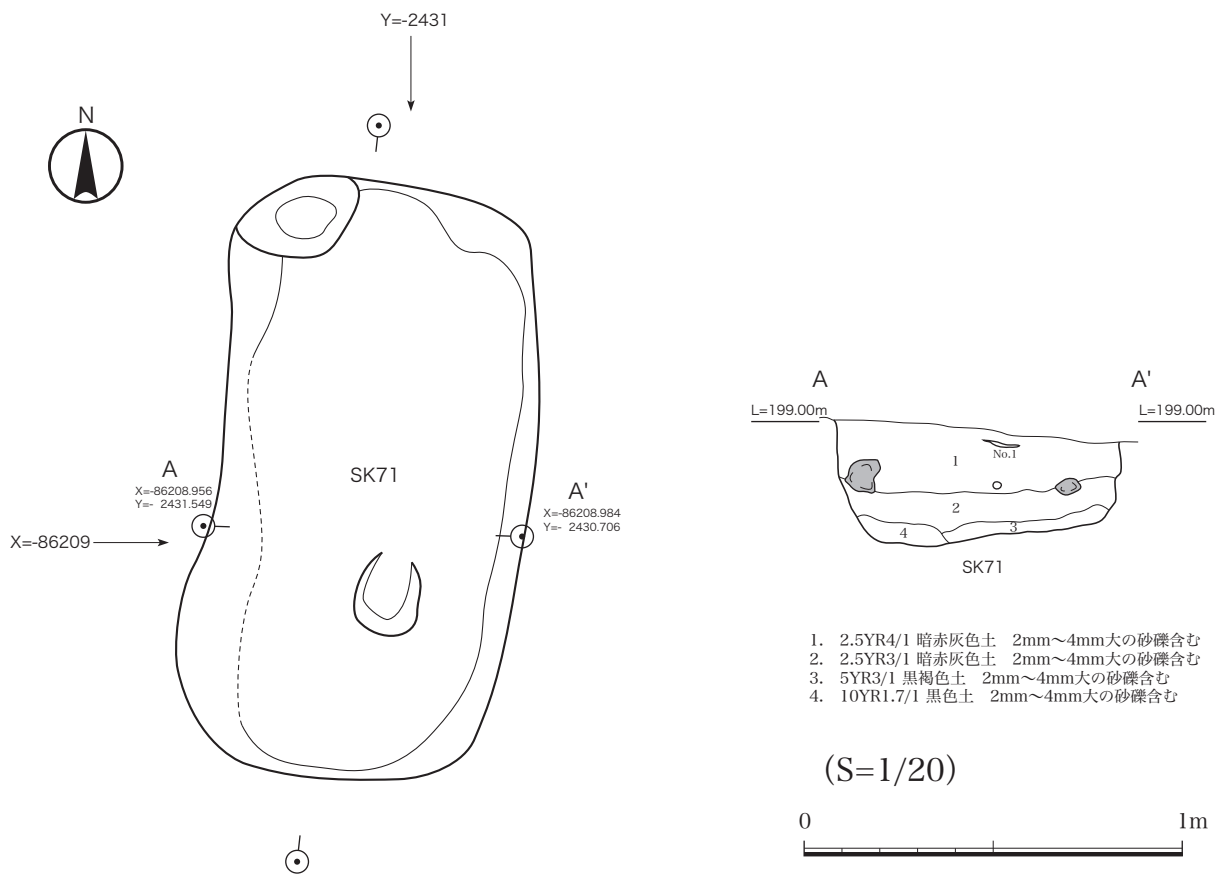


図 19 02 区 SK28 平面図および断面図



※アミフセの礫は、SK169に伴うもの。



1. 2.5YR4/1 暗赤灰色土 2mm~4mm大の砂礫含む
2. 2.5YR3/1 暗赤灰色土 2mm~4mm大の砂礫含む
3. 5YR3/1 黒褐色土 2mm~4mm大の砂礫含む
4. 10YR1.7/1 黒色土 2mm~4mm大の砂礫含む

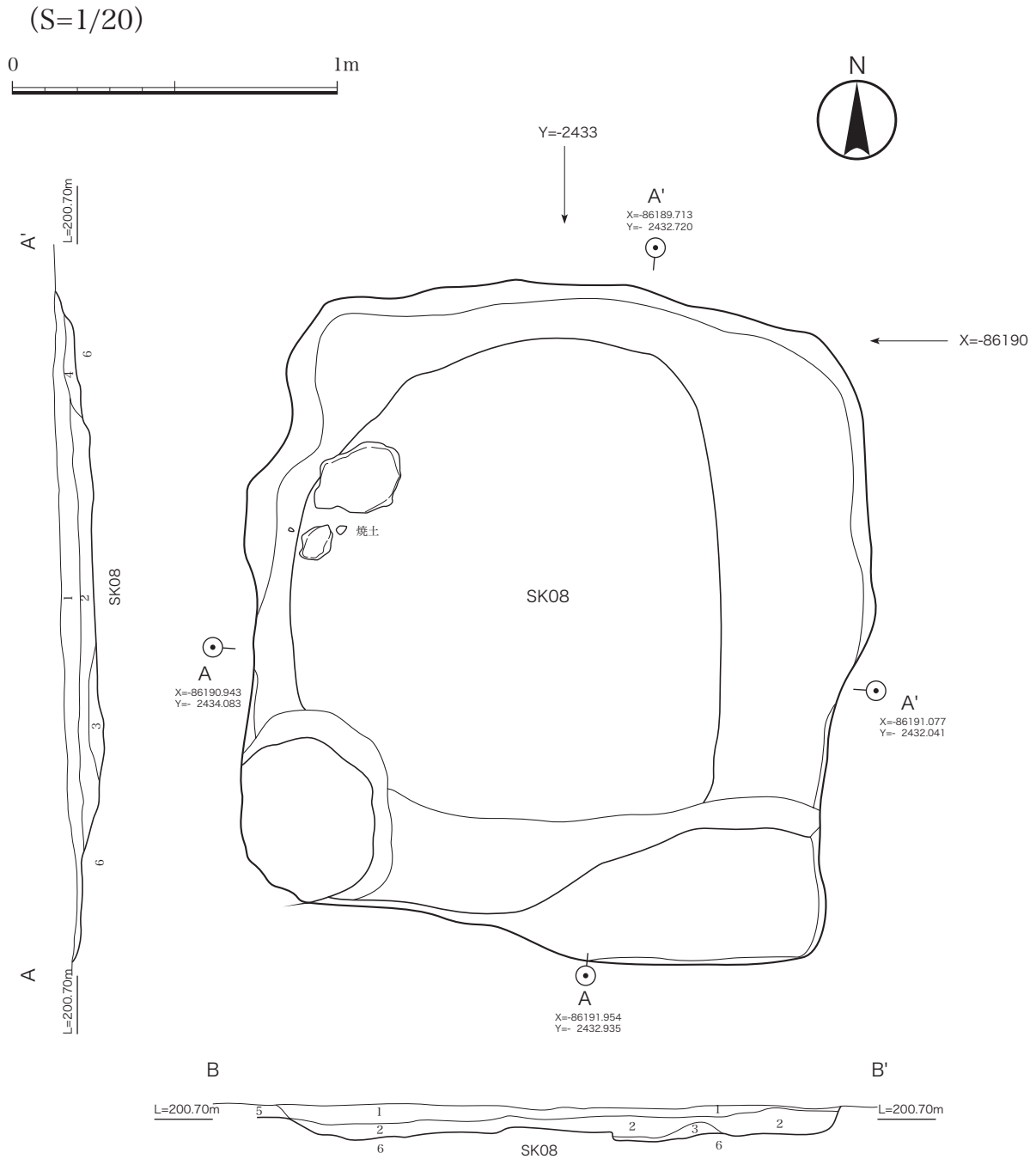
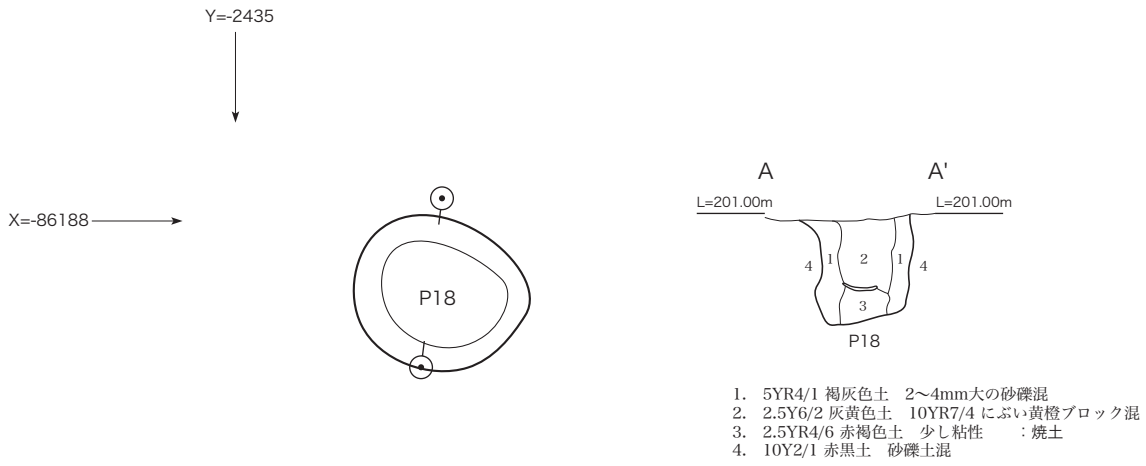
(S=1/20)



図 20 02区 SK71 平面図および断面図



図 21 02 区 SU01 平面図および断面図



1. 10YR3/3 暗褐色土 10YR7/6 明黄褐色土ブロック・2~4mm大の砂礫を含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 5YR5/8 明赤褐色土ブロック・2~4mm大の砂礫を含む
3. 10YR3/1 暗赤灰色土 2~4mm大の砂礫を含む
4. 10YR3/4 暗褐色土 2~4mm大の砂礫を含む
5. 2.5YR3/1 暗赤灰色土 2~4mm大の砂礫を含む
6. 2.5YR2/1 赤黒色土 2~4mm大の砂礫を含む

図 22 02 区 SK08 平面図および断面図

00A区 SX02 (図23・24)

小澤一弘 (愛知県埋蔵文化財センター)

長方形に石組みした施設の一部を検出した。南側は河川敷内となり、河川保持のため施設全体は完掘できなかった。

長方形を呈し、南北2m50cm、東西(幅)1m70cmを測る。南端での標高は195m24cm。あたかも後期古墳の石室を思わせるような状況である。但し南側はまだ広がっており現状での計測値である。長方形を呈した北側は50cmから70cmの大きな花崗岩が囲んでいる。また長方形の石組みの周りは拳大から人頭大の礫が混在しており礫を周辺に詰めたような状況であった。

長方形の南内側に腐食が著しい柱状の木(西側幅10cm、東側幅8cm)を確認した。奥から129cmで柱状の木で区切られ、北側と南側に別けられていた。北側では奥壁部分に小さな拳大程の礫が集中していた。南側では人頭大の礫が整然と敷かれていた。南側の礫上や間から、扁平な10cm前後の石や腐食した鉄片が出土した。

また施設周辺からは、方形の石と扁平な石が出土した。

方形を呈した石は一辺が17cm前後で厚さ12cm前後を測る。内側のみ凹んだものと両面が凹んだものの2種類出土している。

地元での聞き取り調査から、扁平な石と方形の石は石粉や硝子粉製造に関わるものであった。扁平な10cm前後の石は、トロンミルの中に入れた「遮胡の玉石」と呼ばれる北朝鮮遮胡で産する玉石で、昭和5年頃から輸入され長年使用されていたようで、戦後は輸入が途絶えたようである。トロンミルの中に入れた玉石(シャコと称していた)が研磨され摩耗し、その結果扁平になったものであった。方形の石は底石と言われ、底石の周りを板で囲み柵を作り、珪砂がこぼれないようにして杵で搗き、珪砂を砕き、底石が凹むと裏返して使用したそうである。珪砂を搗き砕いて、ガラス粉とするには約一昼夜水車にかけたという。

長方形の遺構と扁平な石と方形の石等から、SX02は木下川を利用した水車小屋の施設の一部、水車部分とみられ、調査区内では木下川からの流水引用状況が不明であるが、南側の河川敷地内に水車に引く水路があったものと考えられる。

なお地元での聞き取り調査では、明治初期頃にはすでに調査区内には水車小屋はなかったそうである。

『瀬戸ところどころ今昔物語』昭和31年刊行(130 石粉水車四十ヶ所を許可)所収によれば、享和三年(1803)には赤津に2ヶ所の水車があったようである。

『瀬戸其外、石粉挽搗水車人別

享和三亥年願濟

- 一 水車 一ヶ所 ○ (○印は売粉搗) 瀬戸村 加藤 唐左衛門
-
- 一 同 ○ 赤津村 中島 新造
- 一 同 ○ 同 豊蔵
-

以上三十二ヶ所 』(『陶家室伝記』 戸田修二氏所蔵本による)



図 23 OO A 区 SX02 平面図およびエレベーション図

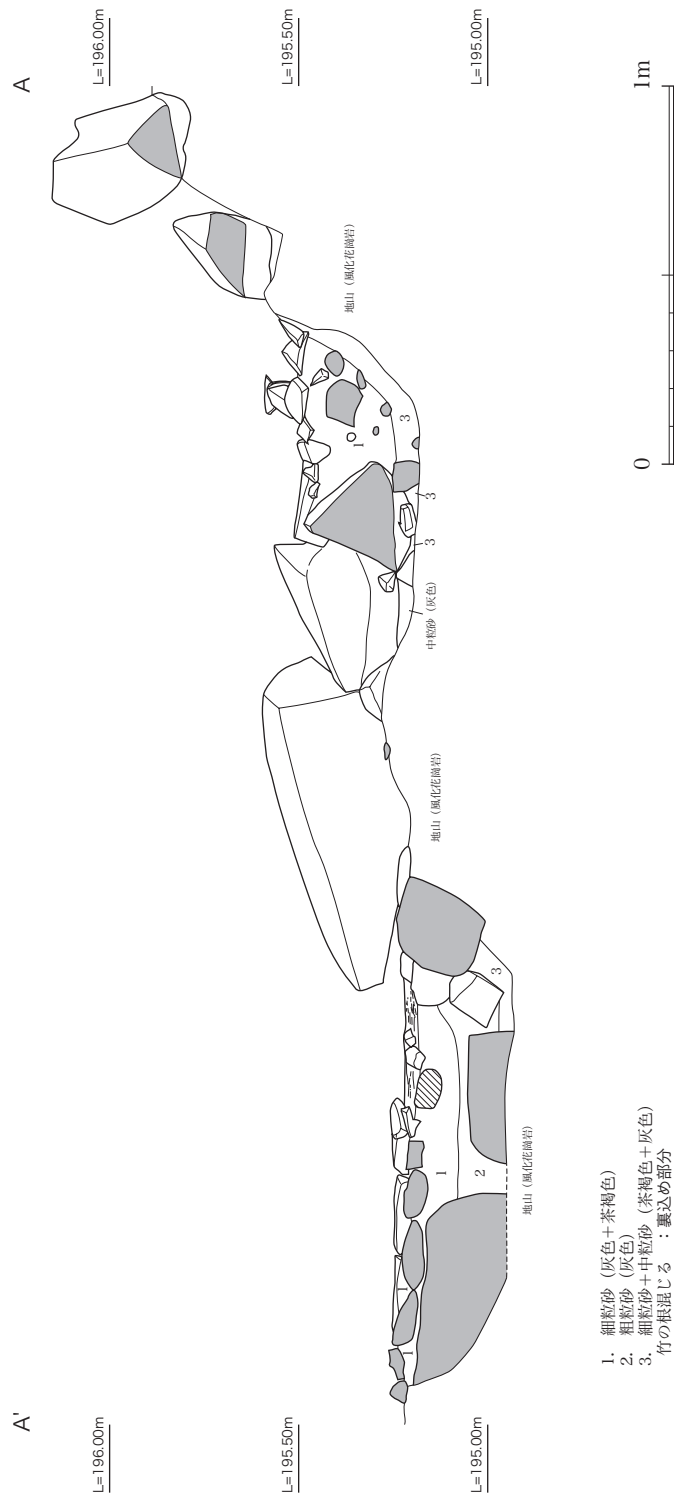


図 24 00A 区 SX02 断面図

『東明小学校百年誌』昭和 50 年刊行によれば赤津では硝子粉の製造が明治 37・38 年頃より始まり、農家の経済を潤していたという。赤津硝子粉水車小屋一覧図では 74 ヶ所が記載されている。木下川では 8 ヶ所あり、長谷口橋より上流にまとまって 5 ヶ所ある。長谷口橋より下流で観音橋までには 2 ヶ所あり、この間に遺跡が立地するが調査区には水車小屋の記載はない。遺跡に近い水車小屋は観音橋の東に一ヶ所（中島留吉）、名鉄バス瀬戸管理所の東建物の裏に一ヶ所（中島信政）の記載がある。

地元での聞き取り調査では、水車小屋は明治末頃にはすでに跡形もなかったようで、明治生まれの方の話によればお祖母さんから昔ここに水車があったと聞いていたという。

8……………縄文土器・早期（図版 24～30）

縄文時代早期の遺構・遺物は、遺構検出の第2面から第3面に確認できた。遺構に伴う遺物も、その多くは数片から10数片に留まる。包含層資料に関しては、02調査区北西側、その大半がIIF19n周辺に集中していた。これらの資料群は2層（検Ⅲと検Ⅳ）に分けて調査段階で捉えた。しかし出土層位による時期差は明確ではなかった。おそらく包含層の成り立ちが斜面堆積の末端であることに起因する。

したがって、今回提示する手段としては、遺構単位・包含層単位といった方法を採用せず、早期の土器として識別できた資料を分類別に提示する。

縄文早期末葉を中心とした土器群のうち口縁部を中心に250点提示する。分類は11群、**分類** 26類とした。群はおおよそ時期のまとまりを、類は紋様を中心とした特徴を基準に分けた。

1群：粕畑式に相当する土器群。今回の調査では5点を提示するのみではあるが、対岸の八王子遺跡ではむしろ粕畑式から上ノ山式が卓越する。

1類（1～5）粕畑式に相当する土器群。1は吸盤状突起で、上面端部に刻目を入れる。2・3は口縁部下に部分隆帯が付く。3は隆帯上に刻み目を入れる。4・5は口縁端面および口縁下に刻み目を入れる。

2群：入海式Ⅱ式に相当する土器群。隆帯が低く、隆帯上の刻み目は下位方向から押し上げるように施すものが多い。入海式Ⅱ式のなかでも新相を示す特徴を備える。隆帯の幅と高さからさらに4類に分類した。隆帯は横位直線紋と山形（波状）紋の組み合わせがみられる。概ね口縁直下に横位直線紋1～2条、この下位に山形（波状）紋を1～2条、最下部に横位直線紋1条入れることもある。

2類（6～12）2群のなかでも、比較的高い隆帯を有するもの。6～9は口縁部資料。9は波状口縁。口縁部の刻み目は2種ある。6～8は口縁端面外面に刻みを入れる。一方9は口縁端面に刻みを入れる。刻みを入れた隆帯は基本的に2条以上認められる。そのうち、8は隆帯が2条、さらに口縁直下に隆帯の刻みを入れる。10は小片のため1条の隆帯のみであるが、11・12同様に複数の隆帯が想定できる。

3類（13～24）4類に比べて隆帯が幅狭のもの。

隆帯は下から押し上げるように刻みを入れるため、隆帯の上端が少し高く、下端が押し潰れて低くなる。13～17は口縁部資料。16・17は波状口縁。2類と同様、刻み目の位置は2種ある。13・17は口縁端面に刻み目を入れる。一方、14～16は口縁部内面に刻み目を入れる。

4類（25～36）3類に比べて隆帯が幅広のもの。

2群のなかで最も隆帯の幅が広い。3類と同様に隆帯は下から押し上げるように刻みを入れる。25～30は口縁部資料。口縁端部の刻み目は口縁部外面（25）、口縁端面（26・28～30）、口縁内面（27）に入れる3者がある。26は口縁部に接するように隆帯がめぐり、刻み目を入れる。一方、胴部の刻み目は7類と同様に隆帯を持たない。31～36は胴部資料。口縁部資料と同様に隆帯は下から押し上げるように刻みを入れる。

5類（37～38）隆帯2群のなかで最も低く、3群とほとんど区別がつかないもの。

3群：石山式あるいは塩屋中層A式に相当する土器群。2群との相違点は、隆帯を持たない点にある。隆帯を省略して直接爪形の連続刺突を施す。爪形紋の大きさなどから5類に分けた。

6類(39～53)口縁部下に幅狭の爪形刺突を横位にめぐらせるもの。すべて口縁部資料。刻み目の間隔が粗になるもの(39・40・53など)もあるが、基本的に密なものが多い。

7類(54～69)口縁部下に幅狭の爪形刺突を横位あるいは波状にめぐらせるもの。すべて口縁部資料。67・68は波状口縁。波状口縁のものを除き平口縁のものは基本的に横位直線が口縁下に1～2条めぐり、その下に波状刺突がめぐる。

8類(70～82)幅狭の爪形刺突をもつ胴部資料。82の爪形刺突は二枚貝腹縁(アサリ?)による施紋か。刺突が緩やかに弯曲し、爪形をなす、この凹みに細かい条線が入る。

9類(83～96)6～8類に比べて幅広の爪形刺突をもつ。83～95は口縁部資料。6～8類に比べ刺突の間隔が粗になる。口縁端部の刻み目は口縁部外面(87・92)、口縁端面(85・86・88・89・91・93～95)、口縁内面(83・84・90)に入れる3者がある。

10類(97～105)爪形の刺突が羽状をなすもの。105以外は口縁部資料。口縁下に横位の刻みを2段から3段に刻み目の方向を交互に施す。

4群：石山式あるいは塩屋中層B式に相当する土器群。刻み目を入れる時、施紋具を器面に接した状態を保ちながら行う。つまり、2・3群のように刻み目を入れるたび器面から施紋具が離れるのではなく、連続して入れる。したがって、刻み目が付かない所も溝底状にくぼむ。また、原体に筋が入るものはその筋が溝底に沿って痕跡をとどめる。4群は施紋原体の特徴が現れやすい。施紋具を中心に7類に分けた。

11類(106～115)貝殻腹縁刺突(サルボウ)によるもの。サルボウに特徴的な凹凸が器面に付く。15類にくらべて明確な溝底状凹線は付かない。

12類(116～121)貝殻腹縁刺突(アサリ)によるもの。11類との相違点は貝殻腹縁にみられる筋がサルボウほど凹凸にならず、細かい筋が爪形のなかに付く点にある。

13類(122～126)平行刺突によるもの。刺突の単位が1対、平行して刺突列をなす。施紋原体の特定はできないが、草本類の茎が候補となろう。

14類(127～156)爪形の刻み目が凹線となるもの。押し引き状に刻み目を入れるため、施紋の単位が確認できる。例えば、128の場合、波状紋の波頭1単位で施紋を一端中断することが見て取れる。つまり、施紋開始時と終了時の爪形が小さくなる傾向があり、波状紋が途切れてみえる。一見、絡条体圧痕紋を想起させる。同様に、横位の刻み目を直線で入れる136の場合も刻み目の大小が認められ、一定の間隔で続く。130は口縁部下に焼成後穿孔が1ヶ所あり、補修孔と考えられる。

15類(157～161)貝殻腹縁(サルボウ)による刻み目が凹線となるもの。刻み目が11類に比べると長く引き摺られる。158・159は口縁端部の刻み目が貝殻腹縁による。

16類(162～165)原体不明の刻み目が細かいピッチで入り凹線状となるもの。施紋原体の特定はできないが、他の施紋具にくらべ凹線状の窪みは顕著になる。162の施紋原体は草本類の茎によるものか？

5群：天神山式に相当する土器群。4群の波状紋にくらべ波長の振幅が短く、鋸歯状になる。また、貝殻腹縁あるいは櫛歯状の施紋具を用い、弥生土器の波状紋を想起させる紋

様、1条あるいは複数条を単位とする斜格子紋も5群とした。

17類(166～173)鋸歯状の波状紋をもつもの。5群の波状紋のうち、もっとも波長の振幅が短いため、鋸歯紋風である。へら状の施紋具を用い1条単位で施紋し、3条前後の波状紋帯を形成する。167・169は波状口縁、他のものは平口縁。169は口縁内面の刻み目を強く施したためか、口縁部が若干外反気味となる。170は口縁部下に爪形紋、その下位に鋸歯状の波紋をめぐらせる。

18類(174～192)茎状工具による波状紋をもつもの。17類にくらべ、柔軟な施紋具、草本類の茎を想定したい。180は茎を半截して施紋しているためか、両端に細い溝が観察できる。183は茎束か、沈線が2～3条平行して波状紋を施す。190は上位に爪形紋、下位に波状紋をもつ。紋様の組み合わせとしては塩屋中層B(爪形紋)と天神山(波状紋)を併せ持つ。191は貝殻腹縁による左上がりの斜位条痕を施した後、茎状工具による波状紋を施す。

19類(193～205)平行沈線波状紋をもつもの。2条に沈線が平行し、波状紋になるもの。194・196・201・202・204は二枚貝腹縁によるものか?これら以外は茎状工具によるもの。197は波状口縁。198は波状紋としたが、茎あるいは二叉工具による連続刺突か?201は貝殻腹縁の条痕施紋後、連続刺突による波状紋。

20類(206～211)貝殻腹縁による波状紋をもつもの。口縁端部の刻み目が貝殻腹縁によるもの(206・207)もある。

21類(212～216)櫛歯状工具による波状紋をもつもの。なかには貝殻腹縁と区別つかないもの(213・215・216)も含む。213は口縁端部が貝殻腹縁による刻み目を施す、体部の施紋も貝殻腹縁によるものか?

22類(217～220)斜格子紋をもつもの。217は茎束(3条)による斜格子紋、その下位に波状紋?がある。218は1条単位で施されたもの。知多産の胎土。

6群:器面に条痕をもつもの。

23類(221～225)表裏に条痕をもつもの。施紋原体は特定できないが、おそらく各個体の表裏は同一施紋具であろう。概ね内面は横方向の条痕。外面はタテ方向あるいは左上がりの斜位方向の条痕。

24類(226～230)表面のみ条痕をほどこすもの。すべて貝殻腹縁によるものと考えられる。

7群:口縁端部に刻み目を入れるが、器面は無文のもの。

25類(231～236)器面に紋様がなく、かつ口縁部資料は図示した6点のみ。早期末葉のうち、天神山式の新相を示す楠廻間貝塚では無紋土器の比率が高いという(山下2003)。

8群:底部および底部付近のもの。

26類(237～250)底部から時期比定は難しい。ただし、尖底から丸底(平底)への変化は想定でき、248～250は尖底にならない天神山式に所属すると考えられる。

9……………縄文土器・前期から後期（図版 31～36）

前期

早期末葉の遺物包含層（検Ⅲ中心）を中心に前期前半に比定できる土器が出土した。同一個体の可能性がある土器片も含まれるが、全部で13点抽出できた。遺構内出土の資料もあるが、他の土器との比較検討の結果、混在資料と判断した。

323は屈曲部に有段、茎束？による平行沈線紋が施されている。上ノ山Z式。324～326は口縁部資料。いずれも縄紋が施されている。325と326は羽状縄紋。327は屈曲部より上位に縄紋を施す。328は半截竹管状の工具による刻み目が2条めぐる。口縁端面は別工具による刻みを施す。329は押し引き状の連続刺突の下に縄紋を施す。330は羽状の刻み目。331は斜位に3条の刺突を施す。332～335は2条1単位に横方向の連続刺突をめぐらせている。332と334は口縁部資料。324～335については、全形および紋様の把握が困難。おおよそ前期前半の羽島下層式に併行する土器群と思われる。

中期

山の神I式

69点掲載した。概ね中期後半（山の神I式に比定）を中心とする土器群。なかでもSB06は混在資料があるものの、山の神I式に比定できる良好な土器群である。一方、中期前半の資料も少量ながら存在し、北裏C式から山田平Ⅲ式（292）のまとまった資料群も注目できる。

251～269はSB06資料。251と252は同一個体。253は低い隆起帯によって縦方向の区画内に、矢羽根状沈線紋を施す。254・255は同一個体、太沈線を縦方向に2条1単位の区画にし、その間を櫛状工具により縦方向に施紋する。256は251と同一紋様を施す口縁部資料。256は口縁部から頸部を無紋、頸胴部界に突帯をめぐらせ、刺突を加える。258は地紋に撚糸紋、口縁部付近に刺突紋、その下位に横方向の平行沈線を2条、その後縦方向の平行沈線を施す。里木Ⅱ式。259～263は口縁部資料。259・260はいずれも沈線がみられるが、紋様を判断するにはいたらない。261～263はミガキが確認できるものの、紋様の有無については不明。264・265は橋状把手。266は沈線による渦巻紋を横位または斜位の2条直線紋で結ぶ。中富Ⅳ式。267は低位隆带状に小円形の刺突を加える。下位には縦位太沈線区画内に櫛歯状工具による施紋を施す。268は台付深鉢の台部。円孔が数ヶ所穿たれる。269は底部資料。4単位の隆起帯区画を行い、区画内に半截竹管状工具による沈線を3条単位で施す。

270はSB04資料。沈線による単位区画を行い、その内側に斜位沈線を充填する。島崎Ⅲ式。271・272はSK77で中世遺構の混在資料。いずれも口縁部資料。口縁部下に4条の沈線をめぐらせる。最下位の沈線内には刺突を充填する。最下位の沈線直下、屈曲部より下位には撚糸紋を横方向に施す。中富Ⅲ式。272は口縁部下に円形刺突紋を配し、その下に結節隆帯がある。口縁内面には縄巻縄紋をめぐらせる。船元Ⅰ式。273はSK82資料、2条沈線の縦区画を行い、その間を櫛歯状の条線で埋める。274はSK184資料、内外面をみかく無紋の口縁部資料。275はSK157資料、竹管状工具による直線+山形紋+直線を口縁部にめぐらせる。中富Ⅲ式。276～279はSK154資料。276と277は台付深鉢の

台部。276は5ヶ所、277は4ヶ所の透し孔が穿たれる。278はナデ仕上げの無紋の口縁部。279は指頭による渦巻紋が描かれ、区画内に櫛状工具による条線の充填が施される。加曾利EⅢ式併行のモチーフ。280～283・285はSK96。284はP77資料。280～284は北裏C式。285は中富式。286はSK146埋甕資料。口縁部の波状口縁は6単位、これに合わせて6単位の区画紋が施されている。胴部は波状口縁にあわせて12単位の2条1単位による太描沈線を配し、その間を矢羽根状あるいはこれを簡略化した沈線を充填する。底部はない。胴部上位と底部付近外面に煤が付く。287はSK155資料。口縁部が緩やかに外反する器形。口縁部下と頸胴部界の上下に沈線区画された2ヶ所に円形刺突紋を配し、3条1単位の太描沈線によって区画されたところへ矢羽根状沈線を施す。288はP68資料。内外面ともにナデ仕上げ、無紋の深鉢。289はP224資料。253に類似する低位隆帯紋による区画がみられる。290はP279資料。291はP572資料。292はP512資料。口縁部肥厚帯の下端部、縦方向の沈線が特徴を示す、山田平Ⅲ式。

293～319は包含層資料。特記する以下の資料以外は山の神Ⅰ式に比定できる。293～296は先が尖る波状口縁とこれに沿うように配される爪形刺突をもつ隆帯、北裏C式。297は口縁部が肥厚し、端部に円形刺突を2列に配する北屋敷Ⅲ(Ⅱc)式。302・303は平行沈線を多用する中富Ⅳ式。

後期

320～322は後期資料。321と322は同一個体と思われる。いずれも後期前葉の中津式に比定できよう。

10 …… 弥生土器 (図版 37)

336～339は前期(尾張第Ⅰ様式)の深鉢。いずれも二枚貝による条痕が施されている。336は口縁部下に2条の条線が入る、古いタイプのものか? 339は底部外面が摩耗している。壺の可能性もある。

340～347は中期後葉(尾張第Ⅳ様式)の資料群。340は02区SB07出土。341～343は条痕系深鉢。342は底部に布目圧痕。340・345は台付甕の脚部。340は外面ケズリ調整。341は外面ハケ調整。344は壺の底部。346は「獅子懸式」系壺。347は櫛描紋系壺。口縁内面に扇形紋、体部に直線紋と波状紋を交互に配する。

348～356は後期前葉(尾張第Ⅴ様式)の資料群。348は00B区SB01出土。349～354は02区SB03出土。350は焼成前穿孔の孔が1カ所ある蓋。348～349・351～356は台付甕。外面はいずれも板ナデ調整。

11 …… 古代の土器 (図版 38～39)

古代の土器は、堅穴住居2棟を中心に39点掲載した。概ね黒笹14号窯式の新しい段階を中心とする資料群。

357～365は00B区出土。これらのうち、358～362・365はSB02出土。357は灰釉陶器小瓶。358・359はおそらく摘み部の付く須恵器蓋。360は灰釉陶器写しの須恵器

黒笹14号窯式新

皿。361 はハケ塗り?の灰釉椀。362 は口縁端部が短く折れる、外面ナデ調整の三河系甕。363・364 は灰釉椀。

366～396 は02区出土。これらのうち、366～395 はSB01、396 はSK12 出土。366～368 は須恵器摘み蓋。369・370 は須恵器有台盤。371～374 は須恵器無台椀。375 は灰釉陶器稜椀写しの須恵器有台椀。376 は緑釉陶器椀。内外面に緑釉がみられる。377～379 は灰釉段皿。いずれもハケ塗りか。380 は灰釉耳皿。382 は須恵器撫肩長頸壺。383 は須恵器小瓶。384 は須恵器平瓶。385 は灰釉瓶の底部。386・387 は須恵器甕の口縁部。388 は須恵器横瓶。外面の所々煤が付着する。389～395 は濃尾系甕。369 の口縁部は頸部付近が剥離し、一見、廻間式のS字甕に酷似する口縁形態。391 は口縁部が内弯気味に立ち上がる。396 は灰釉椀。

12 …… 中世の土器 (図版 40～41)

古瀬戸後Ⅱ・Ⅳ期

中世の土器は、00区からも若干出土しているが、遺構に伴う資料がなく、02区資料を中心に提示する。資料の多くは、古瀬戸編年に依ると後Ⅱ期と後Ⅳ期併行が比較的多い。一方、隣接する八王子遺跡は当該期の資料が少なく、注目できる。

396 はSK06 出土の匣鉢。底部内面に所々灰釉と鉄釉が付く。398～400 はSK07 出土。398 は大窯Ⅰ期の播鉢。399 は東濃産脇ノ島期(以後東濃産を省略して表記)の灰釉系陶器(灰釉系陶器はいわゆる山茶椀を指す)椀。400 はロクロ成形の土師器皿。401 はSK08 出土の匣鉢。402・403 はSK21 出土。402 は古瀬戸後Ⅳ期古段階(以後古瀬戸を省略して表記)の緑釉小皿。403 は尾張型10型式の灰釉系陶器椀。404・405 はSK30 出土。404 は尾張型10型式(以後尾張型を省略して○型式と表記)の灰釉系陶器椀。405 は後Ⅲ期の平椀。406～415 はSK28 出土。406 は10型式の灰釉系陶器皿。407 は大洞東あるいは脇之島期の灰釉系陶器椀。408 は大畑大洞あるいは大洞東期の灰釉系陶器皿。409 は大洞東期の灰釉系陶器椀。410 は後Ⅳ期古段階の緑釉小皿。411 は大窯Ⅰ期の緑釉挟み皿。412 は後ⅠあるいはⅡ期の椀。413 は後Ⅱ期折縁深皿。内面に卸目がある。414 は後Ⅰ期の折縁深皿。底部に脚の剥がれた痕跡がある。底部外面付近に一部煤が付く。415 は後Ⅰ期の折縁中皿。416～419 はSK35 出土。416 は後Ⅱ期の折縁小皿。417 は大洞東あるいは脇之島期の灰釉系陶器椀。418 は後Ⅰ期の天目茶椀。419 は後Ⅰ期の折縁皿。420～424 はSK57 出土。420 は後Ⅱ期天目茶椀。421 は後Ⅳ期の播鉢。422 はロクロ成形の土師器皿。423・424 は大窯期の挟み皿。425 はSK72 出土、後Ⅲ期の平椀。426 はSK83 出土の後Ⅱ期の平椀。427・428 はSK98 出土。427 は大窯Ⅰ期の緑釉挟み皿。428 は後Ⅳ期の天目茶椀。429 はSK138 出土、生田期の灰釉系陶器椀。430 はP18 出土、大窯Ⅱ期新段階の丸皿。431・432 はP79 出土、いずれも後Ⅲ期の平椀。433 はSD06 出土、大洞東期の灰釉系陶器皿。434～436 はSD20 出土。434 は脇之島期の灰釉系陶器椀。435 は後Ⅲ期の浅椀。436 は後Ⅰ期の卸皿。片口が付く。437～440 はSK97 出土。437 は大洞東期の灰釉系陶器椀。438 は後Ⅰ期の浅椀。439 は10型式の片口鉢。440 は後Ⅱ期の折縁深皿。441・442 はSK97 内の遺構、SK122 出土。441 は後Ⅲ期の折縁深皿。442 は後Ⅳ期古段階の播鉢。443～461 はSK143 出

土。443～448は灰釉系陶器碗。443は8型式、444は9型式、445・446は10型式、447・448は大洞東期。449は後I期天目茶碗。450は後期の小瓶。451・453・455は後II期の平碗。452は後I期の平碗。454は後IV期古段階の平碗。456は後II～III期の浅碗。457は後II期の直縁大皿。458は後期の四耳壺。459は後I～II期の内耳鍋。460は後II期の折縁深皿。461は後期の器種不明品。462～468はSX01出土。462～464は灰釉系陶器碗。462は生田期。463・464は脇之島期。465は後II期の折縁大皿。466は後IV期古段階の搦鉢。467は後I期の平碗。468は後IV期古段階の直縁中皿。

13 …… 近世の土器 (図版 42～44)

近世の土器は、02区最上段に位置する屋敷地周辺を中心に出土した。特に、最上段と上段の境目に位置するSU01およびSD06からの出土が目立った。時期は19世紀第3四半期を中心とした、幕末に比定できる資料群。

19世紀第3四半期

496～496はSU01出土。茶器に関連する資料の一括廃棄と考えられる。469～471は落とし蓋。469は475の口径に近似、急須の蓋か。472は磁器の縁反碗。473は灰釉の鉢。474は灰釉の筒碗。475は横手の急須。把手は欠損。注口の孔は3つ。外面全体に煤が付着。476は鉄釉のかかる横手の急須。把手は欠損。煤は付かない。477は柿釉の油徳利。479は鉄釉の半胴甕。478は竜宮城を想起させる絵柄をもつ徳利。480は鉄釉の半胴甕。481は把手が4カ所付く蓋付壺(茶壺?) 482は搦鉢。483は肥前写し、堺搦鉢。484は焙烙鍋、485は内耳鍋、いずれも19世紀第3四半期。486は行灯皿、底部中央に焼成後穿孔あり、燭台に転用? 487・488は目皿。489・490は焜炉。489は490に比べ胎土が緻密。一方、490は瀬戸焼のさや鉢の胎土に類似する。両者の器形に類似する資料としては、名古屋城三の丸遺跡(IV) 県警本部地点、SK101出土資料(1084,1085)がある。491・492はさや鉢。492は底部付近に一对の穿孔がある。493は磁器質のトチオサエ。494は瓦。瀬戸産。495・496は古瀬戸後III期の資料。495は縁釉皿。496は天目碗。

497～499はSD06出土。497は行灯皿。498は片口鉢の焼台。499は行平鍋の蓋。500～502はSK133出土。500は近世下品野村の行平鍋。底部周辺に煤が残る。499はこの行平鍋の蓋と考えられる。501は端反碗。呉須による梅・松木が外面から内面に渡り描かれている。底部外面に銘あり。「□□□」「慶カ□□画」「□□□」「□□吉日」、4行にわたり確認できる。502は鉄釉の糸目土瓶。底部付近に煤の付着あり。503～505はSK57出土。503は17世紀中頃の志野の丸皿。被熱により表面が変色。504は18世紀代(5～6小期)の丸碗。506はSK07出土、19世紀(第8小期以降)半胴。口縁部周辺に煤が付く。507はP76出土、19世紀中頃の碗。508は00A区SX02(水車小屋)出土、磁器の急須。内面に付着物が多い。

SU01を中心とした近世の遺物群は、先述したように茶器に関連する資料を多く含む。今一度整理してみる。

SU01の茶器

まず、急須の2点。475は煤が付く素焼きの急須。一方、476は鉄釉のかかる急須。前者が火にかけ湯を沸かす急須で、後者が茶を入れる急須だとすれば、湯罐と急焼(急須)。つぎに、焜炉と目皿。通常の火器としたいが、以下の点で留意しておきたい。489は緻密

な胎土で作成されている点。490は逆に、さや鉢に使用するような胎土で作成されている点。焜炉は専焼窯など規格品が流通していると考えられるが、これら2点に関しては規格品とは想定しにくい。つまり、煎茶の火器とされている、涼炉として制作され、使用した焜炉ではないか。涼炉は一般に三峰炉に代表されるように特注品が多いとされている。今回出土した焜炉が特注品であるとは断定できない。逆に、490は応急的に制作された可能性も否定できない。

最後に、茶器に関連する道具としては、472の端反碗、481の茶壺などがある。

煎茶のセット？

以上、湯罐と急焼、涼炉、さらに端反碗、茶壺など伝世品や現在の煎茶道具の主要な器種は揃っている。SU01の一括廃棄は煎茶の道具類を含んだ希少な資料群と言えよう。

14 …… 土製品 (図版 45)

509・510は縄文早期末葉の土偶と考えられる製品。511は厚さ1.5cm、径5.5cmの円盤状土製品。時期は不明。

512～520は加工円盤。すべて施釉陶器。519は中心部分に穿孔がある。

521～541は陶丸。530は吊り下げるため？の孔がある。

15 …… その他の遺物

板状鉄斧 (図 25・写真 1)

板状鉄斧は、SK120出土資料。基部から刃部へと緩やかに広がり梯形の平面形をなす。全長12.5cm、刃幅6.5cm、厚さ4～7mmを測る。刃部は片刃と考えられる。錆は認められない。また、刃部の先が片側のみ丸みを帯びていることから、横斧(鉞)として使用していたと考えられる。先に記したように時期比定については、鉄斧以外に出土資料がなく、遺構の切り合い関係から中期後葉から後期初頭の範疇で捉えることにした。同時期の県内および周辺における板状鉄斧の類例は豊川市郷中遺跡(弥生中期末葉～後期初頭)があるのみ。後期後半以降は静岡県川合遺跡の8例、三重県山奥遺跡などが散見する。

P58 参照

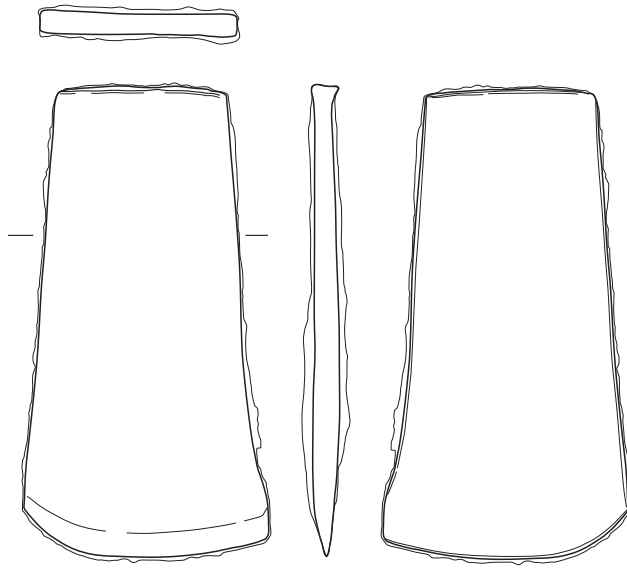


図 25 板状鉄斧実測図 (S=1:2)



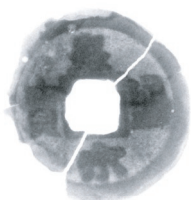
写真 1 板状鉄斧写真

銭貨 (写真2)

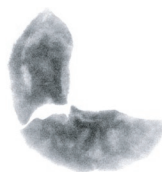
銭貨は、13点出土した。そのうち、遺構出土資料は8点。02区 SK28 から4点出土。02区 SK71 から、馬骨とともに「開元通寶」が1点出土している。「開元通寶」(4,5,6,7) 5点、「永楽通寶」(2)・「皇宗通寶」(3)・「寛永通寶」(10)・「文久永寶」(11)・「元祐通寶」(12)・「嘉祐元寶」(13)・「政和通寶」(14) 各1点、不明2 (8,9) 点。



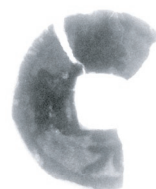
2 : SK28-01



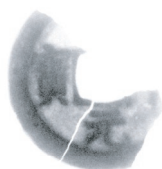
3 : SK28-03



4 : SK28-02



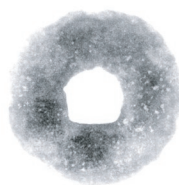
5 : SK28-04



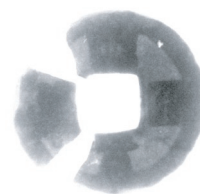
6 : SK57



7 : SK71



8 : SK96



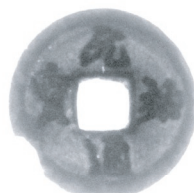
9 : P15



10



11-1



12



13



14



11-2

写真2 銭貨 X線写真(実物大) ※ 11 は写真

(1) 概略

長谷口遺跡の調査で出土した石器は、器種数 15 以上、総点数約 450 点である。今回の調査では縄文時代早期後葉から前期、中期後半から末、弥生時代中期後葉から後期初頭の土器が出土しており、石器群も大多数はこれらの時期に所属するものと考えられる。縄文時代早期後葉～前期土器群に関していえば、早期末以降が中心のようである。木下川を挟んで対岸に隣接する八王子遺跡は、早期後葉粕畑式など表裏条痕土器が主体となっており、この石器群との比較検討は、両遺跡の動態を考える上でも必要となる（武部編2003）。また、長谷口遺跡では縄文時代中期後半や弥生時代中期後葉以降にも当地の利用が見られ、これらの時期の石器群も複雑に絡まっている。弥生時代後期初頭に関しては、02区 SB03 から石器・剥片類がまとまって出土した。ここからは鍛造鉄斧が出土しており、鉄器と石器との関係を検討する上でも興味深い資料となっている。

ここでは、各器種の報告を行ったあとに、各種分析・検討を行っていく。

(2) 各器種の報告

有舌尖頭器 (12)

1点のみの出土で、基部側のみ半分が残存である。胴部には長い斜行剥離が連続して見られ、それが両面同様に施されている。その後、基部にも丹念に細かく剥離調整を加えている。断面形状は肉厚な菱形状を呈する。チャート製。

打製石鏃 (13～76)

105点出土し、64点を提示した。13～23が縄文時代の遺構から出土したもの、24～35が弥生時代の遺構から出土したもの、36～76が包含層から出土したものである。105点のうち基部形態が窺えるものでは、無茎が78点（凹基65・平基13）、有茎が19点、柳葉形が1点、その他不明が7点である。調整は両面に見られるものが多いものの、剥片の片面および一部にしか調整を加えず製品とした、いわゆる「剥片鏃」と考えられるものも数点見られる（40・41など）。14・24のように階段状の剥離が一部に見られ石鏃全体が厚手であるものと、36・37などのように細かいながらも薄く剥離を行い、薄手に仕上げているものがある。石材は、チャート・下呂石・溶結凝灰岩・石英（水晶）・サヌカイト？が使用されている。下呂石製品には礫風化面を残すものがあり、円礫から作られているもの（35）と角礫から作られているもの（54・60）が存在する。

有孔磨製石鏃 (77)

1点のみの出土で、先端側が半分欠失している。両平面および凹基となっている基部を最終的に研磨調整により仕上げている。中央部には両側から穿孔が行われている。弥生時代の遺構 SB03 から出土している。泥岩質のホルンフェルス製。

SB03

石錐 (78～97)

21点出土し、すべて提示した。尖り気味に作り出された部分に、回転運動などによる微細剥離もしくは摩滅痕が残されているものである。形態的には、(a) 頭部と軸部との区分が明瞭で全体的に調整が加えられているもの(79・80・83・84・86)、(b) 頭部と軸部との区分が明瞭で細かい調整がそれほど施されていないもの(78・90～94・97・98)、(c) 頭部と軸部との区別が不明瞭なもの(81・82・85・87～89・95・96)、に分けられる。おおよそ(a)よりも(b)の方が、軸部の作り出しが長い傾向にある。また(c)に関しては、両端に摩滅痕が見られ作業部としているものがある(95・96)。使用石材は、チャート・下呂石・石英(水晶)・サヌカイト?が使用されており、下呂石には円礫から作られているもの(84)と角礫から作られているもの(93)が存在する。

石匙 (99～115)

縦長と横長

使用による微細剥離がある剥片石器で、調整により摘部が作り出されているものを集めた。17点出土し、すべてを提示した。縦に長い「縦長」と、横に長い「横長」の大きく二形態に分けられる。横長のなかには三角形を呈するもの(110～113)と、長方形を呈するもの(109など)と、さらに細かい分類が可能である。101のように横型であったものを摘部の破損により縦型に作り替えている例もある。多くの調整は表面に集中しており、裏面は摘部の調整と使用による剥離のみである場合が多い。使用石材は、チャート・下呂石・サヌカイト?・泥岩が使用されており、下呂石には円礫から作られているもの(105)と角礫から作られているもの(135)が存在する。

スクレイパー (116～155)

使用による微細剥離がある剥片石器で、剥離調整による整形のあるもの。43点出土し、40点を提示した。116～137は縦長剥片を素材にしたもので、138～155は横長剥片を素材にしたものである。両面に同等の剥離調整が施されているものと、剥片表面を中心に調整が見られるものがある。116は片面調整のエンドスクレイパーで、拇形を呈する。使用石材はチャート・下呂石・溶結凝灰岩・石英(水晶)・サヌカイト?があり、下呂石には円礫から作られているもの(147)と角礫から作られているもの(144)が存在する。

使用痕剥片 (165～180)

使用による微細剥離がある剥片石器で、剥片素材のままか、剥離調整がそれほど施されていないもの。15点出土し、すべて提示した。縦長剥片・横長剥片の両者が使用されている。使用石材はチャート・下呂石・サヌカイト?・安山岩・ホルンフェルス・砂岩があり、下呂石には角礫から作られているもの(173)が存在する。

その他剥片石器 (181～202)

小型の剥片石器のうちで、上記の範疇以外のものをまとめた。181～184・185・186は両面に同様の剥離調整を加えたもので、厚手の三角形を呈するものである。186は若干薄手であり、石鏃の可能性もある。191は細長い三角形を呈するもので、二辺には対

称的にノッチが付けられている。192～202は、素材剥片に一部剥離調整が加えられているもので、未製品の可能性もある。

楔形石器 (223～247)

両端に階段状剥離が見られるものである。断面形状が扁平なものと、正形状のものが存在する。階段状剥離が一辺にしか見られないものも多く出土している(203～222)。

石核 (248～271)

29点出土し、24点提示した。249～260がチャート、261～267が下呂石(263～265が角礫、266が円礫)、268が黒曜石、269～271が石英(水晶)である。チャート・下呂石は残核として残されているものは、比較的大きく、252・263など比較的大型の剥片の作出が行われたと考えられる。一方、黒曜石・石英(水晶)の石核はチャート・下呂石に比べ、それほど大きくはない。

礫器様石器 (272・273)

272は礫素材の石器である。片面のみに剥離調整を加え、形を整えている。短辺の一部には使用によるやや階段状になった剥離が見られる。凝灰質砂岩製。273も礫素材の石器と考えられる。短辺には若干の調整が加えられており、長辺には横方向に研磨による刃部調整が施され、使用による微細剥離が見られる。風化面が顕著な平面には、横方向に擦痕が見られる。調整によるものか、使用によるものかの判断は難しい。ホルンフェルス製。

打製石斧 (276・277)

2点のみの出土で、すべて提示した。すべて断片のみの出土である。ホルンフェルス製。

磨製石斧 (278)

1点のみの出土である。最終的には全面研磨により仕上げられているが、その前段階の敲打調整時の痕跡が所々に残されている。刃部には使用による剥離が見られる。断面形状は、側面に面を持ち、かつ平面側は若干湾曲する「定角式」である。蛇紋岩製。

磨石・敲石 (279～289)

12点出土し、11点を提示した。すべて礫素材であり、礫そのままの状態で使用を開始すると考えられるものと、研磨などの調整を行ったあと、使用を開始されるものがあると考えられる。磨り痕が主体となるもの(280・284・289)と、敲打痕が主体となるもの(279・281～283・285・287・288)と、磨り痕と敲打痕の両者が見られるもの(286)がある。284・286は作業面には磨り面が複数見られ、多面化している。使用石材は凝灰質砂岩・安山岩・細粒花崗岩・濃飛流紋岩・砂岩・アプライトなどである。

石皿・台石 (290～293)

可能性のあるものを、4点提示した。すべて平面が若干摩滅しているものの、礫本来の

風化面である可能性も否定できない。石材は花崗岩および細粒花崗岩である。

その他 (274・275)

274は、石器素材と考えられるものである。若干剥離調整が行われた後、全面研磨調整が施され、それを擦り切りによって材が切断されている。擦り切りは両面から行われており、その痕跡が数条残されている。泥岩質のホルンフェルス製。275は径1.6cm程度の球状に整形されたものである。全面に幅6mmほどの研磨面が無数に残されている。ホルンフェルス製。

(3) 帰属時期の推定可能な石器群について

以上、提示した石器群について、石器の器種・形態や出土状況などから、帰属時期の推定をしていきたい。

有舌尖頭器

まず、この石器群の中で最も時期がさかのぼるものは、有舌尖頭器(12)である。また、拇形をしたエンドスクレイパーも、石器群の中では時期がさかのぼる可能性がある(116)。これらは石器の器種および形態上の類推である。縄文時代草創期から早期前半に属するものと考えられる。

次に、縄文時代早期末から中期後半に帰属する可能性の高いものを挙げておく。石鏃は比較的小型の凹基鏃にその可能性があるものの、断言は難しい。石匙は、ほぼこの時期に帰属するものと考えられる。打製石斧・磨製石斧もこの時期に所属するものであろう。

弥生後期の石器

最後に、弥生時代後期初頭に属する石器の推定が、比較的可能である。まず基準として提示できる資料として、00B区SB01・02区SB03出土資料がある。これらの遺構から出土している石器群は、石器の器種・形態上・使用石材および石器製作の状況などから遺構の帰属時期に近い時期でほぼまとまっていると考えられる。

これらの遺構から出土した石器をまとめてみた(表1)。確認された9器種以外にも、剥片類が多量に出土している。これらの中で特に注目されるものは、石鏃(24～33)・有孔磨製石鏃(77)・楔形石器や階段状剥離の見られる剥片(203～208・210・212・229・242)・石核(249・251)、およびその他の274である。

石鏃は有茎・無茎の両者が存在するものの、有茎鏃が優勢を占める。また、楔形石器・階段状剥離のみられる剥片がまとまっているのもこの石器群の特徴である。204～208では長さ5cm以上と、長い縦長剥片を剥離・使用している様子が見られ、端部の剥離は非常に粗い状態である。石核とした249・251では、径3～4cmほどの円礫に対して、粗い剥離が両面から行われている様子が見られる。これら石核の石材はチャートが優占し

表1 遺構出土石器一覧

器種 遺構	石鏃	有孔磨製石鏃	スクレイパー	使用痕剥片	その他 剥片石器	楔形石器・ 階段状剥離の 見られる剥片	石核	磨石・敲石	石皿 台石	その他
00B区 SB01	24・25 26・27		117			206・208・210 212・229・242				
02区 SB03	28・29・30 31・32・33	77	119	157・178	182・199	203・204 205・207	249・251	279・280	290	274

□ 「チャート1」製であることを示す

ている。チャートに関して、光沢の度合い・色調・節理の状態などから、1 から 45 の 45 種類に分類を行った^{*}。その結果、チャート石材は「チャート 1」が絶対的多数を占めていることが明らかとなった。一方、その他包含層資料も含めて「チャート 1」資料には、石鏃・楔形石器・階段状剥離の見られる剥片があり、特に楔形石器・階段状剥離の見られる剥片では、この石材が圧倒的多数を占める。従って、「チャート 1」の石器・剥片の多くは、00B 区 SB01 および 02 区 SB03 と同様に弥生後期初頭の所産であると推定される。長くかつ粗い階段状剥離の見られる剥片のまとまった存在は、長谷口遺跡出土全剥片石器のなかでも、特異性が見られるものである。

また、有孔磨製石鏃 77 と 274 とが同一遺構から出土しているのは、興味深い。両者は泥岩質のホルンフェルスであり、長谷口遺跡ではこのホルンフェルスによる石器の出土は見られない。また、274 は擦切りによる切断痕が順次残されているものであることから、有孔磨製石鏃の材である可能性がある。

(4) 剥片類および使用石材について

出土全小型剥片石器および全剥片類を対象に総重量（比）、および小型剥片石器を対象に重量（比）を算出したのが、表 2 である。

下呂石は、「円礫」「円礫（爪）」「角礫」「その他」の 4 種類に分けた。残存している風化面で判断しており、風化面が見られないものを「その他」にしている。「円礫」は風化面の白色化が著しく、ほぼ均一化しているものを示す。「円礫（爪）」は、風化面全体が白色化しているものの、所々爪形の非風化部分が見られるものである。「角礫」は白色の風化が著しくないものである。

チャートに関しては 45 に分類を行ったが、ここでは 3 区分で表示する。それは「チャート 1」と「チャート 45」と「それ以外のチャート」である。「チャート 1」としたものは、色調は暗褐色を主体とし浅青色を部分的に含むものである。全体に光沢を有し、不純物および節理は顕著に見られない。「チャート 45」としたのはいわゆる「土岐石」である。暗緑色の色調で、不純物を顕著に有しない均質な質感のものである。

石材全体比では、石英（水晶）が半分以上と最も多い。次に多いのがチャートで約 30% を占める。その次に多いのが下呂石で計 9.4% を占めている。下呂石では、礫の種類を同定できないものが 58% を占めている。残り 42% での重量比は、「円礫」：「円礫（爪）」：「角礫」が、1000：1379：3688 で、「円礫」全体：「角礫」が 10：15 である。またチャート全体の中で、「チャート 1」が 30% 近くを占めており、ある一定量を占めている。一方、小型の剥片石器についてのみの石材比では、チャート全体が 60% 近くを占め、最も多い。石英（水晶）は 5.7% 程度しか見られない。当地では採取が容易な石材であるものの、石材としての利用はそれほど積極的ではなかったと考えられる。石核・剥片では見られるものの、石器製品の見られなかった石材には、チャート（土岐石）と黒曜石がある。また、石器製品はあるものの、石核・剥片の見られなかった石材には、溶結凝灰岩や泥質凝灰岩などがある。

表 3 は、小型の剥片石器器種それぞれに、使用石材の比率を重量と点数で示したものである。いずれも器種もチャートと下呂石が主体であるといえ、下呂石では円礫・角礫が見

^{*}紙面の都合により「チャート 1」・「チャート 45」のみ次節で説明を行う。その他チャートを含めた分類の詳細は添付 CD 内にその基準を示す。

下呂石

チャート

石材の比率

られる。これらの器種を重量比と点数比では、比率が著しく異なる石材が所々にみられる。器種ごとに各石材による1点あたりの重量を見てみた。石鏃で注目されるのは、チャート1のみ2.3gと、ほかの石材に比べ重さがあることである。また、楔形石器・階段状剥離をみられる剥片・石核でも、チャート1が1点あたりの重さが著しいことが注目される。

表2 出土石材重量と比率

石材		石器・剥片・石核 総重量計	石鏃・石錐・石匙・スクレイパー 使用痕剥片・その他剥片石器のみ	石材総重量比率	
下呂石	下呂石円礫	72.448 (0.641%)	33.936 (3.582%)	(6.791%)	1066.855 (100.001%)
	下呂石円礫(爪)	99.940 (0.884%)	4.695 (0.496%)	(9.368%)	
	下呂石角礫	267.190 (2.363%)	38.449 (4.059%)	(25.045%)	
	その他下呂石	627.277 (5.548%)	156.133 (16.482%)	(58.797%)	
チャート	チャート	2426.563 (21.460%)	492.084 (51.945%)	(69.035%)	3514.959 (99.999%)
	チャート1	1087.296 (9.616%)	82.142 (8.671%)	(30.933%)	
	チャート45 (土岐石)	1.100 (0.010%)	0.000 (0.000%)	(0.031%)	
	サヌカイト?	44.227 (0.391%)	27.127 (2.864%)		
	黒曜石	16.735 (0.148%)	0.000 (0.000%)		
	石英(水晶)	6357.012 (56.220%)	54.875 (5.793%)		
	安山岩	28.008 (0.009%)	12.688 (1.339%)		
	溶結凝灰岩	1.901 (0.017%)	1.901 (0.201%)		
	泥質凝灰岩	10.615 (0.094%)	10.615 (1.121%)		
	泥岩	23.001 (0.203%)	18601 (1.964%)		
	砂岩	7.481 (0.066%)	7.481 (0.790%)		
	ホルンフェルス	236.522 (2.092%)	6.587 (0.695%)		
	計	11307.316	947.314		

数値はg、()は%を示す

表3 器種別使用石材比率一覧

石鏃

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
下呂石	38.221	32.249	44	41.904	0.869
下呂石門礫	1.722	1.453	1	0.952	1.722
下呂石角礫	2.310	1.949	2	1.904	1.155
サヌカイト?	1.367	1.153	1	0.952	1.367
石英(水晶)	13.787	11.633	9	8.571	1.532
チャート	40.675	34.320	38	36.190	1.070
チャート1	18.534	15.638	8	7.619	2.317
溶結凝灰岩	1.901	1.604	2	1.905	0.951
計	118.517	99.999	105	99.997	

石錐

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
下呂石	1.947	4.702	2	9.524	0.974
下呂石門礫	3.428	8.279	2	9.524	1.714
下呂石角礫	7.322	17.684	2	9.524	3.661
サヌカイト?	1.728	4.174	1	4.762	1.728
石英(水晶)	4.647	11.224	3	14.286	1.549
チャート	20.562	49.661	10	47.619	2.056
チャート1	1.770	4.275	1	4.762	1.770
計	41.404	99.999	21	100.001	

石匙

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
下呂石	65.211	37.881	5	29.411	13.042
下呂石門礫	6.094	3.540	1	5.882	6.094
下呂石角礫	9.890	5.750	1	5.882	9.890
サヌカイト?	11.417	6.632	1	5.882	11.417
チャート	60.930	35.395	7	41.176	8.704
泥岩	18.601	10.806	2	11.765	9.301
計	172.143	100.004	17	99.998	

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
安山岩	3.305	1.320	1	2.326	3.305
下呂石	19.243	7.688	6	13.953	3.207
下呂石門礫	11.573	4.624	1	2.326	11.573
下呂石角礫	9.100	3.636	1	2.326	9.100
サヌカイト?	16.548	6.611	3	6.977	5.516
石英(水晶)	9.744	3.892	3	6.977	3.248
チャート	160.463	64.109	24	55.814	6.686
チャート1	9.705	3.877	3	6.977	3.235
泥質凝灰岩	10.615	4.241	1	2.326	10.615
計	250.296	99.998	43	100.002	

使用痕剥片

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
安山岩	9.383	4.998	1	4.000	9.383
下呂石	18.867	10.049	4	16.000	4.717
下呂石角礫	6.794	3.619	1	4.000	6.794
砂岩	7.481	3.985	1	4.000	7.481
サヌカイト?	6.067	3.323	1	4.000	6.067
チャート	114.608	61.044	13	52.000	8.816
チャート1	17.960	9.566	3	12.000	5.987
ホルンフェルス	6.587	3.508	1	4.000	6.587
計	187.747	100.092	25	100.000	

その他石器

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
下呂石	12.644	7.011	4	10.256	3.161
下呂石門礫	11.119	6.166	4	10.256	2.780
下呂石門礫(爪)	4.695	2.604	1	2.564	4.695
下呂石角礫	3.033	1.682	2	5.128	1.517
石英(水晶)	26.697	14.804	4	10.256	6.674
チャート	87.971	48.783	18	46.154	4.887
チャート1	34.173	18.950	6	15.385	5.700
計	180.332	100.000	39	99.999	

楔形石器および階段状剥離のみられる剥片

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
安山岩	6.539	0.796	1	0.752	6.539
下呂石	109.027	13.275	34	25.564	3.207
下呂石門礫	11.625	1.416	2	1.504	5.813
下呂石門礫(爪)	9.538	1.162	2	1.504	4.769
下呂石角礫	34.207	4.165	6	4.505	5.701
石英(水晶)	22.514	2.742	5	3.760	4.503
チャート	226.489	27.579	38	28.571	5.960
チャート1	401.297	48.865	45	33.834	8.918
計	821.236	100.000	133	99.994	

石核

	重量(g)	重量比(%)	点数	点数比(%)	重量/点数
下呂石	42.695	9.821	6	20.690	7.116
下呂石門礫(爪)	21.588	4.956	1	3.448	21.588
下呂石角礫	53.114	12.199	3	10.345	17.705
黒曜石	3.451	0.793	1	3.448	3.451
石英(水晶)	39.305	9.028	4	13.793	9.826
チャート	134.368	30.862	10	34.483	13.437
チャート1	140.866	32.354	4	13.793	35.217
計	435.387	100.013	29	100.000	

(4) 八王子遺跡出土石器群との比較検討

木下川を挟んで対岸に所在し、長谷口遺跡とは時期的前後関係にあたる八王子遺跡の石器群との比較検討を行っていく。しかし、上記したように、長谷口遺跡で「縄文時代早期末から中期後半に帰属する可能性の高いもの」は部分的にしか提示できない。したがってまず、出土器種（点数）、次に石匙、最後に使用石材の三点に絞って検討を行う。

器種 出土器種（点数）について。八王子遺跡と同じく打製石斧・磨製石斧の出土がそれほど多くない。また、八王子遺跡で出土した礫石錘・切目石錘が見られなかった。

石匙 石匙について。縦長石匙・横長石匙が共存する状況は、変わらないようである。八王子遺跡で見られた「小型」の石匙は、見られなかった（八王子遺跡 175 など）。八王子遺跡ではそれほど顕著ではなかったものに、横長石匙の中で端部の一方を意識的に「作り出し」、さらには「使用している」ものが存在することである（106・107）。

使用石材 使用石材について。第一に注目されるのは、溶結凝灰岩の利用の少なさである。八王子遺跡では、石錐以外の小型剥片石器に広く使用され、剥片・石核の出土も見られていた。今回の長谷口遺跡では、溶結凝灰岩の利用は石鏃 2 点のみで、石核の出土は見られなかった。縄文時代草創期の良好な石器群の出土で知られる品野西遺跡では、有舌尖頭器など、溶結凝灰岩の広い利用が見られる（岡本ほか 1997）。縄文早期後半と早期末で、石材利用変化の可能性が考えられる。第二に下呂石についてである。注目されるのは、角礫の比重の高さである。八王子遺跡では円礫が主体の中、角礫が数点見られる程度であった。しかし下呂石に関しては、弥生時代後期にも利用が見られるため、残念ながら単純に八王子遺跡石器群との比較はできないものと考えられる。

参考文献

- 青木 修ほか,1991『二股貝塚』知多市教育委員会。
- 岡本直久ほか,1997『品野西遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 関西縄文文化研究会,2002『縄文時代の石器Ⅰ－関西の縄文草創期・早期－』
- 武部真木編,2003『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

(5) 長谷口遺跡出土石器の使用痕分析

長谷口遺跡から出土した石匙、スクレイパー等の剥片石器を対象として使用痕分析を実施した。このうち、石匙2点、搔器1点に使用痕が認められたので報告する。

使用痕の観察方法は、金属顕微鏡を用いた高倍率法に基づくものである。100～500倍の倍率を使用し、光沢・線状痕などの微細な痕跡を観察した。また、刃縁の摩滅痕や微小剥離痕の観察には、10～60倍の実体顕微鏡を使用した。

各資料に認められた使用痕と推定される機能は次のとおりである。

111 チャート製の横型石匙で、摘部が欠損している。刃部の加工は、片面調整である。

加工のない面の刃縁に摩滅痕が認められる。この部分を金属顕微鏡で観察すると、縁辺に沿って弱い光沢が観察される。光沢面はやや明るく、表面には微細な凸凹がみられる。線状痕は明瞭でないが、光沢面の微細な凸凹は刃部と直交する方向性をもつ。

刃部調整のない腹面を対象物に接触させ、刃と直交方向の運動がなされたと推定される。光沢の発達が弱いので、作業対象物を限定することはできない。

101 チャート製の石匙である。2ヶ所に摘部をもち、横型の石匙を縦型に作りかえたものと思われる。刃部は片面のみ加工されている。

使用痕は刃部中央を中心に認められ、未加工の腹面側でよく発達している。金属顕微鏡下では、高所が著しく摩滅していることが確認でき、この部分に平坦に広がるやや明るい光沢が観察される。表面には無数のピット、線状痕を伴い、やや荒れた外観を呈している。これらの特徴から、光沢タイプはCタイプに分類される。線状痕及び光沢の発達方向は刃縁と平行する。

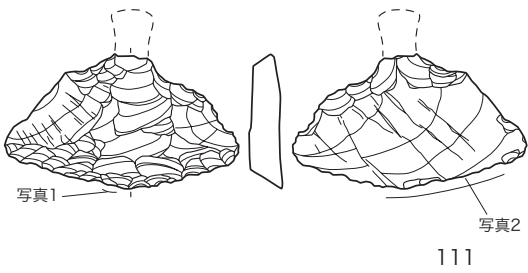
刃部中央を対象物に接触させ、刃を平行方向に操作したと推定される。作業対象物は鹿角や骨などが想定される。

116 チャート製の搔器で、剥片の端部に刃部を作出している。加工は背面側にのみ施され、腹面側は平坦な面となっている。

金属顕微鏡による観察では、腹面の刃縁がわずかに摩滅している。この摩滅部に微弱な光沢が観察される。光沢面は、やや明るく微細な凸凹がみられ、Eタイプに近い。明瞭な線状痕は認められないが、光沢部の微凸凹は、刃と直交する方向性をもつ。

光沢が微弱であるため、作業対象物は特定できない。光沢は腹面の刃縁に認められるので、この面を対象物と接触させ、刃を直交方向に動かして使用したものと推定される。

- 梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究ーポリッシュを中心とした機能推定の試みー」『考古学雑誌』67-1: pp.1-36
御堂島正 1988「使用痕と石材ーチャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュー」『考古学雑誌』74-2: pp.1-28



111



写真1 20 ×

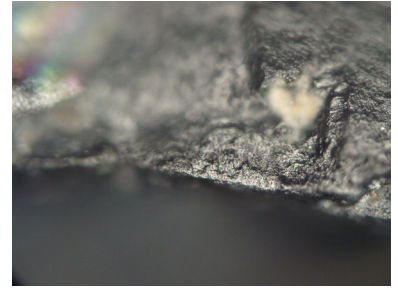
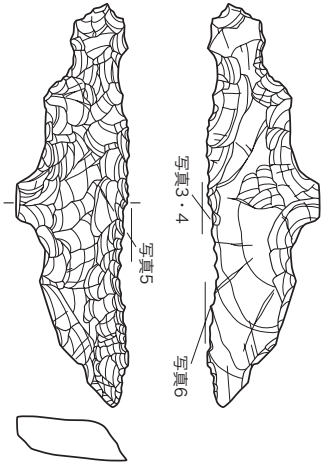


写真2 200 ×



101

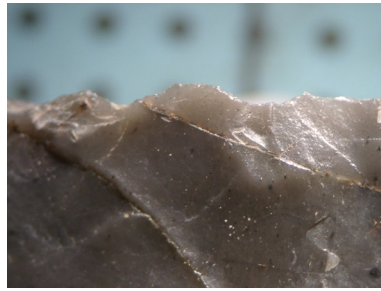


写真3 10 ×

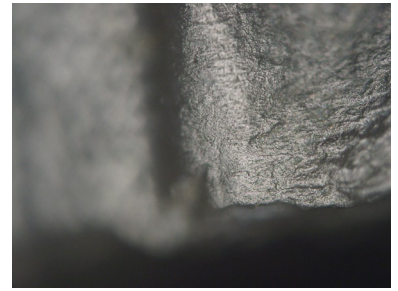


写真4 200 ×



写真5 200 ×

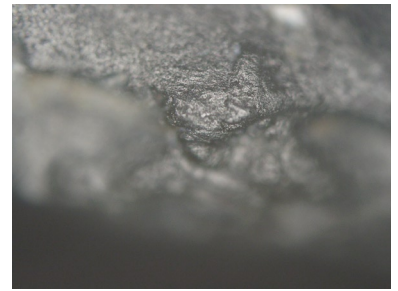
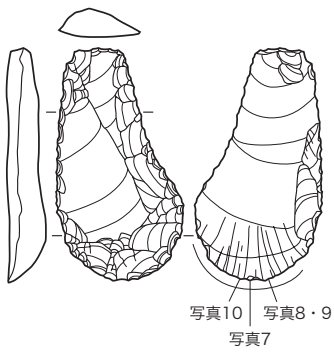


写真6 200 ×



116

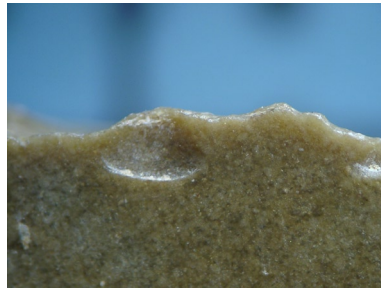


写真7 20 ×



写真8 200 ×



写真9 500 ×

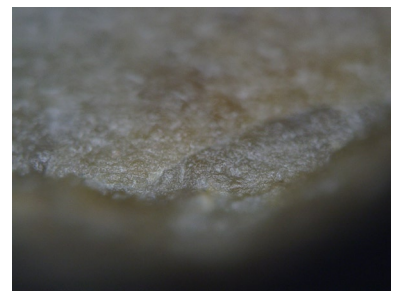
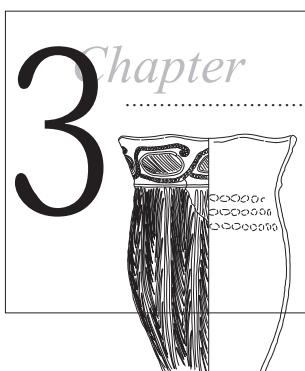


写真10 200 ×

200 × : 300 μ m
500 × : 120 μ m





3 Chapter まとめ

長谷口遺跡は多岐にわたる調査成果を得ることができた。ここでは、調査の成果からいくつかの要点をまとめておきたい。

(1) 縄文時代早期末葉について

集石遺構2基のほか、ピット・土坑などがあつたが、住居は確認できなかった。住居の可能性のある場所としては、第2面19n周辺のピット群あるいは第3面20o周辺のピット群がある。いずれにしても遺構なのかあるいは地表面の凹凸なのか判断しかねる。

一方、早期末葉の遺物群は比較的まとまりがある。遺跡の形成が斜面堆積の末端であるので、層位的な把握は不可能であった。出土頻度の高かったのは、2群から5群としたいわゆる入海Ⅱ式新相から天神山式古相までの土器群である。最近の研究成果や調査から、より細分が可能になってきた。

土器群の位置付け

2群（入海Ⅱ式新相）は「ナデ付けた低い隆帯を特徴とする」（小崎2004）土器群で、長谷口遺跡の隆帯をもつ土器群のなかで主体を占める。3群（石山式あるいは塩屋中層A式）は隆帯が消滅し、刻み目による紋様構成となる土器群、4群（石山式あるいは塩屋中層B式）は刻み目が押引となり、施紋箇所が凹む土器群。5群（天神山式）。

塩屋遺跡は概ね塩屋中層A式（下位層）→B式（上位層）の層位で確認されている（磯部1984）。長谷口遺跡では2群から5群（天神山式）まで共伴する遺構（SK92）がある。遺構は前述したように人工的な掘削によるものか判断しかねる落ち込みもあるので、遺構の記述ではほとんど触れなかった。ここで、遺構内の土器群の組み合わせを少し検討してみよう。分類可能な土器片数が多い遺構を列挙してみる。

遺構出土の資料

SK89（入海Ⅱ式+、塩屋中層A式+、塩屋中層B式+、不明○）

SK92（入海Ⅱ式+、塩屋中層A式◎、塩屋中層B式○、天神山+、不明○）

SK94（入海Ⅱ式+、塩屋中層A式○、塩屋中層B式◎、不明+）

SK101（塩屋中層A式+、塩屋中層B式+、天神山○）

P245（塩屋中層A式+、塩屋中層B式○、天神山○、不明+）

P257（塩屋中層B式○、天神山+、不明+）

P262（粕畑式+、塩屋中層A式○）

P263（塩屋中層A式○、塩屋中層B式○）

+は1点、○は少ない、◎は多いを表す。ただし、図示していない土器も含めて傾向を示している。

P272 (塩屋中層 A 式○)

P280 (塩屋中層 A 式○、塩屋中層 B 式+、不明+)

P281 (塩屋中層 A 式+、塩屋中層 B 式◎、天神山+)

P310 (塩屋中層 B 式○、天神山+)

上記のうち、遺構の新旧関係と土器型式の符合する例が1つある。P280とP281は、P280を切り込んでP281が掘削されている。P280は塩屋中層A式にB式が1点伴うに對して、P281は塩屋中層B式にA式と天神山式が各1点伴う。漸進的ではあるが、組成として新旧を確認できる土器群である。その他の遺構は、混在資料もあろうが、塩屋中層A式・塩屋中層B式・天神山式の共伴する事例が多い。したがって、長谷口遺跡の場合は、傾向として各型式が共伴するものの、漸進的な推移を示しながら組成に変化がうかがえる。

繊維混入土器

長谷口遺跡の特徴としては、繊維混入土器の多いことが指摘できる。知多半島の場合、長谷口遺跡とは異なり、入海Ⅱ式を境に繊維を含まない土器が多くなる。天神山式ではほとんどの土器に繊維を含まない。ところが、図示した250点のうち、繊維を含まない土器は50点に満たない。絶対数ではないが、およその傾向は間違いない。瀬戸地域の特徴かあるいは知多地域の特徴か？

5群(天神山式)の土器に2点、興味深い資料がある。それは、塩屋中層式の特徴である刻み目による押し引き紋と天神山式の特徴である波状紋が同一個体に施紋されている資料である。170と190、それぞれ波状紋の上位、口縁下に刻み目が施される。2型式の施紋特徴を合わせ持つ希少な土器である。

無紋土器が少ない

土器組成としては、無紋土器が少ない点が指摘できる。知多半島の楠廻間貝塚の場合、天神山式の後半に比定されている土器組成は無紋土器が3割以上を占める(山下2003)。また、楠廻間貝塚に「隆帯紋土器」とされた神之木台式との関連が指摘されている土器群も長谷口遺跡では見られない。上記2点の特徴は、天神山式後半段階の特徴とされている(山下2003)。つまり、長谷口遺跡は楠廻間貝塚の天神山式とは異なる土器組成であると指摘できる。天神山式以降、無紋土器の組成が増加傾向にあることを受ければ、長谷口遺跡の天神山式は楠廻間貝塚より古い様相であるといえる。

最後に、隣接する八王子遺跡との関係を示しておこう。

八王子遺跡は、木下川を挟んで長谷口遺跡の対岸に位置し、遺跡の消長から密接な関係が指摘できる。八王子遺跡は、早期後葉である粕畑式から上ノ山式に比定できる土器群が最も多く出土している。入海Ⅰ式以降、徐々に出土量が少なくなる。一方、長谷口遺跡は粕畑式に比定できる資料も数点確認できるものの、大多数は早期末葉の入海Ⅱ式から天神山式である。つまり、八王子遺跡から長谷口遺跡への移動が想定できる。ただし、八王子遺跡では竪穴住居が1棟検出されているものの、長谷口遺跡では明確な住居がない。

その後、八王子遺跡では塩屋式、長谷口遺跡では上ノ山Z式に比定できる土器が各々確認できるものの、皆無に等しい。縄文早期末に降下したと考えられる鬼界アカホヤ(K-Ah)との関連性も示唆できる。

(2) 縄文時代中期後葉について

竪穴住居 2 棟と土坑が数基ある。

02 区 SB04 は遺物が 1 点 (270) のみで、時期比定に確証がない。住居内の集石も石囲炉としての形態ではない。しかしながら、ほぼ真北 10m に位置する SK146 埋甕を合わせて考えると、住居と埋甕の関連性から時期比定が可能と考えられる。つまり、SB04 出土の土器片と SK146 出土の土器は同時期に比定でき、さらに住居と埋甕を一連の遺構として捉える。

02 区 SB06 は中期後葉の五角形プランをもつ竪穴住居。壁溝と柱穴の配置から五角形と判断した。プランのほぼ中央に炉をもち、周辺を石で囲む、石囲炉。炉の中央が正円に落ち込むことから炉帯土器の存在も推定できる。五角形プランの竪穴住居については、愛知県内に 4 例確認されている (岩瀬 1997)。平面プランを無視して柱穴の配置でみると 7 例ほど増える。岩瀬彰利によると、長野県伊那地域の縄文中期後葉に五角形の住居が多いという (岩瀬 1997)。

五角形プラン

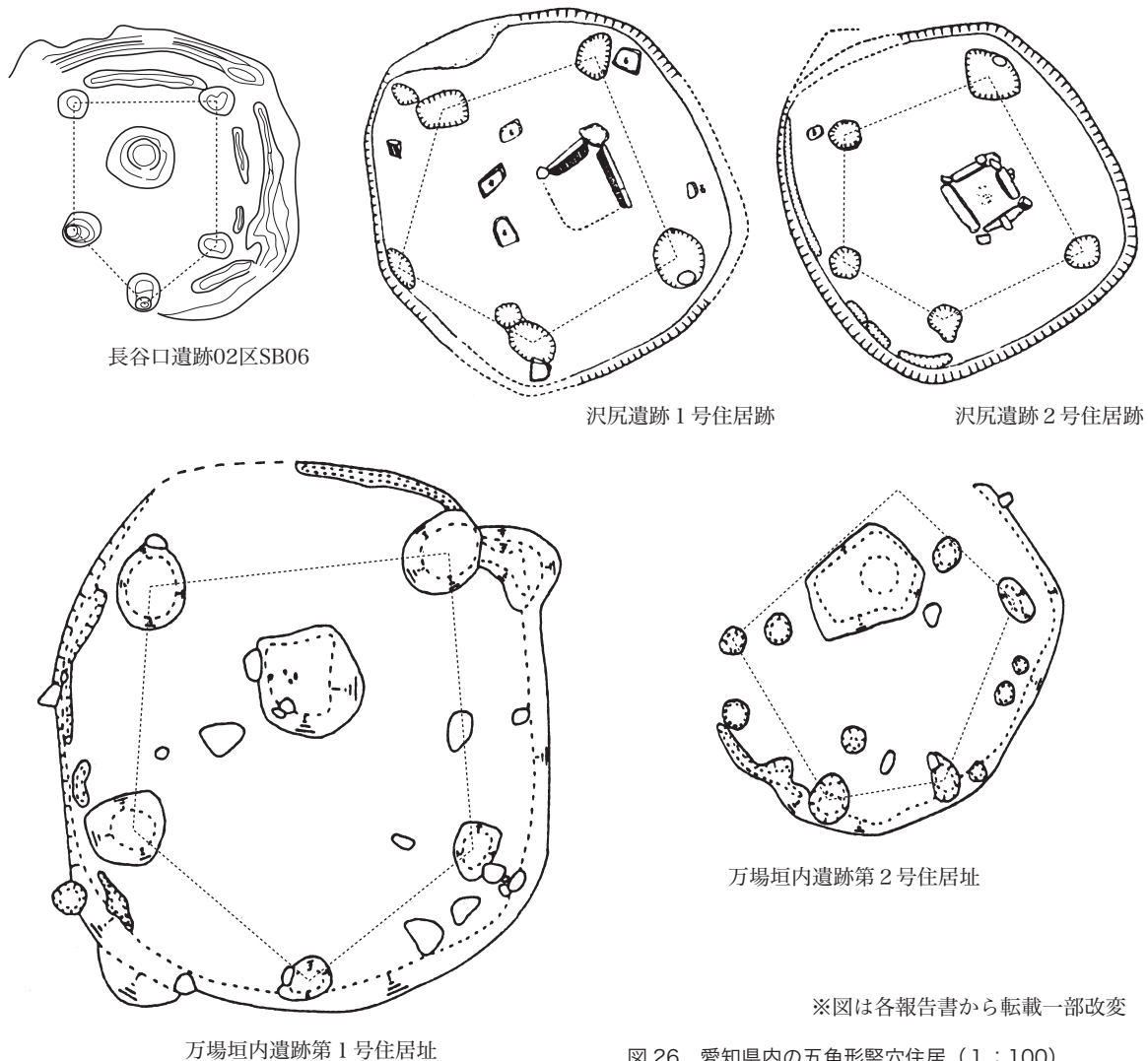


図 26 愛知県内の五角形竪穴住居 (1 : 100)

(3) 弥生時代中期後葉から後期初頭について

竪穴住居 2 棟と土坑 1 基がある。これら 3 つの遺構は切り合い関係があり、SB07 → SK120 → SB03 の順で掘削されていた。

SB07 は尾張 IV 様式後半（高蔵式後半段階）の竪穴住居で、瀬戸市内の類例としては最も古い。隅丸方形のプランの典型的なこの時期の住居。

※朝日遺跡例は後期初頭に比定されている有肩袋状鉄斧。全国で 4 遺跡 5 例確認されている。また、無肩袋状鉄斧は古墳時代初頭の名古屋市三王山例が県内に 1 例ある。

続いて SK120 は板状鉄斧が出土した土坑。土坑から出土した遺物は、鉄斧のみで、共存する土器から相対的年代比定ができなかった。弥生時代の県内出土鉄斧については、類例が少ない。板状鉄斧は豊川市郷中遺跡に次いで 2 例目。袋状鉄斧は朝日遺跡の 1 例のみ。

SB03 は尾張 V 様式初頭（見晴台式）の竪穴住居。赤津川を少し下ると惣作・鐘場遺跡がある。尾張 V 様式前半（山中式）に比定される竪穴住居群や溝が確認されている。2004 年度調査継続中ではあるが、隣接する遺跡の類例として、今後の調査成果に注目できる。

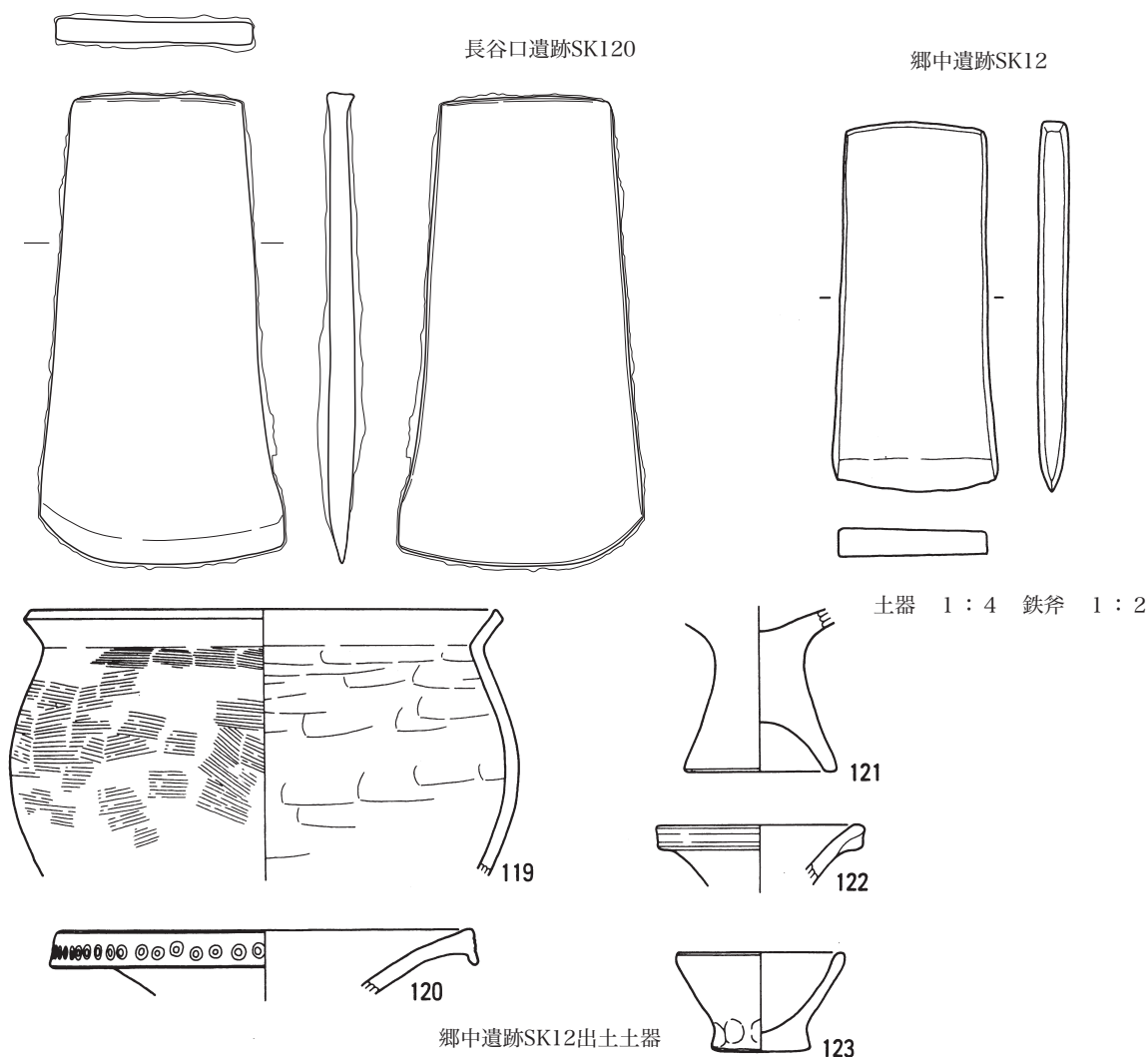


図 27 長谷口鉄斧と郷中鉄斧および共存土器（図は各報告書から転載）

(4) 古代について

竪穴住居3棟と土壇1基がある。02区SB08を除く2例は、出土資料が多く、両者とも同時期（黒笹14号窯式）に廃絶した住居と考えられる。00B区SB02と02区SB01はともに造り付けのカマドをもつ竪穴住居。両者とも、カマドのほぼ中央にピットが1ヶ所確認でき、支脚の抜き取り痕と考えられる。造り付けのカマドはこの時期あるいはこれ以降、激減し竪穴住居が消滅すると同時に終焉を迎える。この造り付けカマドで使用される煮炊き具は、胴部の長い甕、長胴甕である。古代の長胴甕は生産地がおおよそ推定できる。伊勢地域を主体として生産される伊勢系甕、美濃加茂市・可児市周辺の中濃地域を主体として生産される濃尾系甕、三河地域を主体として生産される三河系甕。これらの甕はおおよそ旧国単位あるいは隣接する国にまたがって流通する。同時期に流通する須恵器・灰釉陶器ほど遠隔地にもたらされることはない。瀬戸市域は旧尾張国山田郡に属する。東に向かい峠を越えると旧三河国加茂郡の藤岡町がある。旧国境に位置するためか、美濃から尾張に流通する濃尾系甕を主体としながら、三河に流通する三河系甕も若干伴出する。長谷口遺跡では00B区SB02から出土した362が三河系甕であり、濃尾系甕（365）と共伴した好例として注目できよう。隣接する鳳山屋敷遺跡からも三河系甕が出土しており、従来三河系甕の流通は三河国内に限定されて考えられていたが、再考の時期を迎えている。一方、濃尾系甕も最近豊田市域を中心に確認されている。現状は水入遺跡と梅坪遺跡だけであるが、類例は増加傾向にある。中でも注目されるのが、梅坪遺跡11次調査SB1101出土資料であろう（豊田市教委2003）。濃尾系甕が大多数で、三河系甕が数点伴う。時期は黒笹90号窯式に比定される。

(5) 近世末について

長谷口遺跡は、赤津地区の窯業生産地の東端に位置し、近世末から近代とされる長谷口B窯が遺跡の北西に隣接する。今回の調査成果としては、長谷口B窯と同時期に比定できる居住地を検出したことがあげられる。居住地を区画する溝に廃棄されたSU01は特に注目できる。

SU01は茶道具に関連する一括廃棄が認められ、居住者像を知る手がかりになる。湯罐と急焼、涼炉？として使用された焜炉、さらに端反碗や茶壺など、伝世品や現在の煎茶道具に見られる主要な器種は揃っている。SU01の一括廃棄は煎茶の道具類を含んだ希少な資料群と言えよう。

長谷口B窯については、窯本体および周辺の調査がおこなわれていないため、詳細は不明である。また、00A区SX02は水車小屋跡と考えられる遺構で、珪砂を砕く施設と考えられる。窯との関連性が指摘できる。

今回の調査において、匣鉢をはじめ窯道具に関連する遺物が多く出土した。調査区最上段に長谷口B窯の操業と同時期の居住地が確認できたことと、茶道具に関連する一括廃棄、さらに長谷口観音堂（17世紀後半頃創建）との関連性が問題となろう。

参考文献一覧

1 調査の概要

- 小澤一弘 2001「長谷口遺跡」『平成 12 年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸 2003「長谷口遺跡」『平成 14 年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター
瀬戸市史編纂委員会 1986『瀬戸市史』資料編 2 自然
愛知県 1997『愛知県活断層アトラス』
瀬戸市教育委員会文化財課編 1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会
青木修 1998「瀬戸市の縄文遺跡について」『研究紀要』第 6 輯(助瀬戸市埋蔵文化財センター)
武部真木編 2003『八王子遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 112 集)
宇佐見守編 2003『鳳山屋敷遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 116 集)
金子健一編 1993『白坂雲興寺遺跡』(助瀬戸市埋蔵文化財センター)

2 調査の成果

- 磯部幸男・杉崎章・久永春男 1965「愛知県知多半島南端における縄文早期末・前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41 号古代学協会
増子康眞 1969「木曾川下流域の縄文中期後半期について」『古代学研究』54 号古代学研究会
紅村弘・増子康眞ほか 1973『牧野小山遺跡』美濃加茂市教育委員会
増子康眞 1978「縄文中期後半土器の編年」『古代人』34 名古屋考古学会
磯部幸男・山下勝年ほか 1983『林ノ峰貝塚 I』(南知多町文化財調査報告書第 5 集) 南知多町教育委員会
鈴木保彦ほか 1983「シンポジウム 83 縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集」『神奈川考古』第 17 集神奈川考古同人会
谷口康浩 1984「打越式土器」の再検討『東京考古』2 東京考古談話会
磯部幸男 1984「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1 知多古文化研究会
増子康眞 1998「東海地方西部地域の縄文時代中期後半土器編年再考」『古代人』59 名古屋考古学会
山下勝年 1989「所謂、石山式土器の再検討」『知多古文化研究』5 知多古文化研究会
静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会編 1998『縄文時代中期前半の東海系土器群』予稿集静岡県考古学会
増子康眞 1999「東海地方 中期後半」『縄文時代』第 10 号縄文時代研究会
山下勝年 1999「東海地方 早期後葉」『縄文時代』第 10 号縄文時代研究会
谷藤保彦・関根慎二『第 13 回縄文セミナー 早期後半の再検討』縄文セミナーの会
山下勝年・増子康眞 2002「山田平式土器について」『伊勢湾考古』16 知多古文化研究会
小崎晋 2002「早期東海系土器の連続性」『伊勢湾考古』16 知多古文化研究会
山下勝年 2003「天神山式土器の終焉と塩屋式土器の成立」『伊勢湾考古』17 知多古文化研究会
小崎晋 2004「縄文早期東海系土器群と広域編年 (1)」『伊勢湾考古』18 知多古文化研究会

3 まとめ

(1) に関するもの

- 山下勝年 2003 前掲
磯部幸男 1984 前掲
小崎晋 2004 前掲

(2) に関するもの

- 愛知県教育委員会 1968『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』
鈴木昭彦 1988「沢尻遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報平成 61 年度』3 愛知県教育委員会ほか
岩瀬彰利 1997「三河湾・伊勢湾周辺における縄文時代住居の変遷について (I)」『三河考古』第 10 号

(3) に関するもの

- 豊川市教育委員会 1989『郷中・雨谷』
名古屋市教育委員会 1999『埋蔵文化財調査報告 30 三王山遺跡 (第 1～5 次)』(名古屋市文化財調査報告 40)

(4) に関するもの

- 豊田市教育委員会 2003『梅坪遺跡 VII』(豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 21 集)

(5) に関するもの

- 愛知県陶磁資料館 2000『秋季企画展 煎茶とやきもの』図録

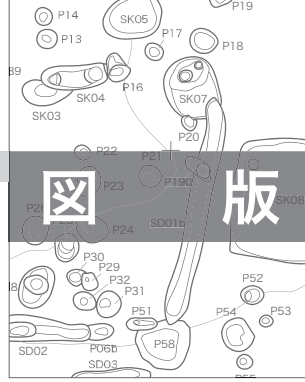
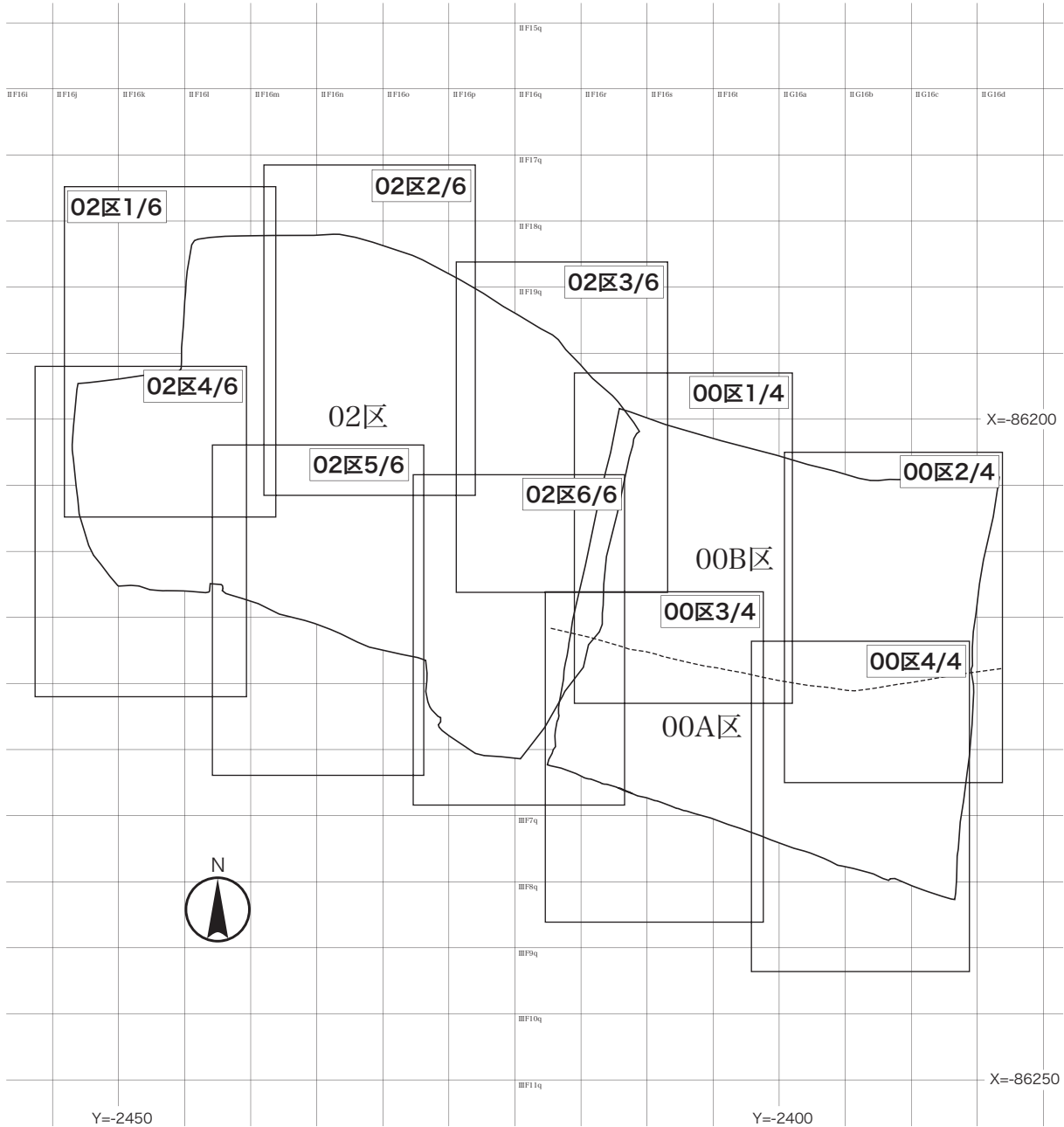
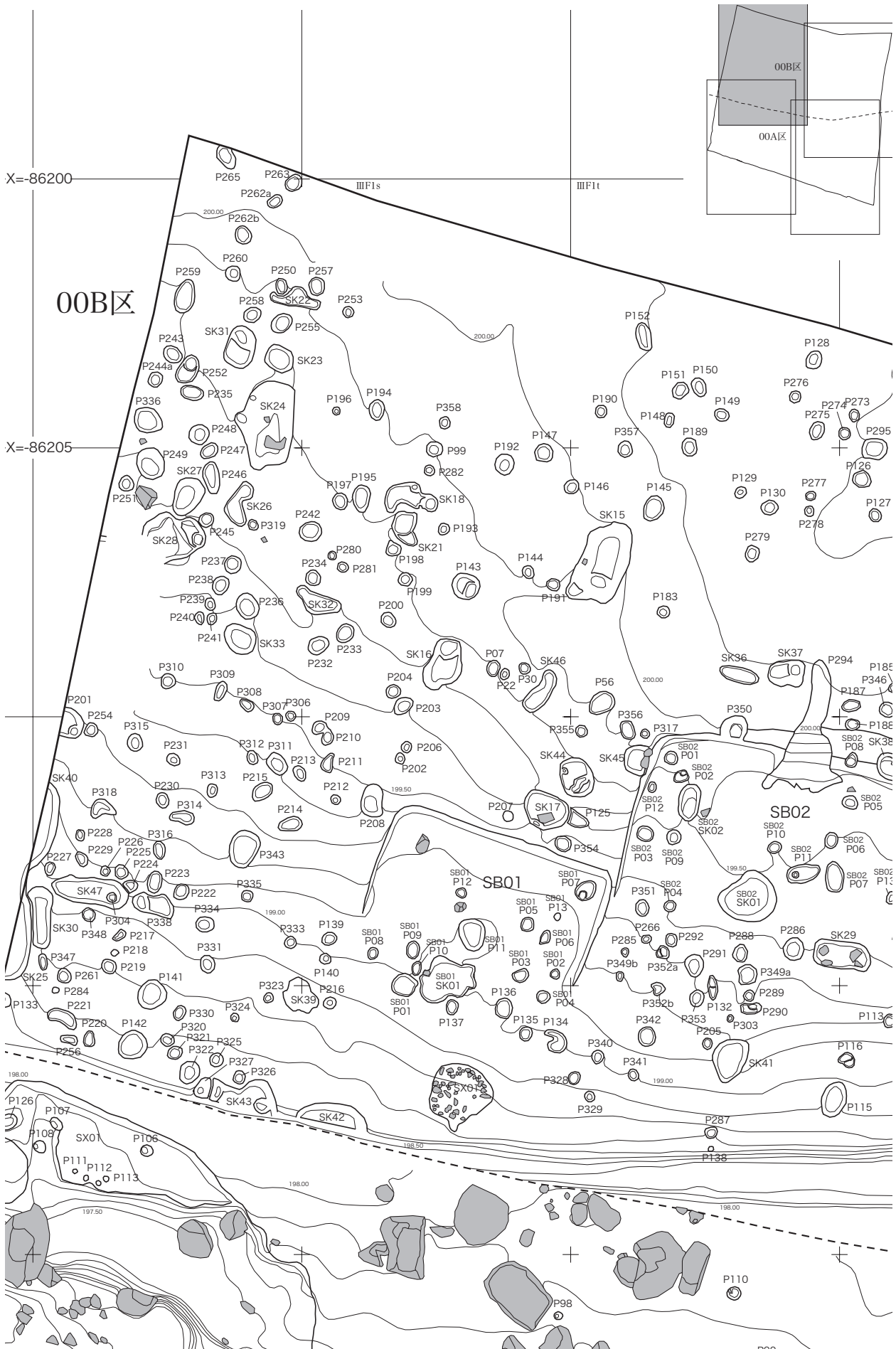


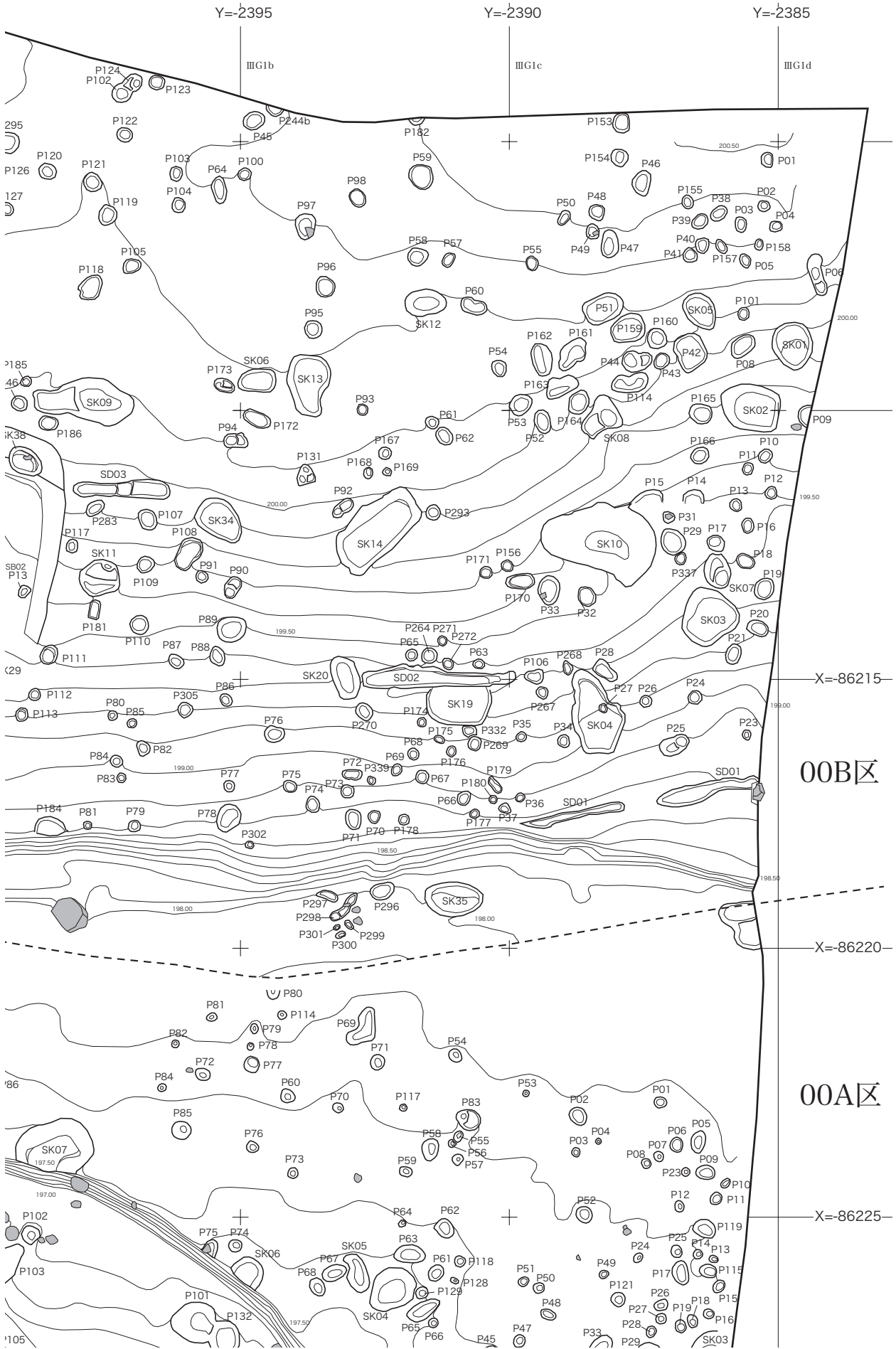
図 版



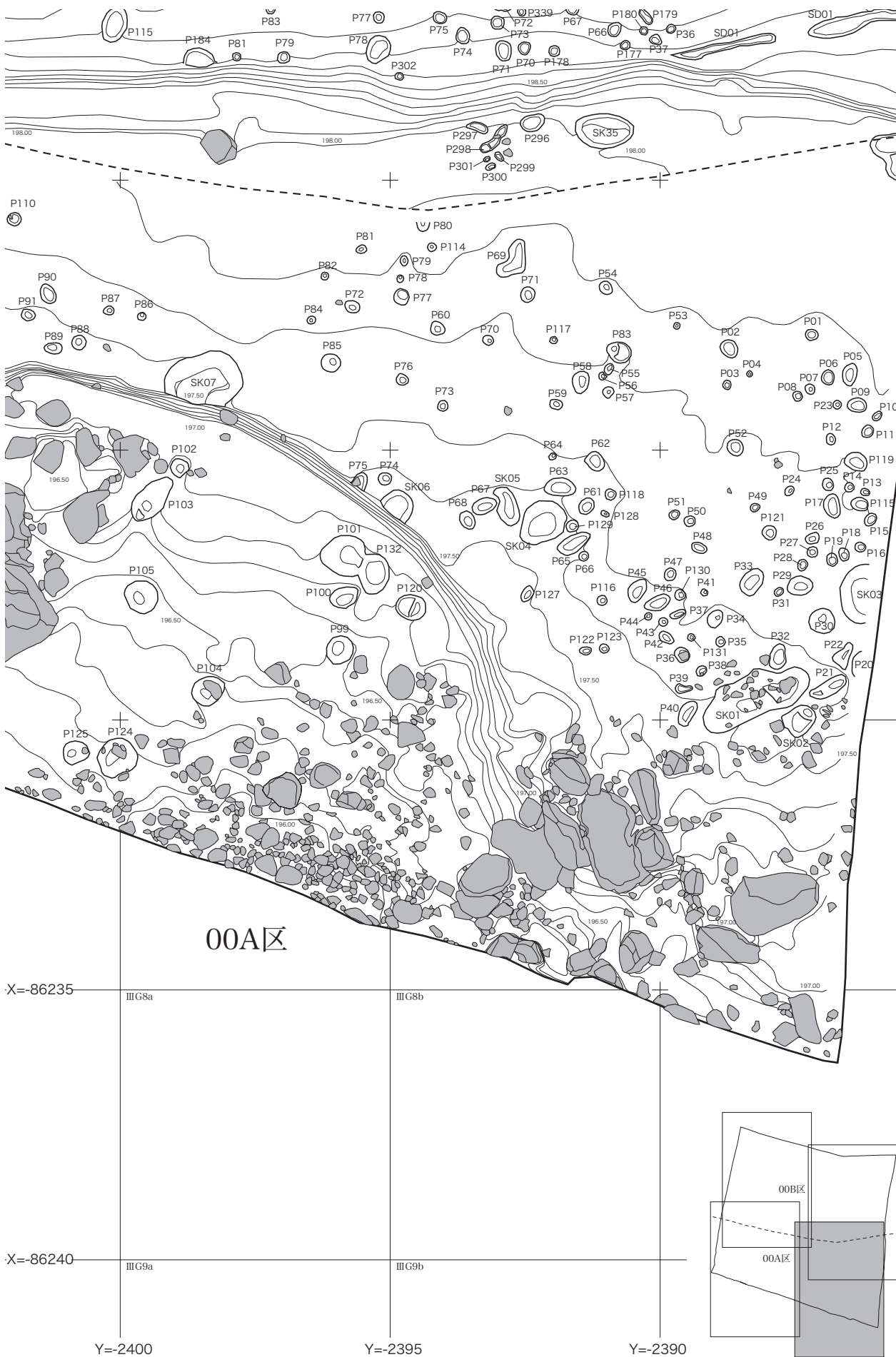
S=1 : 500

※各調査区の図割りは「1/4」の場合、PL4の内1番目を示す。
 ※※ 02区は3面。第1面は最上面、第3面は最下面を示す。
 ※※※図版2～23の縮率は全て1:100。

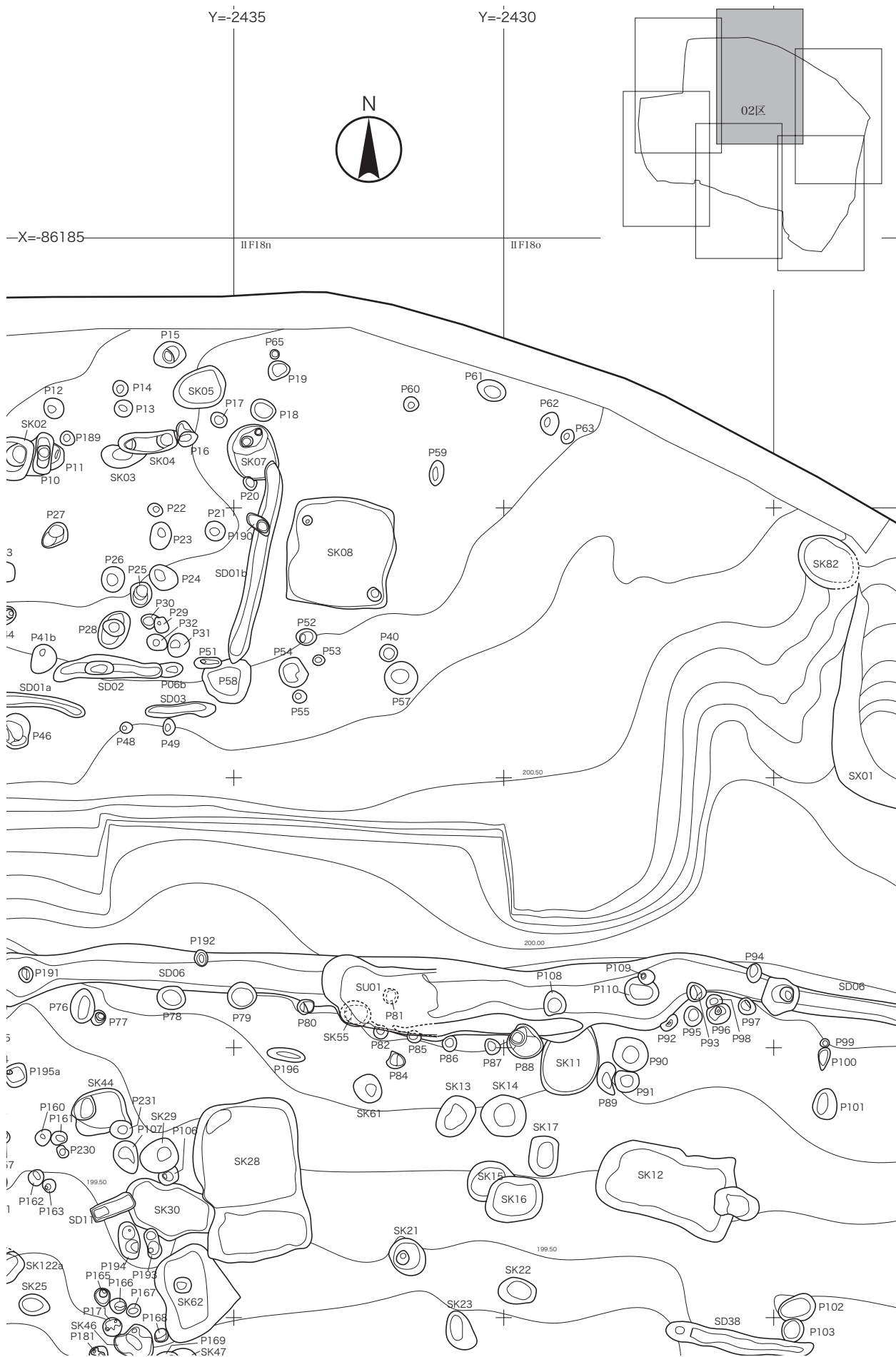


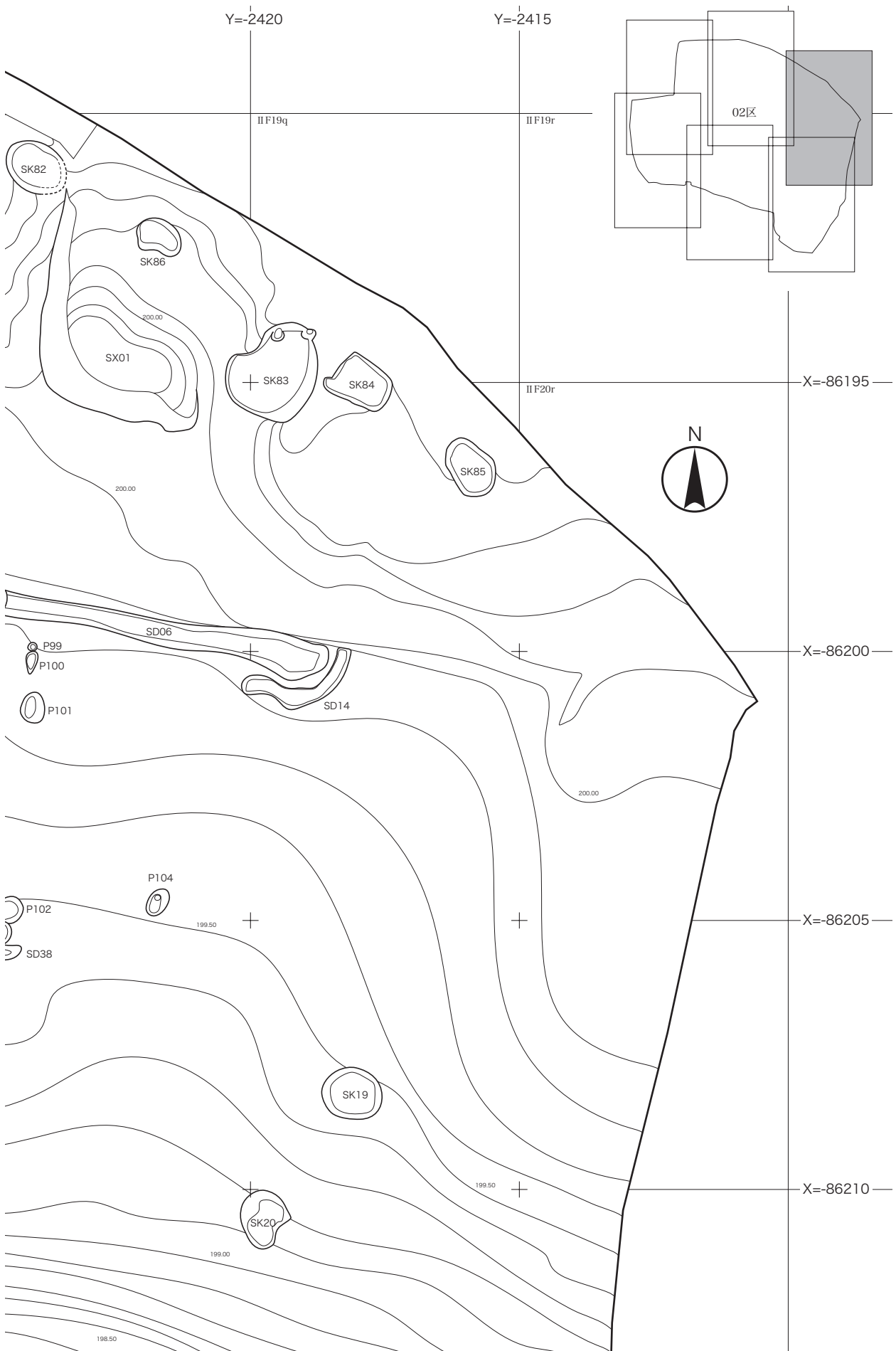


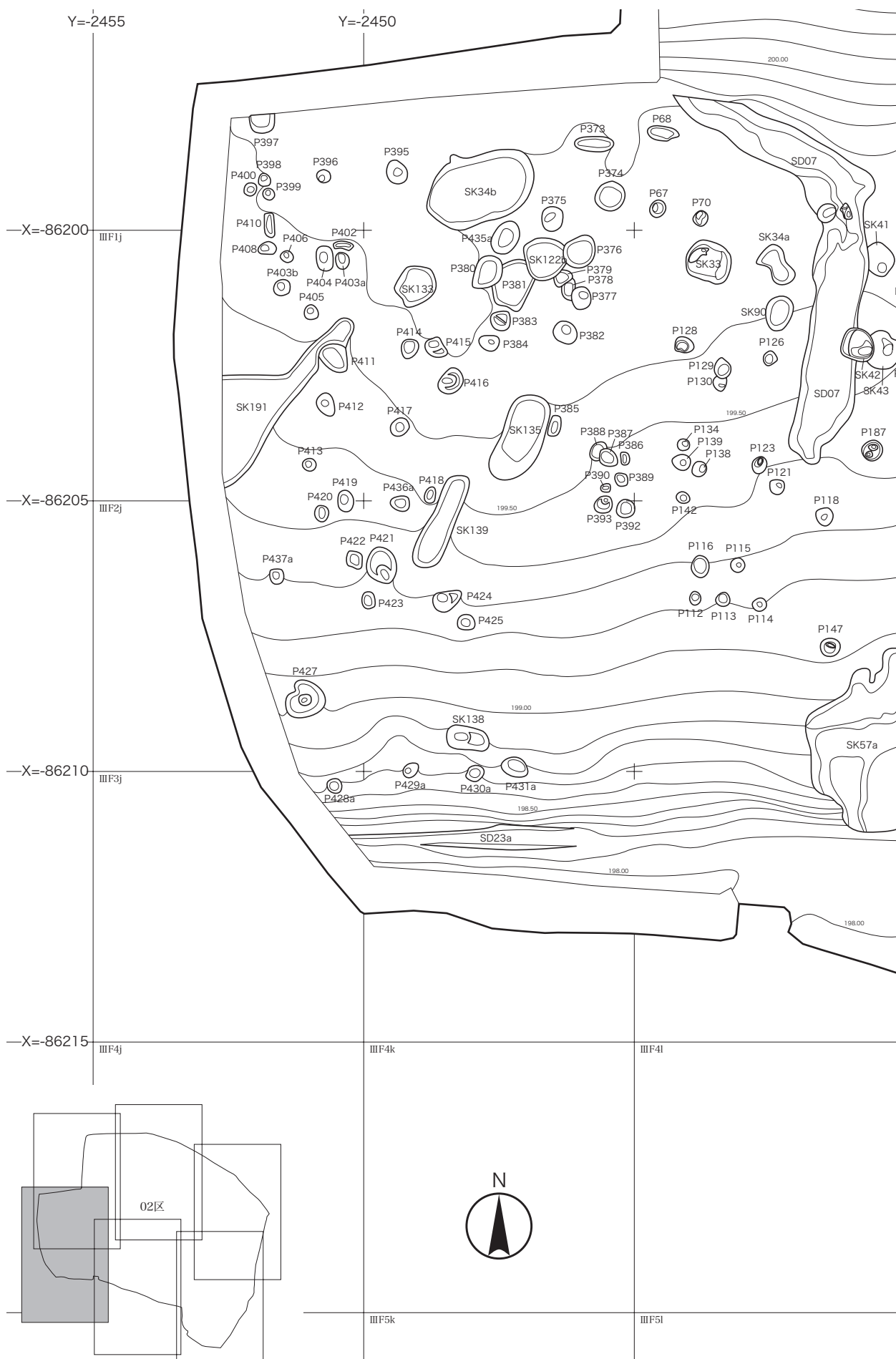


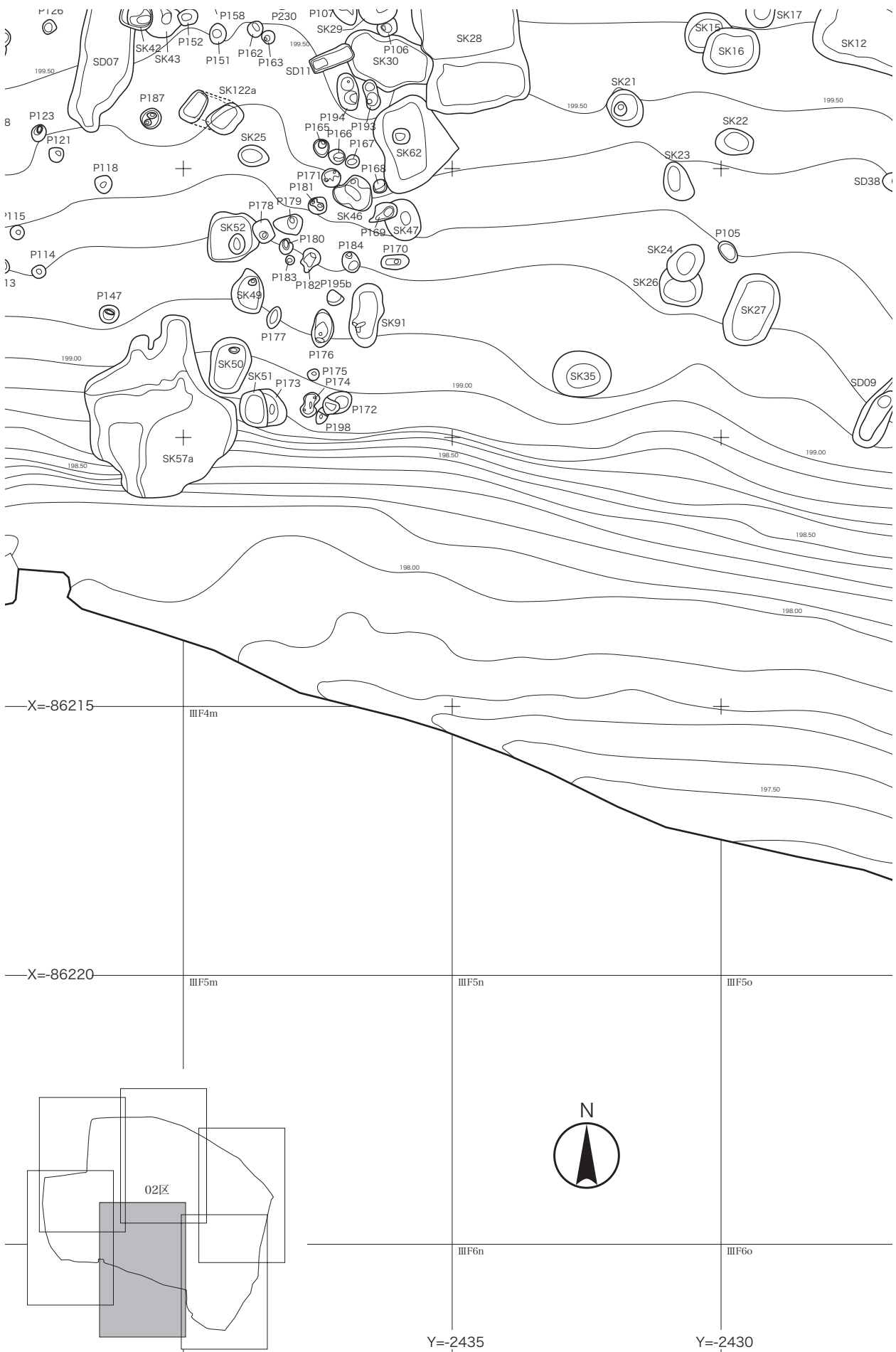




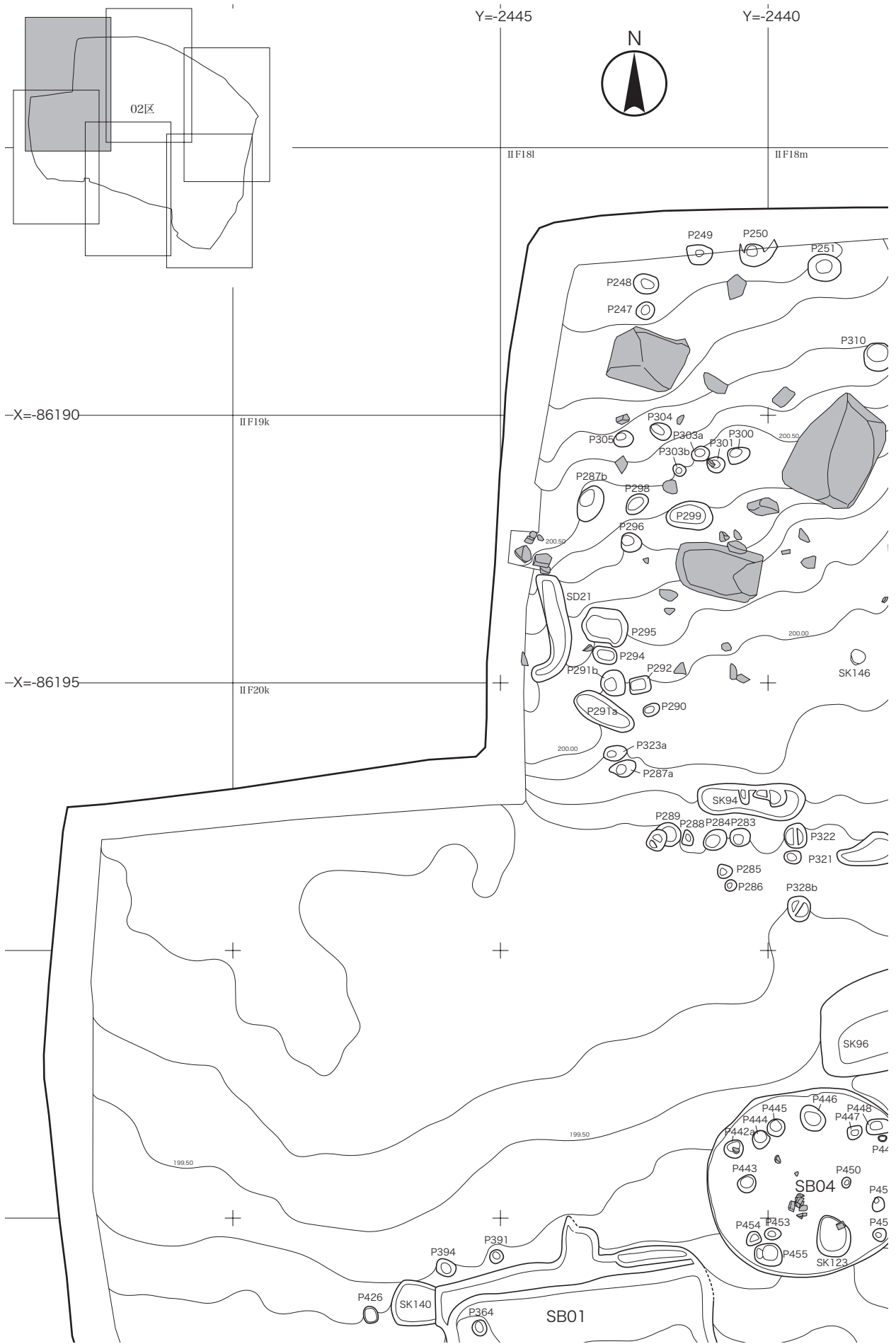




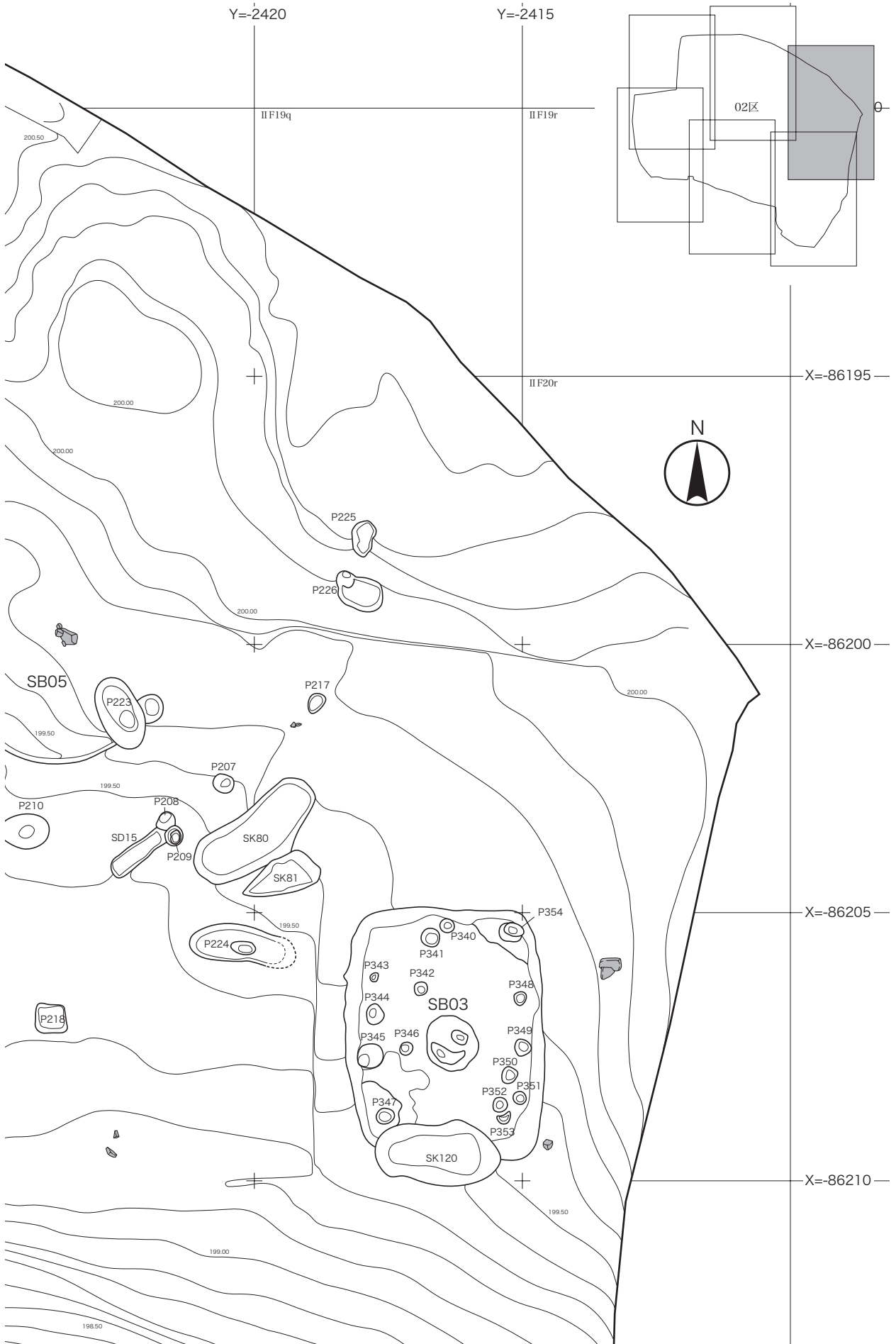


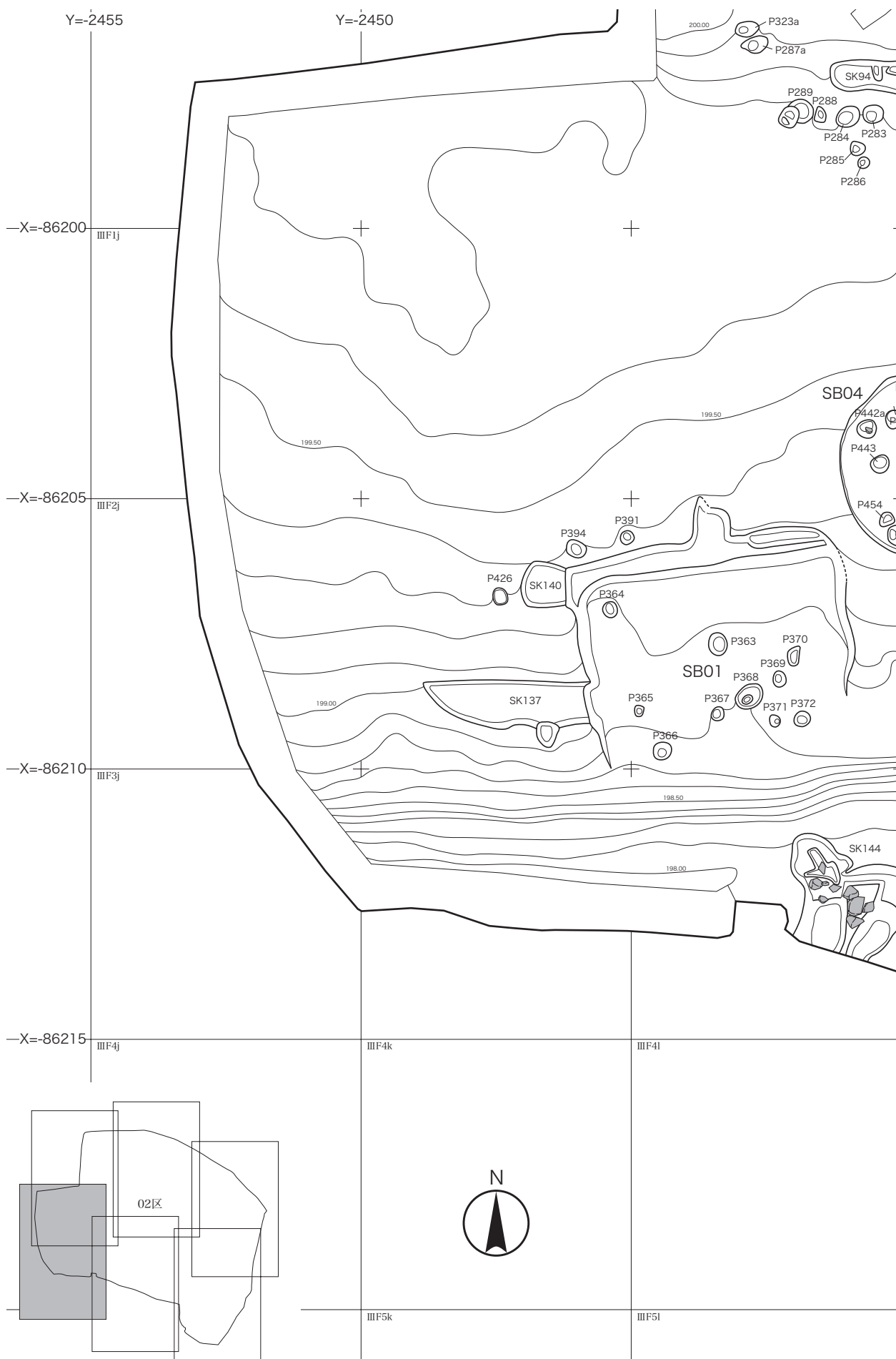


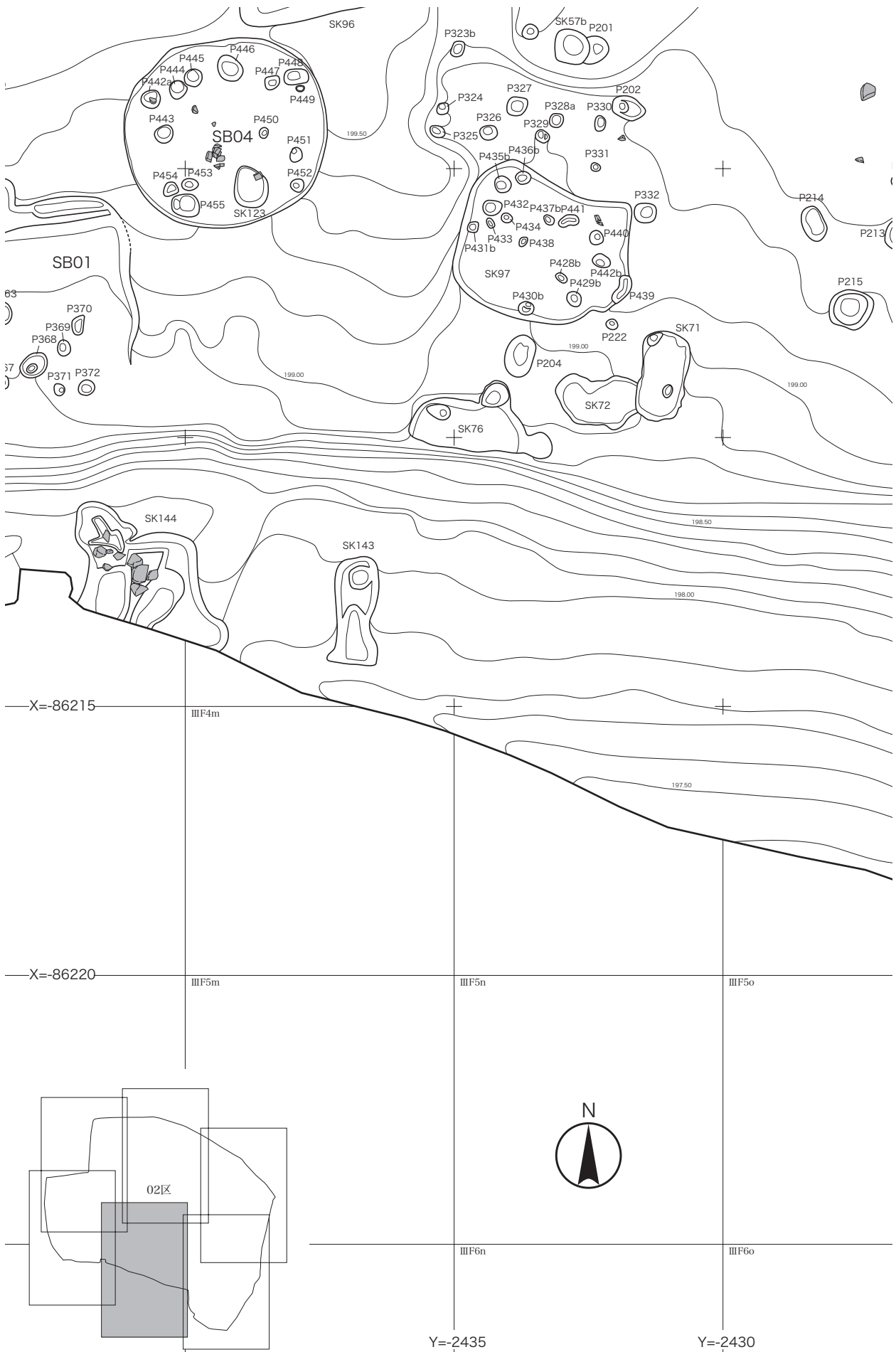




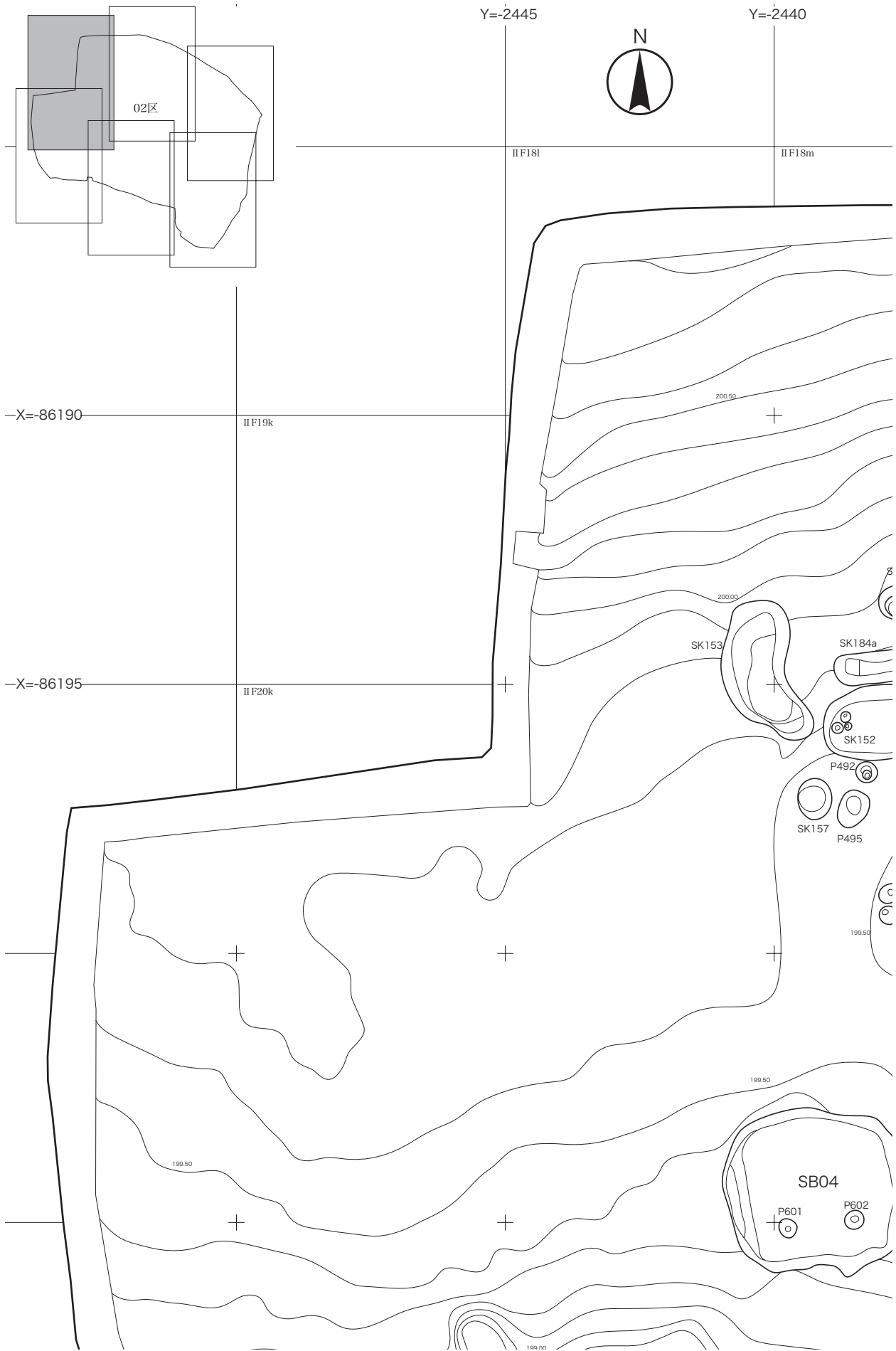




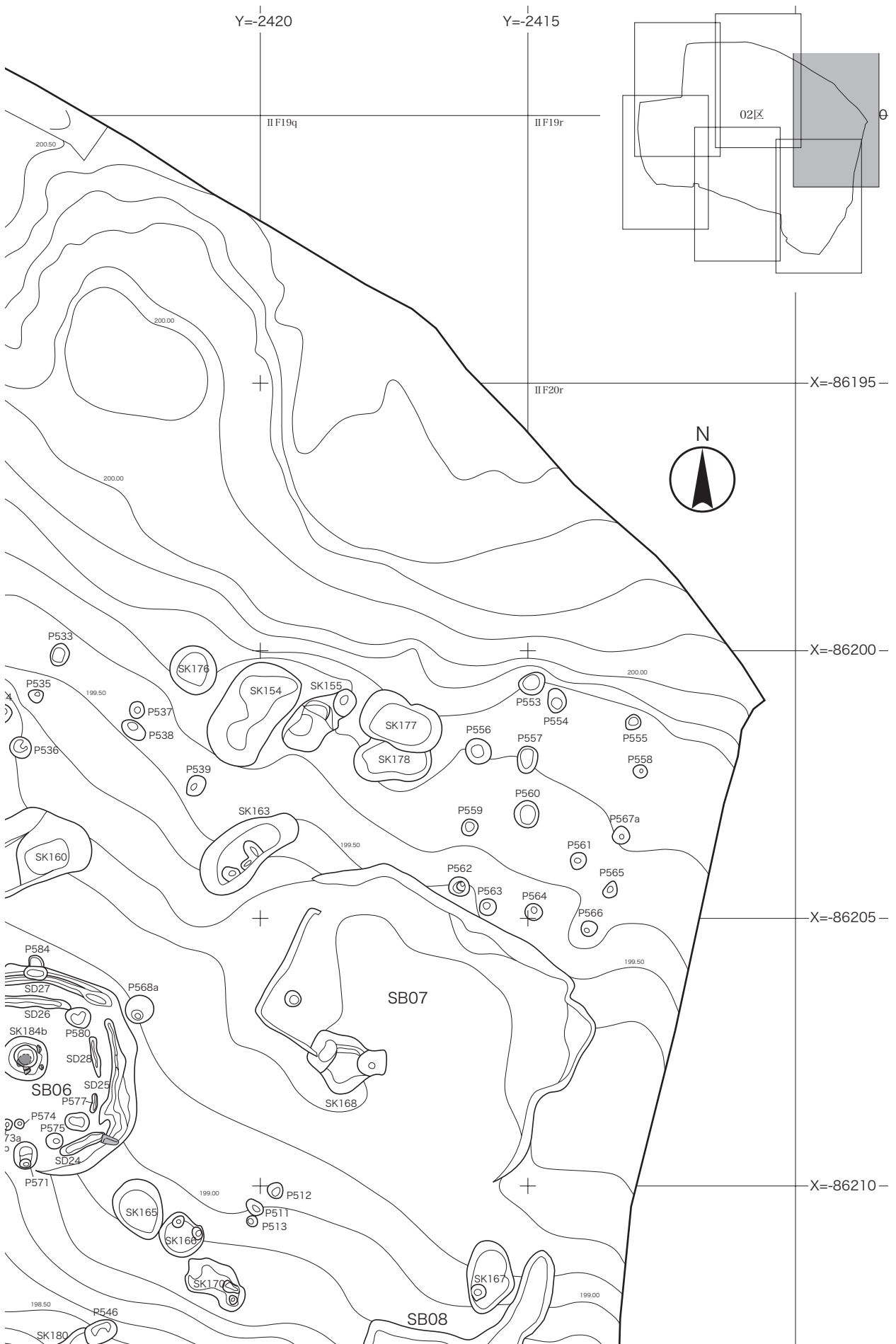


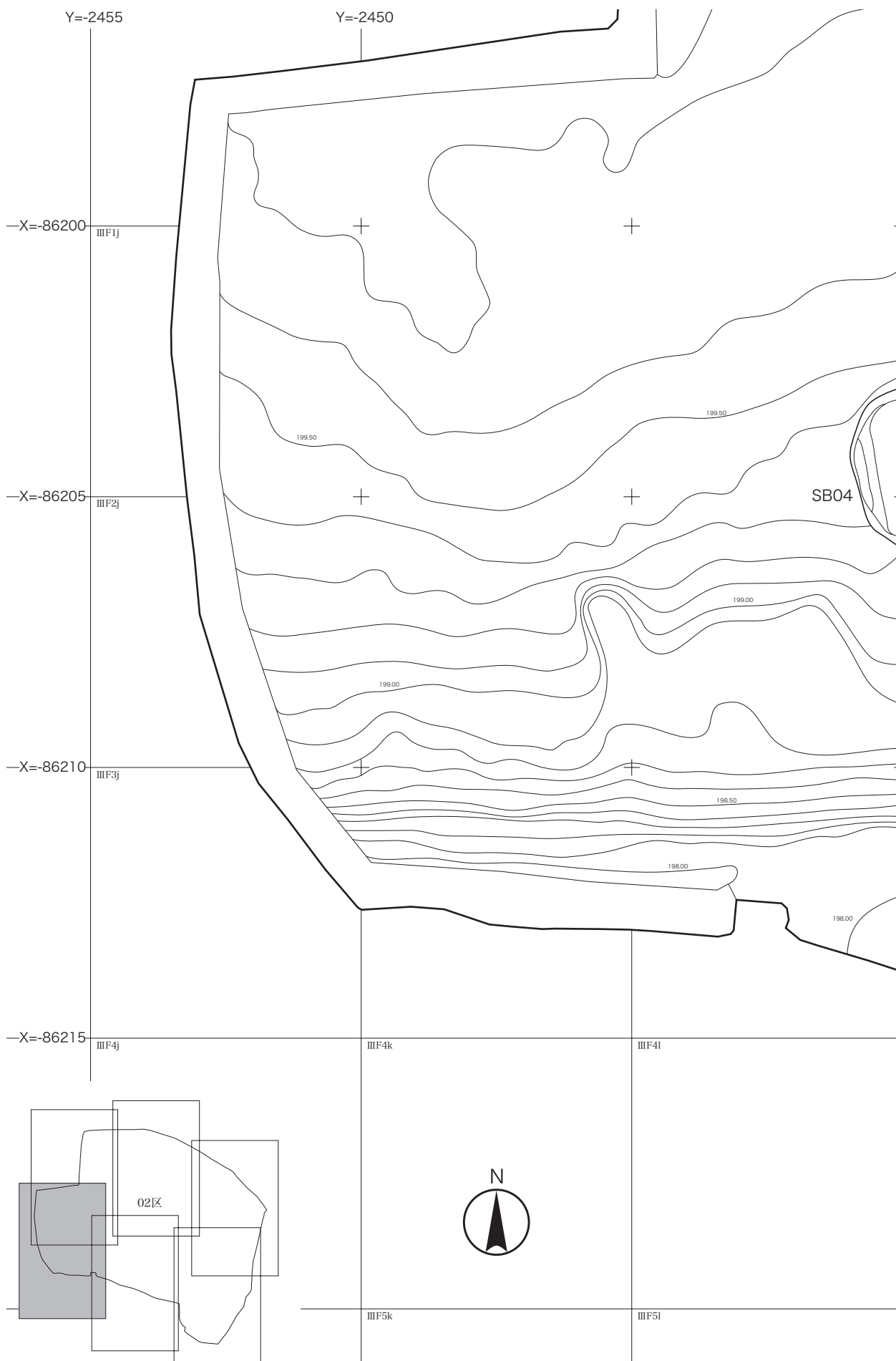


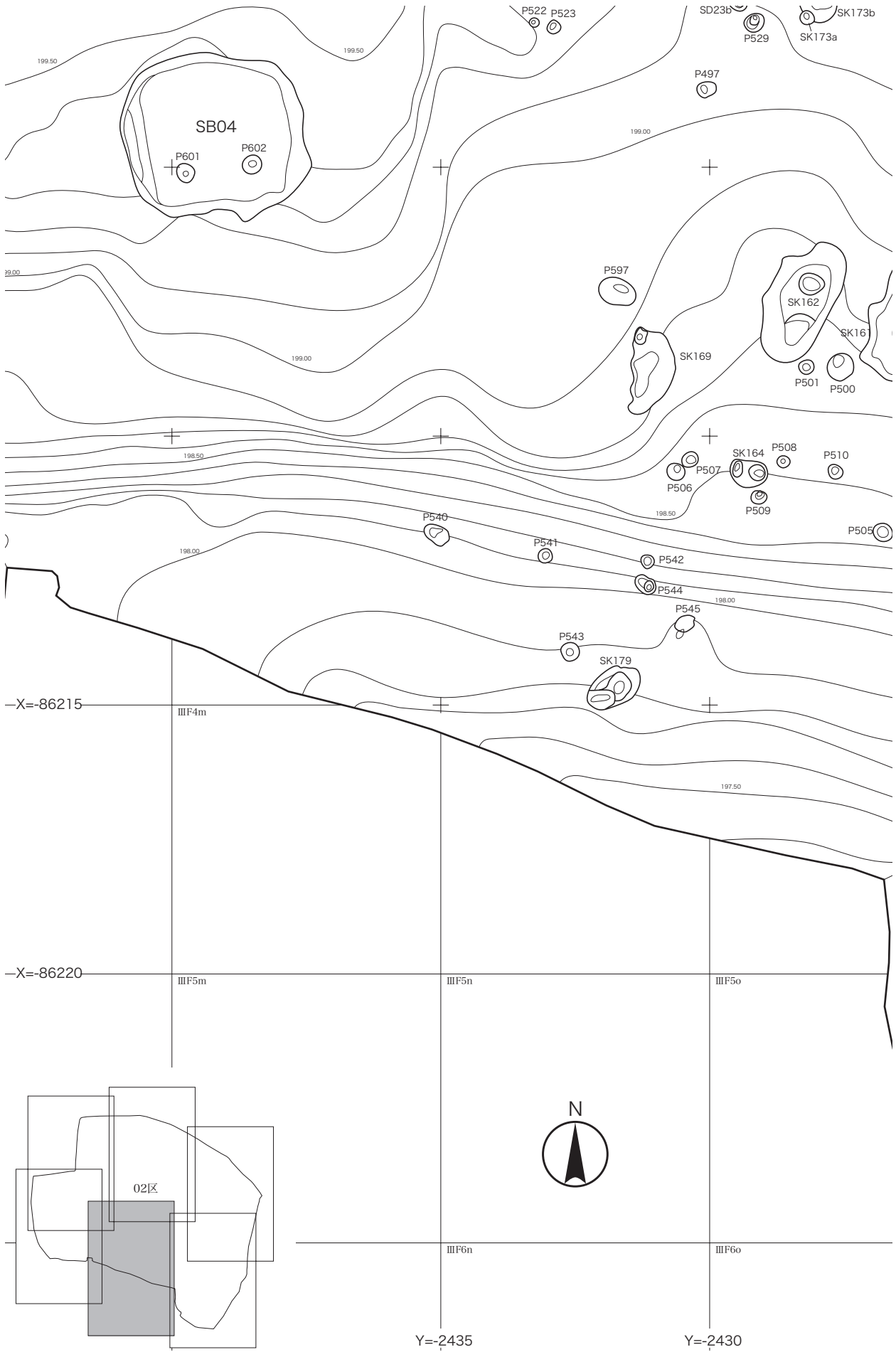


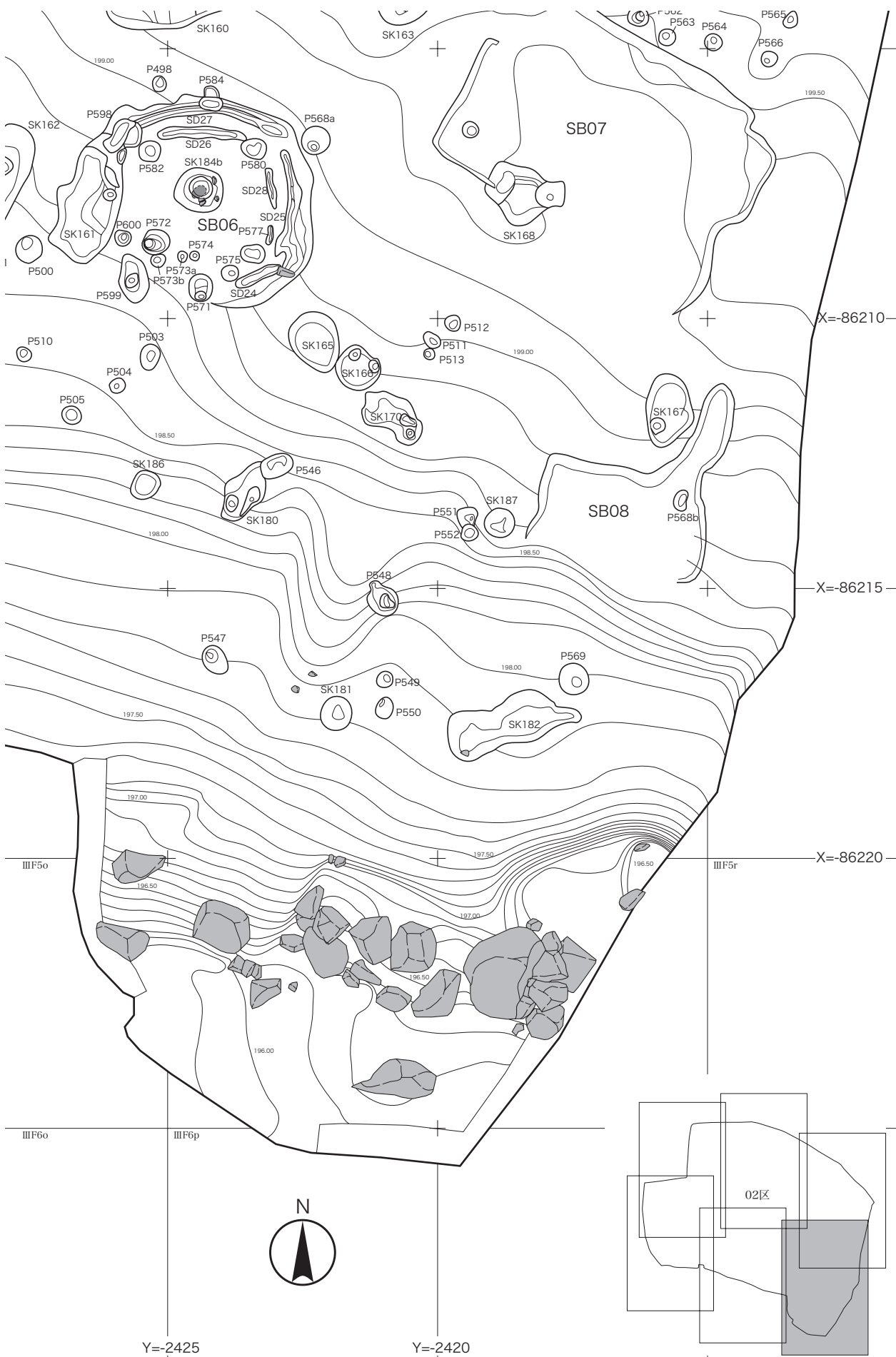


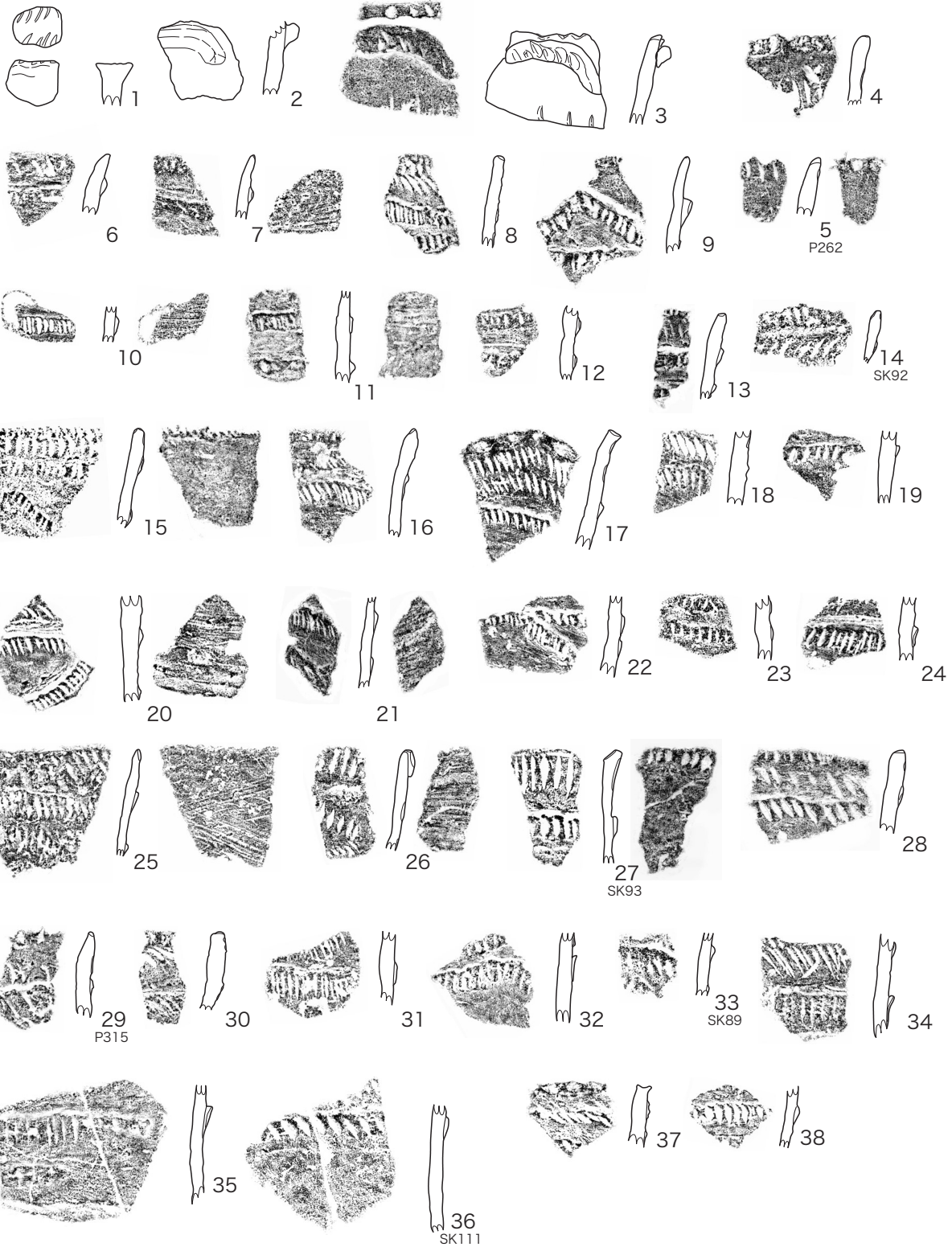




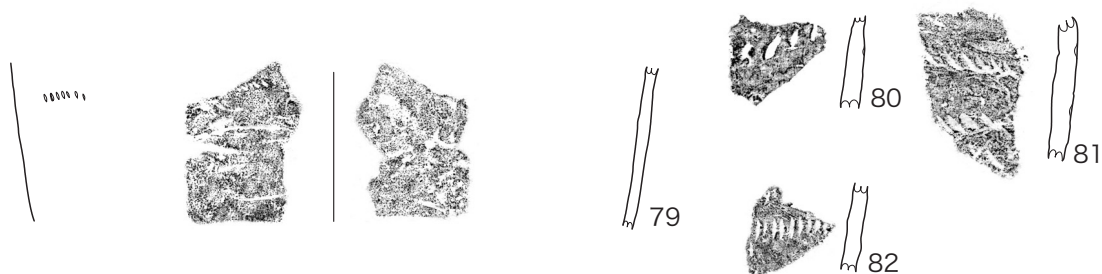
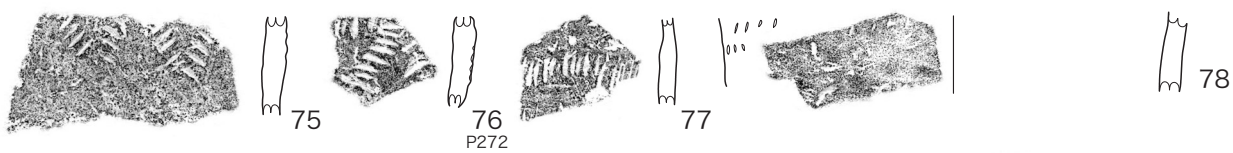
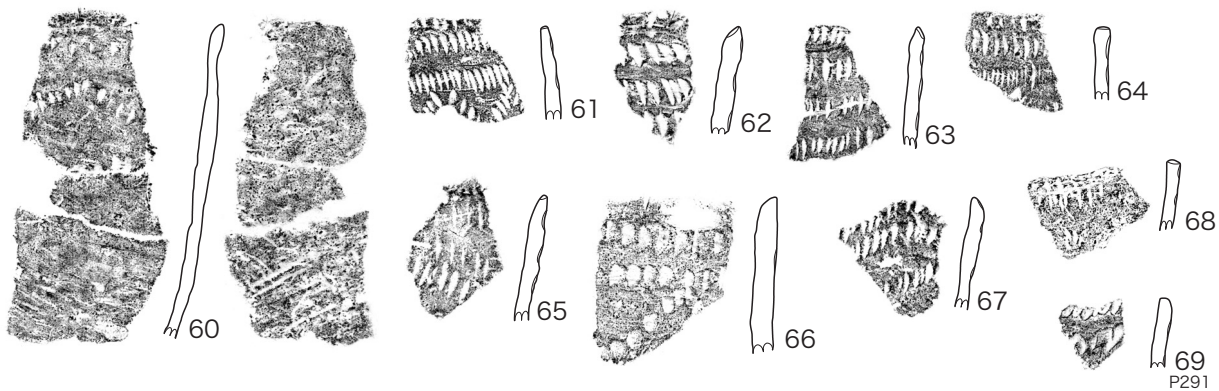
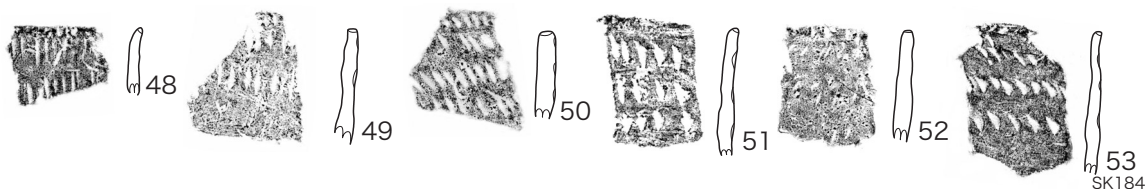
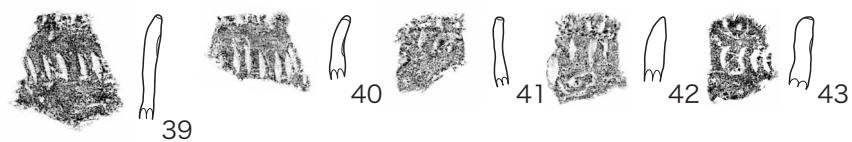


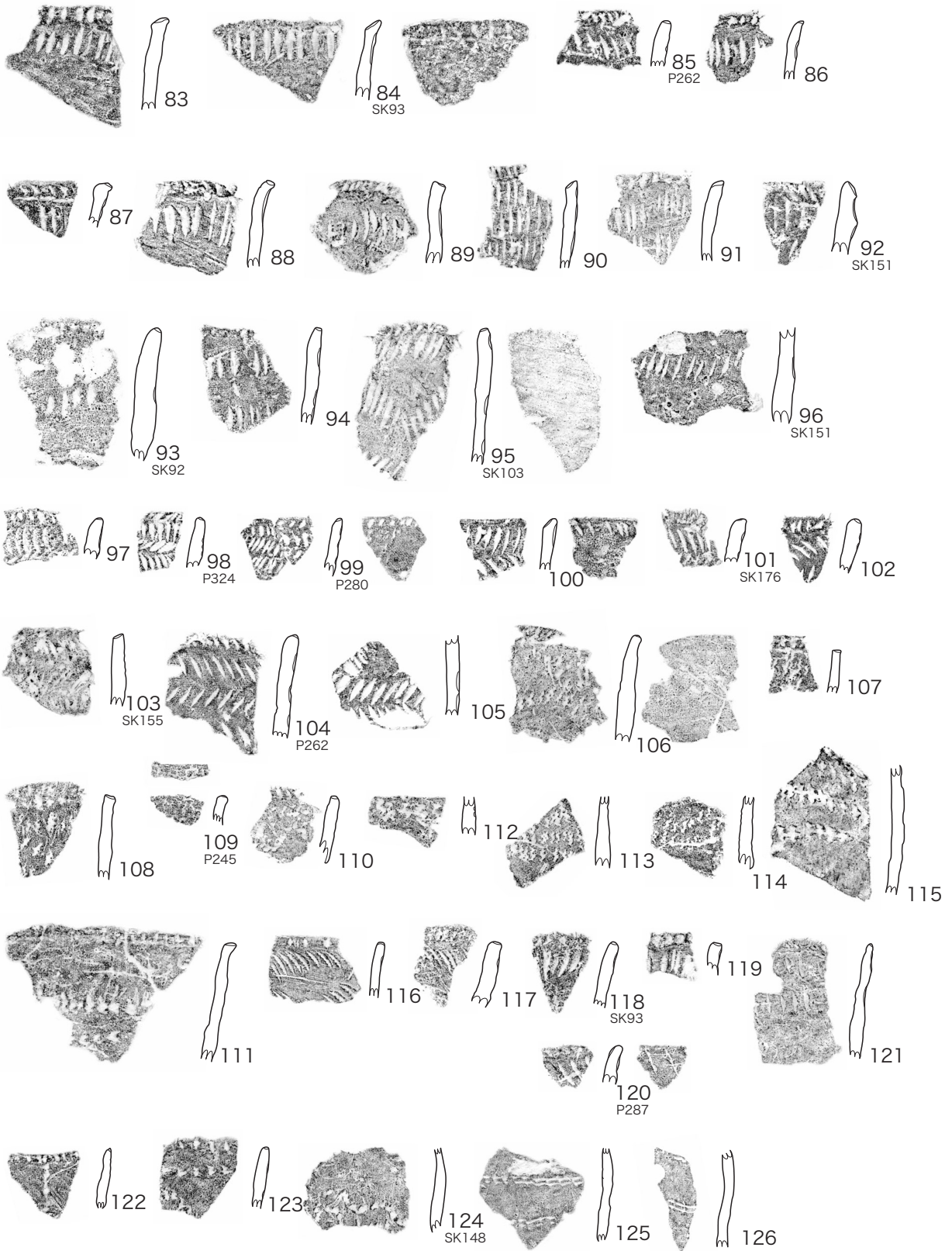


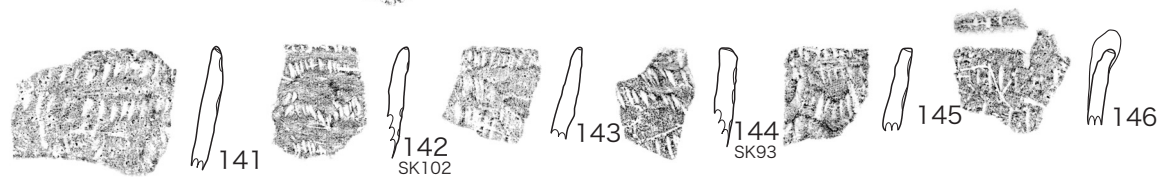
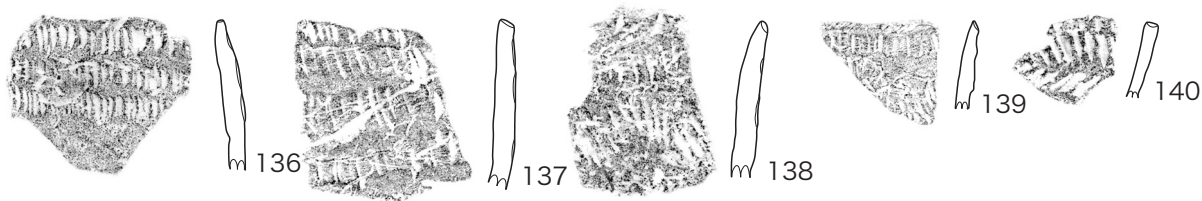
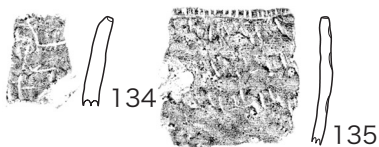
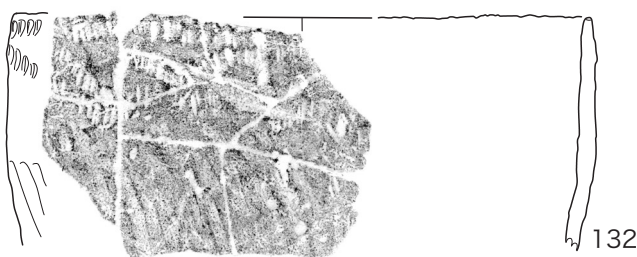
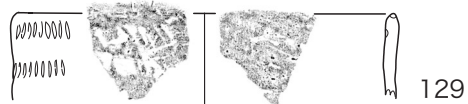
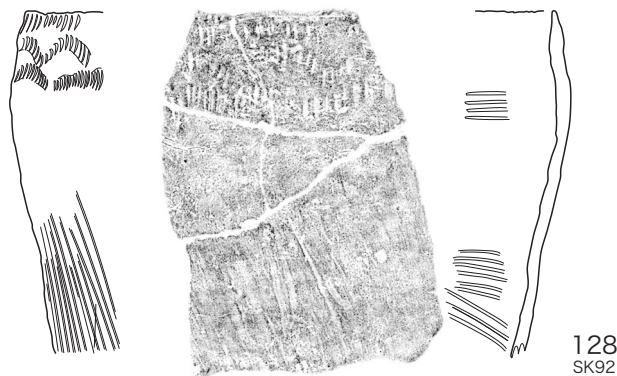
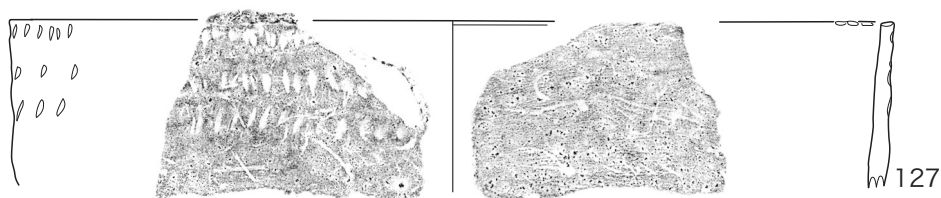


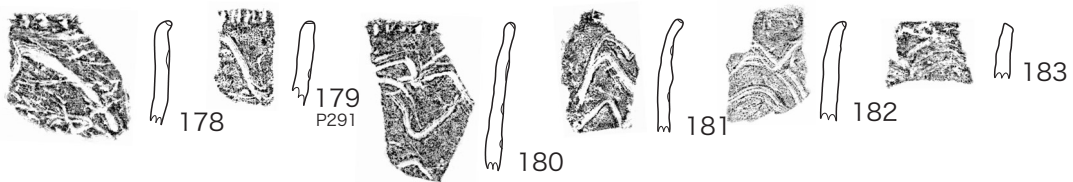
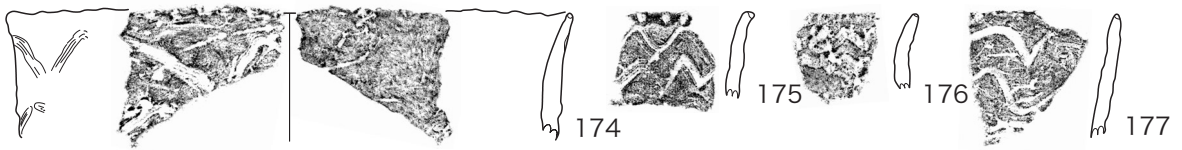
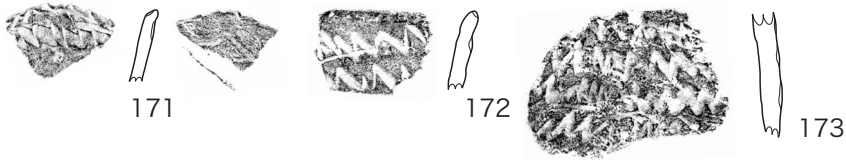
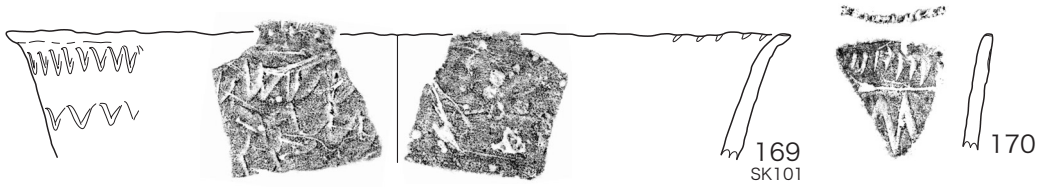
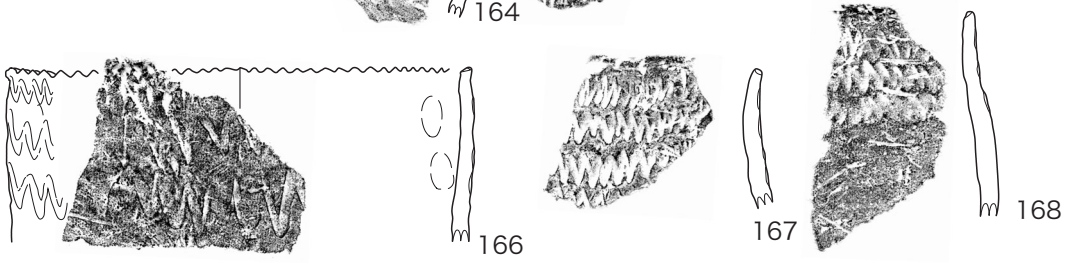
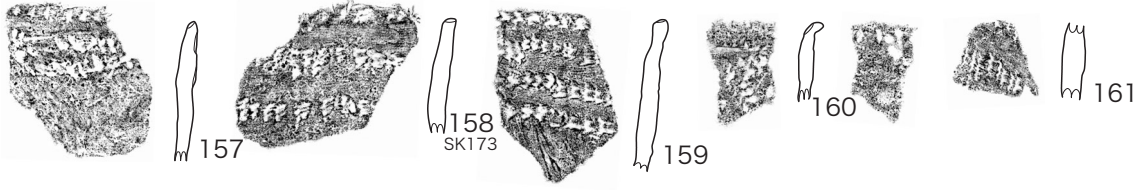
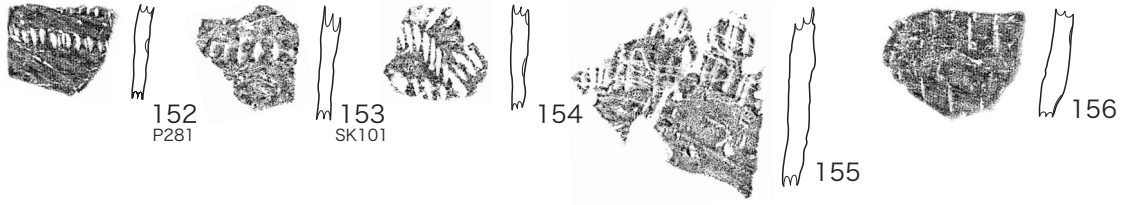


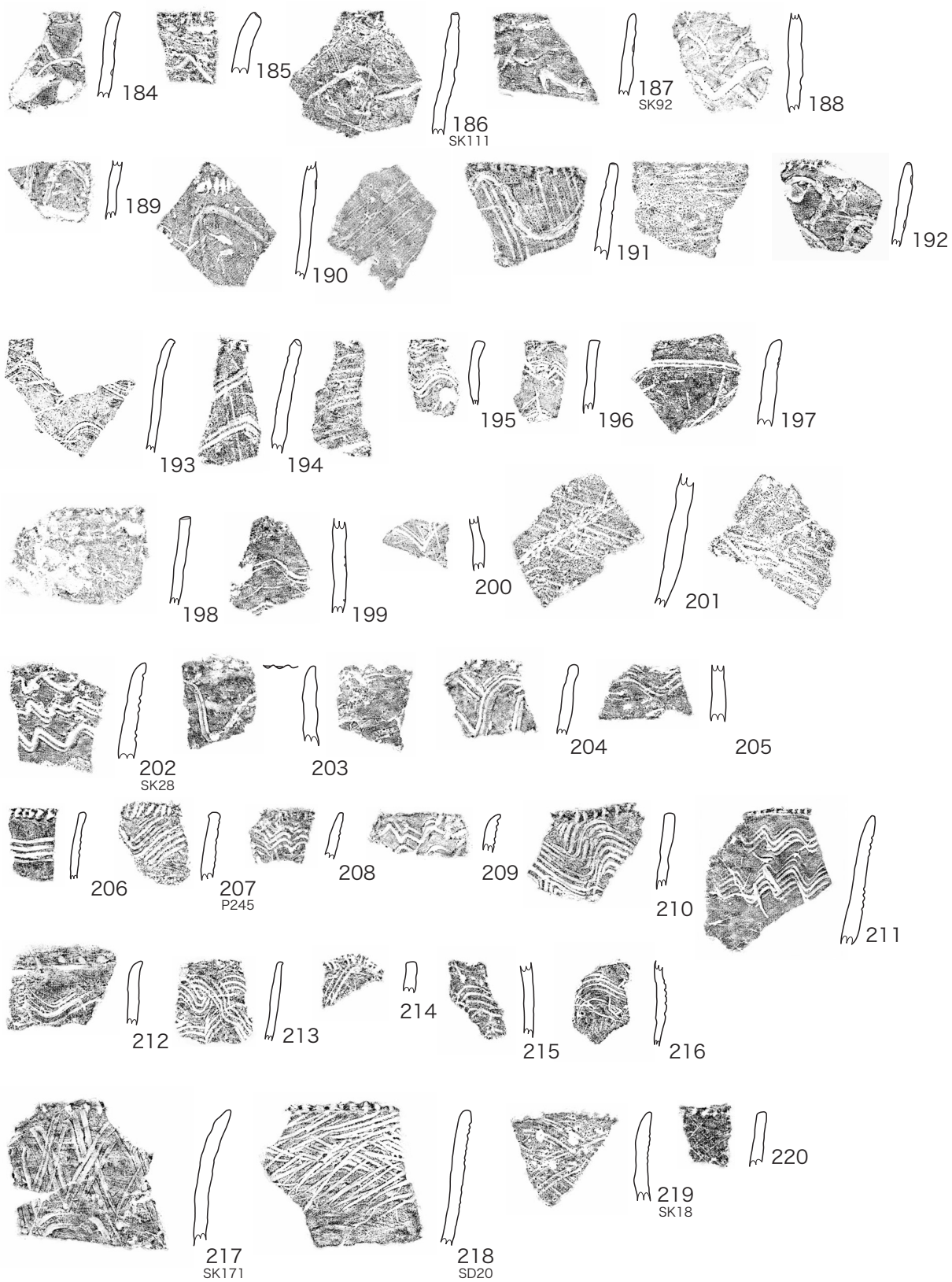
0 15cm



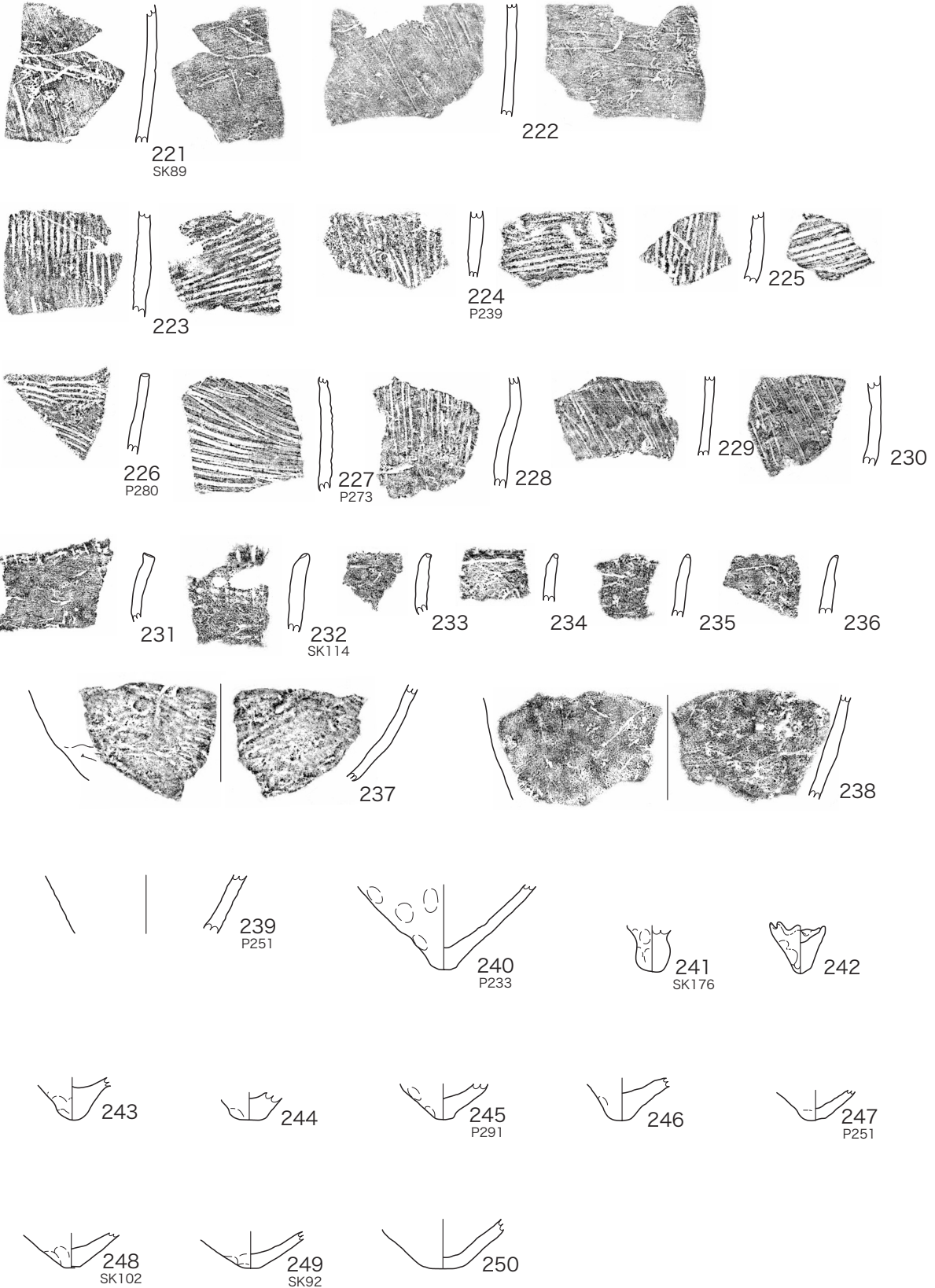


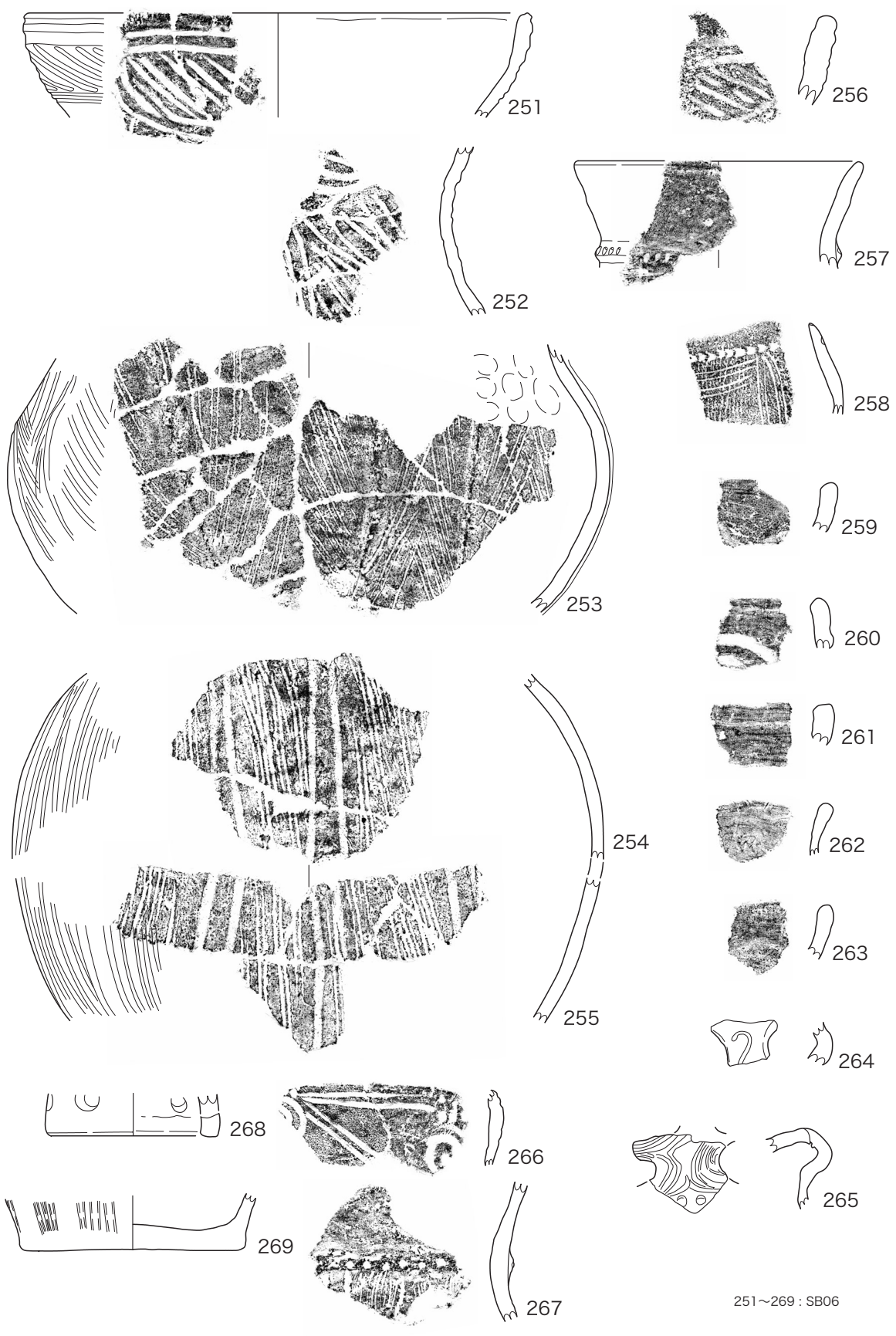




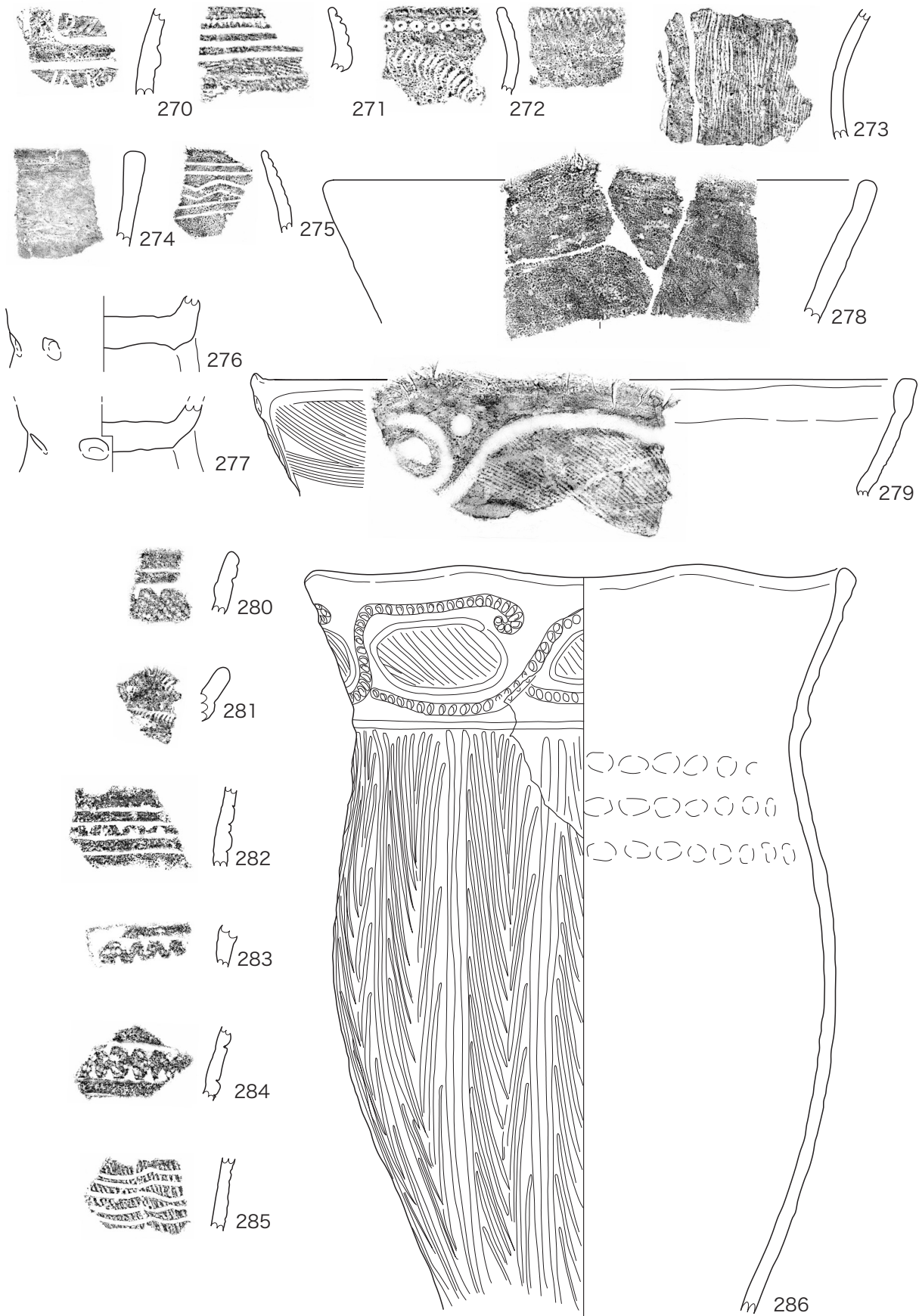


0 15cm





0 15cm



270 : SB04
 271 · 272 : SK77
 273 : SK82
 274 : SK184
 275~279 : SK154

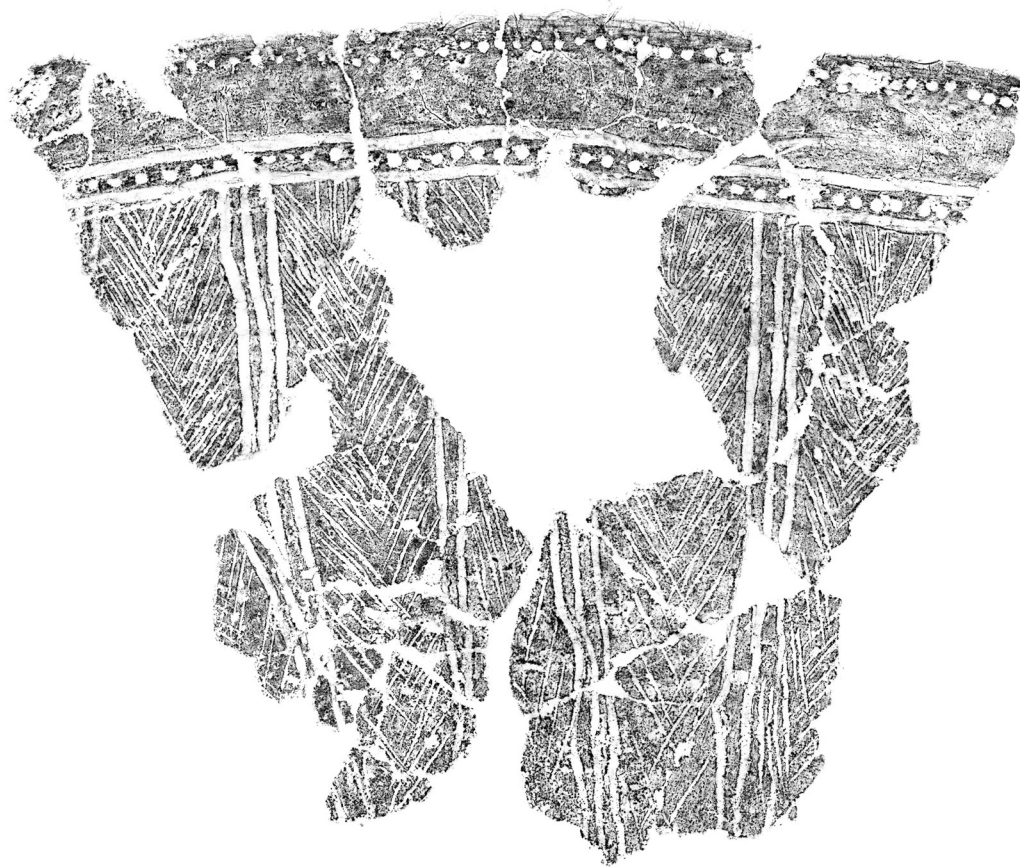
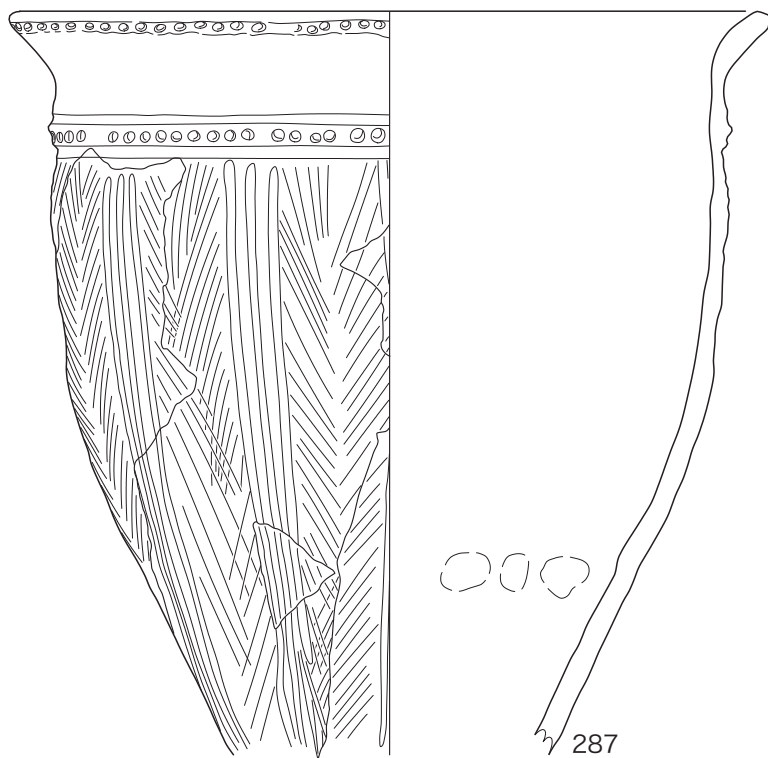
280~285 : SK96
 286 : SK146

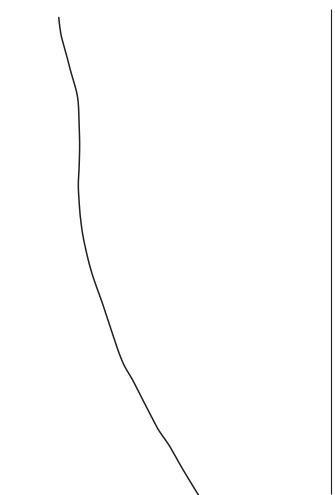
0 15cm



286
SK146

0 15cm





288
P68



290
P279



291
P572



292
P512



289
P224



293



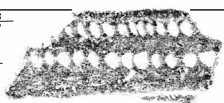
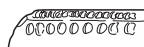
294



295



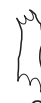
296



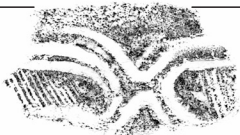
297



298



299



301



300

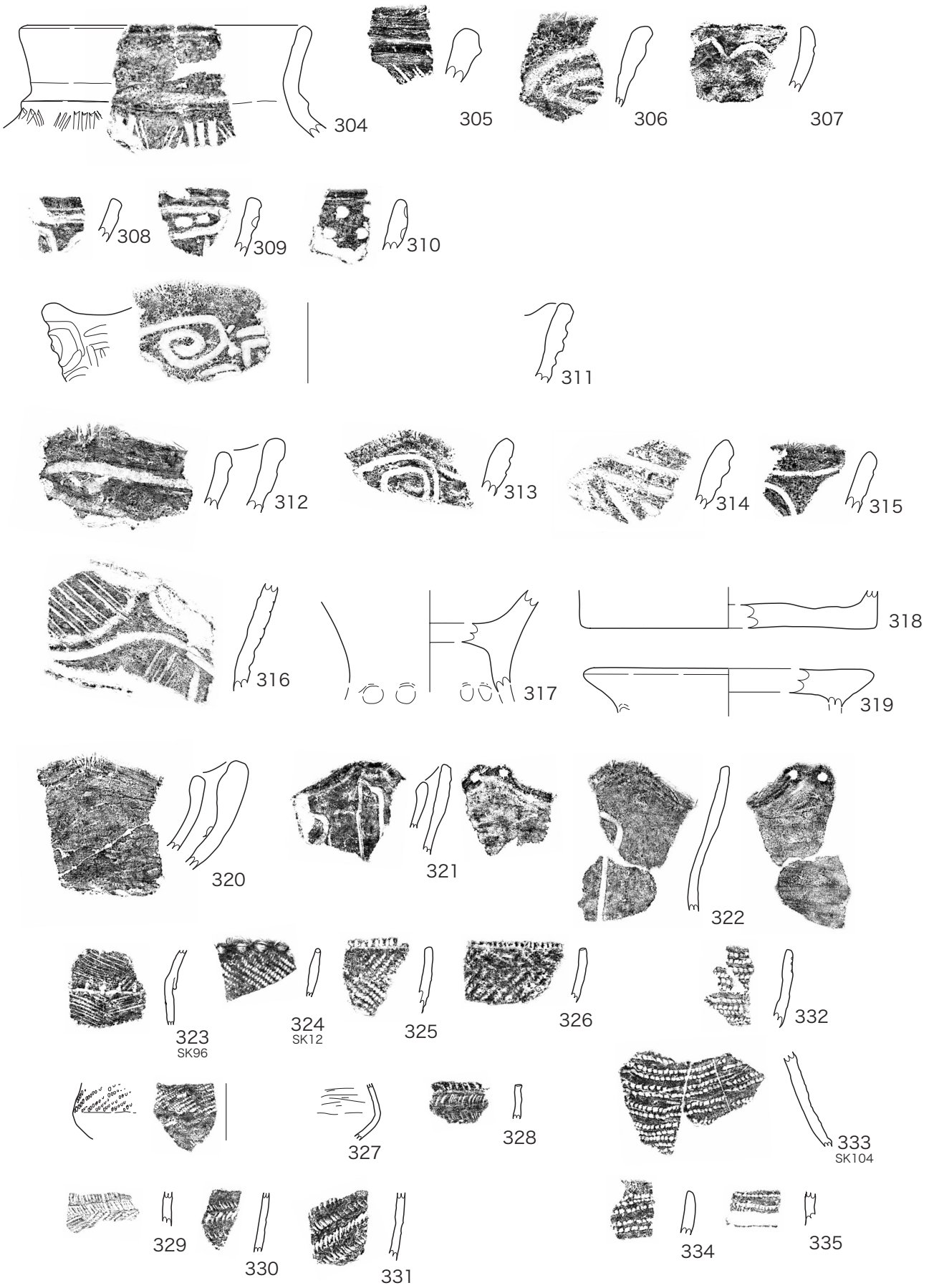


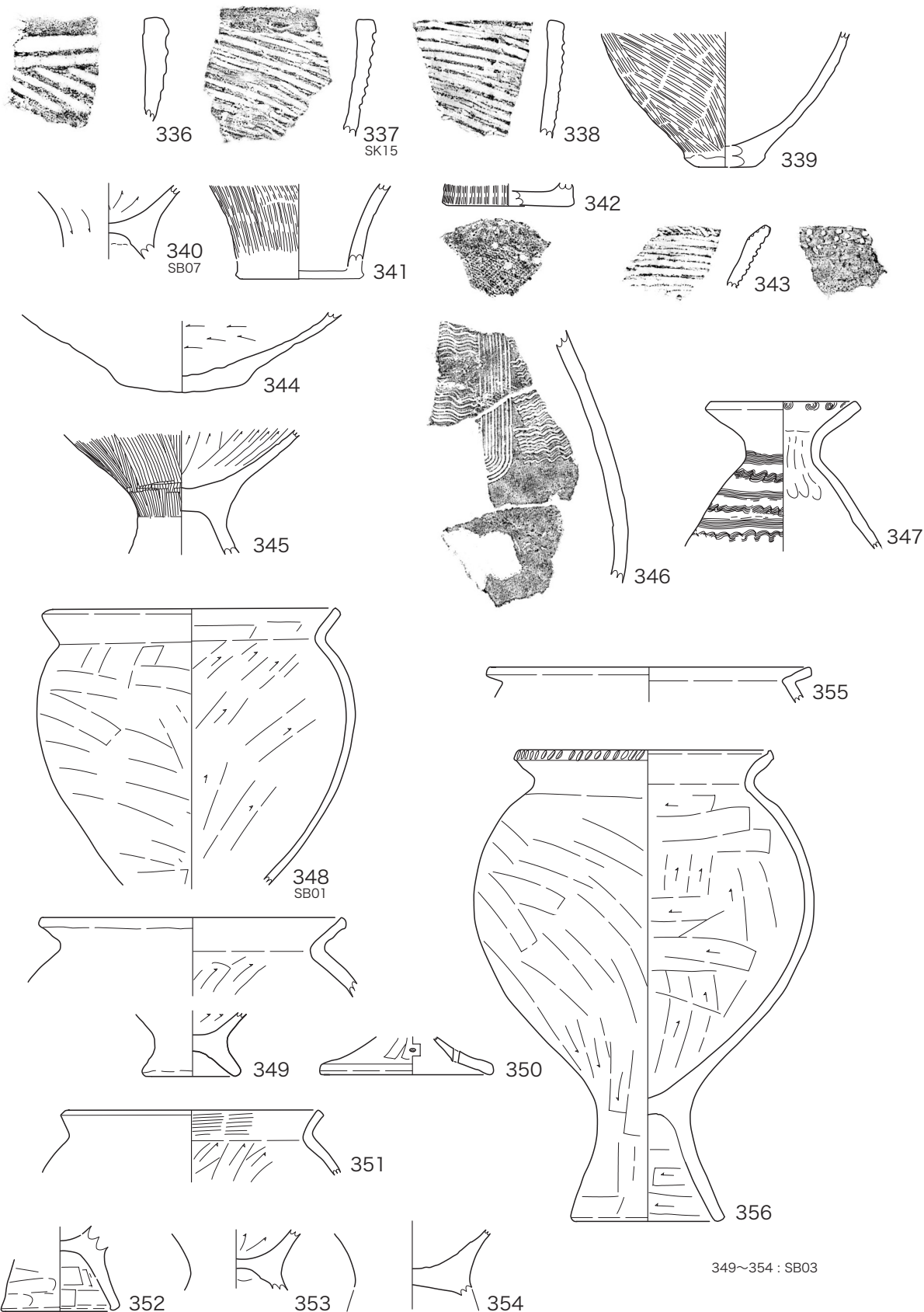
302



303

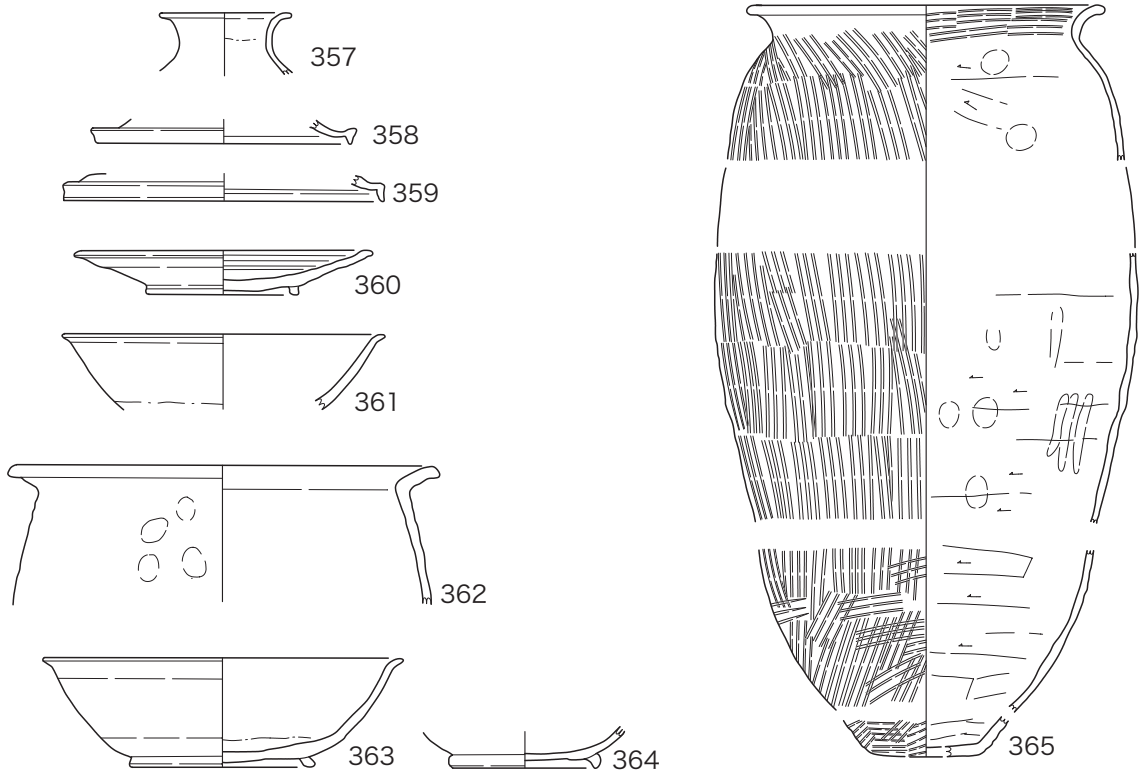




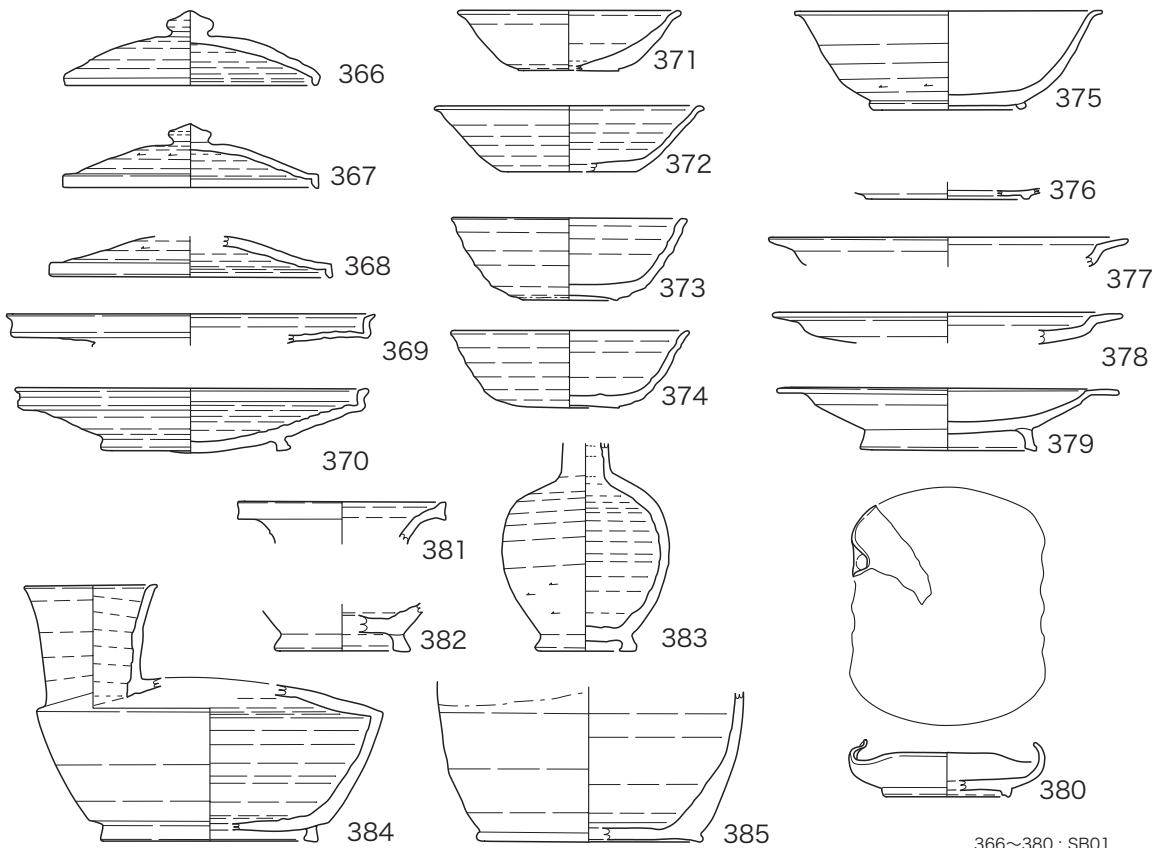


336 ~ 343 · 346 0 15cm

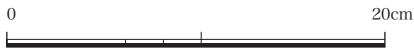
344 · 345 · 347 ~ 354 0 20cm

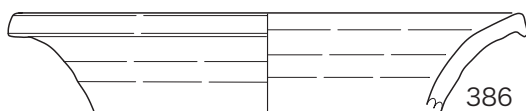


358~362・365 : SB02

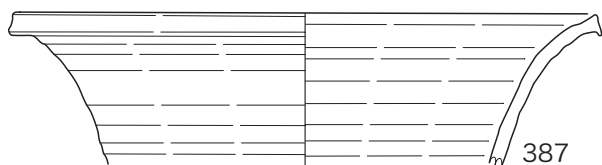


366~380 : SB01

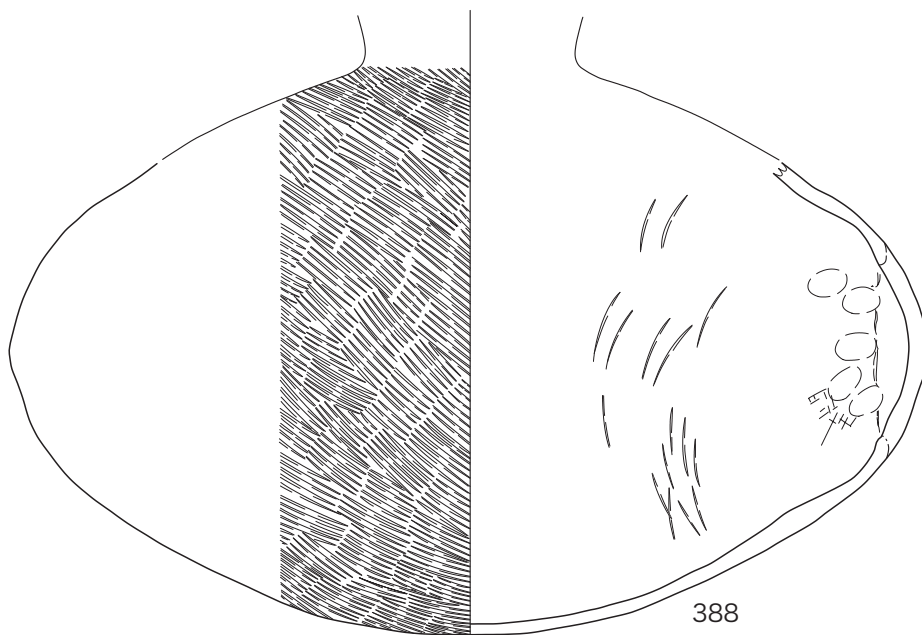




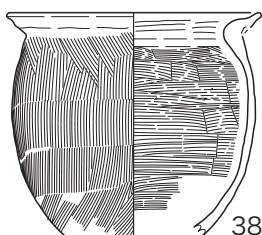
386



387



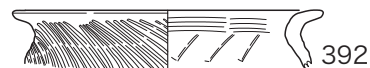
388



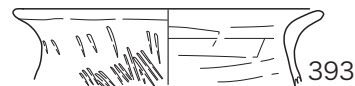
389



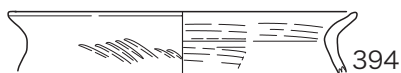
391



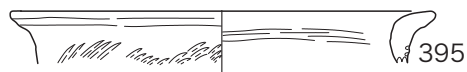
392



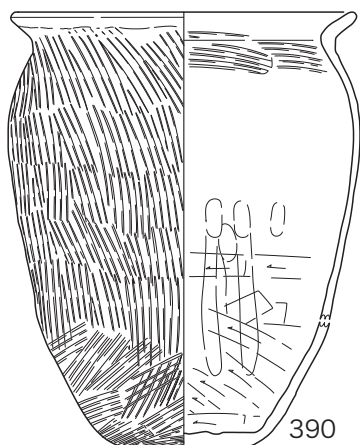
393



394



395



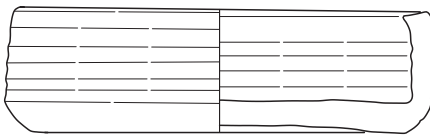
390



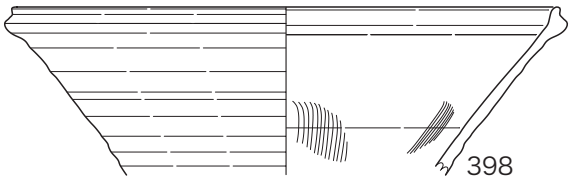
396

386~395 : SB01
396 : SK12

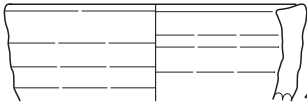




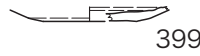
397
SK06



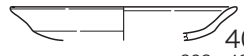
398



401
SK08

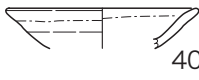


399

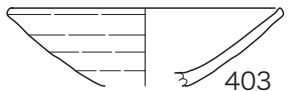


400

398~400 : SK07



402



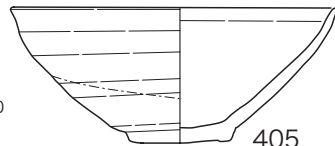
403

402・403 : SK21

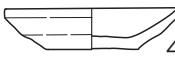


404

404・405 : SK30



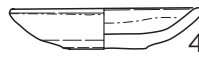
405



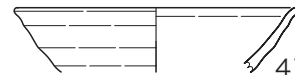
406



408

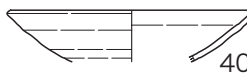


410



412

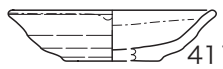
406~415 : SK28



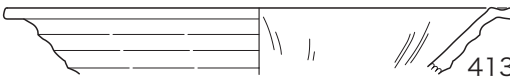
407



409



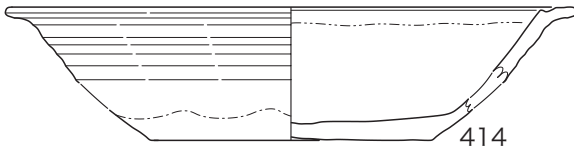
411



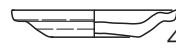
413



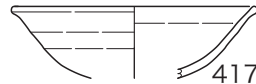
415



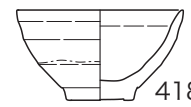
414



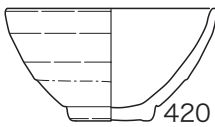
416



417



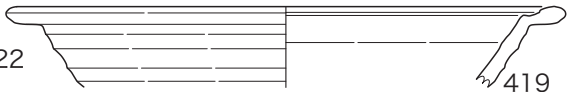
418



420

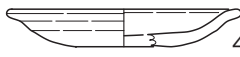


422

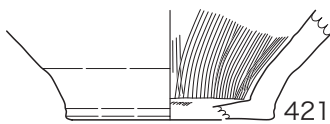


419

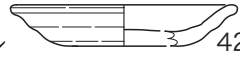
416~419 : SK35



423

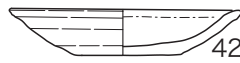


421



424

420~424 : SK57

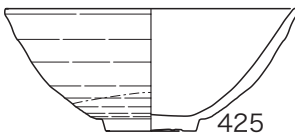


427

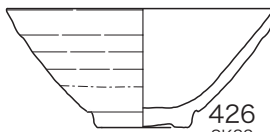


429

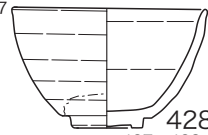
SK138



425
SK72



426
SK83

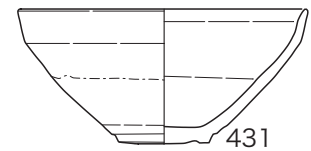


428

427・428 : SK98



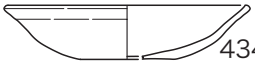
430
P18



431

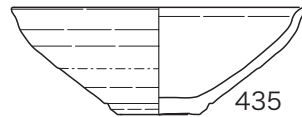


433
SD06

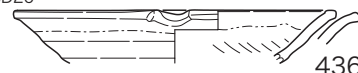


434

434~436 : SD20



435



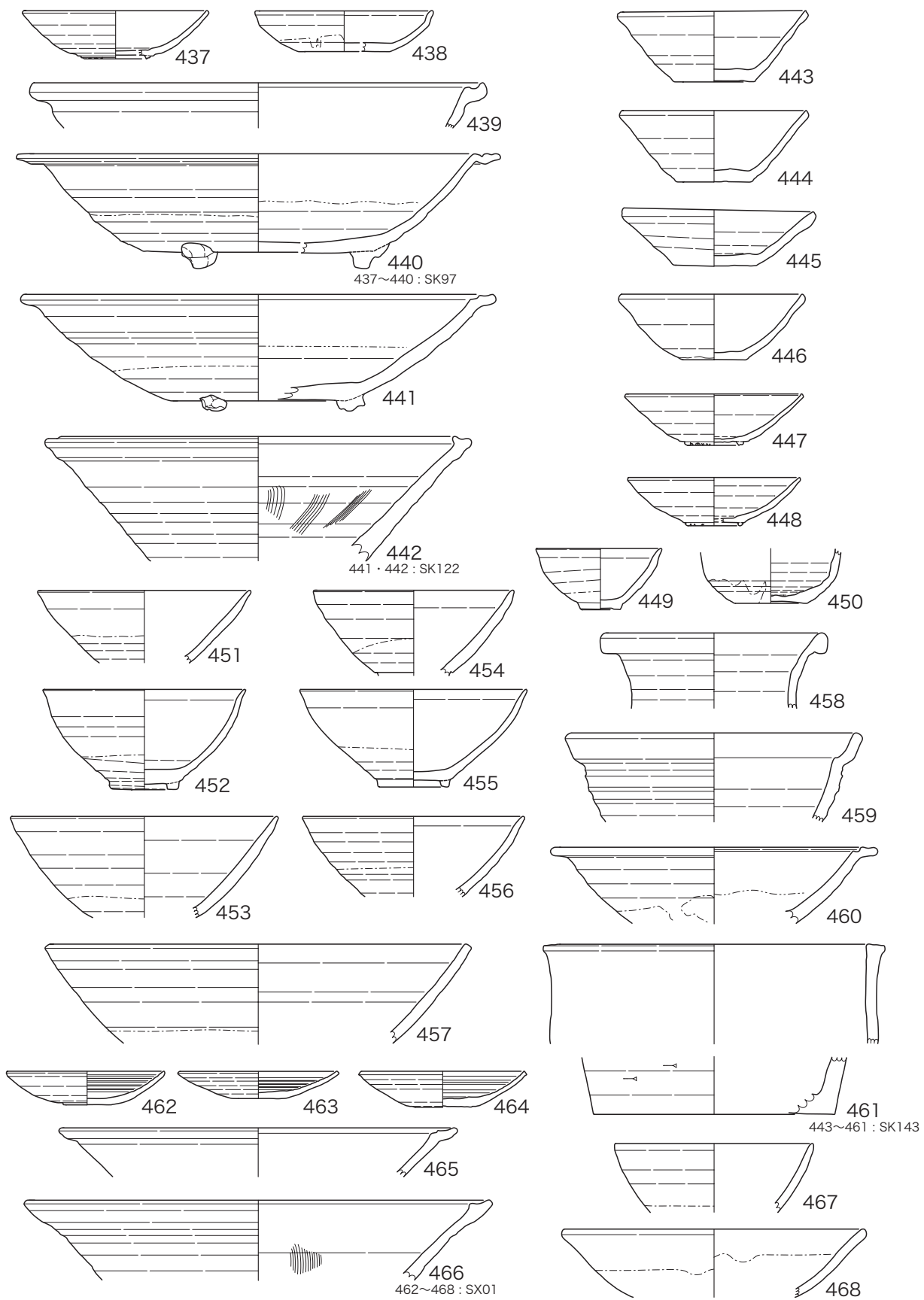
436

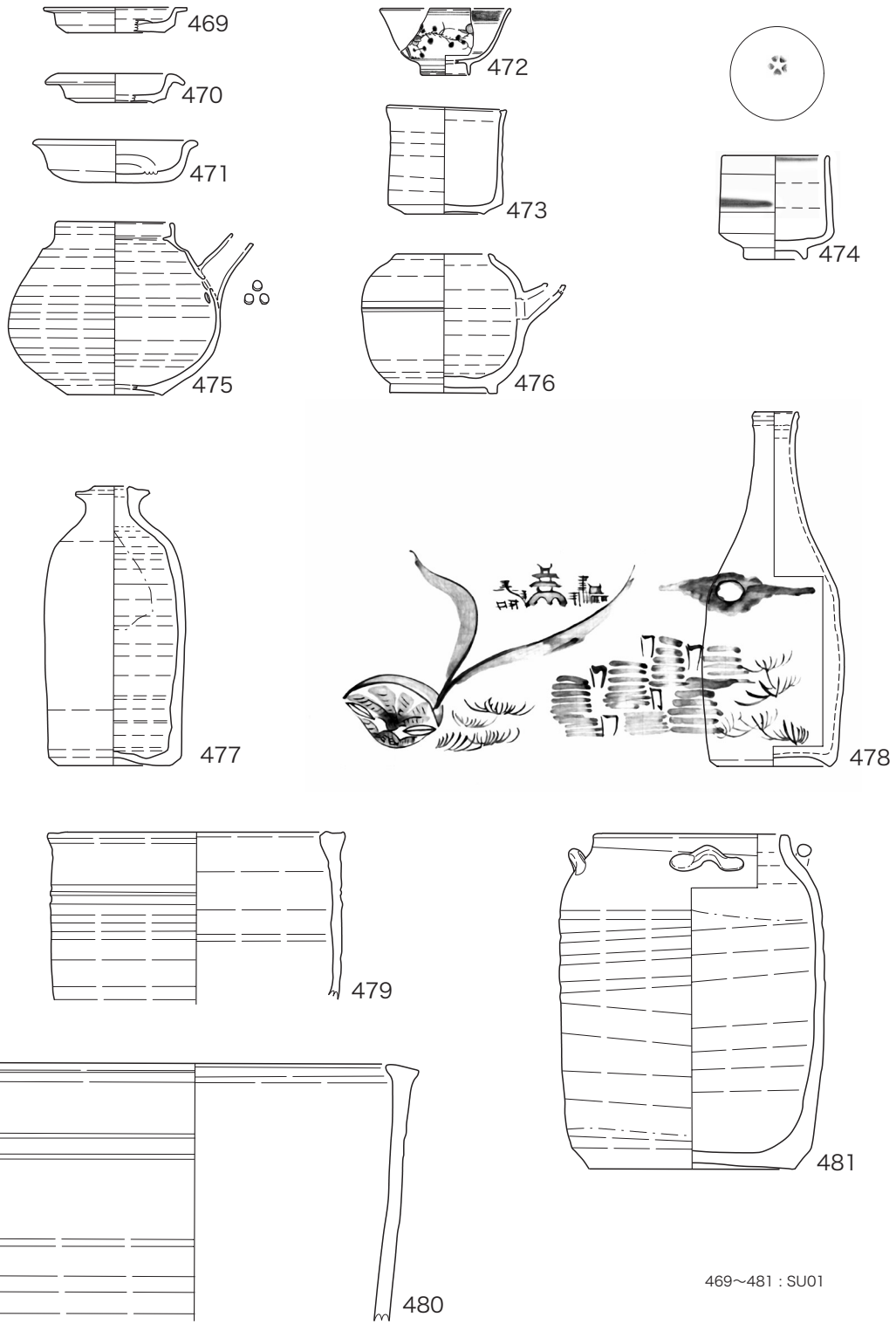


432

431・432 : P79

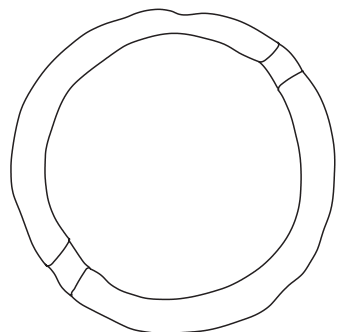
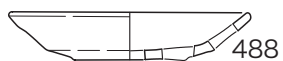
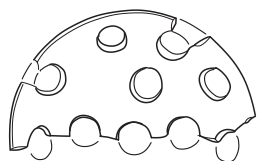
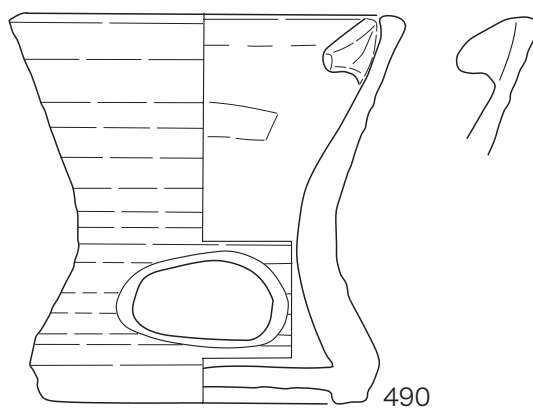
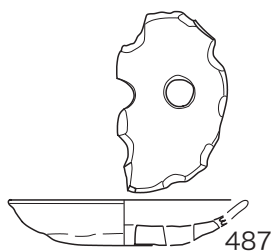
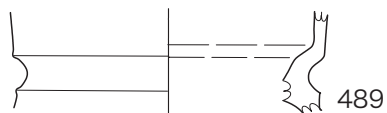
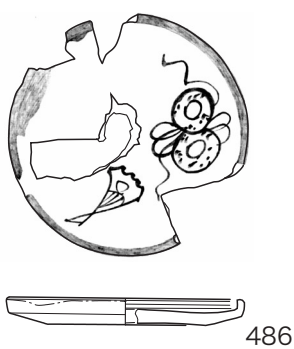
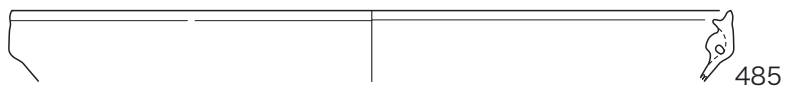
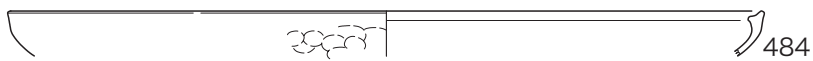
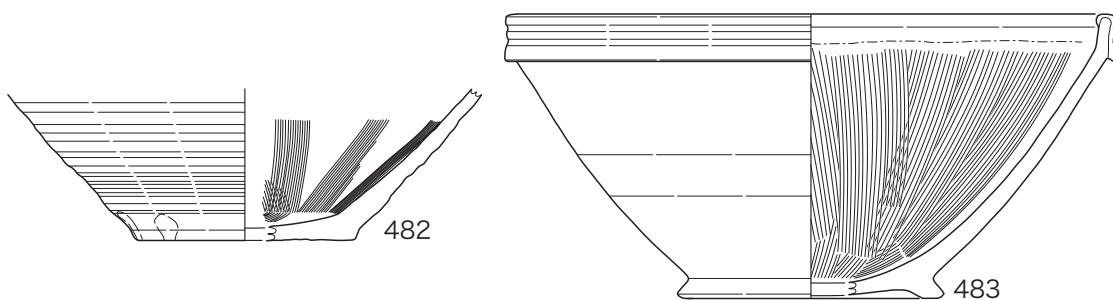






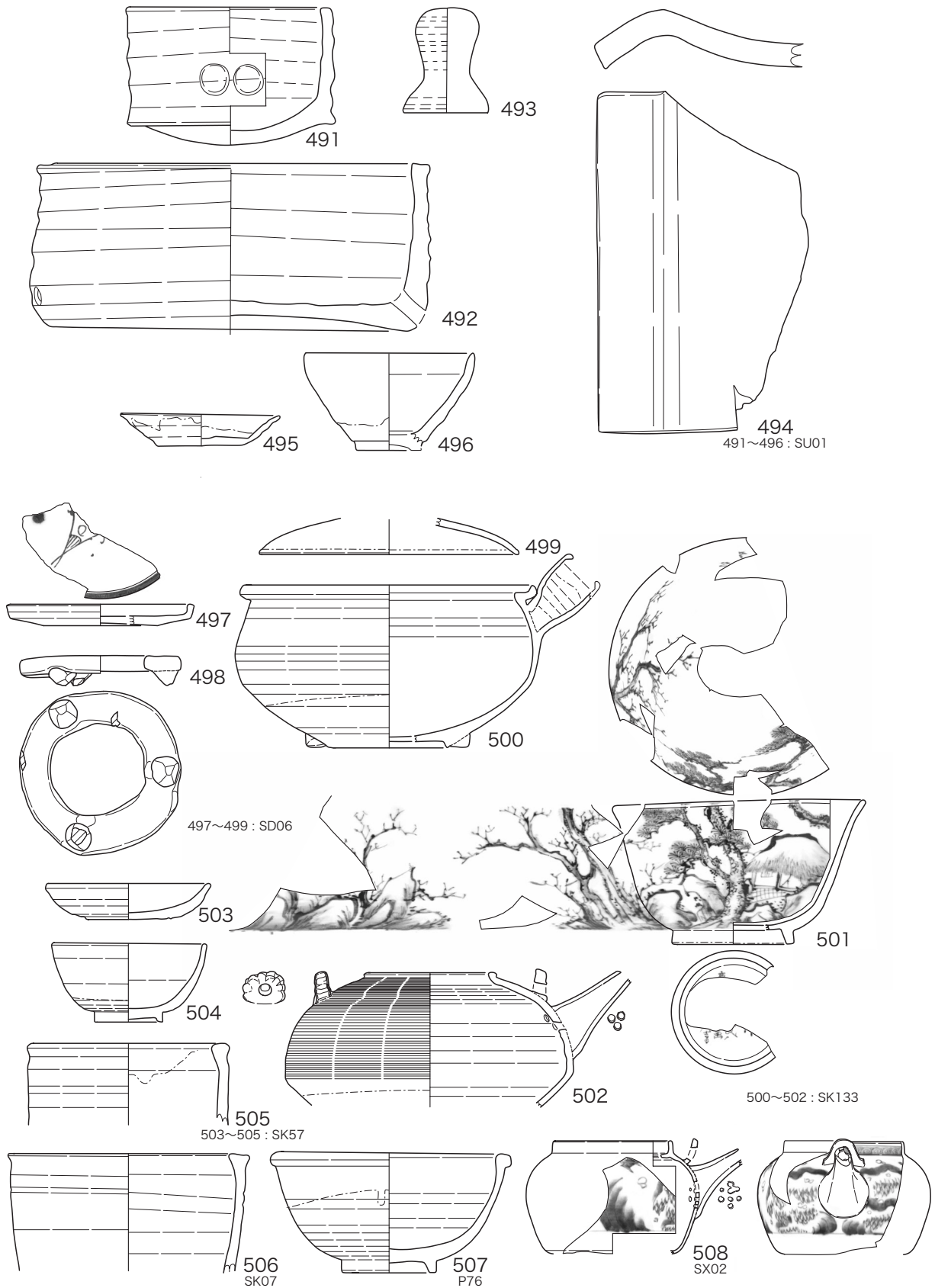
0 20cm

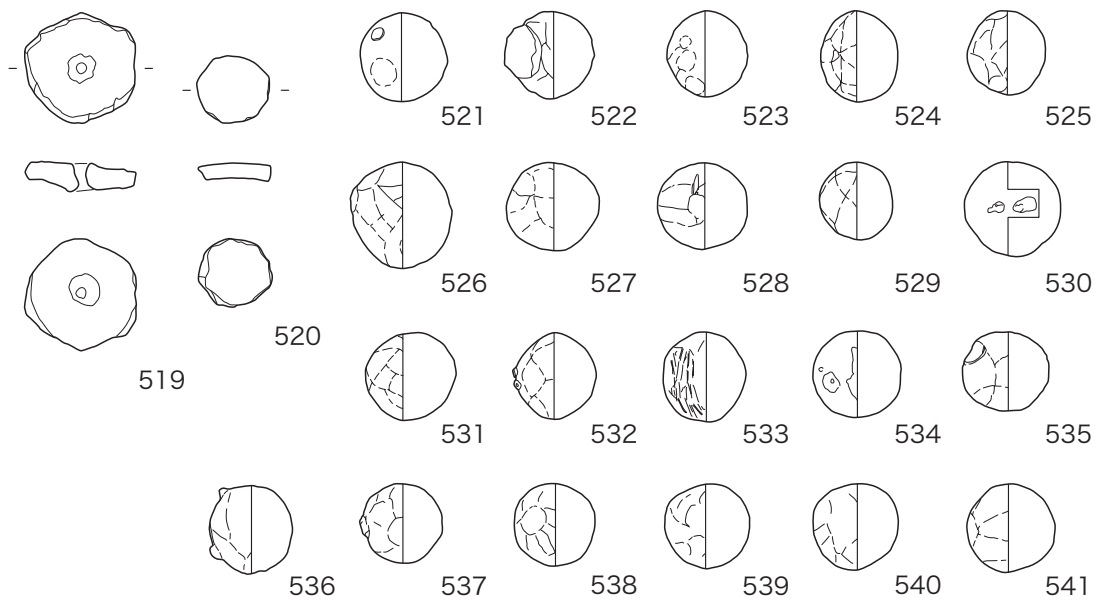
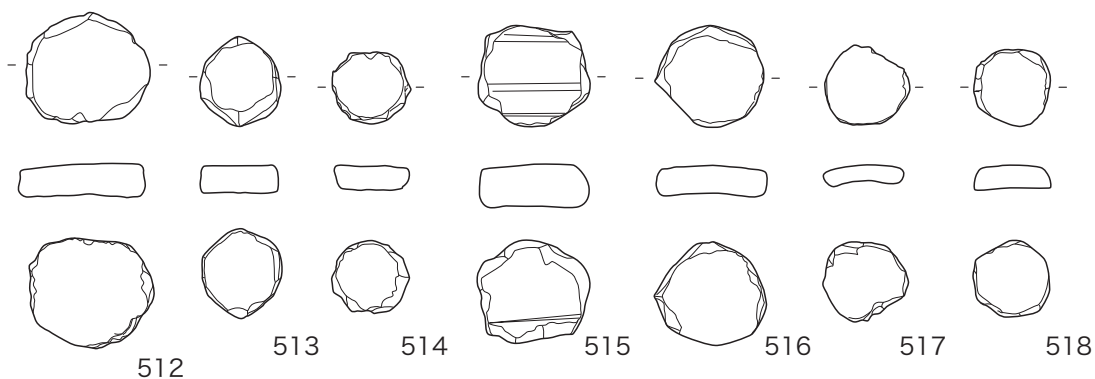
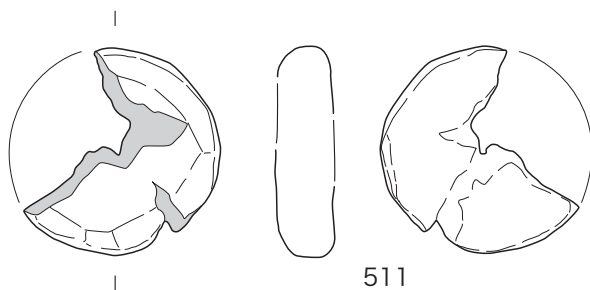
469~481 : SU01

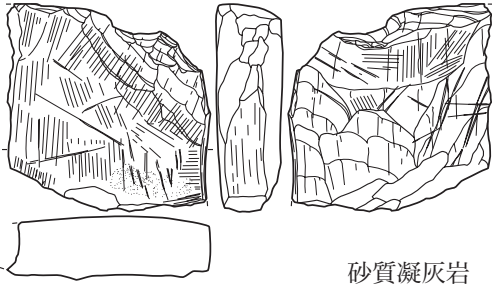


482~490 : SU01

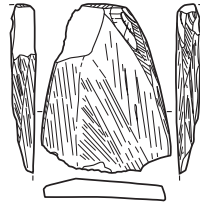








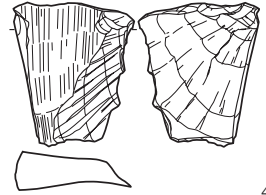
砂質凝灰岩 1



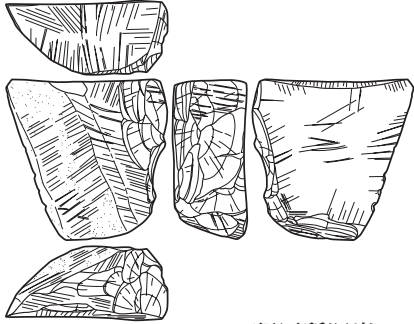
泥質凝灰岩 2



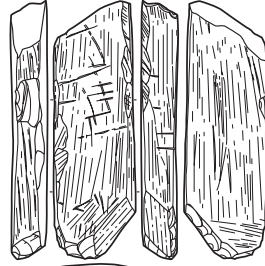
凝灰質泥岩 3



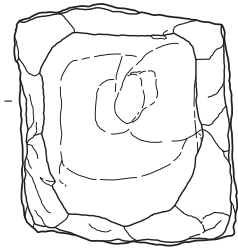
ホルンフェルス 4



凝灰質泥岩 5

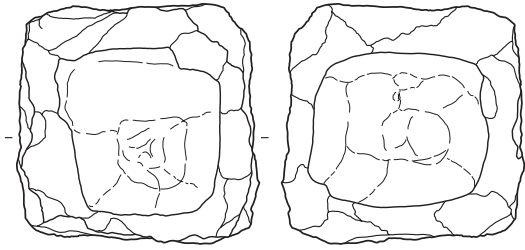


凝灰岩 6

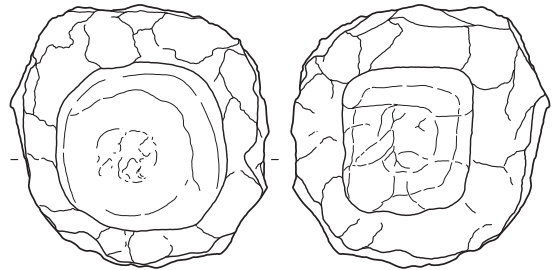


花崗岩 7

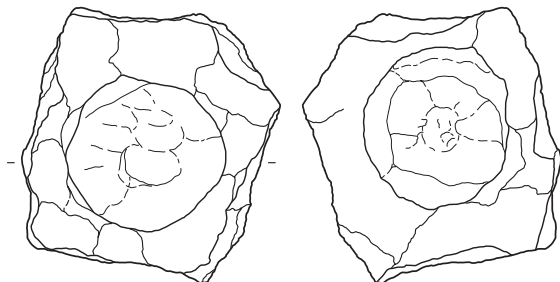
1～6は1:3、7～11は1:6



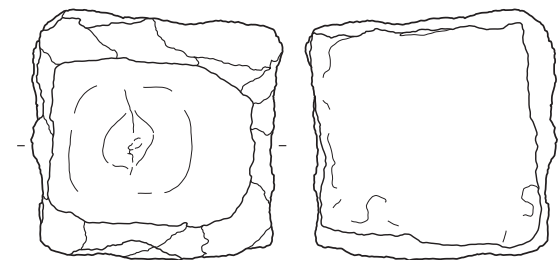
花崗岩 8



花崗岩 9



花崗岩 10



花崗岩 11

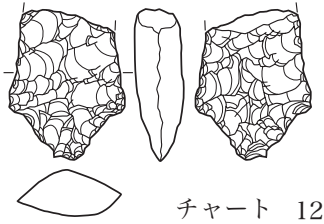


チャート 12



チャート 13

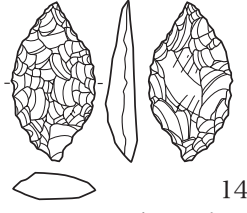


チャート 14



チャート 15



下呂石 16



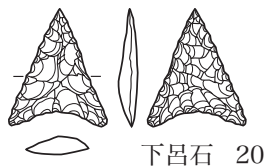
下呂石 17



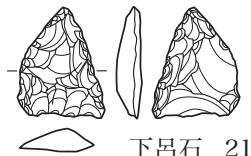
18
溶結凝灰岩



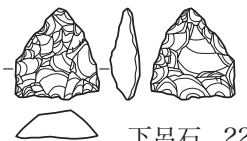
チャート 19



下呂石 20



下呂石 21



下呂石 22



チャート 23

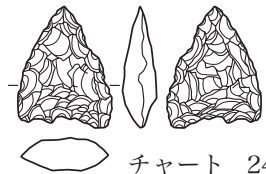
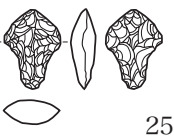


チャート 24



25
チャート

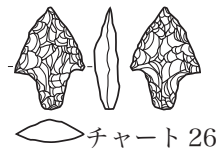
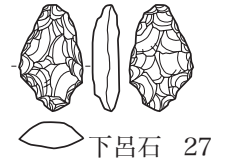
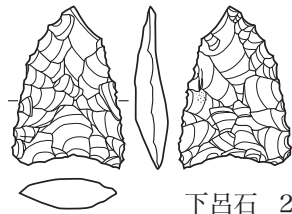


チャート 26



下呂石 27



下呂石 28



チャート 29

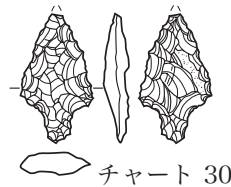
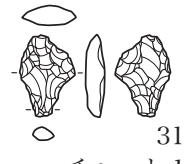
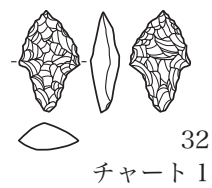


チャート 30



31
チャート 1



32
チャート 1

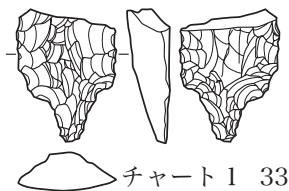
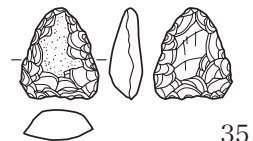


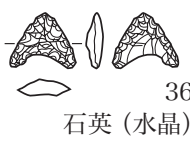
チャート 1 33



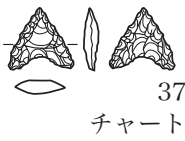
チャート 34



35
下呂石 (円礫)



36
石英 (水晶)



37
チャート



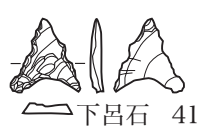
チャート 38



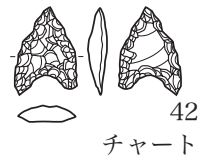
下呂石 39



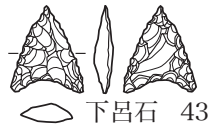
40
下呂石



下呂石 41



42
チャート



下呂石 43



下呂石 44



下呂石 45

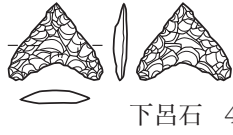
2:3



下呂石 46



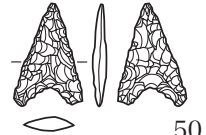
下呂石 47



下呂石 48



チャート 49

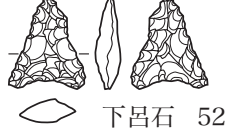


50

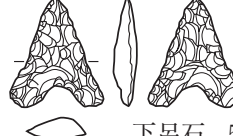
チャート



チャート 51



下呂石 52

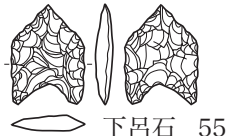


下呂石 53



54

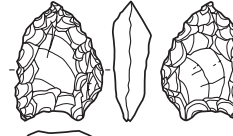
下呂石 (角礫)



下呂石 55



チャート 56



石英 (水晶) 57

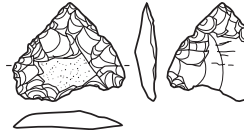


58

サヌカイト?



チャート 59



60

下呂石 (角礫)

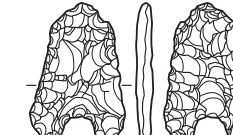
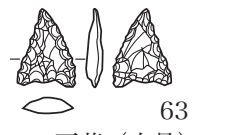


チャート 61



下呂石 62



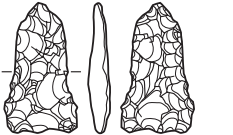
63

石英 (水晶)



64

チャート



下呂石 65



66

チャート1



下呂石 67



下呂石 68



69

チャート



チャート 73



70

溶結凝灰岩



71

チャート1

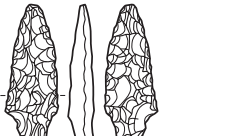


72

チャート



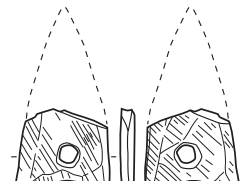
下呂石 74



下呂石 75



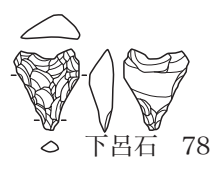
チャート 76



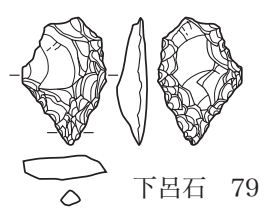
77

ホルンフェルス

2:3



下呂石 78



下呂石 79

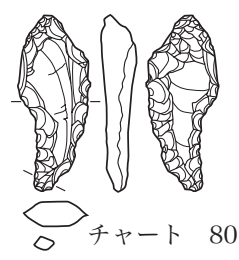


チャート 80

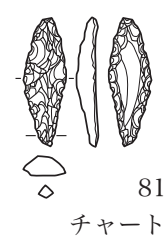


チャート 81

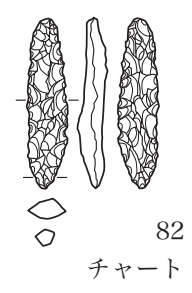


チャート 82

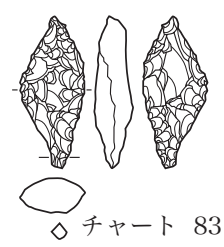
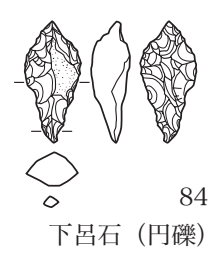
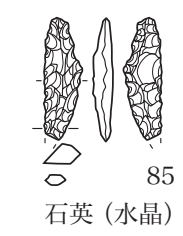


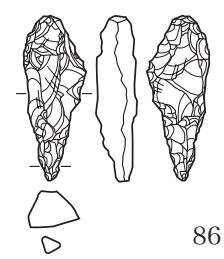
チャート 83



下呂石 (円礫) 84



石英 (水晶) 85



石英 (水晶) 86

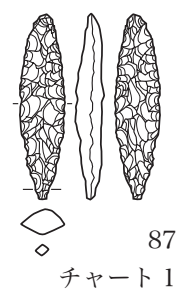


チャート1 87

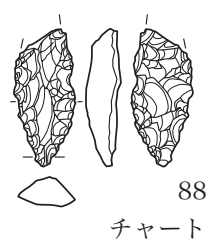
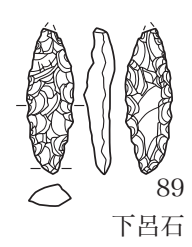
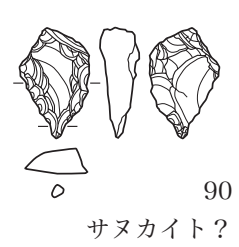


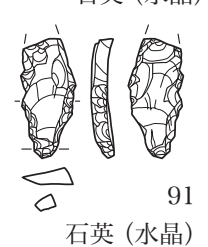
チャート 88



下呂石 89



サヌカイト? 90



石英 (水晶) 91

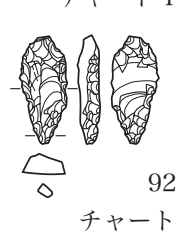
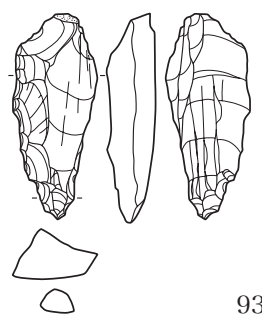


チャート 92



下呂石 (角礫) 93

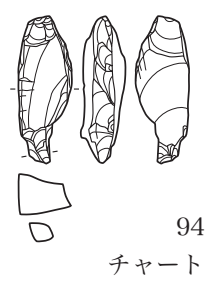
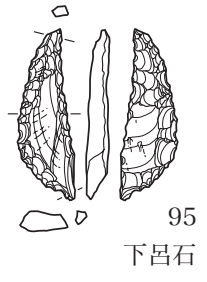


チャート 94



下呂石 95

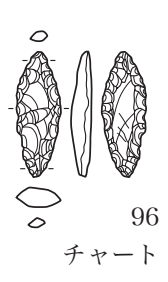


チャート 96

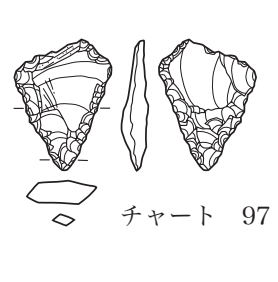


チャート 97

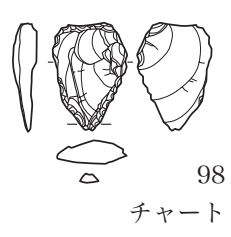


チャート 98

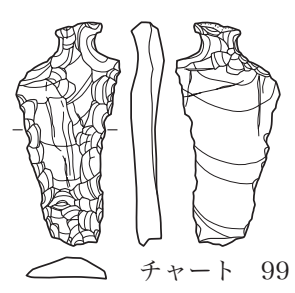


チャート 99

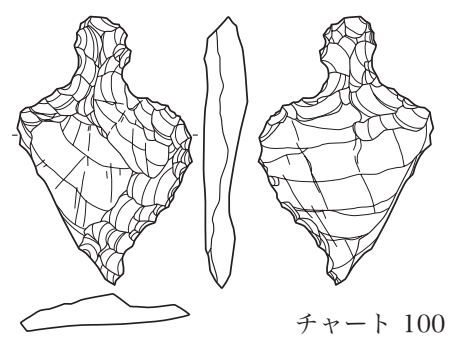


チャート 100

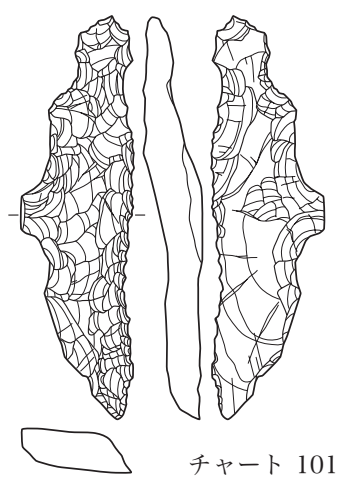


チャート 101

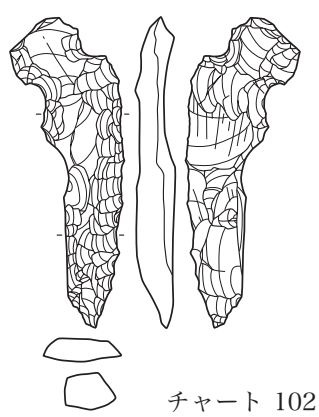
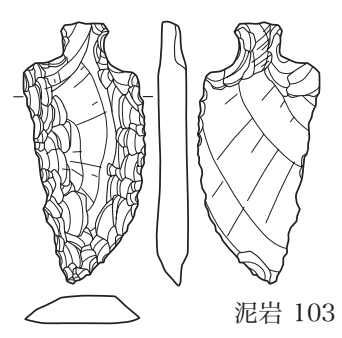


チャート 102



泥岩 103

2:3

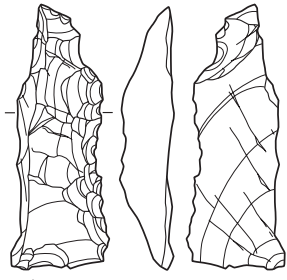
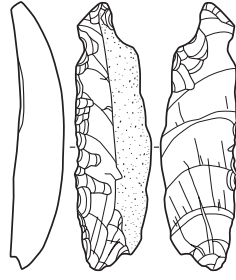
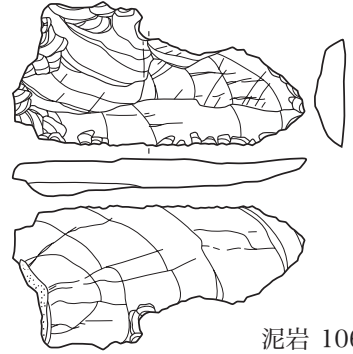


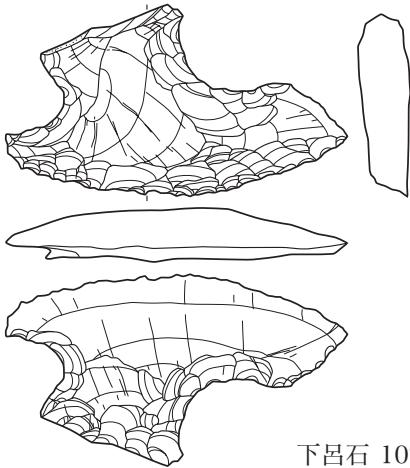
チャート 104



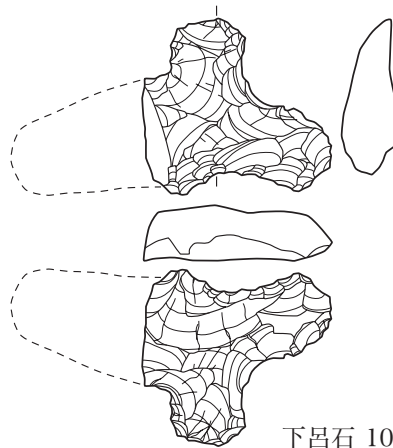
105
下呂石 (円礫 (爪))



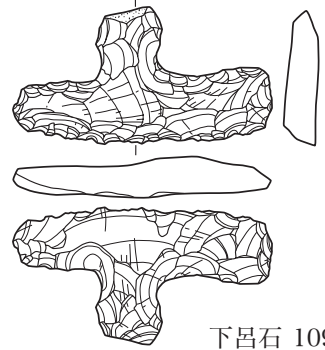
泥岩 106



下呂石 107



下呂石 108



下呂石 109

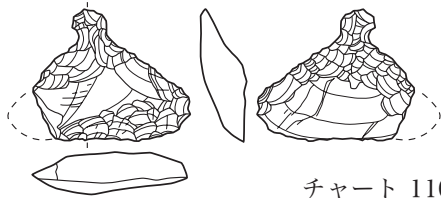
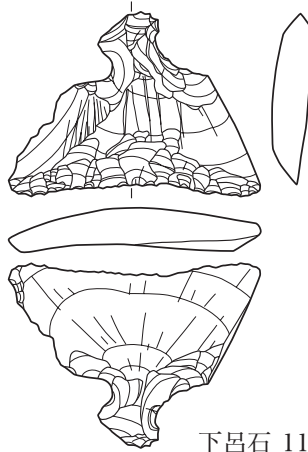
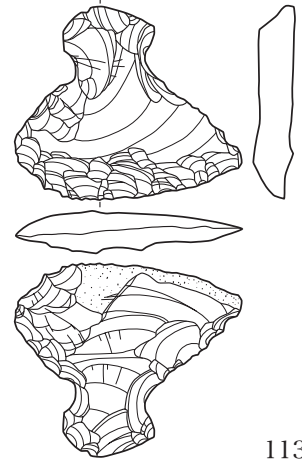


チャート 110



下呂石 112



113
下呂石 (角礫)

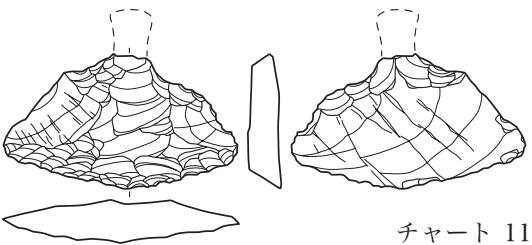
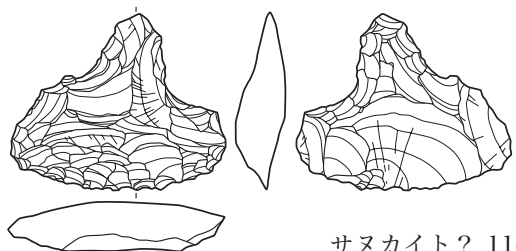
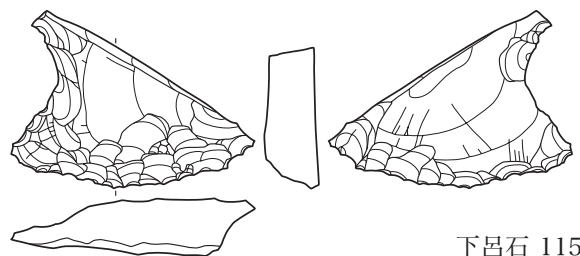


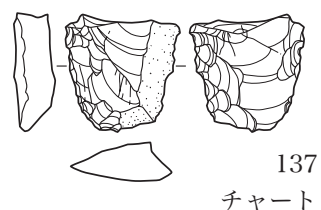
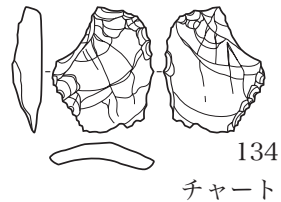
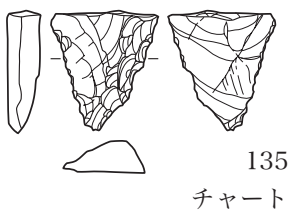
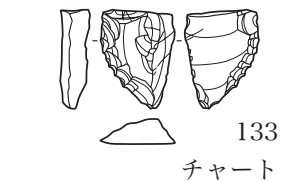
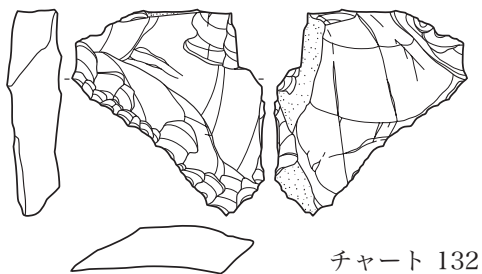
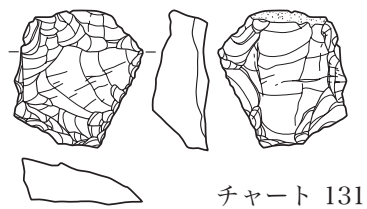
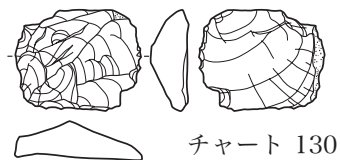
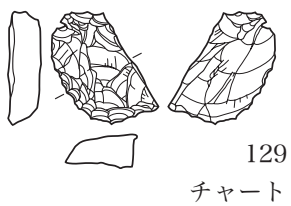
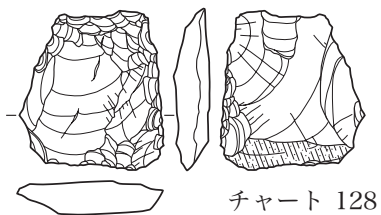
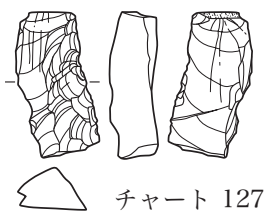
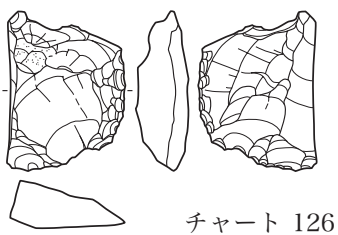
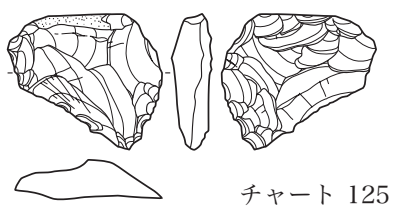
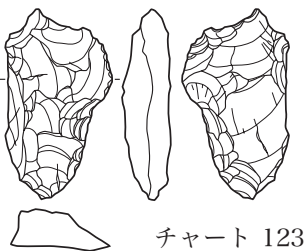
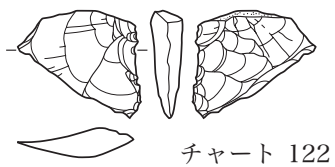
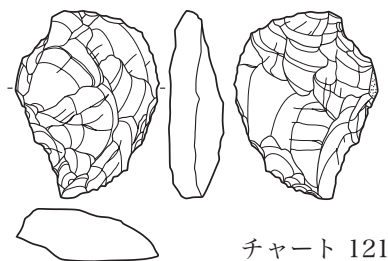
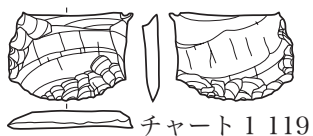
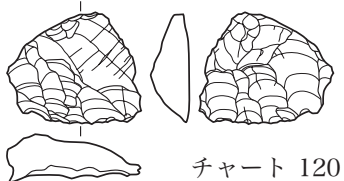
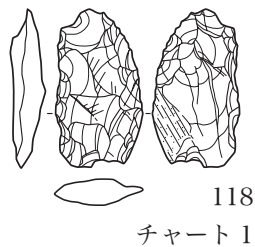
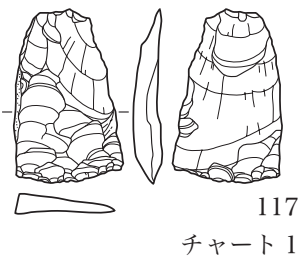
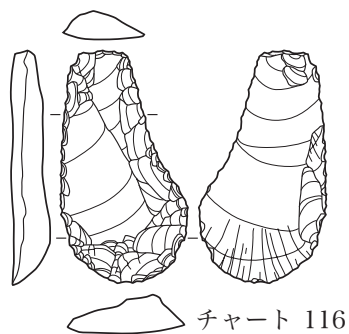
チャート 111



サヌカイト? 114



下呂石 115



2:3

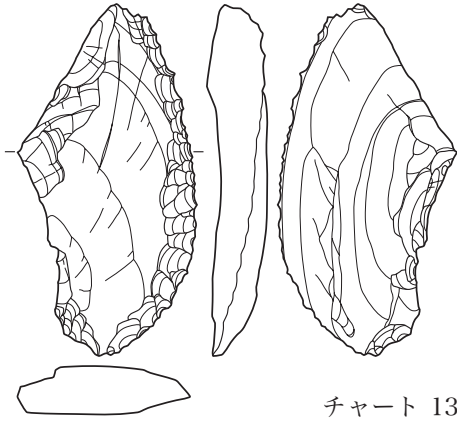
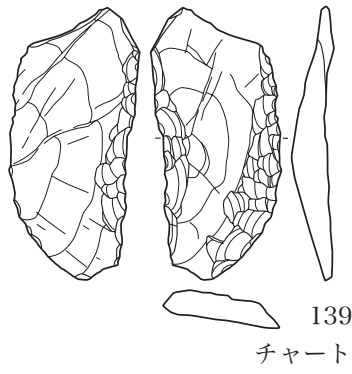


チャート 138



139
チャート

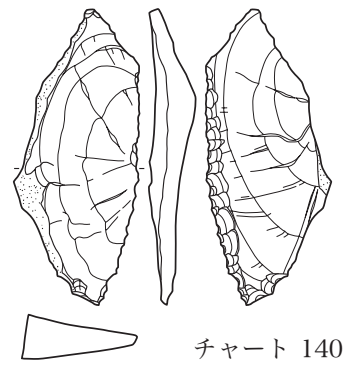


チャート 140

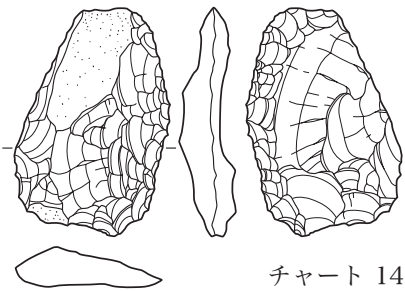
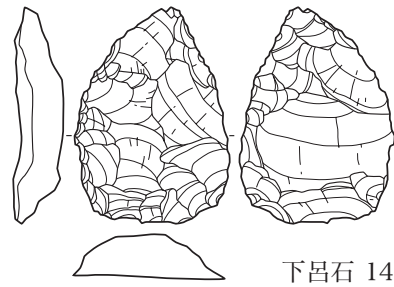
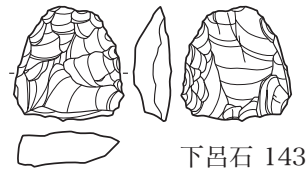


チャート 141



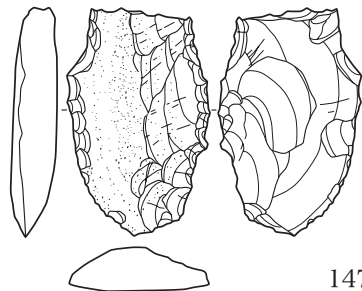
下呂石 142



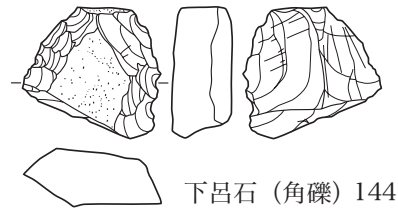
下呂石 143



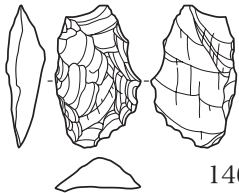
下呂石 145



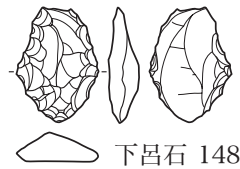
147
下呂石 (円礫)



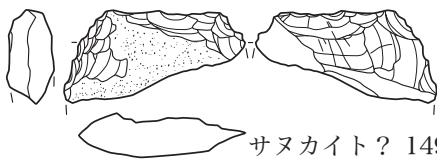
下呂石 (角礫) 144



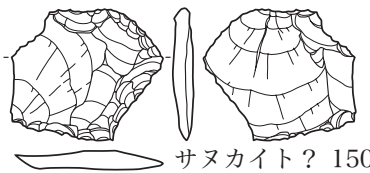
146
安山岩



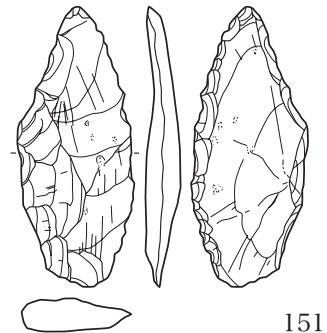
下呂石 148



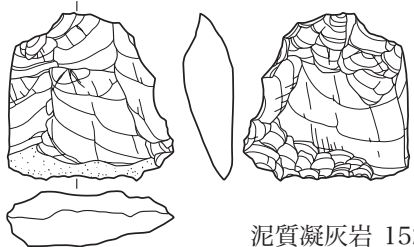
サヌカイト? 149



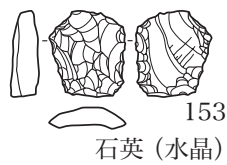
サヌカイト? 150



151
サヌカイト?



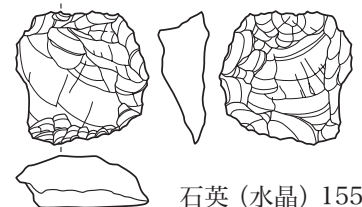
泥質凝灰岩 152



153
石英 (水晶)

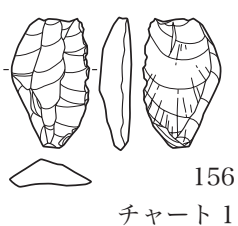


154
石英 (水晶)



石英 (水晶) 155

2:3



156
チャート1

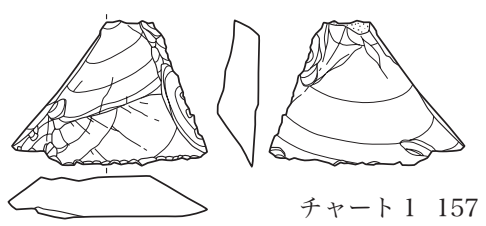


チャート1 157

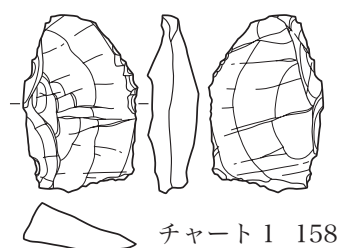


チャート1 158

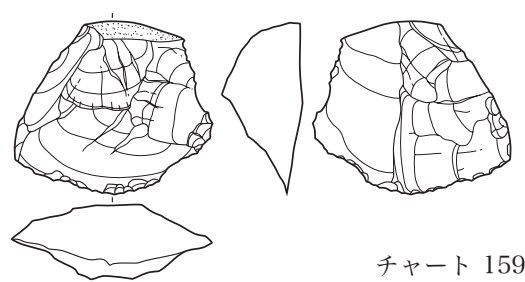


チャート 159

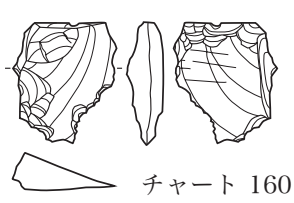


チャート 160

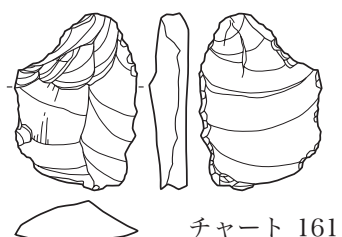


チャート 161

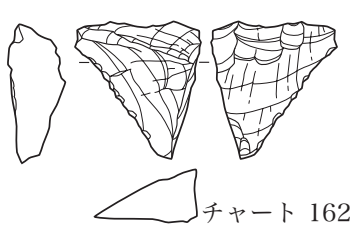
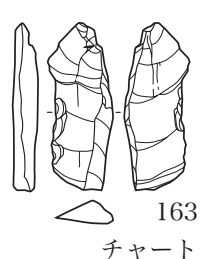


チャート 162



163
チャート

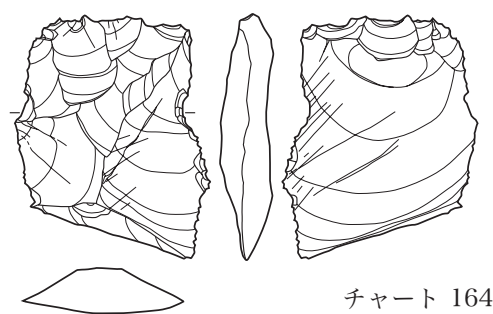


チャート 164

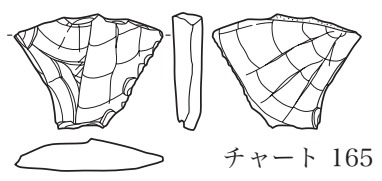


チャート 165

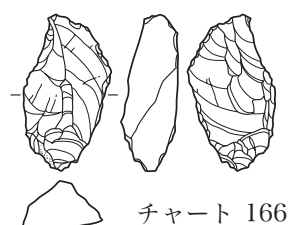


チャート 166

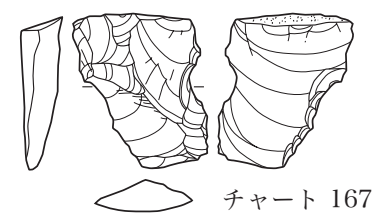


チャート 167

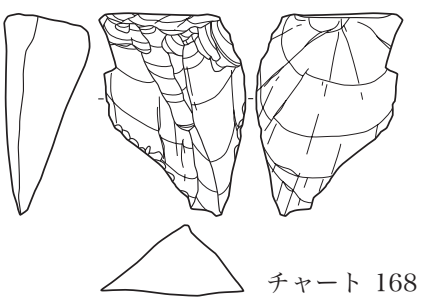


チャート 168

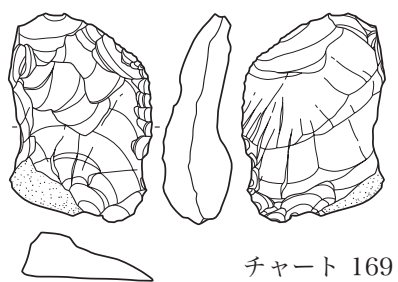


チャート 169

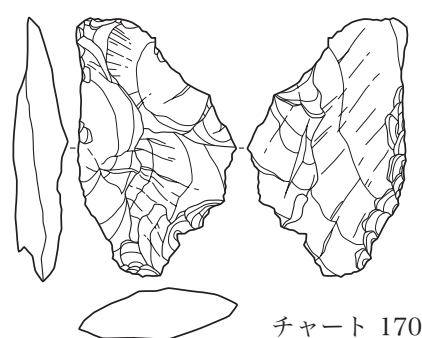
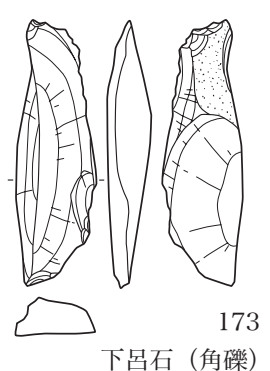


チャート 170



173
下呂石 (角礫)

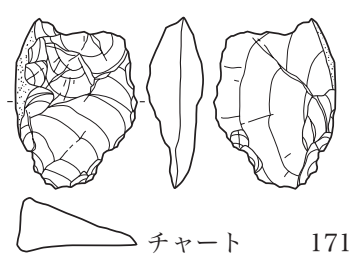
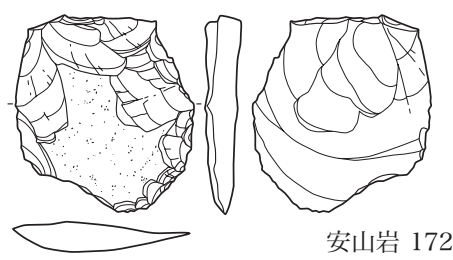
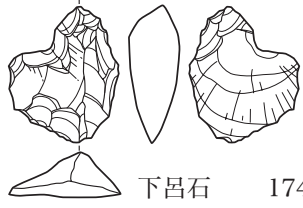


チャート 171



安山岩 172

2:3



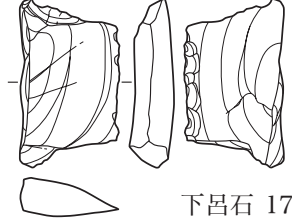
下呂石 174



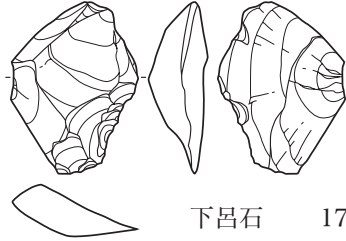
175
下呂石



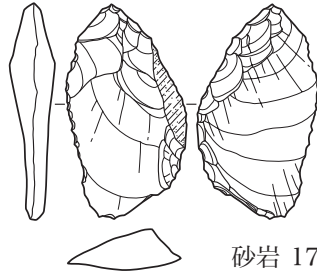
下呂石 176



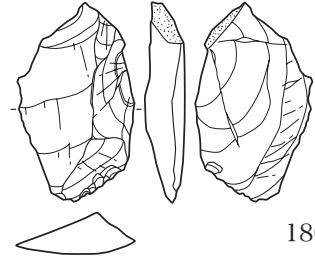
下呂石 177



下呂石 178



砂岩 179



180
ホルンフェルス

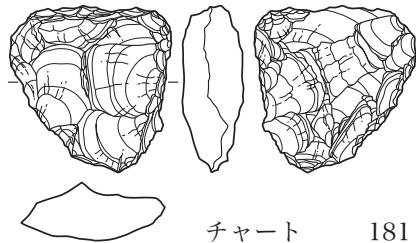


チャート 181

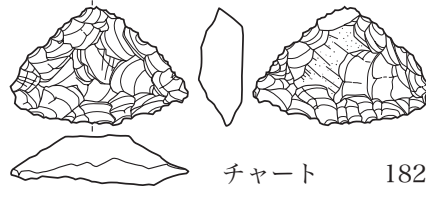
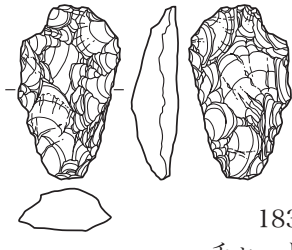


チャート 182



183
チャート

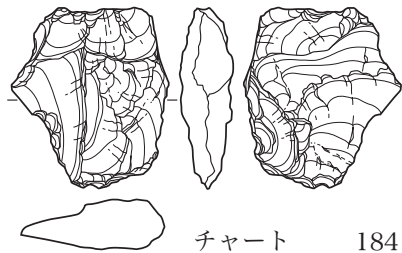
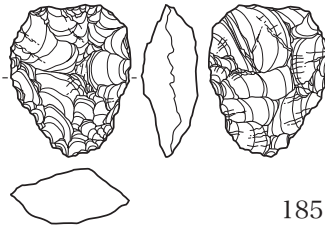
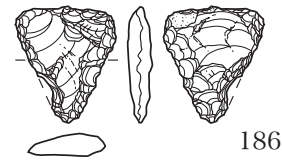


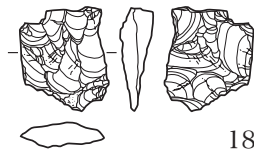
チャート 184



185
チャート



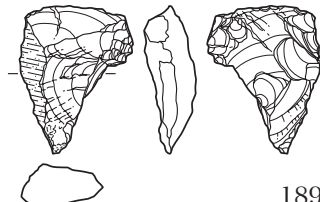
186
チャート



187
チャート



188
チャート



189
チャート



チャート 1 190

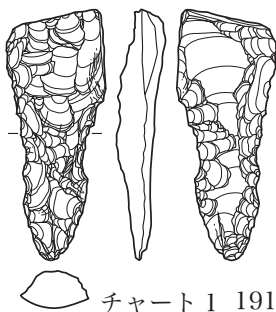


チャート 1 191

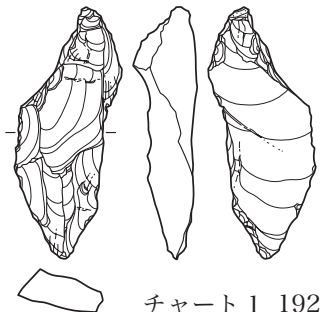


チャート 1 192

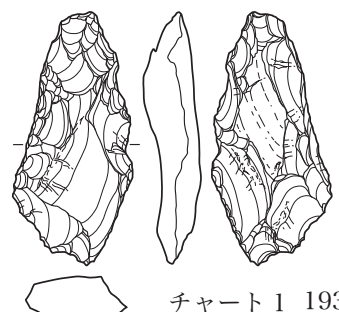
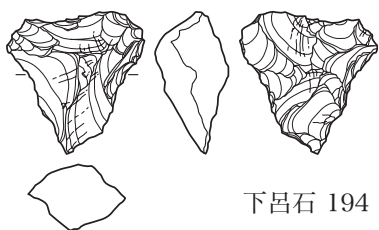
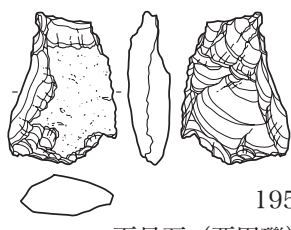


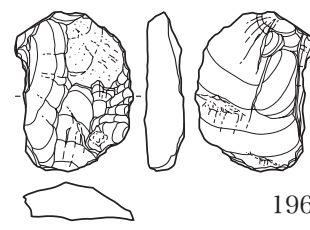
チャート 1 193



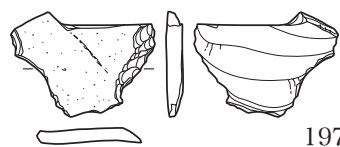
下呂石 194



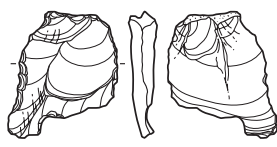
下呂石 (垂円礫) 195



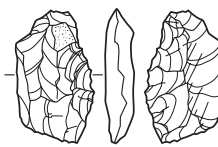
下呂石 (円礫) 196



下呂石 (角礫) 197



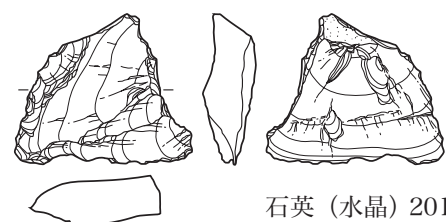
下呂石 (円礫) 198



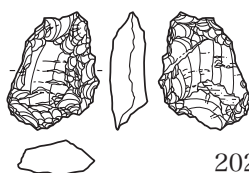
下呂石 (円礫) 199



下呂石 200



石英 (水晶) 201



石英 (水晶) 202

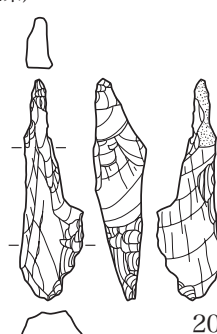


チャート 1 203

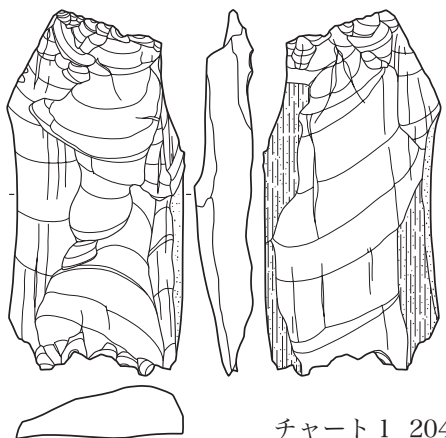


チャート 1 204



チャート 1 205

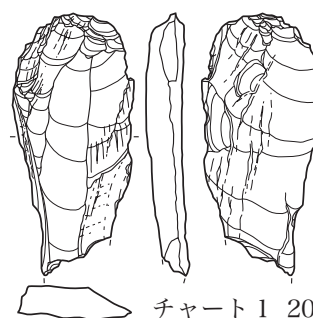


チャート 1 206

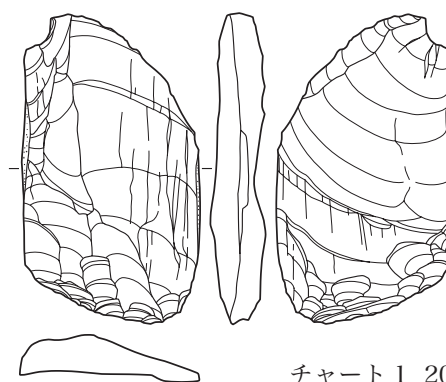


チャート 1 207

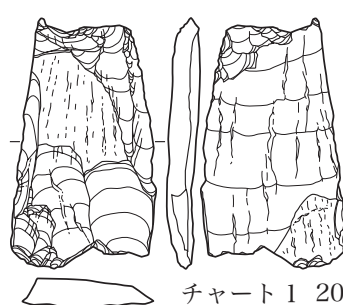


チャート 1 208

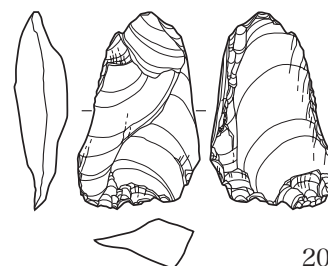


チャート 1 209



チャート 1 210

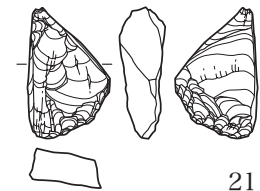


チャート 1 211

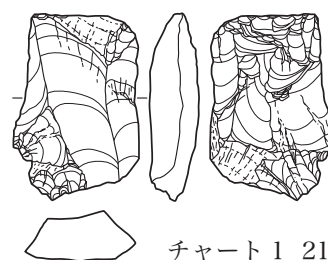


チャート 1 212

2:3

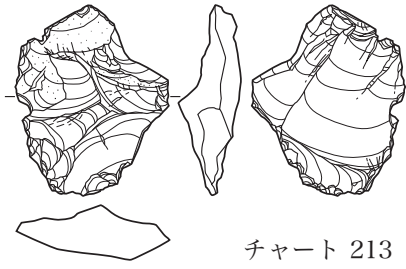


チャート 213

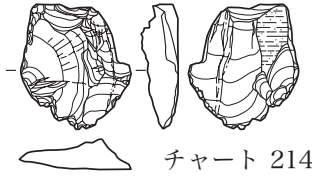


チャート 214

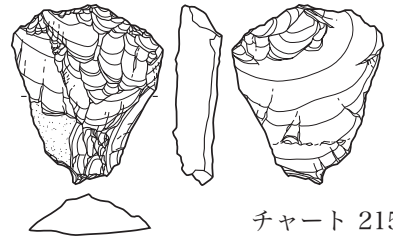


チャート 215

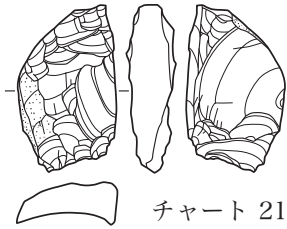


チャート 216



217
チャート

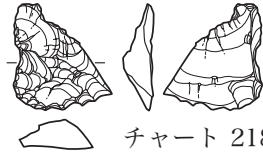
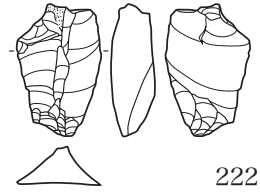
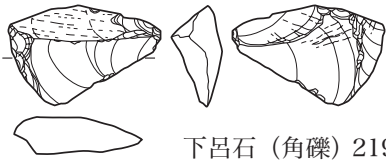


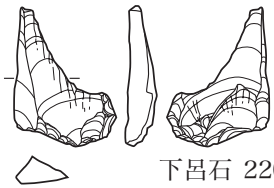
チャート 218



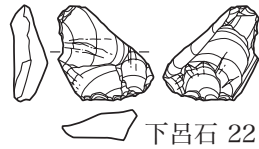
222
下呂石 (円礫)



下呂石 (角礫) 219



下呂石 220



下呂石 221

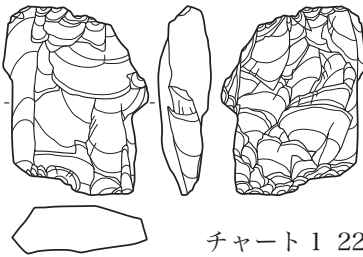


チャート 1 223

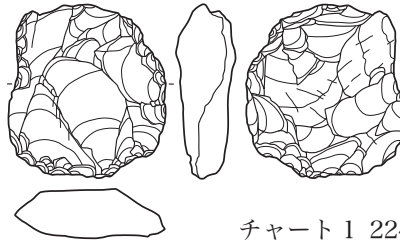


チャート 1 224

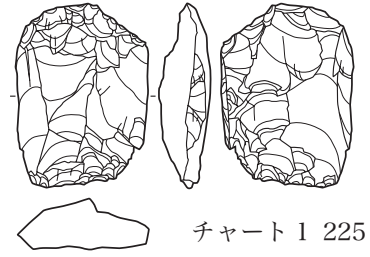


チャート 1 225

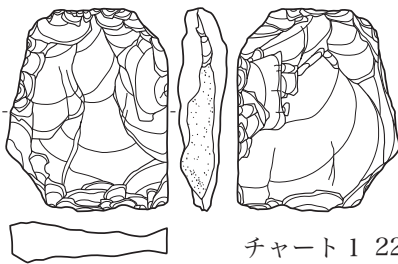


チャート 1 226

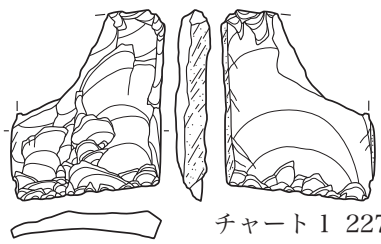


チャート 1 227

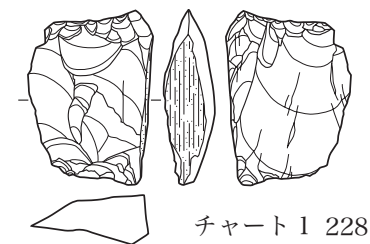


チャート 1 228

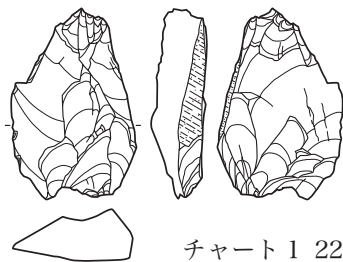


チャート 1 229

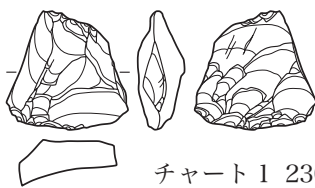


チャート 1 230

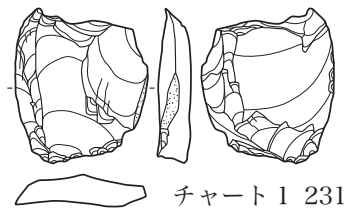


チャート 1 231

2:3

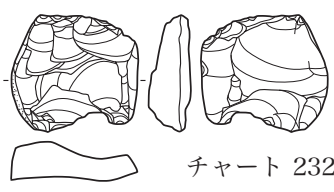


チャート 232

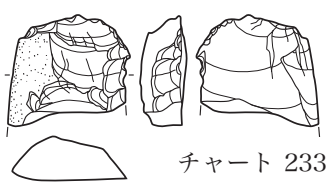


チャート 233

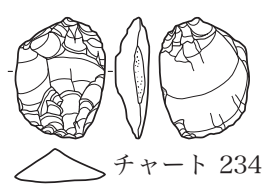


チャート 234

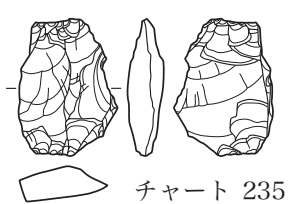
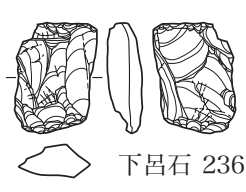


チャート 235



下呂石 236

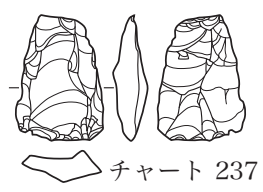
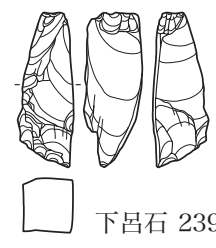


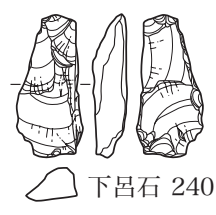
チャート 237



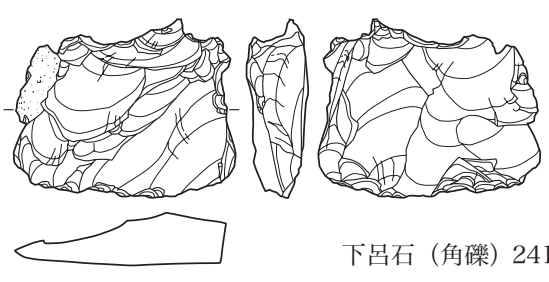
安山岩? 238



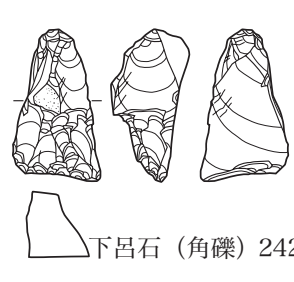
下呂石 239



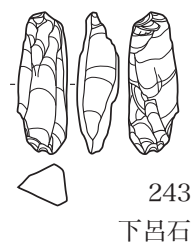
下呂石 240



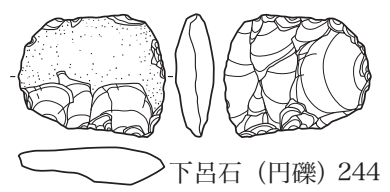
下呂石 (角礫) 241



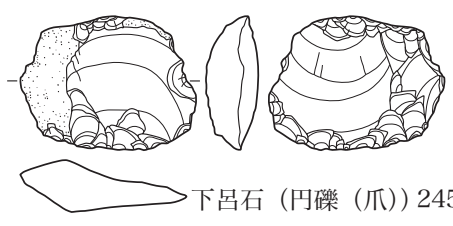
下呂石 (角礫) 242



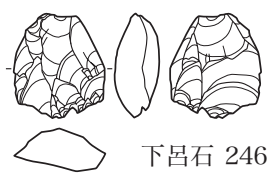
243
下呂石



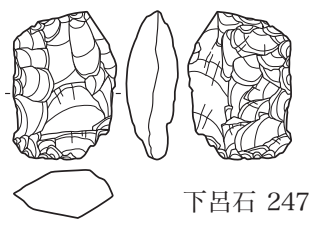
下呂石 (円礫) 244



下呂石 (円礫 (爪)) 245



下呂石 246



下呂石 247

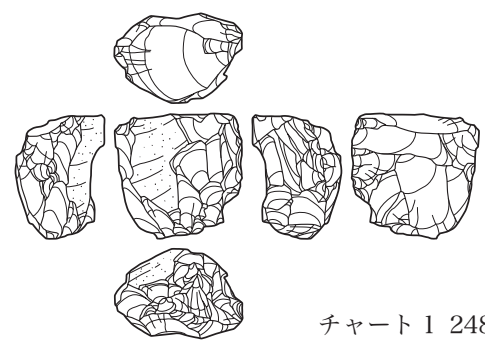
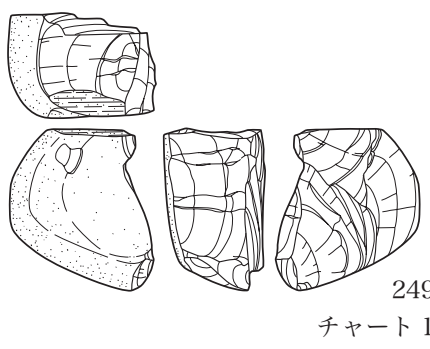


チャート 1 248



249
チャート 1

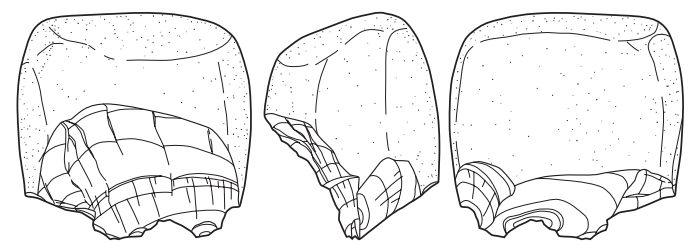


チャート 1 251

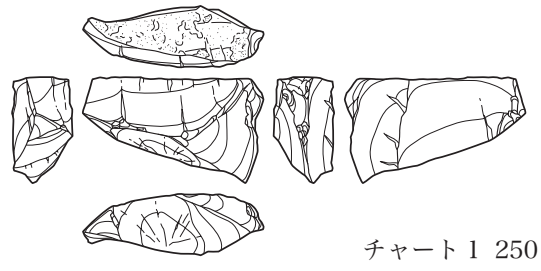


チャート 1 250

2:3

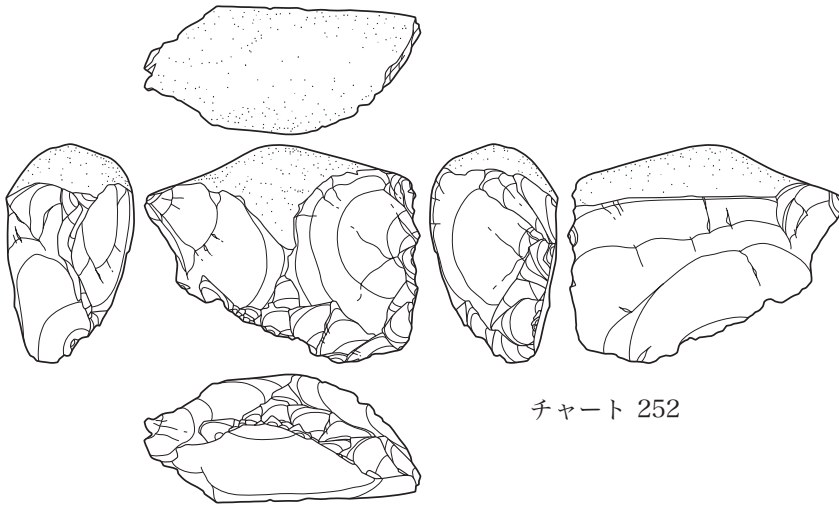


チャート 252

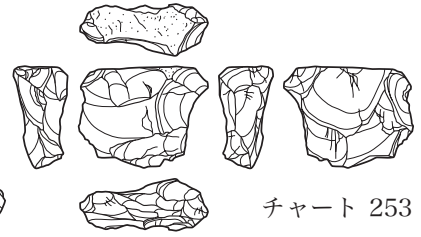
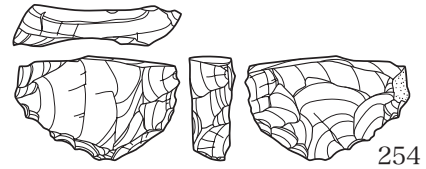


チャート 253



254

チャート

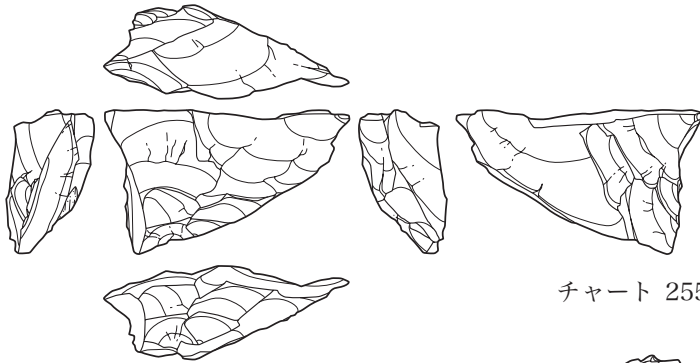


チャート 255

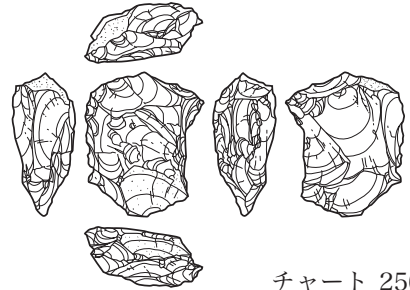


チャート 256

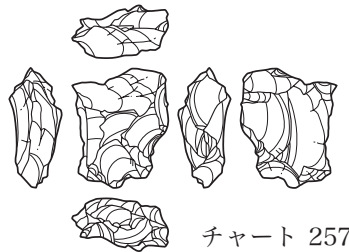


チャート 257

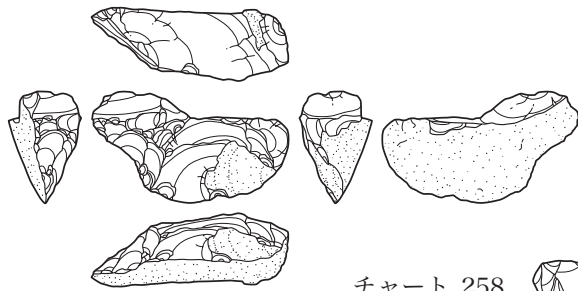


チャート 258

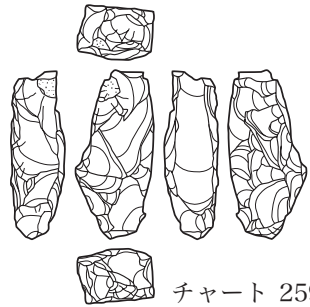


チャート 259

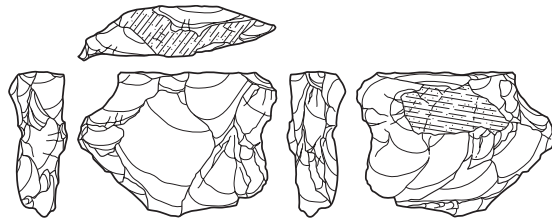
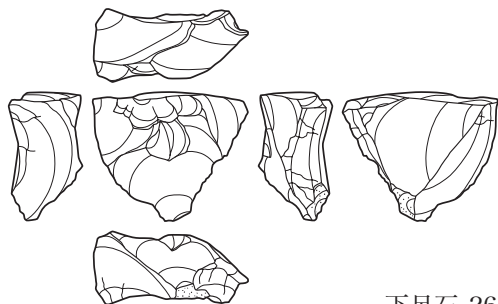
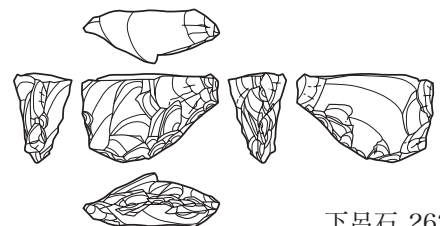


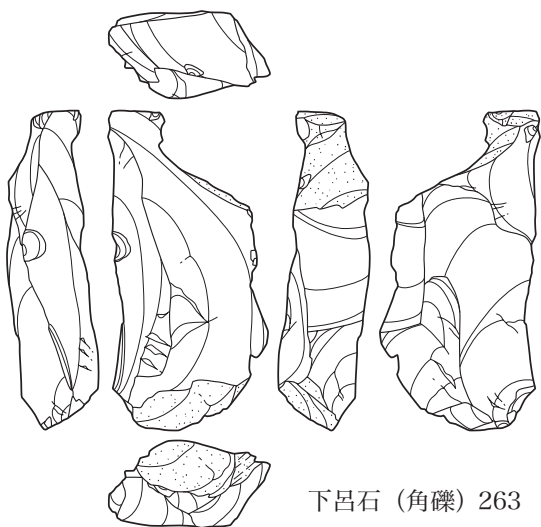
チャート 260



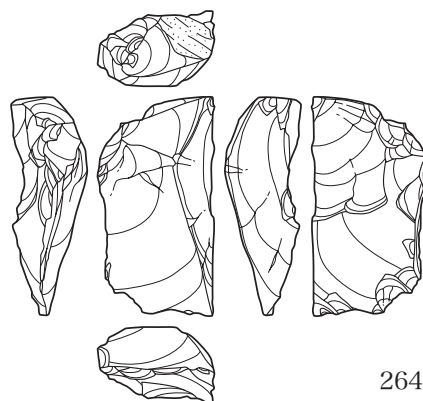
下呂石 261



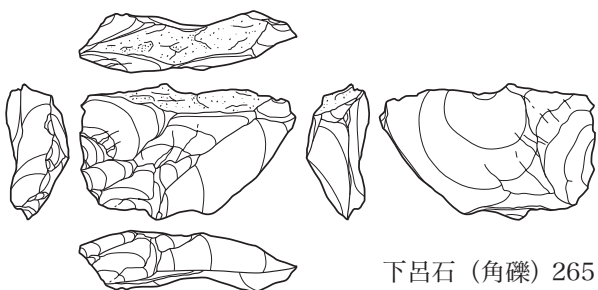
下呂石 262



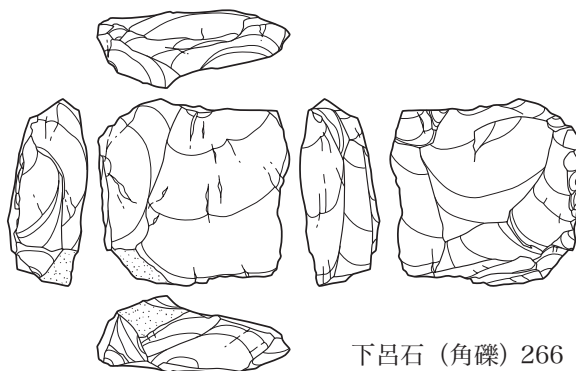
下呂石 (角礫) 263



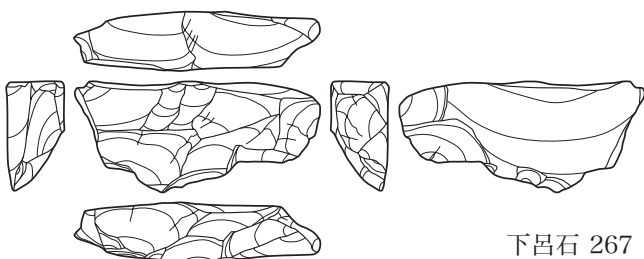
264
下呂石 (角礫)



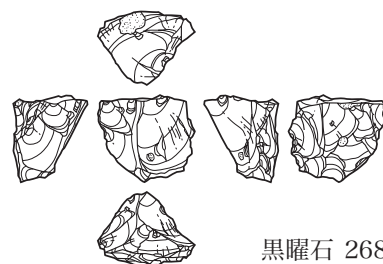
下呂石 (角礫) 265



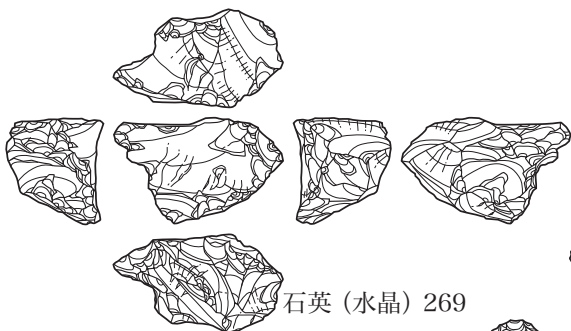
下呂石 (角礫) 266



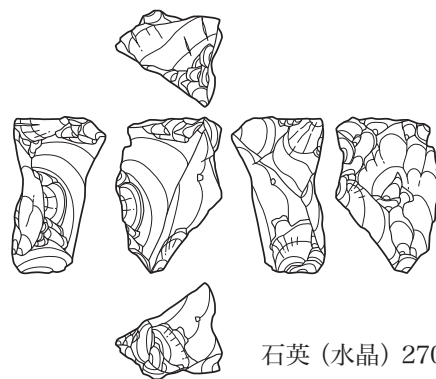
下呂石 267



黒曜石 268



石英 (水晶) 269

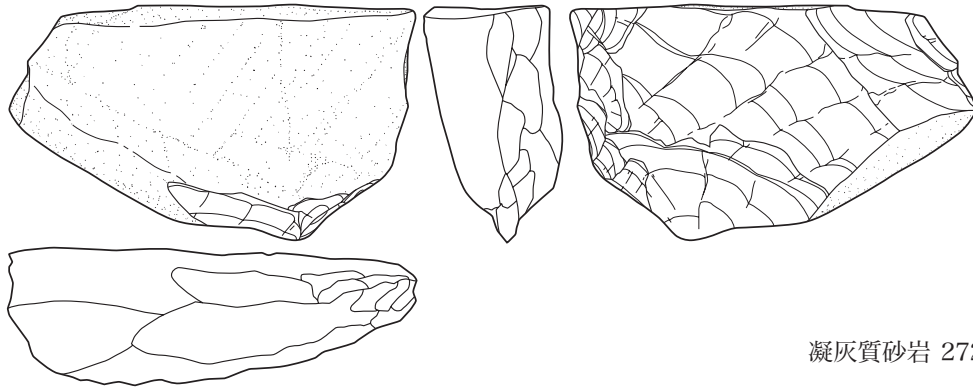


石英 (水晶) 270

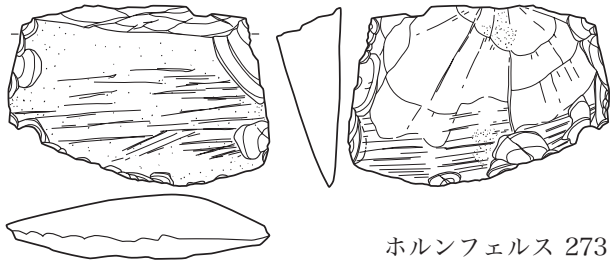


石英 (水晶) 271

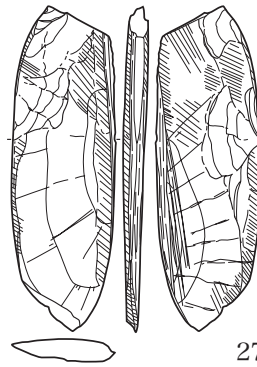
1:2



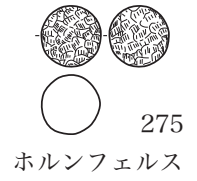
凝灰質砂岩 272



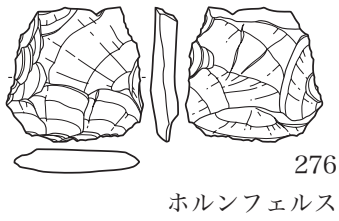
ホルンフェルス 273



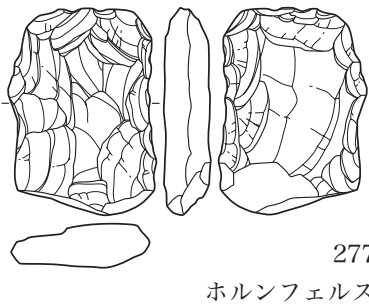
274
ホルンフェルス



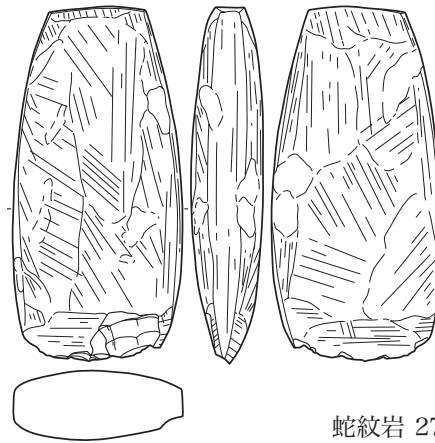
275
ホルンフェルス



276
ホルンフェルス



277
ホルンフェルス



蛇紋岩 278

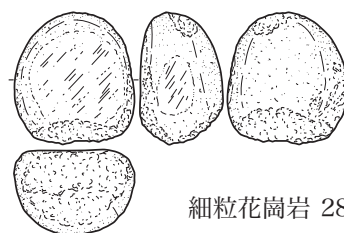
279～289は1:3、290～293は1:6



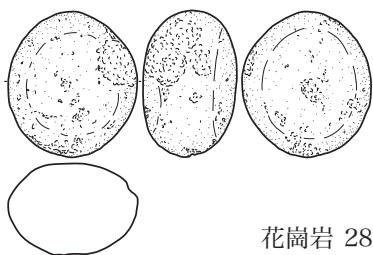
凝灰質砂岩 279



安山岩 280



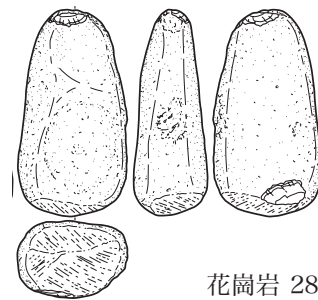
細粒花崗岩 281



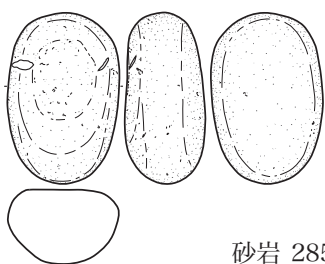
花崗岩 282



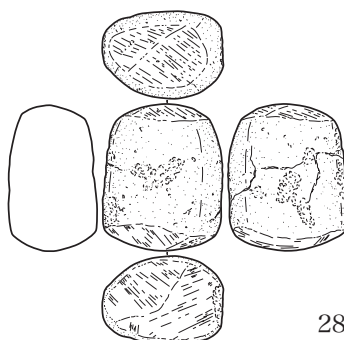
花崗岩 283



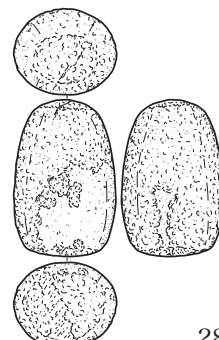
花崗岩 284



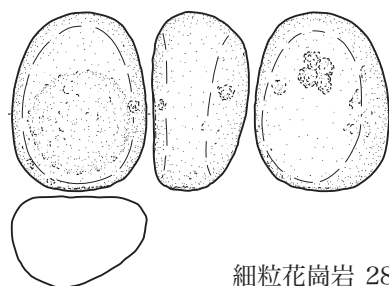
砂岩 285



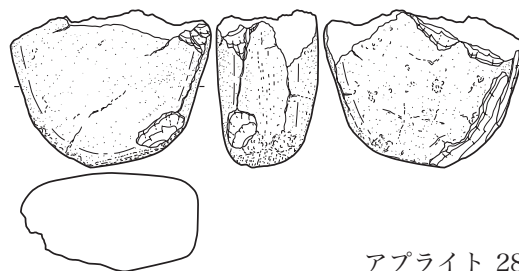
286
濃飛流紋岩



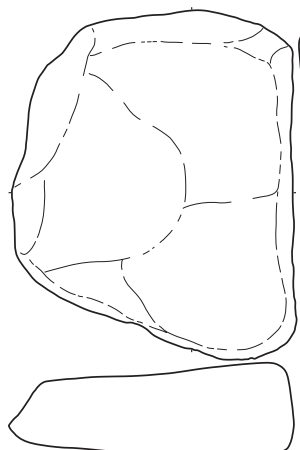
287
凝灰質砂岩



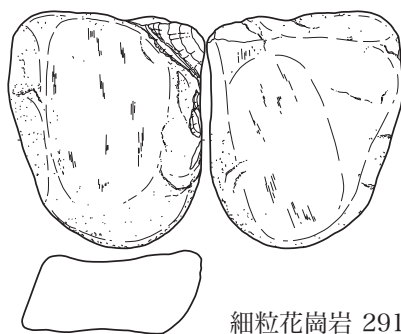
細粒花崗岩 288



アプライト 289



290
花崗岩



細粒花崗岩 291



292
細粒花崗岩



花崗岩 293

報告書抄録

ふりがな	はせぐちいせき							
書名	長谷口遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	永井宏幸(編著)・川添和暁・原田幹・小澤一弘							
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方 802-24 TEL 0567 (67) 4161							
発行年月日	西暦2004年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
はせぐちいせき 長谷口遺跡	せとし 瀬戸市 はせぐちちょう 長谷口町	市町村	遺跡番号	35度 13分 33秒	137度 8分 12秒	20000818 ∩ 20001108 20020701 ∩ 20020909	1,200 m ²	東海環状 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長谷口遺跡	集落	縄文時代 早期末葉 中期後葉 弥生時代 中期～後期 古代 中世後期 近世末	土坑・ピット 竪穴住居・土坑・埋 甕 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土壙 土壙・土坑・ピット・ 溝 土坑・ピット・溝	縄文土器・石器・土 製品 縄文土器・石器 弥生土器・石器・鉄 斧 須恵器・灰釉陶器・ 土師器甕 灰釉系陶器・古瀬戸 製品・土師器・錢貨 瀬戸産陶磁器・土師 器・窯道具		縄文時代早期末葉の 一括資料 五角形プラン竪穴住 居 板状鉄斧 茶道具(煎茶?)の 一括廃棄資料		

上 SX02 遠景東から
中 左 SX02 北から 右 SX02 東から
下 SX02 西から

00A 区

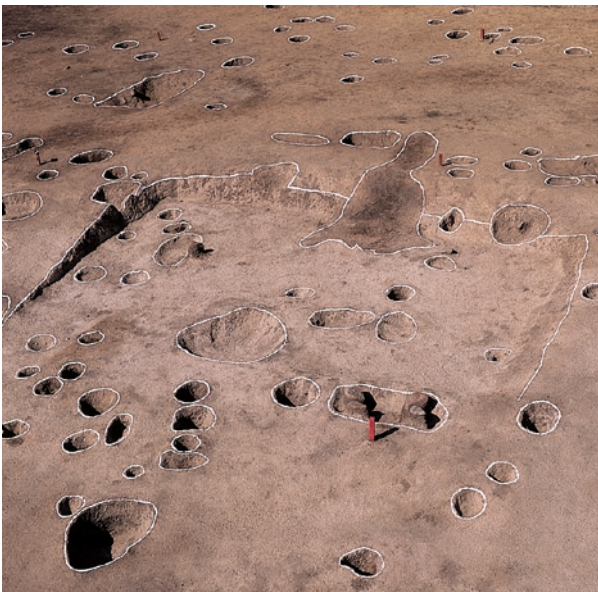
写真図版1
(遺構) 1



00B 区

上 SB01・SB02 遺景南から
中 左 SX01 上面南から 右 SX01 下面南から
下 左 SB02 全景南東から 右 SB02 カマド南から

写真図版2
(遺構) 2



上 近世層敷地全景東から
中 左 SK08 北東から 右 SU01 北東から
下 左 SK71 南西から 右 SU06 東から

02 区



02 区

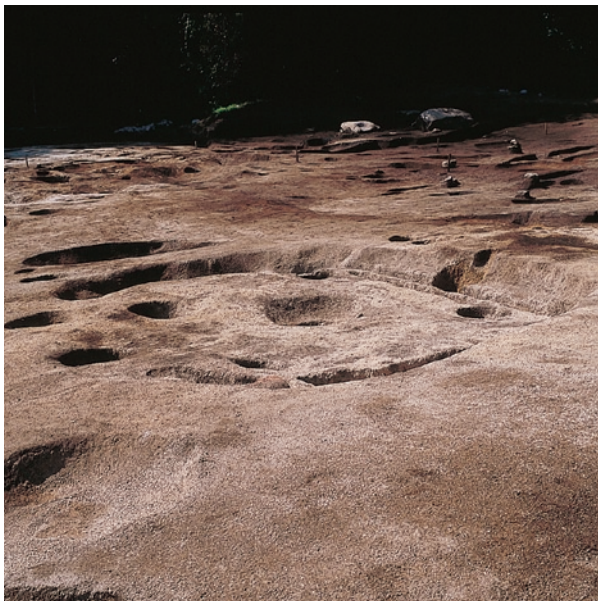
上 左 SK120 北から 右 SK12 南西から
中 左 SB03 東から 右 SK12 南西から
下 左 SK146 南から 右 SK155 南東から



上 左 SB06 全景南東から 右 SK169 東から
中 左 SB06 壁溝西から 右 第2面全景南東から
下 左 SB06 内炉東から 右 第3面全景南東から

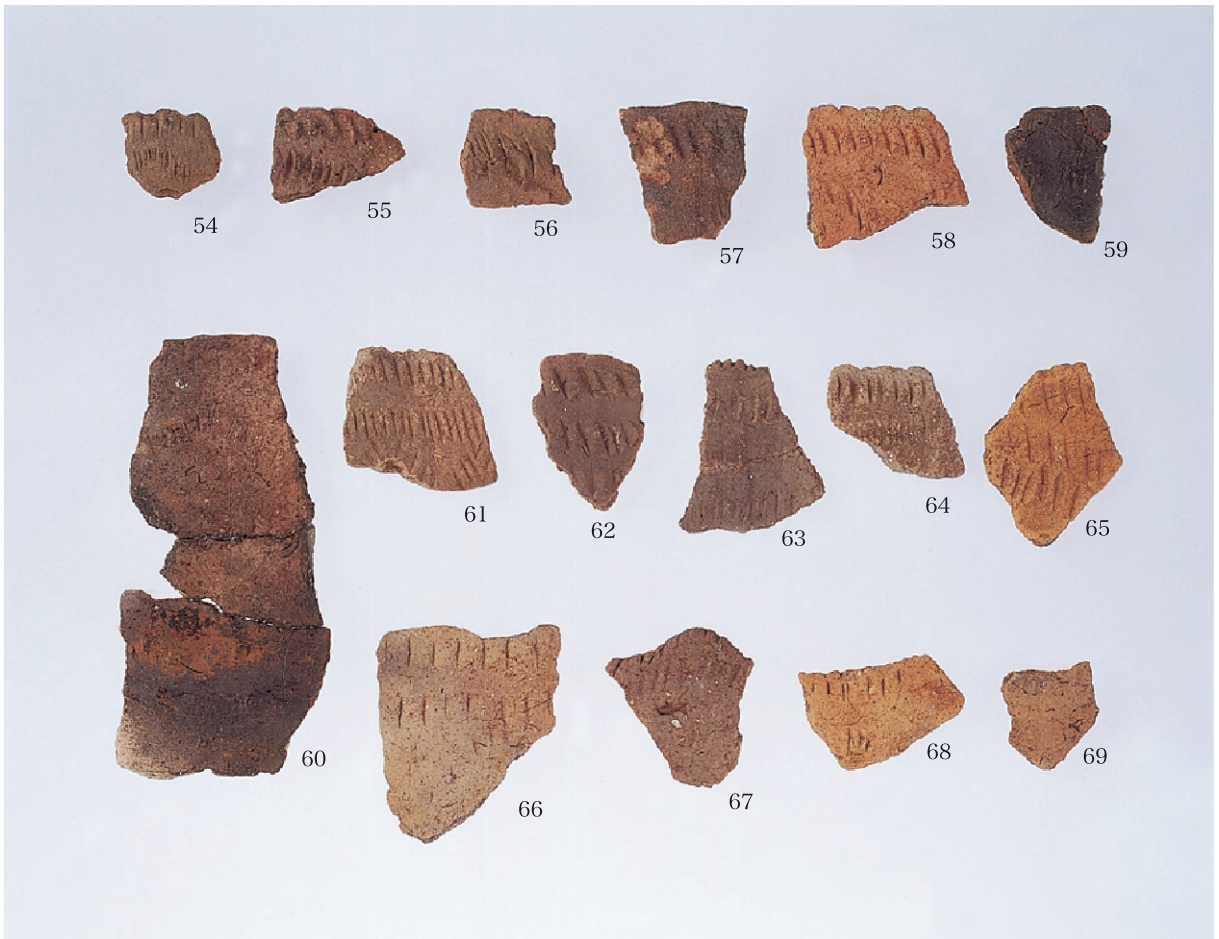
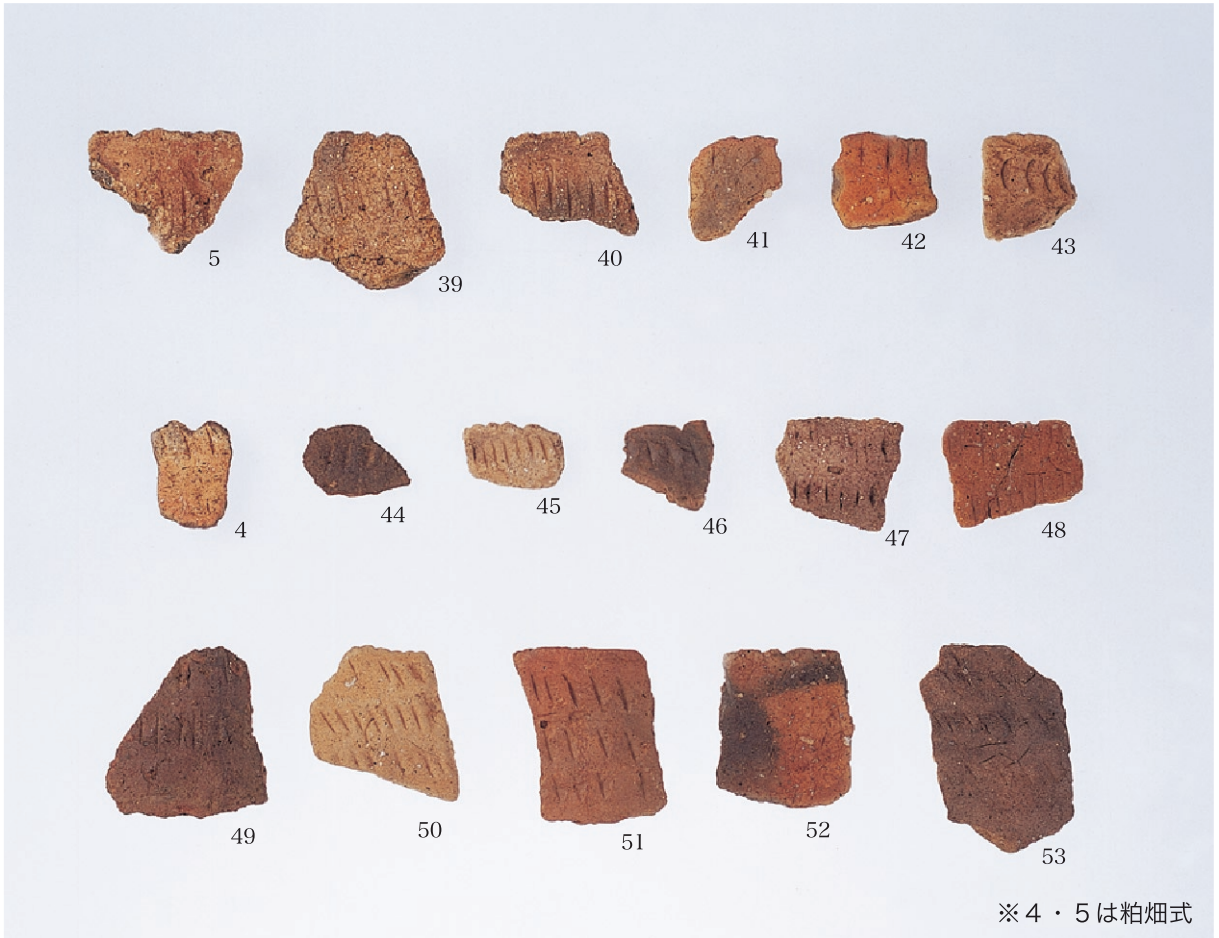
02 区

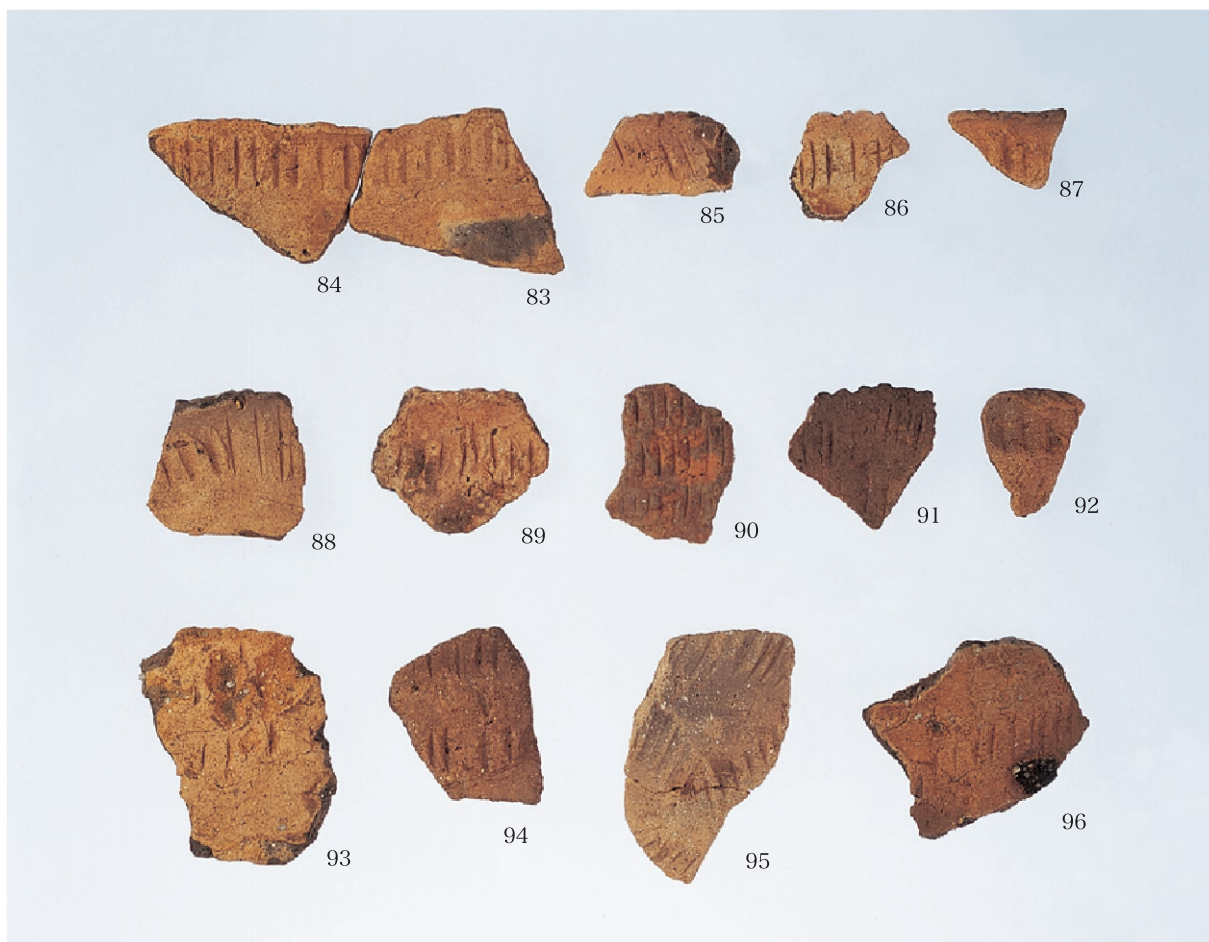
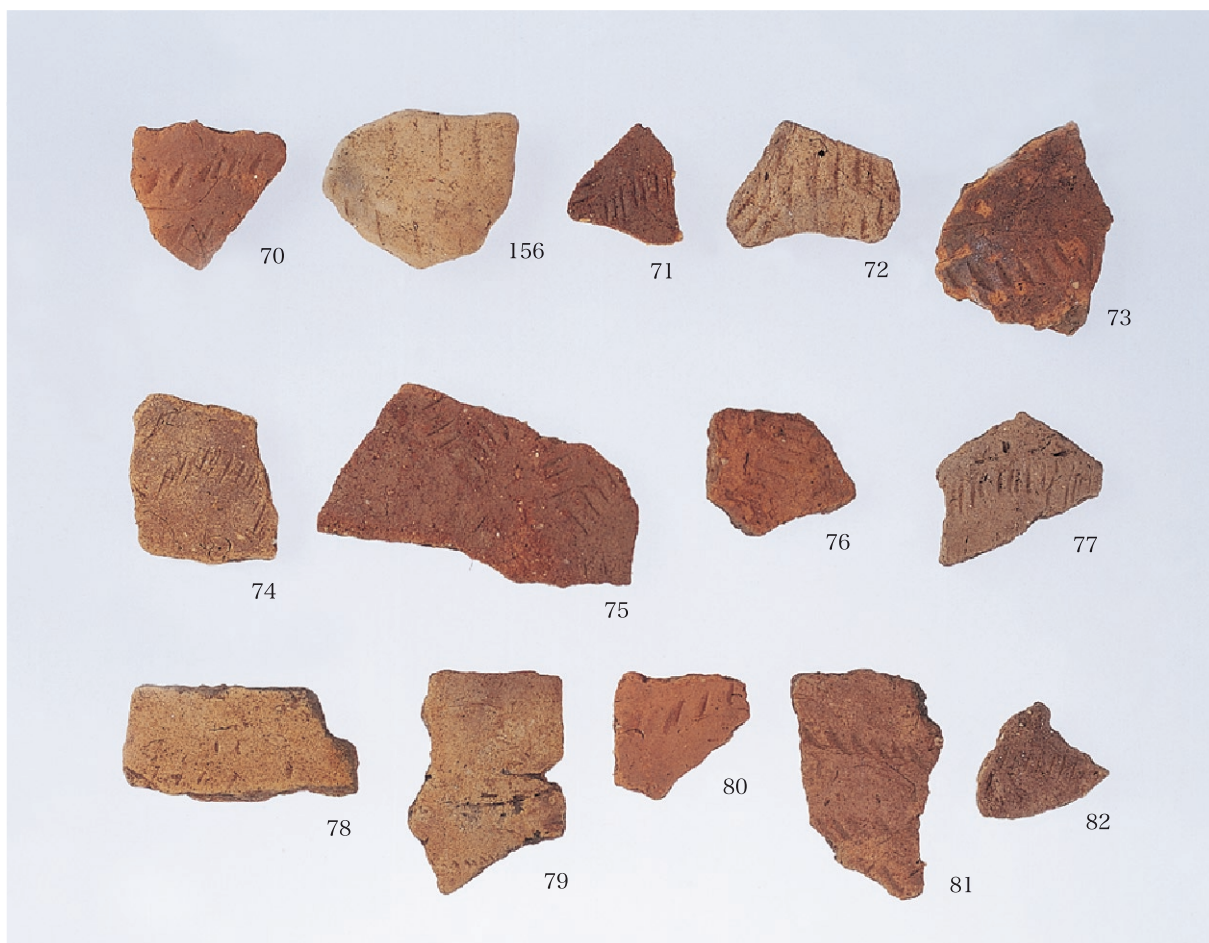
写真図版5
(遺構)5





石山式 (塩屋中層A式)

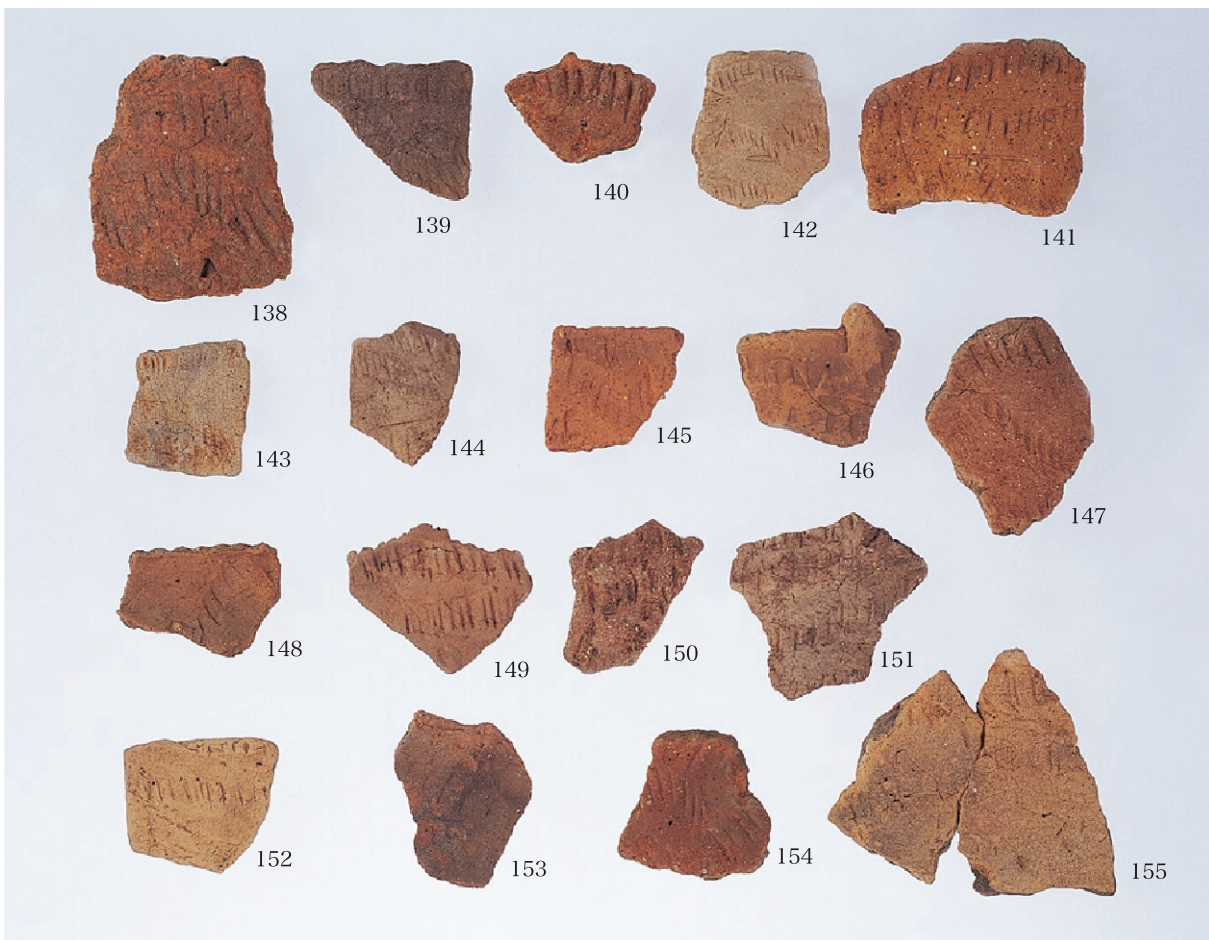




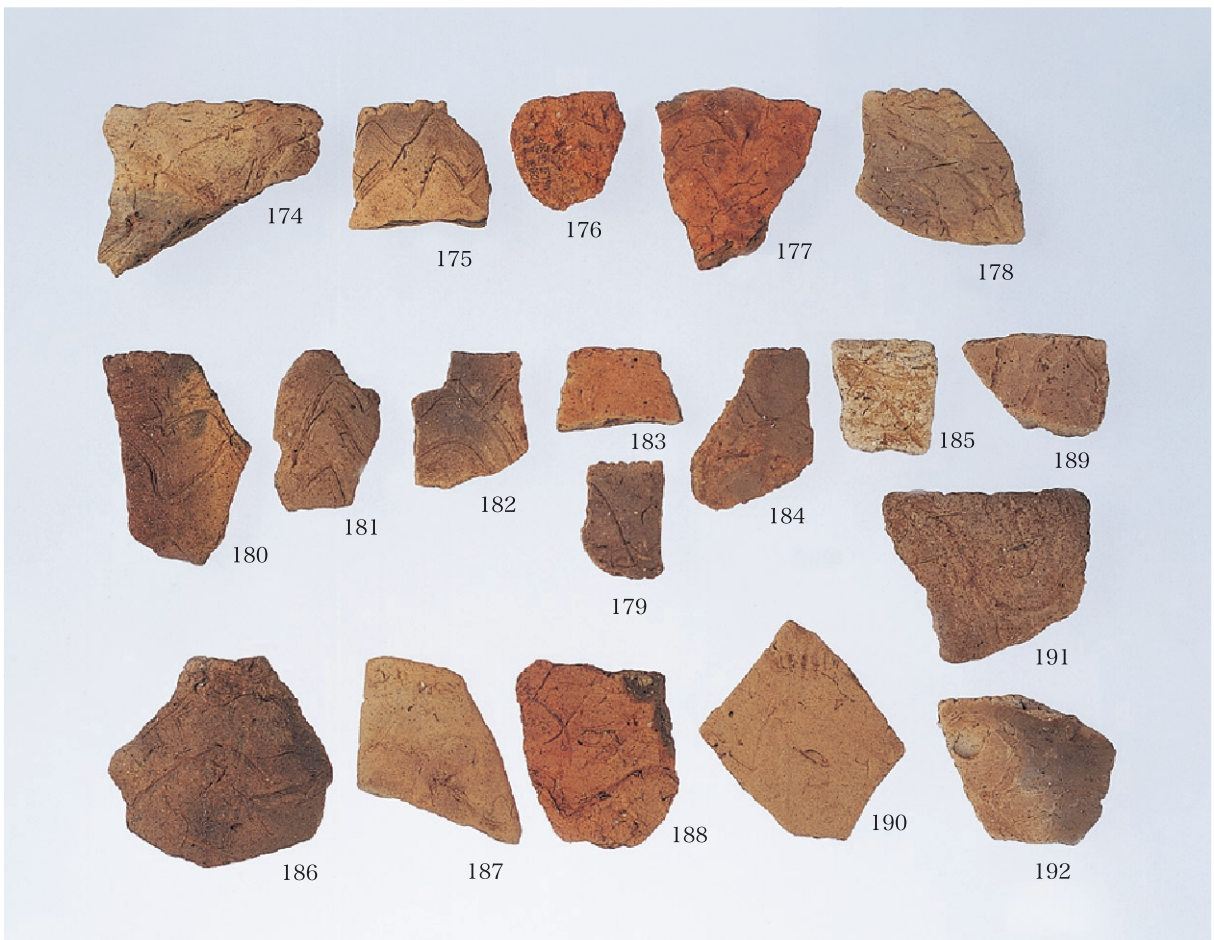
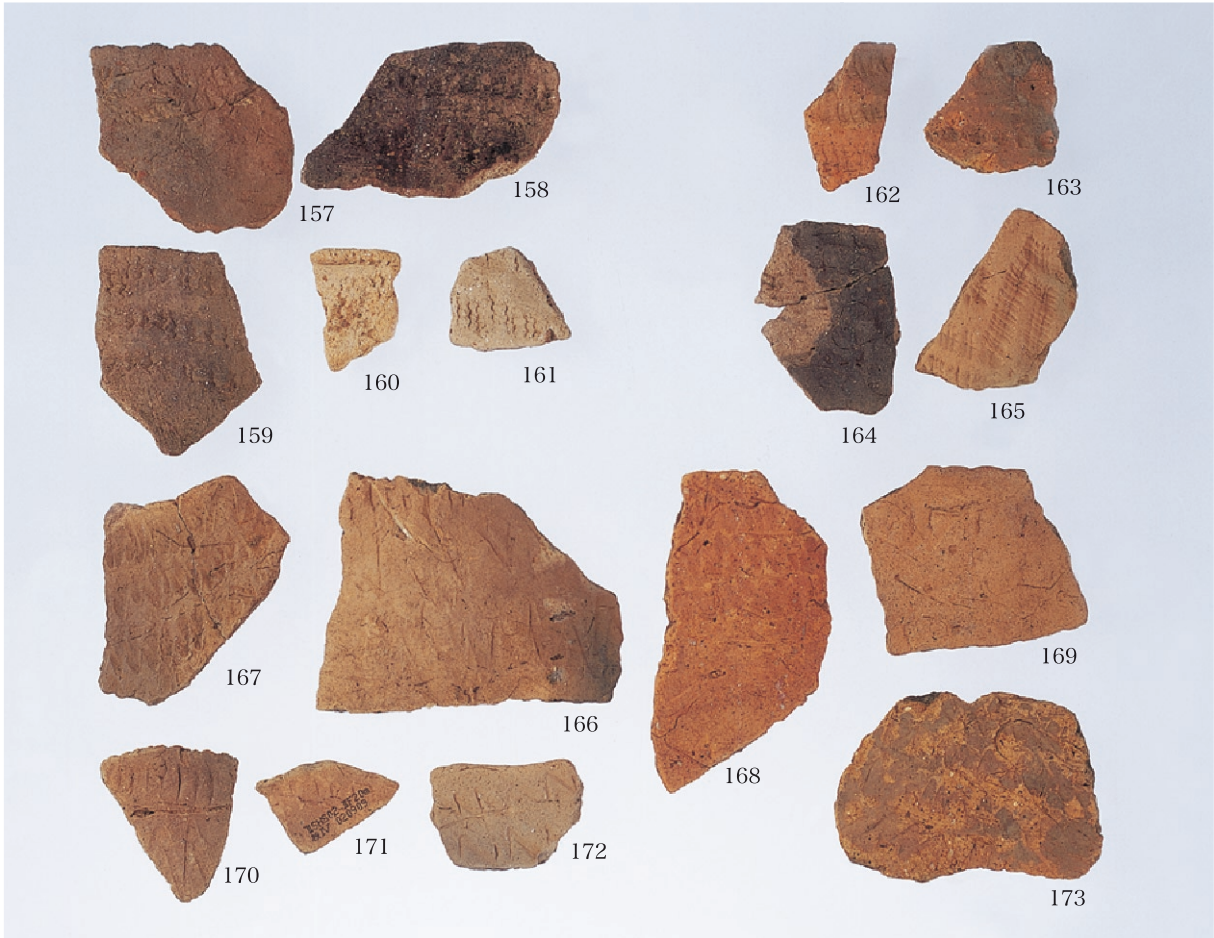
石山式 (塩屋中層A式) ~ 105

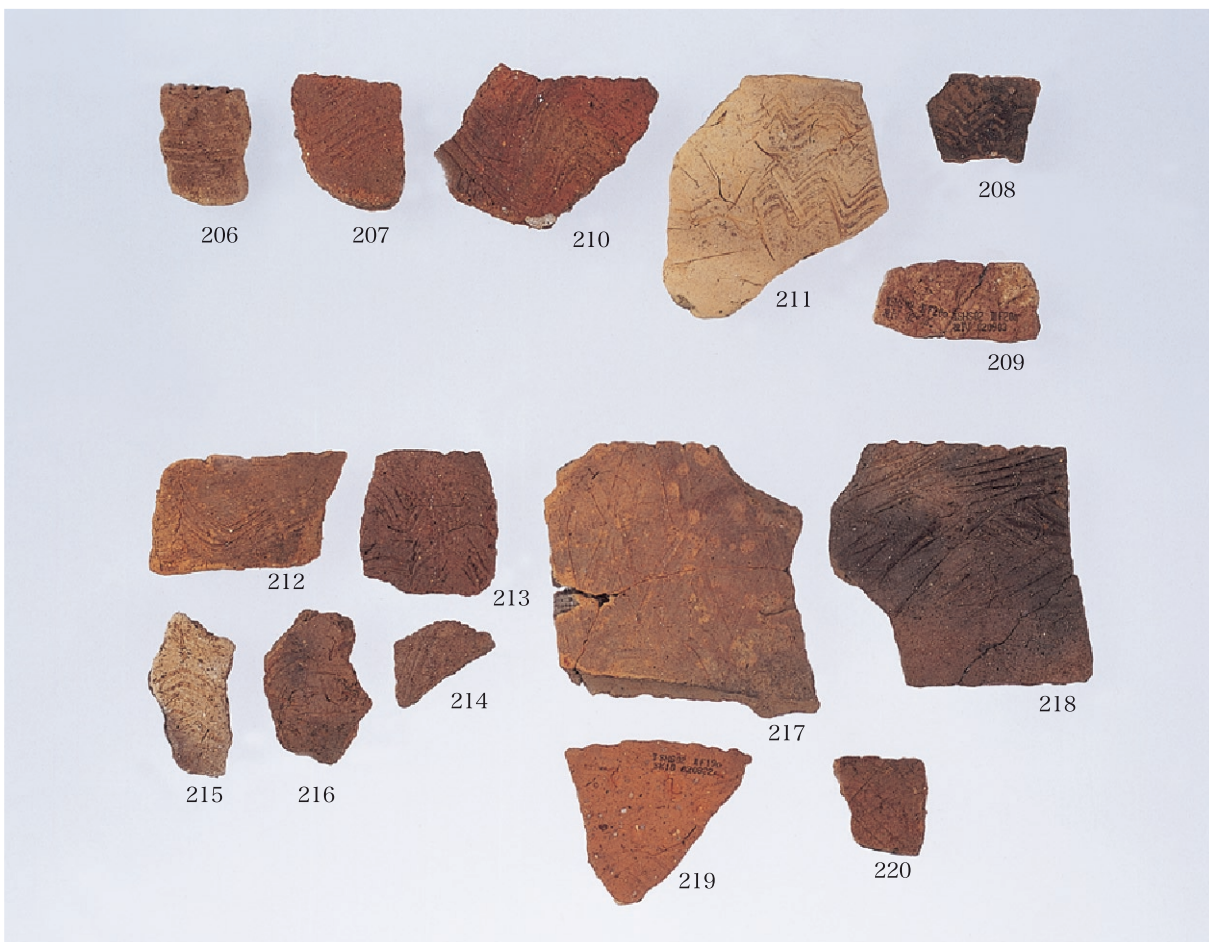
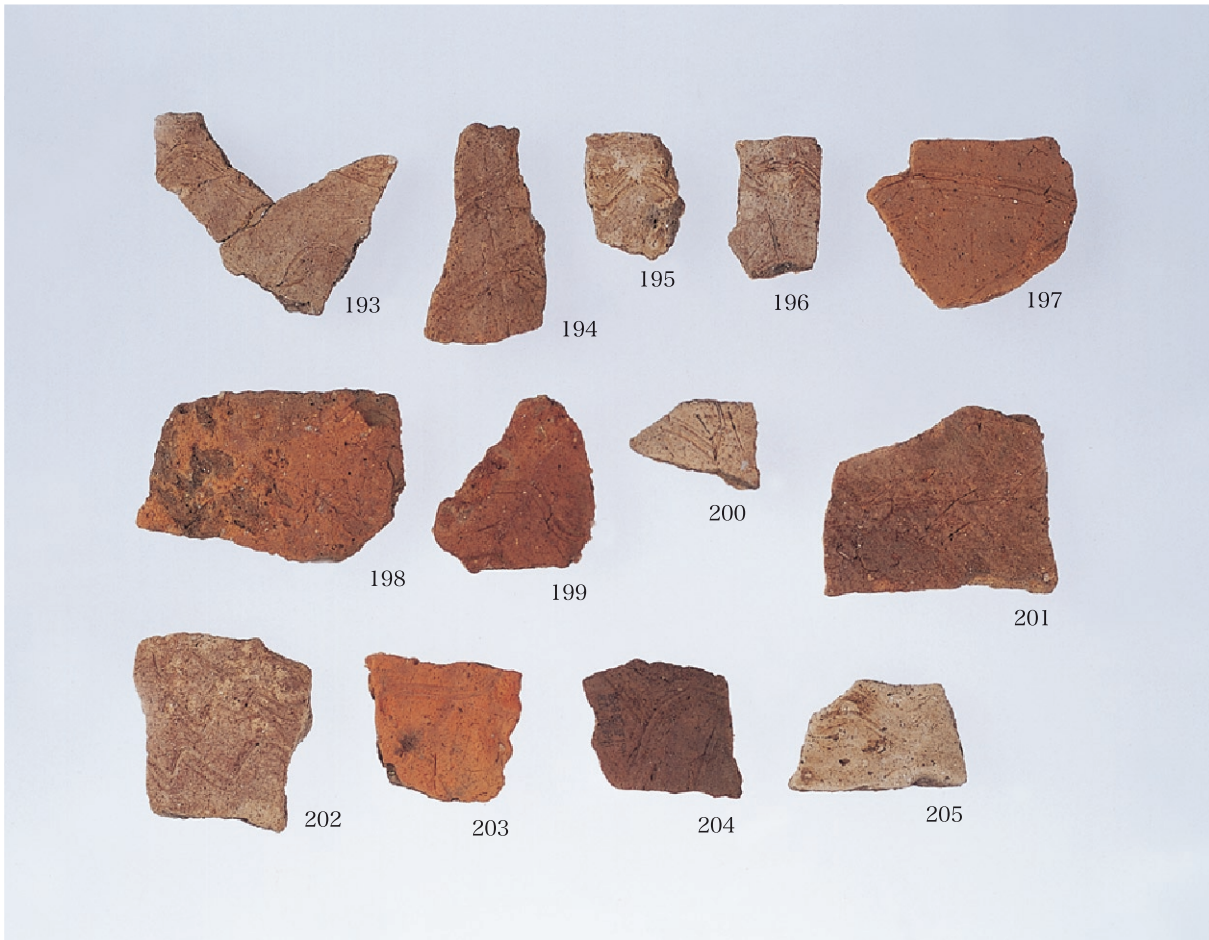
石山式 (塩屋中層B式)





石山式（塩屋中層B式）～166
天神山式











002 SU01 一括資料



490

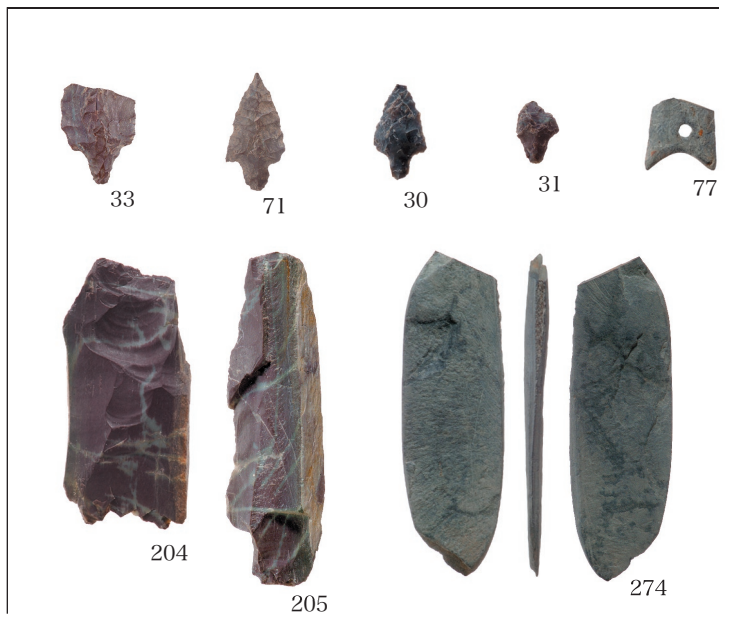
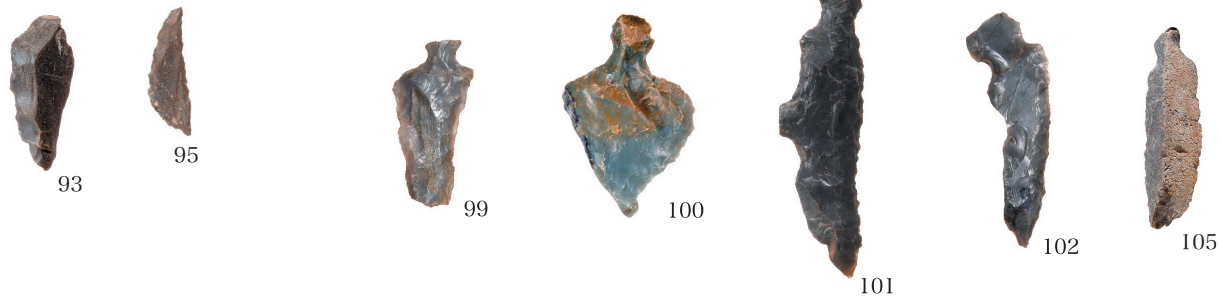
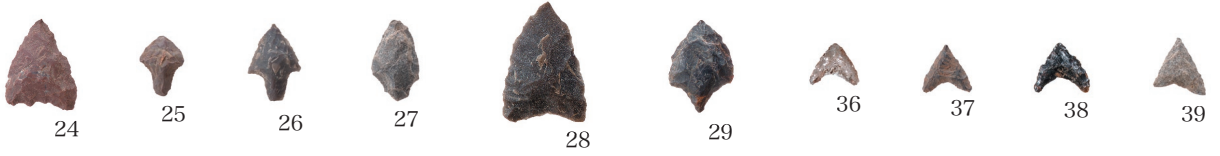
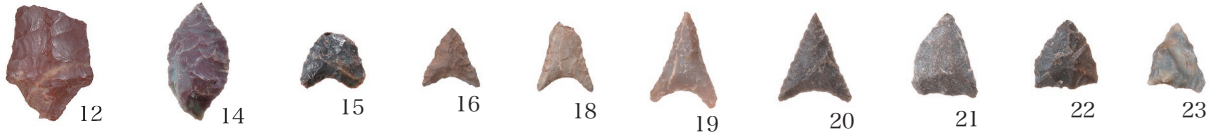


489



487

488



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第126集

長 谷 口 遺 跡

2004年8月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 クイックス